

[授業科目名] 哲学へのいざない		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 松本 高志
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 自ら問題を発見し、それを整理する方法と、出発点から結論までの筋道を正しく立てる方法を身につけるということを授業の到達目標とする。			
授業の概要 古代ギリシアでフィロソフィア（「知を愛すること」）と呼ばれた領域から、今日の哲学が発展した。学生にとって必要な人間観・世界観などをともに考える。第1回から第5回までは、哲学への導入と学習・思考などの諸問題を基本的考察とし、第6回から第10回までは、我々の踏まえる文化的伝統について考察し、第11回以降は、新たな文化を創造しつつ生きるための現代の哲学として構成する。 なお、初回授業時にこの科目に対する要望などを調査し、それによって新たな内容を以下の予定に付加する場合がある。			
学生に対する評価の方法 課題に対する取り組みなど、授業への積極的参加（30%）と、学期末試験（70%）により評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 哲学とは何か ソクラテスの生涯と思想を紹介し、哲学とは何を問うものであるか、私たちの生活にはどのように関わってくるのかということを考える。 「私はどのような人か」という小レポートを、講義開始時に提出して欲しい。様式などは自由。 第2回 考えるとはどういうことか 「ゼノンのパラドックス」を、まず紹介する予定である。謎々か何かのように見えるこの問いかけは、私たちがものごとをどのように考えているかということを映し出している。考え、答えがわかったと思うところに生じやすい過ちについても、併せて考える。 第3回 自己疎外 私たちはどのようにして、今のこの自分になったのか。そこには自己疎外という現実が存在することを、多くの思想家が指摘し、警告している。そのありさまを考察し、自己回復という面についても考える。 第4回 ことばの働き 私たちは、自分で自由に考え、判断していると思っている。しかし、それは、ことばの働きによって大きく制約を受けている。ことばが誤って働く時、人間の判断も誤る。そのようなありさまについて考察し、私たちは何に気づいておかなければならないのかという点についても考える。 第5回 隠されたカリキュラム 学校は、学びを助ける場でもあるが、同時に、ある錯覚を与えてしまうものでもあると、イリイチは気づいた。それは何だろうか。大学生活を充実したものにするために、イリイチの言葉に耳を傾けてほしい。 第6回 存在と価値 価値に対する私たちの意識はどこから生じるのか。「存在」に対する考察から始め、「価値」につき動かされている私たち自身の生き方に注目する。			

第7回 実存と価値

「実存」という捉え方に注目し、生の意味に触れる。さらに、「価値」を2つに分け、「失われぬ価値はあるか」という問いに立ち向かう。

第8回 日本の哲学

岡倉天心の美学を中心に、教育論・文明論をも視野に据えて論じる予定である。日本的感性は、どのような美学を生んだであろうか。

第9回 中国の哲学(1)

私たちの文化に様々な影響を与えた中国の哲学を紹介する。儒教は、単に身分の上下にこだわる窮屈な思想ではない。それは生き生きとした活力に満ちている。

第10回 中国の哲学(2)

老荘の思想は、単に虚無を見つめているのではない。無にさえ意味があることを教えている。孫子の言葉は、多くの成功者にヒントを与えた。人生の知恵を学ぼう。

第11回 イチローの哲学

イチローが語る哲学を探ろうとするのではない。哲学者がイチローの生き方・感じ方をみると、それらはどのように見えるかということである。坂本龍馬・清水宏保・甲野善紀らも登場する。

第12回 これまでの「私」

自分自身を振り返るための方法を、一つ紹介し、実施する。自分のために、自分だけのものとして、各自取り組んでもらいたい。いわゆる「自分史」なるものよりも、はるかに有効であると、担当者は感じている。

第13回 現代を如何に生きるか

現代社会はさまざまな矛盾を抱え、困難に直面しているが、学生諸君は、そのことにどれだけ気づいているだろうか。社会の問題や、これからの自分自身のあり方について、整理し、考え直してみようという授業となる。

第14回 公共哲学

公共性ということについて、どう考えるか。ある人類学者がかつて論じたことだが、日本人は、単独の個人としては、公共性が薄いという。本当だろうか。私たちはどう考えるだろうか。哲学の領域における最近の話題について、ともに考えたい。

第15回 試験

受験する上で注意しなければならないことなどを説明し、試験を実施する。

使用教科書

教科書は特に用いない。必要に応じて、教材プリントを配布する。

自己学習の内容等アドバイス

ほぼ毎回、次回のための予習となるような内容の問いを、課題として提示する。よく調べ、あるいは考えて、準備をするよう望む。それ以外の課題は、別に示す。

[授業科目名] 宗教と文化		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 松本 高志
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 宗教文化の多様性に対する理解を持つとともに、社会・文化のさまざまな領域が、宗教と密接に関わっていることを理解できるようになることを、授業の目標とする。			
授業の概要 日常経験によって証明できない秩序に関心を持ち、それによって日常の平安から人生の究極の意味にいたるまでの問題を解決したいと願う心が、宗教の根幹にある。本科目では、宗教体験、儀礼など、宗教一般の事項について解説するとともに、仏教・キリスト教などの個別の宗教や、現代の宗教事情について考察する。			
学生に対する評価の方法 毎回、数分程度で仕上げられる小さな提出物を課す。これを含めて、積極的な授業参加態度（30%）と、学期末レポート（70%）により、評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 日本人は本当に無宗教か 宗教の定義、多神教と一神教などについて説明し、宗教というものの捉え方を考える。次いで、日本の宗教の特徴について解説する。 なお、「私にとって宗教とは何か」という小レポートを授業開始時に提出して欲しい。様式などは自由とする。 第2回 古代神話のヒーローたち 古代神話に登場するヒーローたちを紹介し、後世に与えた影響などについて考察する。 第3回 イエス・キリストの7つの秘密 イエスの生涯などについては、実は謎が多い。常識とされているものについても、実はいくつもの間違いがある。それらを順に解き明かしながら、キリスト教の世界をのぞいてみよう。 第4回 コーランの響き キリスト教とイスラム教を中心に考察する。キリスト教の教会の体制、イスラム教の特徴などを解説し、最後に、ユダヤ教・キリスト教・イスラム教について、いくつかの点で比較を試みる。 第5回 曼荼羅の神秘 仏教の成立とその後について概観し、次いで密教の特徴について説明する。密教をわが国に伝えた空海は、何を夢見たのか。絢爛たる曼荼羅は、何を語っているのか。ビデオ視聴の予定。 第6回 一休さんの悟り方 頓知で知られる一休さんは、実在した禅僧であり、純粹な悟りの世界を徹底して探求した。禅の文化と、禅寺の生活などについて紹介する。ビデオ視聴の予定。 第7回 浄土への祈り 浄土を祈り求めた浄土教と、仏国土を建設したいと願った日蓮宗について、解説する。仏教の世界に、「祈り」はあるか。			

第8回 千と千尋の宗教学

宮崎ワールドには様々なからくりがある。『千と千尋の神隠し』を例にとり、そこに様々な神話や民俗が生きていること、この物語にはどのようなからくりが隠されているのかということなどを探究し、「宗教」を新たな角度から考察する。

第9回 豆腐小僧のかわいい悪戯

民話の世界に生きている妖怪やその他の不思議な話、年中行事の宗教的な意味など、身の回りにある「宗教」について、紹介する。

第10回 「道」の世界

剣・弓・茶などの世界に、宗教がどのように関わっているかを考察する。私たちの祖先が、単に表面的な完成には満足せず、究極の世界を目指したことがわかるであろう。

第11回 枯山水の宇宙

わが国の宗教建築や庭園などのいくつかを取りあげて紹介し、それらの鑑賞のしかたの要点を簡単に解説する。ビデオ視聴の予定。

第12回 謎の微笑

仏像にはそれぞれに意味があり、仏師の工夫がこらされている。仏像の種別や意味、鑑賞のしかたなどを、いくつかの例を紹介しながら説明する。ビデオ視聴の予定。

第13回 残照の聖ミカエル

ヨーロッパの宗教芸術のいくつかを取りあげて紹介する。キリスト教建築・美術の例としてモン・サン・ミシェルとシャルトル大聖堂を予定している。また、ガウディの信仰と作品の関わりについても、解説したい。ビデオ視聴の予定。

第14回 花子さんはなぜ学校に現れるか。

宗教という文化は決して過去のものではない。「花子さん」や「口避け女」にも歴史があり、そして現代人の心の中に、今も住んでいる。現代都市文化の中の宗教について解説する。

第15回 現代社会と宗教

現代の諸宗教の動向について、まず紹介する。次いで、世界の宗教文化がどのように変貌しつつあるか。また、諸科学がどのように宗教に直面しつつあるかということについて解説し、簡単な未来展望も行いたい。

使用教科書

プリントを配布して用いる。参考図書類については授業中に紹介する。

自己学習の内容等アドバイス

ほぼ毎回、「読み物」と題した予習用教材プリントを配付する予定である。これを事前に読んで積極的に学びたいという学生に、受講をしてもらいたい。プリントを配布しない回には、予習方法を別に示す。

[授業科目名] 現代社会と倫理		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 松本 高志
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 倫理上に生じるアンビバレント（両価的）な状況について具体的に理解するとともに、それらの問題に対して自分なりの判断をすることができるような能力を育てることを目標とする。			
授業の概要 倫理の問題について、特に現代社会の諸問題を意識しながら、そしてできるだけ意識する視野を広くとりながら、共に考えていこうとする。近年話題になったさまざまな出来事、あるいは新たに登場してきた問題などを視野に置く。 問題意識を深めるために、小グループによる話し合いの時間を持つ予定であるが、その回数については相談の上変更する場合がある。			
学生に対する評価の方法 予習のための課題への取り組みなど、積極的な授業参加（30%）と、学期末レポート（70%）により評価する。詳しくは第1回授業時に、また、レポートについては必要に応じて説明する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 倫理学とは何か 「倫理」という言葉について解説した後、本科目で扱う問題について、具体的に展望していく。 「私の心温まる体験」という小レポートを、授業開始時に提出してほしい。 第2回 黄金のルール 多くの文化圏で共通に語られる道徳律は、一見自明に見える。しかし、本当であろうか。問題の深さに、できるだけ早く気づいておきたい。 第3回 男らしさと女らしさ さまざまな文学作品などを例に、ジェンダーがどのように倫理上の問題に絡んできたか、今はどうあるのかということを考える。 第4回 総合的学習(1) 小グループによる話し合いの時間を持ち、問題意識を深める。 第5回 「男と女」再考 討論をした経験を踏まえて、改めて、この問題を考え直す。倫理上の問題に関して、我々がどれだけ、「エートス」（この語については、第1回に解説する）に左右され、「常識」にとらわれているかということも、考えたい。ビデオ視聴の予定。 第6回 孤独について 「孤独」について考えると、人間の社会性のある一面が見えてくる。プライバシーの問題にも触れながら、考えてみたい。 第7回 「いじめ」の構造 なぜ、そしてどのように「いじめ」は起こるのか。どのような対策があるのか。いじめる側、いじめられる側、そして周囲の人々という、それぞれの視点を区別して、この問題について、考えていく。			

第8回 総合的学習(2)

小グループによる話し合いの時間を持ち、問題意識を深める。

第9回 環境問題はどこが難しいか

環境問題に対する私たちの心構えに注目し、具体例を取り挙げながら、そこに問題点がいくつも潜んでいることを説明する。

第10回 環境問題の現状と倫理

「環境」は、現在どのように問題になっているのか、さまざまな問題が叫ばれながら、なぜ、対策が後手にまわりがちなのかという点について、ともに考える。

第11回 生命と倫理(1)

身体性に注目し、私という存在を身体のみから考えてみる。私の身体は、どのように社会に直面しているであろうか。働きかけるだけでなく、社会から、どのように見られ、扱われているだろうか。生と死の社会性について、また、重病の患者をめぐる生と死に関わる葛藤などを考察する。

第12回 生命と倫理(2)

生と死にまつわる倫理上の問題について、また、動物愛護に関わる問題について考察する。諸君は、動物に「権利」はあると思うだろうか。今から約100年前、1頭のイルカを保護するための法令が発せられた。倫理的には、動物の「権利」に関する偉大な考察がそこにあると考えることが可能である。これらを、広く、生命全般の問題として考察する。

第13回 産業社会と倫理(1)

さまざまな産業にとって、あるいはそこに働く者にとって、倫理とは何であろうか。近年のさまざまな事例をも視野に入れながら、できるだけ具体的に考察したい。

第14回 産業社会と倫理(2)

前回に引き続き、特に個人の問題として考えていく。組織的決定が曖昧で、個人として意思決定を迫られる時、問題はどのようにひろがるだろうか。

第15回 まとめ

これまでの考察を整理し、必要に応じて補足を行う。

使用教科書

主として教材プリントを用いる。

自己学習の内容等アドバイス

ほぼ毎回、予習となるような内容の問いを提示する。さらに、「総合的学習」のためにはかなりの時間をかけた予習が必要となるが、これらについては授業中に説明する。

[授業科目名] 現代社会と倫理		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 真田 郷史																																													
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考																																													
授業の到達目標及びテーマ テーマ「現代社会における諸問題を、倫理的視点から考える。」 現代社会において、具体的にどのような問題が起こっているのか、また、それらの何が問題であるのかを正しく理解した上で、さらには、それらの問題に対する自分なりの意見を持てるようになることを、本授業の到達目標とする。																																																
授業の概要 20世紀の後半から主にアメリカを中心として、現代社会の諸問題に対して、倫理的な視点からのアプローチが試みられて来た。「応用倫理学」と呼ばれるそれら一群の問題領域は、非常に多岐にわたっているが、その中から「生命倫理」「環境倫理」「情報倫理」といった3つの問題領域を取り上げ、それぞれの領域における典型的・基本的な問題を紹介する。																																																
学生に対する評価の方法 毎回、講義内容に関する短いレポートを課すので、それら全15回分のレポート評点を基に、科目としての評価・単位認定を行う。授業への出席・講義内容の理解(60%)・課題への積極的取り組み(40%)が、受講生には、毎回要求されるものと考えておくこと。本授業は、期末試験および再評価を、実施しない。																																																
授業計画(回数ごとの内容等) 「生命倫理」「環境倫理」「情報倫理」の3つの領域から、それぞれ4つないし5つのトピックを具体的に紹介して行くとともに、各講義の最後に課題を提示するので、講義時間内に所定のレポート用紙に「解答」を記入し、提出してもらう。課題作成のための作業時間は10分程度を予定しているが、講義内容の理解を前提としているので、受講中も気を抜かないように。ただ漫然と聴いているのではなく、常に、自分から問題を考えようとする積極的姿勢で、受講して欲しい。																																																
<table border="0"> <tr> <td>第1回</td> <td>ガイダンス</td> <td>「応用倫理学」について</td> </tr> <tr> <td>第2回</td> <td>生命倫理(1)</td> <td>脳死をめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第3回</td> <td>生命倫理(2)</td> <td>臓器移植をめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第4回</td> <td>生命倫理(3)</td> <td>生殖医療をめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第5回</td> <td>生命倫理(4)</td> <td>遺伝病をめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第6回</td> <td>環境倫理(1)</td> <td>人間と自然をめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第7回</td> <td>環境倫理(2)</td> <td>自然の権利をめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第8回</td> <td>環境倫理(3)</td> <td>世代間倫理をめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第9回</td> <td>環境倫理(4)</td> <td>地球全体主義をめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第10回</td> <td>環境倫理(5)</td> <td>人口爆発をめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第11回</td> <td>情報倫理(1)</td> <td>匿名性をめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第12回</td> <td>情報倫理(2)</td> <td>プライバシーをめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第13回</td> <td>情報倫理(3)</td> <td>著作権をめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第14回</td> <td>情報倫理(4)</td> <td>ネット社会と現実社会をめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第15回</td> <td>情報倫理(5)</td> <td>言語グローバリズムをめぐる問題</td> </tr> </table>				第1回	ガイダンス	「応用倫理学」について	第2回	生命倫理(1)	脳死をめぐる問題	第3回	生命倫理(2)	臓器移植をめぐる問題	第4回	生命倫理(3)	生殖医療をめぐる問題	第5回	生命倫理(4)	遺伝病をめぐる問題	第6回	環境倫理(1)	人間と自然をめぐる問題	第7回	環境倫理(2)	自然の権利をめぐる問題	第8回	環境倫理(3)	世代間倫理をめぐる問題	第9回	環境倫理(4)	地球全体主義をめぐる問題	第10回	環境倫理(5)	人口爆発をめぐる問題	第11回	情報倫理(1)	匿名性をめぐる問題	第12回	情報倫理(2)	プライバシーをめぐる問題	第13回	情報倫理(3)	著作権をめぐる問題	第14回	情報倫理(4)	ネット社会と現実社会をめぐる問題	第15回	情報倫理(5)	言語グローバリズムをめぐる問題
第1回	ガイダンス	「応用倫理学」について																																														
第2回	生命倫理(1)	脳死をめぐる問題																																														
第3回	生命倫理(2)	臓器移植をめぐる問題																																														
第4回	生命倫理(3)	生殖医療をめぐる問題																																														
第5回	生命倫理(4)	遺伝病をめぐる問題																																														
第6回	環境倫理(1)	人間と自然をめぐる問題																																														
第7回	環境倫理(2)	自然の権利をめぐる問題																																														
第8回	環境倫理(3)	世代間倫理をめぐる問題																																														
第9回	環境倫理(4)	地球全体主義をめぐる問題																																														
第10回	環境倫理(5)	人口爆発をめぐる問題																																														
第11回	情報倫理(1)	匿名性をめぐる問題																																														
第12回	情報倫理(2)	プライバシーをめぐる問題																																														
第13回	情報倫理(3)	著作権をめぐる問題																																														
第14回	情報倫理(4)	ネット社会と現実社会をめぐる問題																																														
第15回	情報倫理(5)	言語グローバリズムをめぐる問題																																														
使用教科書 なし(必要に応じて、適宜、資料プリントを配布する。)																																																
自己学習の内容等アドバイス 日頃から、TVのニュースを観たり、新聞に目を通すなどして、社会の中で何が起きているのか、現在、何が問題になっているのかを、自分から関心を持って知ろうと努めること。																																																

[授業科目名] 心の科学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 松尾 美紀
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 科学的心理学の視点から、社会や人間について考察することを目標とする。また、これまでの自分の視点や世間の常識的な視点をとらえなおすことで、大学教育にふさわしい新たな枠組みを構築していく。			
授業の概要 知覚、記憶、学習、対人行動といった心理学の入門的内容を扱う。基本的な心理学の研究を紹介しながら、現実世界で遭遇する問題について考えていく。授業中簡単な実験や調査を体験することで、多様な心理学の世界を考えてみる。			
学生に対する評価の方法 再評価は行わない。授業中の小レポートと終盤に行う筆記試験で総合的に評価する。なお出席状況や授業態度が悪い場合は、減点する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 心理学と心の科学 第2回 科学的に考えるとは 第3回 無意識の世界1 無意識の世界とは 第4回 無意識の世界2 見えるものと見えないもの 第5回 無意識の世界3 記憶に残るものと残らないもの 第6回 無意識の世界4 好きになるときならないとき 第7回 マインドコントロール1 条件づけと行動変容 第8回 マインドコントロール2 説得による態度変容 第9回 マインドコントロール3 集団と権威の力 第10回 暴力的なところ1 暴力的な人の特徴 第11回 暴力的なところ2 暴力が起きやすい条件 第12回 暴力的なところ3 攻撃に関する理論 第13回 暴力的なところ4 身近な暴力・虐待 第14回 評価 第15回 調査研究の報告			
使用教科書 下野孝一著 「こころの解体新書 心理学概論への招待」ナカニシヤ出版			
自己学習の内容等アドバイス 事前に教科書を読んでおくと理解しやすい。			

[授業科目名] 青年期の心理		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 松尾 美紀
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 生涯発達の見点から青年期をとらえる視点を持ち、成人期への移行の姿勢を自分なりにとらえていくことを目標とする。またレポートを書くことで、各テーマに対する自分の考えを客観的に見直していく。			
授業の概要 本講義は、青年心理学の入門的内容を扱う。大学生にとって身近な身体の変化と心の変化、恋愛とセクシャリティ、性役割として自分探しといったテーマについて、最近のニュースを取り込みながら考えていく。			
学生に対する評価の方法 再評価はしない。期間中課す4回のレポート(20%)と終盤に行う筆記試験(80%)から総合的に評価する。ただし出席状況や授業態度が悪いときには減点する。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回 「青年期」の成立 第2回 成長する身体と性役割意識1-身体の成長と成熟する性 第3回 成長する身体と性役割意識2-性別と性役割意識 第4回 認知能力の発達1-抽象的な認知能力 第5回 認知能力の発達2-他者視点の取得と道徳性の発達 第6回 成長する私1-自己と自我 第7回 成長する私2-アイデンティティの確立 第8回 成長する私3-社会的比較理論と友人関係の発達 第9回 彷徨する親子関係-親子間のコミュニケーション 第10回 恋愛と性行動1-恋愛に関する理論 第11回 恋愛と性行動2-恋に落ちるとき 第12回 恋愛と性行動3-恋愛の進展 第13回 恋愛と性行動4-セクシャリティ 第14回 評価 第15回 レポート講評			
使用教科書 「青年心理学への誘い-漂流する若者たち-」 和田実・諸井克英著 ナカニシヤ出版			
自己学習の内容等アドバイス 事前に教科書を読んでおくと、理解しやすい。またレポートを書くにあたり、新聞や雑誌等の関連記事にも目を通しておくとよい。			

[授業科目名] 青年期の心理		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 松尾 美紀
[単位数] 2	[開講期] 4年次後期	[必修・選択] 選択	備考 子どもケア専攻のみ (認定心理士資格取得用に開講)
授業の到達目標及びテーマ 生涯発達の視点から青年心理学の基礎を学ぶとともに、青年期教育に関連する問題への心理学的アプローチについて理解することを目標とする。			
授業の概要 認定心理士取得を前提とする。青年心理学の基本的な問題について解説し、さらに心理学研究、教育心理学研究、発達心理学研究といった雑誌の関連論文の内容をしながら、最近の研究動向についても概観していく。			
学生に対する評価の方法 再評価をしない。指定論文の要約をも含めたレポートと、終盤における筆記試験によって総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 「青年期」の成立と青年心理学の誕生 第2回 文化的規定と生物学的規定 第3回 身体の成長と瘦身願望 第4回 性の分化 第5回 性役割と現代社会 第6回 認知発達と学校教育 第7回 他者視点、共感性 第8回 アイデンティティの確立 第9回 自己の分化と自尊感情 第10回 友人とのつきあいかたと孤独感 第11回 親子のコミュニケーション 第12回 恋愛に関する理論：成人期アタッチメント 第13回 恋愛至上主義とセクシャリティ 第14回 評価 第15回 レポート講評			
使用教科書 指定しない			
自己学習の内容等アドバイス 関連する内容について、他の授業とあわせて考えると理解しやすい。また心理学の研究雑誌も目を通すようにしておくことがのぞましい。			

[授業科目名] 日本の歴史		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 今井 隆太
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 近代日本の歴史、ことにアジア・太平洋戦争にいたる過程を、テキストに沿ってじっくり学ぶ。場合によっては当時の新聞・雑誌類を参照しながら、時代のリアリティを感じるのが大切である。諸君が時々耳にされるであろう「平成の開国」とはなにであるのか、「開国」は日本になにをもたらししてきたのかを、順を追って観ていく。			
授業の概要 松本健一の『日本の失敗』をテキストに、その内容を各章ごとに区切って講義し、時には教室で学生諸君に音読を求める。日本はなぜ戦争をし、それに負けたのかがテキストのテーマである。授業では一歩進んで、敗戦と現代の生活はどのようにつながっているのか、いま、日本はなにをしなればいけないかを考えて行こう。			
学生に対する評価の方法 毎回、講義内容に沿った小テストをする。出席も大切だが、各回の答案に表れる、問題をどうとらえたか、いかに真剣に答えようとしたかを重視する。毎期末、出席が足りないがどうかしてほしいという学生が出現するが、もはや取り返しのつかない事態であることを理解するべきである。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 日本の歴史を学ぶ意味とは 第2回 日米の仮想敵国 第3回 発端としての「対支二十一カ条」 第4回 アジアの帝国主義 第5回 「日米衝突」のシナリオ 第6回 満州事変というファシズム 第7回 世界戦争のプロローグ 第8回 「侵略」という認識 第9回 統帥権干犯の思想 第10回 軍部の独裁化をめぐる 第11回 精神的鎖国としての国体イデオロギー 第12回 日本の「世界史」 第13回 大東亜戦争の「開戦の詔勅」をめぐる 第14回 時代思潮としての「死の哲学」 第15回 外の力 テキストは決して平易ではない。が、平易ではない書物に出会う場が、大学である。とはいえ、本には読み方がある。難しいものは、易くして理解する方法がある。だから心配することはない。いままでの自分がどうであったかは問わない。ただ、この科目を履修するには、毎回、きちんと出席することが大切である。学ぶことについて、近道の遠回りもありえる。しかし単位に関する限り、抜け道はない。各回の講義の時間内に、頭を使って課題を解決していくことが、案外、これからも、生きていく上で大切な能力だと理解されると思う。			
使用教科書 『日本の失敗』松本健一著、岩波現代文庫			
自己学習の内容等アドバイス 講義が終わったら、わからない用語を調べておくこと。前もって読んでおくつもりが出てきたら、それは大変な進歩である。松本氏の他の著作も読んでみることをすすめる。			

[授業科目名] 西洋の歴史／ヨーロッパの歴史		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 早坂 泰行
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 本講義ではドイツを中心に、ヨーロッパの近代史を取り上げる。現在私たちが自明のもののみなしている社会のしくみや制度、生活様式のうち、多くのものは近代に入ってから始めてつくり出されたものである。また近代の歴史は、現在の私たちにとってもなお重大な、多くの問題をも突きつけている。近代世界の形成過程を学ぶことをつうじて、現在の私たちの社会や生活のかたちを、複眼的に捉える姿勢を養うことを目指す。			
授業の概要 近代ヨーロッパ全体の動向を広く視野におさめながら、近現代(17世紀半ば～20世紀半ば)のドイツについて、その政治・経済・社会的な側面を取り扱う。講義においてはPowerPoint やDVDなどの視聴覚教材も利用し、その時代ごとの具体的な生活や技術のありよう、また社会の変化に関するイメージを容易に捉えられるよう配慮する。			
学生に対する評価の方法 授業の出席状況(10%)、期末試験(70%)、レポート(20%)の結果から、内容の理解度を総合的に判定する。なお、この授業は再評価を認めないので、その点には十分留意すること。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 近代ヨーロッパとドイツ史に関するイントロダクション 第2回 ウェストファリア体制 第3回 啓蒙思想と近世の文化 第4回 フランス革命とナポレオンの時代 第5回 ドイツの自由主義とナショナリズム 第6回 「ドイツ」帝国の成立 第7回 第二次産業革命～大陸ヨーロッパとドイツの工業化 第8回 帝国主義の時代 第9回 世紀転換期ドイツの社会と文化 第10回 第一次世界大戦～総力戦の時代 第11回 ワイマル共和国 第12回 ナチズムと第二次世界大戦(1) 第13回 ナチズムと第二次世界大戦(2) 第14回 戦後冷戦と再統一の間のドイツ 第15回 期末試験			
使用教科書 特になし。毎回の授業ごとにレジユメを配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 授業後に要約・要点の整理をおこなうなどして、その回の内容を自分なりにまとめるとよい。単なる事実の羅列ではなく、過去との対比の中で現在の社会や文化を捉えなおしながら、考えや論点をまとめること。			

[授業科目名] 西洋の歴史／ヨーロッパの歴史		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 京極 俊明
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ ドイツの近代史を学び、基礎的な知識を身につけると同時に、ナショナリズム、帝国主義、総力戦といった近代史上の重要な概念について、理解を深めることを目的とする。			
授業の概要 啓蒙専制君主の時代から、第一次世界大戦終結までのドイツの近代史について、ヨーロッパ全体の動向と結びつけて講義を行う。授業ではプリントとパワーポイントを使用する。またDVD教材「映像の世紀」を視聴する。			
学生に対する評価の方法 授業の出席状況(10%)、期末試験(70%)、レポート(20%)の結果から総合して判定する。この授業は再評価を認めないので、その点には十分留意すること。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 はじめに 第2回 啓蒙専制君主の時代（1） 第3回 啓蒙専制君主の時代（2） 第4回 ナポレオン戦争 第5回 ウィーン体制 第6回 1848年革命 第7回 ドイツ統一（1） 第8回 ドイツ統一（2） 第9回 ドイツ帝国の成立 第10回 ビスマルク体制 第11回 ヴィルヘルム2世の時代 第12回 第一次世界大戦（1） 第13回 第一次世界大戦（2） 第14回 まとめ 第15回 試験			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス 参考図書として、坂井栄八朗「ドイツ史十講」（岩波書店）を挙げておく。			

[授業科目名] アジアの歴史		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 鵜飼 尚代
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 最近「東アジア共同体」などという語を耳にするようになった。結束の目的は何であれ、ユニットとしてのアジアを考える場合、それぞれの国・地域の過去を考慮しないわけにはいかない。そうした歴史を踏まえて現在を見なおし、それぞれの国・地域の特質・特長を総括してこそ「東アジア共同体」の可能性も考えられよう。また学生自身の関心に沿って東アジアを見ることも重要であると思われるので、学生は各自でテーマを決め、調査をしてもらいたい。			
授業の概要 世界史的観点からアジア史、とくに東アジアの諸問題を考察する。中国史が東アジア史の一大要素であることは確かであるので、近年経済的にも政治的にも注目を集める中国の近代化の流れを中心に、東アジアの近代化を概観する。受講生には各自でテーマを選び、調査をして、レポートにまとめてもらう。提出されたレポートは、担当教員が授業中にできるだけ紹介する。			
学生に対する評価の方法 講義が広範にわたるので、受講生は自主的に内容を深める努力をしてもらいたい。そこで、a. レポートを課す。レポートを担当教員が紹介するので、b. それを聴いての意見や感想を毎回提出してもらう。講義内容については、c. 期末試験も予定しているので、評価はa. b. c. を総合して判断することになる。			
授業計画（回数ごとの内容等） 授業は以下の通り進める予定である。 第1回 授業についてのオリエンテーション 授業の目的、進め方、学生に求める姿勢等を説明する。 第2回 中国の近代化①（アヘン戦争～太平天国の乱） 第3回 中国の近代化②（日清戦争前後） 第4回 中国の近代化③（義和団事変前後） 第5回 中国の近代化④（中華民国成立前後） 第6回 中国の近代化⑤（中華人民共和国成立前後） 第7回 中国の近代化⑥（現代中国への道） 第8回 朝鮮半島の近代化①（日清戦争前後） 第9回 朝鮮半島の近代化②（日清戦争前後） 第10回 朝鮮半島の近代化③（朝鮮半島の独立前後） 第11回 朝鮮半島の近代化④（南北分離前後） 第12回 朝鮮半島の近代化⑤（現代朝鮮への道） 第13回 ベトナムの近代化①（独立前後） 第14回 ベトナムの近代化②（現代のベトナムへの道） 第15回 試験 但し、学生のレポートを授業中に紹介するので、進度が変わることもある。			
使用教科書 必要に応じてプリントを配布する。 【参考図書】 ：布目潮風、山田信夫編「新訂東アジア史入門」（法律文化社）			
自己学習の内容等アドバイス 講義が広範にわたるので、受講生は自主的に内容を深める努力をしてもらいたい。高校で使った年表や地図帳での確認、歴史事典での調査でも知識は深まり、また広がります。			

[授業科目名] 歴史と社会		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 安井 克彦
[単位数] 2	[開講期] 1・3年次前期	[必修・選択] 選択	備考 幼児保育専攻のみ (小学校教員免許取得用に開講)
授業の到達目標及びテーマ 小学校社会科の学習内容の研究が主たる目的である。小学校3年から6年までの学習内容は、多岐にわたっており、それらは地理、歴史、公民的分野の基礎的かつ専門的内容である。それらを理解することが目標であるが、同時に、小学校社会科の目標である、公民的資質を培う上で大切な時事問題をNIE方式で毎時間取り上げ、社会への関心を強めることも目標とする。			
授業の概要 社会科は、社会生活を総合的に理解することを通して、公民的資質を養うという重要な役割を果たす教科である。日本の国土や地域の産業、地理的環境、文化財や先人の業績、歴史と伝統、政治の働きと考え方、国民生活、国際社会における日本の役割等について、考える力を養成する。また、社会科への理解・態度・能力を身につけ、記述内容・写真・統計資料・地図等の資料の活用することができる柔軟な探求力を養うことをねらいとしている。			
学生に対する評価の方法 授業への参加活動を重視する。関心・意欲・態度(30%)、小テスト・レポート(30%)、テスト(40%)などを総合的に評価する。特に授業欠席や遅刻は減点の対象となる。試験の欠席は認めない。本授業は再評価しない。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回 社会科の目標及び授業全体の紹介 第2回 社会科教育の教科内容 第3回 小学校第3学年社会科(私たちの町・日進市、人々の仕事とくらし)・小テスト 第4回 小学校第3学年社会科(暮らしを守る、火事や事故) 第5回 小学校第4学年社会科(ごみ、水道)・レポート 第6回 小学校第4学年社会科(郷土の歴史、私たちの県・愛知県) 第7回 小学校第5学年社会科(私たちの生活と日本の農業、工業) 第8回 小学校第5学年社会科(私たちの生活と情報、国土と環境)・小テスト 第9回 小学校第6学年社会科(歴史的分野) 第10回 小学校第6学年社会科(歴史的分野) 第11回 小学校第6学年社会科(政治経済、国際理解) 第12回 具体的な人物学習の事例①近世の人物・レポート 第13回 具体的な人物学習の事例②明治維新の人物 第14回 各種統計資料の利用方法 第15回 学習のまとめと試験			
使用教科書 東京学芸大学社会科教育学研究室編「小学校社会科教師の専門性の育成 改訂版」教育出版			
自己学習の内容等アドバイス 社会への関心を持つために時事問題を取り上げ、新聞をNIEとして活用し、輪番制で発表するので、つねにマスコミ等の時事問題の動向に注意しておくこと。			

[授業科目名] 歴史と社会		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 安井 克彦
[単位数] 2	[開講期] 1～2年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 社会科学を学習するとき、つねに歴史的・社会的に見ることが、物事をより深く、本質的に見ることになる。そのことが、正しい社会観や世界観をつくっていくことになる。その意味で、日本の教育を「歴史」と「社会」の側面から追究させたい。高校日本史を専攻していない学生も多いかと思われるので、さまざまな史料等も提示して、学生が興味を持つように授業を構成する。			
授業の概要 日本の社会と歴史を教育の視点から見ようとするものである。「歴史」と「社会」が教育を規定する面もあるが、逆に「教育」によって社会や歴史が切り拓かれるという面も見られる。明治維新の「学制」発布から150年近く経ったことになる。この間の教育、学校、子どもの様子を「歴史」や「社会」と関連して追究しようとするものである。			
学生に対する評価の方法 授業への参加活動を重視する。関心・意欲・態度(20%)、レポート(20%)、テスト(60%)などを総合的に評価する。試験の欠席は認めない。本授業は再評価しない。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回 オリエンテーション・歴史的・社会的な見方について 第2回 近代教育制度の成立と展開 第3回 小学校の普及と子どもの生活の変化 第4回 天皇制教育体制の確立 第5回 明治期小学校教育の実態 レポート 第6回 中等教育の拡充、高等教育の拡大 第7回 大正デモクラシー期における社会と教育の再編 第8回 都市新中間層と農村・都市下層の教育 第9回 大正自由教育の高揚 第10回 貧窮する農村、変化する社会 レポート 第11回 戦時体制下の学校と子ども 第12回 敗戦直後の日本の教育、占領政策と戦後改革 第13回 新学制の展開、戦後教育の新段階 第14回 高度経済成長後の社会と教育 第15回 学習のまとめと試験			
使用教科書 片桐芳雄・木村元編著「教育から見る日本の社会と歴史」八千代出版			
自己学習の内容等アドバイス 毎時間課題を提出するので、事前によく調べておくこと。特にテキストは次回の範囲を指定するので、事前によく読んで、授業に臨むこと。			

[授業科目名] 日本の文学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 大島 龍彦
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 前期・後期レポート
授業の到達目標及びテーマ 智恵子抄の世界 詩の分析とその詩の背景を学ぶことによって、思考力と想像力を涵養する。			
授業の概要 詩集『智恵子抄』の各詩の分析を通して、彫刻家で詩人の高村光太郎が一人の女性智恵子を如何に愛し、如何に表現したのかについて学ぶ。			
学生に対する評価の方法 主にテストと授業に取り組む姿勢によって評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 講義概説（出席とミニットペーパー・講義の内容とその方法・奇縁ということ） 第2回 文学ということ・作品へのアプローチの方法について（例えば詩「涙」の分析を通して） 第3回 『智恵子抄』前史（二人の生誕から出会いまで） 第4回 『智恵子抄』前詩「あをい雨」について 第5回 第1部の世界 詩「人に」、詩「或る夜のころ」、詩「おそれ」とその背景 第6回 詩「或る宵」とその背景 第7回 詩「郊外の人に」、詩「冬の朝のめざめ」とその背景 第8回 愛の統合的定義の『智恵子抄』について 第9回 詩「深夜の雪」、詩「人類の泉」とその背景 第10回 詩「僕等」、詩「愛の嘆美」、詩「晚餐」とその背景 第11回 9年間の詩空白の意味と生活 第12回 第2部の世界 詩「樹下の二人」～ 詩「美の監禁に手渡す者」とその背景 第13回 第3部の世界 詩「人生遠視」～ 詩「梅酒」とその背景 第14回 テスト 第15回 『智恵子抄』その後			
使用教科書 大島龍彦・大島裕子編著『智恵子抄の世界』新典社			
自己学習の内容等アドバイス 本時に扱う詩について事前に鑑賞し、疑問を持って授業に臨むこと。授業後、本時に扱った詩とその背景について感想文を書く。			

[授業科目名] 英米の文学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 河口 和子
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 1～3年次：管理栄養学部・メディア造形学部 1～4年次：ヒューマンケア学部
授業の到達目標及びテーマ 本講座では、歴史的社会的背景を踏まえつつ、英語で書かれた文学、特にイギリス、アメリカ、アイルランド文学について概観することを到達目標とする。			
授業の概要 代表的な作家の優れた作品を選び、視聴覚機器を用いながら鑑賞する。			
学生に対する評価の方法 定期試験（50%）、平常の授業態度、発言、レポート（50%）で総合的に評価を行う。 なお、授業開始から30分以上遅れてきた場合は欠席とする。遅刻3回で1回の欠席とする。 開講期間中、数回のレポート提出を課す。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 導入（講義内容の説明、英国について） 第2回 英文学：英文学の導入 第3回 英文学：演劇と劇場 第4回 英文学：シェイクスピア1 第5回 英文学：シェイクスピア2 第6回 英文学：18世紀の小説 第7回 英文学：ジェイン・オースティン1 第8回 英文学：ジェイン・オースティン2 第9回 英文学：まとめ 第10回 アイルランド文学：アイルランド文化 第11回 アイルランド文学：神話、民話 第12回 アイルランド文学：W.B.イェイツ 第13回 米文学：演劇1 第14回 米文学：演劇2 第15回 試験日			
使用教科書 随時、資料を配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 授業で取り上げた作品を読んでおく。			

[授業科目名] 日本の憲法		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 加藤 英明
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 管理栄養学部・メディア造形学部
授業の到達目標及びテーマ 国の最高法規である憲法の原理を学ぶ。憲法の由ってきたる理念、および歴史的淵源に遡って考察することで、日本国憲法のより深い理解を身につける。また憲法の解説を通じて、社会知識、教養をも涵養する。すなわちテーマは、憲法の概説である。			
授業の概要 国の最高法規であり、国の基本体制を規律する憲法について概説する。国民主権、人権尊重、平和主義など日本国憲法の原理を学び、あわせて社会的視野の拡大にもつとめる。 受講者の希望に応じ、随時時事問題を取りあげる。新聞が苦勞なく読めることを目標とするので、時事教養を身に付けたい者で、意欲ある学生が受講せよ。			
学生に対する評価の方法 学期末に行う筆記試験の成績を基本とし（パーセンテージでいえば100%）、これに平常の受講態度などを加味して採点する。試験では、憲法の意義や憲法の基本的概念の理解度を主に問う。原則として、再評価は行わない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 教養とは何か 第2回 憲法とは何か 第3回 憲法とは何か（続） 第4回 社会契約説について 第5回 社会契約説について（続） 第6回 憲法の歴史 世界 第7回 憲法の歴史 世界（続） 第8回 憲法の歴史 日本 第9回 憲法の歴史 日本（続） 第10回 天皇制と戦争の放棄 第11回 三権分立について 第12回 自由と平等について 第13回 論文の書き方 第14回 社会権について 第15回 筆記試験			
使用教科書 教科書というわけではないが、『岩波基本六法』（岩波書店）は必携。（すでに六法をもっている者ほどの出版社のものでも可）			
自己学習の内容等アドバイス 日頃、新聞・テレビなどのニュースに触れ、自分なりの感想、意見をもつようにつとめることが、社会教養を深める結晶の早道である。読書、映画・ドラマの鑑賞も大いに薦める。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
日本の憲法		講義	早川 秋子
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	1年次前・後期	選択	前期：子どもケア専攻 後期：幼児保育専攻
授業の到達目標及びテーマ 周知のごとく、日本は、第二次世界大戦終結のためにポツダム宣言を受諾し、今後の近代国家のあり方を憲法に示した。国民主権・平和主義・基本的人権の尊重を3本柱とする憲法の内容を理解し、国民の権利を尊重するとは具体的にどのようなことか等、事例の整理を通して理解し、各自が自分の言葉で権利義務、平和維持、国づくりのあり方を考え、他者に伝えることができるようにしたい。			
授業の概要 憲法の歴史を踏まえながら、基本的人権を判例を通して整理する。法の下での平等や表現の自由を身近な問題に照らし合わせながら整理する。平和維持に関する問題では、湾岸戦争以来の国際社会の動きを軸にして自衛隊問題や国際協力について整理する予定である。 必要に応じてプリント配布、DVDやパワーポイントを使用する。			
学生に対する評価の方法 積極的に参加する姿勢を強く求める。当然のことながら私語や他ごとをする学生を許さない。 ①受講態度 ②不定期に行う小テスト（講義時間中にレポートを作成してもらうこともある）③最終評価（筆記テスト）（①20パーセント+②20パーセント+③60パーセント） 追試・再試はレポートで行う			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 憲法の制定・概念 憲法とは何か、どのような内容であるかを理解する 第2回 国家について考えてみよう 個人の尊重、国民主権、平和主義 第3回 人としての基本的な権利1 人権とは何か、幸福追求権 第4回 人としての基本的な権利2 新しい人権・自己決定権（尊厳死法の必要性について考える） 第5回 人としての基本的な権利3 法の下での平等（女性の再婚禁止期間・親殺し重罰規定違憲訴訟） 第6回 人としての基本的な権利4 信教の自由（靖国神社参拝問題を考える） 第7回 人としての基本的な権利5 表現の自由（報道の自由とプライバシー保護のバランスを考える） 第8回 人としての基本的な権利6 生存権（朝日訴訟と社会保障制度） 第9回 平和主義1 戦争放棄（歴史的視点から考える） 第10回 平和主義2 自衛隊（政府の憲法解釈を基に考える・イラク自衛隊派遣違憲訴訟） 第11回 天皇 象徴天皇制（国事行為と女性天皇） 第12回 民主主義の政治制度 権力分立・裁判員制度 第13回 地方自治と 条例の制定（住民による直接請求） 第14回 憲法の改正 改憲の可能性・問題点 第15回 総まとめ・評価			
使用教科書 初宿正典他『いちばんやさしい憲法入門』（第4版）有斐閣 1600円			
自己学習の内容等アドバイス 講義で扱う内容は新聞やニュースで日々報道されている内容と深く関係しています。いつ、どんな出来事が起こってどのような問題が生じたのか、それについて自分は何を感じたのか、という日々問題意識を持つことが、興味をもって憲法に取り組むきっかけになります。ただ、聞き流すのではなく、書き留めて改めて考え直す習慣をつけてみて下さい。			

[授業科目名] 法と社会		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 加藤 英明
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 社会生活において、法というものがきわめて重要な役割を果たしているにもかかわらず、高等学校までの学校教育で教えられることはあまりに少ない。ほぼ初心者といってよい学生諸君に、法を一通り学んでいただくのが本講義である。また法の解説を通じて、社会知識、教養の涵養にもつとめる。すなわちテーマは、法の概説である。			
授業の概要 民法を中心に、現代日本の実定法秩序を、ときに歴史的観点、国際的観点をも取り入れて、概説する。受講者の希望に応じ、随時時事問題を取りあげる。新聞が苦勞なく読めることを目標とするので、時事教養を身に付けたい者で、意欲ある学生が受講せよ。			
学生に対する評価の方法 学期末に行う筆記試験の成績を基本とし（パーセンテージでいえば100%）、これに平常の受講態度などを加味して採点する。試験では、法というものの理解、「権利」など法に関する基本的概念の理解を主に問う。再評価は行わない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 教養とは何か 第2回 法のかたち 第3回 国家法と非国家法 第4回 法と道徳 第5回 法と道徳（続） 第6回 法のちから 第7回 法による制裁 第8回 刑罰について 第9回 裁判とはいかなるものか 第10回 司法の制度 第11回 民法とはいかなる法か 第12回 損害賠償の法 第13回 財産所有の法 第14回 契約の法 第15回 筆記試験			
使用教科書 教科書というわけではないが、『岩波基本六法』（岩波書店）は必携。（すでに六法をもっている者ほどの出版社のものでも可）			
自己学習の内容等アドバイス 日頃、新聞・テレビなどのニュースに触れ、自分なりの感想、意見をもつようにつとめることが、社会教養を深める結晶の早道である。法や裁判に関する読書、映画・ドラマの鑑賞も大いに薦める。			

[授業科目名] 政治と社会		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 島田 弦
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ この講義は、政治と社会に関する現代の問題について民主主義という視点から考えてみることにする。「民主主義」というのは、多くの人にとってもっとも身近な政治用語でしょうし、大切なことだと思うでしょう。しかし、民主主義の内容は時代や地域により多種多様です。この授業ではさまざまな民主主義の内容を理解するとともに、すべての人が民主主義という手続を受け入れ、社会が安定して運営される条件とは何かを考えます。			
授業の概要 この授業ではさまざまな民主主義の内容を理解するとともに、すべての人が民主主義という手続を受け入れ、社会が安定して運営される条件とは何かについて多くの事例をもとにビデオ素材などをもとに考えます。講義で取り扱ったビデオの内容について、400-600字のレポートを書いてもらいます（おおむね5回から6回）。また、授業開始15分以上の入室を認めないので注意すること。			
学生に対する評価の方法 ビデオに関するレポートの評価及び期末試験（論述式）の評価を合計して算出する。したがって、一定以上の成績を取るためには、各レポートの提出が重要であることを理解して下さい。			
授業計画（回数ごとの内容等） 1. オリエンテーション：民主主義のイメージ 2. 民主主義のための戦争 3. 民主主義のための戦争（対テロ戦争に関するビデオ） 4. 民主主義と表現の自由 5. 民主主義と表現の自由（デンマークの事例に関するビデオ） 6. 民主主義とマスメディア 7. 民主主義とマスメディア（ベトナム戦争とマスメディアに関するビデオ） 8. 民主主義と選挙 9. 民主主義と選挙（日本の選挙に関するビデオ） 10. 民主的社会における裁判と私たち（裁判員に関するビデオ前半） 11. 民主的社会における裁判と私たち（裁判員に関するビデオ後半） 12. 民主主義の実験 13. 民主主義の実験（中国の学校での試みに関するビデオ） 14. 講義のまとめ 15. 期末試験 受講者数、受講者の構成によって若干変更する場合があります。 また、時事問題を取り扱うために、順番や内容を変更する場合があります。			
使用教科書 指定しない			
自己学習の内容等アドバイス 各回のレポートを提出しないと、成績評価が大幅に下がり、単位認定が困難になります。短いレポートなので、欠かさずに提出するようにしてください。			

[授業科目名] 経済と社会		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 釜賀 雅史
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 経済は、「疎遠なもの」、「難しいもの」といった印象を持つ人は多いかもしれない。しかし、そうではない。なぜなら、経済現象は人間の営みそのものであるから。 本講の目標は、学生諸君に、①一見、疎遠に感じられる新聞の経済欄に親しくなってもらふこと、「経済記事が読める」または経済欄の記事に「ついていける」ようになってもらうこと、②現代経済社会の諸問題について理解を深めてもらうこと、ここにある。			
授業の概要 上の目標に基づき、本講では、日頃、経済記事（報道VTR）などで頻繁に目にするトピカルな話題を念頭に置きつつ、それを理解するのに必要と思われる経済学上の幾つかの基本項目についてわかりやすく講義する（パートI）。そして、わが国の経済発展のありようについて、特にその光と影の部分について考えてみる（パートII）。			
学生に対する評価の方法 ①授業への参画態度（評価ウエート20%） ②産業・経済記事のレポート……具体的に産業・経済に関する新聞記事の一つとりあげ、それについて自分なりに展開する（内容紹介だけにとどまらず、他の情報も導入して記事内容を追究したり、自分なりの見解を展開したりする。）（評価ウエート40%） ③最終レポート……授業内容からのテーマについてレポートを作成提出。（評価ウエート40%） 以上3点から総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス（経済学の役割） 第2回 序・市場経済とは何か？ われわれが生きる経済社会の基本メカニズムを考える。 ≪パートI 経済記事を読む上で知っておきたい経済知識≫ 第3回 円高・円安と経済生活① 外国為替の基本的メカニズムを学ぶ。 第4回 円高・円安と経済生活② 円高・円安に関する記事を読むときに必要な知識を学ぶ。 第5回 GDPとは何か？① 日本経済を大づかみに捉える（巨視的にみる）手法=GDPについて学ぶ。 第6回 GDPとは何か？② そもそも「豊かさ」とは何か？ その指標としてのGDPの問題点を考える。 第7回 景気とは何か？① 景気循環はなぜ起るか、その原理と景気予測の手法について学ぶ。 第8回 景気とは何か？② 日本の景気循環のありようを歴史的に振り返る。 第9回 政府・財政の役割とは？① 現代経済における政府の役割について学ぶ。 第10回 政府・財政の役割とは？② 日本の財政の現状と問題点を考える。 ≪パートII 経済社会の諸問題を考える ～経済発展の光と影≫ 第11回 日本の経済社会はどのように発展してきたか、VTRを見ながらその発展の経緯をサーベイする。 第12回 われわれは経済発展で何を、何を失ってきたか？ 経済成長の影の部分（自然破壊やさまざまな社会病理現象）について考える。 第13回 世界経済の諸問題① グローバル化とは何か？ アジア地域の経済の発展の経緯を考察しつつ、その意味を考える。 第14回 世界経済の諸問題② 資源・エネルギー、環境問題など、現代世界が抱える問題について考える。 第15回 まとめと発展的学習のための主要文献解説。			
使用教科書 テーマ関連の資料・記事などを毎回配布し、それに従って授業を行う。準拠する文献は、釜賀雅史著『日本経済を読む－新聞記事で学ぶ経済学－』学文社（参考書≒教科書）。			
自己学習の内容等アドバイス 授業時に示される次回の授業で取り上げられるテーマ・話題について、事前に検討しておくこと。 ≪より深く学ぶために≫ 授業時に紹介される文献などにできる限り取り組んでみる。			

[授業科目名] 企業と社会		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 折笠 和文
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 卒業後の進路として、企業や何らかの組織に就職を希望している皆さんにとって、企業の役割や実態、あるいは経営戦略などを理解できること、乃至、就職活動や社会人へのパスポートとしての企業経営の知識を身につけることが目標である。			
授業の概要 企業経営における領域は多岐にわたるので、限られた時間内で網羅することは到底不可能なので、下記の4つの領域に絞り、企業の役割や全体像を把握することにする。①会社の方向性を決める「戦略論」、②顧客のニーズを探り、売れる仕組みづくりを考える「マーケティング」、④社員を動かす「組織論」、④会社の活動をお金という点から把握する「会計学」である。			
学生に対する評価の方法 学期末試験（70%）、毎回配布する出席カードの記入内容・問題意識（15%）、受講態度・欠席回数（15%）など、総合的に評価する。 ※病欠および就職試験等（やむを得ない場合）以外は、再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 授業概要と心得. 企業と社会および環境変化との関係. 経済学と経営学との違いについて. 第2回 株式会社など企業形態の諸特質について. 第3回 企業における戦略の役割、および戦略の次元（全社戦略、機能別戦略、事業部戦略など）について. 第4回 企業を取り巻く環境分析（内部環境、外部環境） 第5回 基本的な競争戦略（コスト・リーダーシップ戦略、差別化戦略、集中化戦略など） 第6回 マーケティングの全体像（マーケティングの定義を含めて） 第7回 市場細分化およびその基準、標的市場の選定 第8回 マーケティングの基本戦略 ①製品戦略 第9回 マーケティングの基本戦略 ②価格戦略 第10回 マーケティングの基本戦略 ③プロモーション戦略、④流通チャネル戦略 第11回 組織論（モチベーション論、リーダーシップ論、チームマネジメント論など） 第12回 会計 ①貸借対照表、損益計算書、キャッシュフロー計算書 第13回 会計 ②利益の概念（売上総利益、営業利益、経常利益、当期純利益） 第14回 会計 ③経営分析（安全性の分析、収益性の分析、効率性の分析、成長性の分析など） 第15回 学期末試験			
使用教科書 教科書は使用しない。随時、プリント等を配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 学期末試験は、プリントとその講義内容から出題するので、全出席と講義の復讐および専門用語の意味調べ等が必須である。			

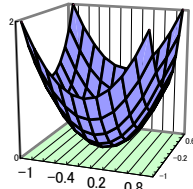
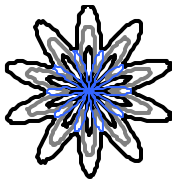
[授業科目名] 情報と社会		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 折笠 和文
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 現代社会、特に便利で効率的で合理化が叫ばれるような情報社会といわれる現代、そのメリットだけではなく、多くのデメリット（負の側面）を認識することも重要である。さまざまな社会の病理現象を認識し、その中で如何に生きるべきかを問い直すことが目標でありテーマである。			
授業の概要 IT（情報技術）の進展により、携帯電話からインターネットなど、我々はデジタル・情報社会の中で、多くの恩恵を享受しているが、反面、多くの問題も孕んでいる。講義では情報のもつ意味を考えながら、情報社会で多用されているカタカナ語・略語等の意味の理解、情報社会の功罪両面、情報社会に潜む病理現象および豊かさ・便利さ・効率化・合理化に潜む負の現象など、現代社会の特質を考察する。			
学生に対する評価の方法 学期末試験は勿論のこと、受講態度、遅刻数、欠席回数などのも考慮に入れて総合的に評価する。 ※病欠および就職試験等（やむを得ない場合）以外は、再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 情報社会を学ぶにあたっての授業の目的と講義内容の概要、授業方法等の説明および授業日程の説明 第2回 ①情報社会で多用されている日常用語の説明・解説（DVD、ADSL、IC、POS、ユビキタスなど） 第3回 ②情報ネットワークで多用されている用語の説明（LAN、eコマース、光ファイバーケーブルなど） 第4回 情報という言葉の由来と歴史的な展開 第5回 情報の性質と種類 第6回 現代社会における呼称の特質と解釈・内容（情報化社会、情報社会、高度情報社会、知識産業社会、高度通信技術社会、ハイテクノロジー社会、システム社会などの特質） 第7回 情報社会の特質「システム」の意味とシステム社会に関連して 第8回 ①高度情報化社会の具体的動向とその影響（個人・家庭生活・社会生活における事例とその光と影） 第9回 ②高度情報化社会の具体的動向とその影響（経済・産業・企業活動における事例とその光と影） 第10回 ①国際関係における情報化の具体的動向とその影響（グローバルに展開する情報化の進展について） 第11回 ②国際関係における情報化の具体的動向とその影響（デジタルエコノミー、eビジネス世界の進展、および主要各国の情報化の取り組み） 第12回 ①情報社会にみる利便性のパラドックス（情報社会に潜む病理現象と人間生活） 第13回 ②情報社会にみる利便性のパラドックス（情報社会の便利さ、効率化、合理化に潜む負の現象） 第14回 ネットワーク社会の進展にともなう諸問題（コンピュータの不正使用や有害情報、ネットワーク犯罪、プライバシーの問題など情報倫理問題） 第15回 学期末試験			
使用教科書 『高度情報化社会の諸相』折笠和文著（同文館出版）			
自己学習の内容等アドバイス 回数毎の授業内容が明記されているので、理解を深めるためにも事前にテキストを読んでおくことが望ましい。			

[授業科目名] 社会学／家族の社会学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 今井 隆太
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 社会学の対象と方法についての基礎知識を得ること。グローバル化という現代社会の現象が、私たちの日常生活をどのように変容させているかを知ること。毎回、小テストを実施する。インプットと同時に、アウトプットを学ぶこと。すこしでも文章を書くことが大切。			
授業の概要 指定テキストに沿って、各項目について講義する。テキストのテーマは、グローバル化時代の日常生活であり、私たちの学校生活、家庭生活、将来の職業生活がいま、どのような変化に直面しているかを学ぶ。事柄にはすべて歴史という側面がある。現在の大変さを知って、過去の教訓に学ぶのもまた重要だ。生きることに希望をもっていこう。そのための道案内が、社会学に課せられた課題でもある。			
学生に対する評価の方法 ほぼ毎回、講義内容に沿った小テストもしくはレポートを求める。これは出席と試験が一体になったもので、当然、出席は重視するが、小テストの答案が、出席していた内容を物語ることになることに注意すべきである。			
授業計画（回数ごとの内容等） 入れ替えはあるが、大体、以下の項目について講義する。 第1回 社会学入門、社会的相互行為、グローバル化 第2回 社会学理論と社会調査 第3回 身体社会学（健康・病気・障害） 第4回 社会成層と階級 第5回 貧困・社会的排除・福祉 第6回 人間の安全保障 第7回 人種とエスニシティ 第8回 組織社会学 第9回 戦争と現代 第10回 ライフストーリーの社会学 第11回 家族論 第12回 戦後日本の家族1 第13回 戦後日本の家族2 第14回 高度成長期の日本社会 第15回 現代をどうとらえるか テキストの他に、教材として映画、文芸作品などを用いる。とくに小津安二郎の映像作品には、家族について考えさせられるテーマが含まれている。例年、「東京物語」、「晩春」などをとりあげている。小津作品には、家族論的な要素と共に、戦後日本社会の変動をはかる要素も描かれている。映画史上見事な作品であるが、社会的な見方を学んでみよう。			
使用教科書 『入門 グローバル化時代の新しい社会学』西原和久・保坂稔共編、新泉社			
自己学習の内容等アドバイス 予習は特に求めない。復習として、難解な用語を調べる癖をつけたい。それも一般的な語義で十分なのか、『社会学用語辞典』のような専門辞書に拠る必要があるのか、それを判断するのもいい訓練になる。			

[授業科目名] アメリカの社会と文化		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 河井 紀子
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 人種、階級、ジェンダーの視点から、もうひとつのアメリカをみる。マイノリティの視点から、アメリカ文化の基本的価値である「自由・平等」理念の歴史的展開について学ぶことで、今アメリカで起こっている事象がどのような意味を持ち、なぜ起きているのかをよりよく理解できるようになることを目標とする。			
授業の概要 自由の国としてのイメージをもつアメリカ。しかし、アメリカの自由は固定されたものではなく、21世紀になった今もたえず議論されているし、また変えられていくべきである。アメリカ合衆国が軍事的、経済的、文化的に世界で傑出した国でありながら、今なお戦争をしているためにその国際的影響力は弱まっている時であるからこそ、アメリカの歴史と価値を学ぶことは重要である。 本授業では、映像資料や歴史史料も用いながら「自由」をキーワードに、「自由」の意味、その社会的条件、その境界（自由を享受する資格）という3つの視角から、自由と民主主義、物質的豊かさが一体となった「アメリカ文明」が世界を席捲する20世紀前半と、冷戦終結により唯一の超大国となったアメリカが国内外の新たな試練にさらされる20世紀後半をみていく。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度及び授業内で行うレポートによる授業の理解度（40%）、最終に実施する試験（60%）で総合的に評価する。なお、本授業は再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 講義の概要説明 「アメリカの世紀」 第2回 アメリカの根源—その理想と現実（植民地時代～南北戦争） 第3回 アメリカの根源—その理想と現実（植民地時代～南北戦争） 第4回 アメリカの文化の成立—その光と影（南北戦争後～1890年代） 第5回 20世紀前後のアメリカ—1890年代 第6回 革新主義の時代—1900年代～1910年代 第7回 大衆消費社会の展開—1920年代 第8回 「現代アメリカ」の危機—1930年代 第9回 アメリカの世紀へ—1940年代前半 第10回 冷戦下の「黄金時代」—1940年代後半～1950年代 第11回 激動の時代—1960年代 第12回 激動の時代—1960年代 第13回 保守の時代—1970年代～1980年代 第14回 文化戦争の世紀末—1990年代以降 第15回 試験日			
使用教科書 有賀夏紀『アメリカの20世紀』（上・下）（中公新書） 参考史料は適宜配布する。 【参考図書】 エリック・フォナー『アメリカ 自由の物語』（上・下）（岩波書店、2008年）			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業内容をテキストで予習しておくこと。			

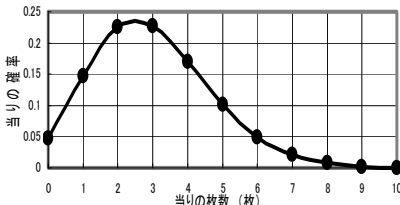
[授業科目名] 民族と文化		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 齊藤 基生
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 地球上には数多くの「民族」や「文化」が存在しているが、その定義はきわめてあいまいである。まずは言葉の定義から始め、各自の「民族」観や「文化」観を作る。そして、いまだ絶えることのない民族紛争の要因である、誤解、偏見、差別について、その背景を考える。			
授業の概要 民族や文化などの、言葉を定義する。自然人類学、文化人類学、それぞれの観点から、ヒトと人を見る。それらを踏まえたうえで、環境・民族と文化の関係を、衣食住それぞれの分野から概観する。			
学生に対する評価の方法 成績は、期末試験の平均点を指標（50％）に、受講態度（出席、遅刻、早退、出席カードへの記入など）を加味（50％）しながら、総合的に判断する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 導入。各自が民族や文化をどうとらえているか、アンケートを実施する。あわせて、講義の概要を説明する。 第2回 アンケート集計結果の講評。それを手がかりに、文化とは何か、民族とは何かを考える。動物学から文化人類学まで、様々な分野でどのように定義されているか解説し、各自の「文化」観を作る。 第3回 文化人類学と民族1。民族の定義。人文科学の諸分野で民族がどのように定義されているか、様々な研究者の見解を紹介する。 第4回 文化人類学と民族2。民族、民俗、風俗の違いについて述べる。 第5回 自然人類学と民族1。人種とは何か、人類の進化から解き起こす。 第6回 自然人類学と民族2。人種と形質、民族との関係について述べる。 第7回 自然人類学と民族3。血液型と民族の関係について述べる。 第8回 スライド大会。日本各地の食とデザインについて、スライドを用いて解説する。 第9回 世界の地理と気候。気候が人々の暮らしに及ぼす影響について、主に植生との関係を概観する。 第10回 衣と民族。赤道直下の熱帯から酷寒の極地まで、人々は様々な条件の下で暮らしており、それぞれの気候風土にあった衣服を身にまとっている。それらを概観する。 第11回 食と民族、その1。韓国、東アジアを中心に、食文化に表れた国内外の違いを見る。 第12回 食と民族、その2。食材と食に関する禁忌。 第13回 食と民族、その3。食器の話、箸とフォーク、食器を通して食の作法の違いを知る。 第14回 住まいと民族。衣食住同様、住まいも地域差が著しい。自然への適応と住文化の違いを考える。 第15回 評価試験。			
使用教科書 特定の教科書は用いず、適宜資料を配付する。			
自己学習の内容等アドバイス 普段から新聞、テレビ、ラジオなどのマスコミに親しみ、世の中の動きに注意を払ってほしい。			

[授業科目名] 国際社会の動き		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 加藤 英明
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 現代の社会生活において、国際的な知識、発想を有することは大きな財産といえよう。本講義は、日々最新の国際事情を解説して、受講者の理解に供するのみならず、それらによって来たる歴史的淵源を考察することで、将来を展望する。すなわち学問としての「国際社会の動き」を、つとめて平易に講ずるものである。			
授業の概要 まず考察の基礎として、国際社会における重要な要素である民族・文化（言語・宗教）・国家（政治）について、ヨーロッパとシナ（中国）を中心に解説する。世界の盟主としての地位が揺らいではいるが、なお相対的にはナンバーワンであり続けるアメリカについても、わが国と対照しつつ考察する。 受講者の希望に応じ、随時時事問題を取りあげる。新聞が苦勞なく読めることを目標とするので、時事教養を身に付けたい者で、意欲ある学生が受講せよ。			
学生に対する評価の方法 学期末に行う筆記試験の成績を基本とし（パーセンテージでいえば100%）、これに平常の受講態度などを加味して採点する。試験では、国際社会の動きへの関心度、基本的概念の理解度を主に問う。再評価は行わない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 教養とは何か 第2回 国際社会とは 第3回 アジアの国々 第4回 ヨーロッパの国々と諸民族 第5回 地理と歴史の重要性 第6回 地理と歴史の重要性（続） 第7回 民族とは何か 第8回 言語と世界 第9回 宗教と世界 第10回 宗教と世界（続） 第11回 国家と世界 第12回 アメリカと世界 第13回 アメリカと世界（続） 第14回 日本と世界 第15回 筆記試験			
使用教科書 『なるほど知図帳 2011 世界』昭文社 『世界史年表・地図』吉川弘文館			
自己学習の内容等アドバイス 日頃、新聞・テレビなどの国際情報に触れ、地図や年表で確認する習慣を身につければ、国際的素養は短期間で飛躍的に向上するであろう。			

[授業科目名] 数と形		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 森 千鶴夫	
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 管理栄養学部・メディア造形学部	
授業の到達目標及びテーマ 数式があまり好きでない人も、数式にはこんな意味があるのか、数式はこんなことに役立つのか、数式を図形化するとこんな面白い図形になるのか、ということ、パソコンを利用しつつ、比較的容易に理解することをテーマとし、結果として「数式は結構面白く、身近なもの、役立つもの」と実感でき、ある程度デザインなどに役立たせることができるようになることを到達目標とする。				
授業概要 高校で学んだ数式および若干新しい数式を対象にし、日常生活に関連した現象に結び付けて説明する。さらにパソコンを使い、数式を形に表すことによって、数式の新しい側面を見出しつつ理解を深める。				
学生に対する評価の方法 出席と授業態度（40%）、毎回行う簡単な演習問題（20%）、図形の自由作成と期末試験（40%）をもとにして総合的に判断する。				
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 授業の目的と講義内容の概要、数字の歴史、国際単位系 第2回 関数関係（1）：1次関数、多次関数（線、面積、体積） 第3回 パソコンによる1次、2次関数の図形化 第4回 関数関係（2）：弧度法と三角関数 第5回 直角座標と極座標 円、楕円、双曲線、放物線、等を表すのに便利な極座標 第6回 三角関数と極座標関数を使ったパソコンによる図形化 第7回 図形の自由作成 第8回 関数関係（3）指数関数、対数関数 第9回 パソコンによる指数関数、対数関数等の図形化 第10回 微分概念とパソコンによる近似計算。 第11回 積分概念とパソコンによる近似計算 第12回 関数関係（4）特殊な関数、パソコンによる図形化 減衰振動、サイクロイド、トロコイド、リサージュ、バラ曲線等。 第13回 ベクトル：ベクトル概念を理解し、演習を行う 第14回 試験日 第15回 学習のまとめ				 <p>半径の異なる円の等高面</p>
				 <p>三角関数と極座標を用いた花模様</p>
使用教科書 毎回、プリントを配布する。 【参考図書】 石原 繁 編 「大学数学の基礎」 裳華房				
自己学習の内容等アドバイス パソコンを使って数式・数学の新しい理解に活用するため、欠席はパソコンの新しい操作の仕方を学ぶ機会を逸するため極めて好ましくない。				

[授業科目名] 数と形		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 山田 敏子
[単位数] 2	[開講期] 1年次前期	[必修・選択] 選択	備考 幼児保育専攻
授業の到達目標及びテーマ 数学に関する興味・関心を持つことと数学的素養を養うことを目的とする。数と図形に関する基本的な内容を学ぶことにより、数学的な系統性・論理生を理解し、日常生活に活かし、考えることの楽しさや数学的な美しさや良さを理解することを到達目標とする。また、初等教育における「数と計算」「図形」指導を念頭に置く。			
授業の概要 この講座では、「数」と「形」についての算数的研究活動を通して、日常生活で活用されている算数・数学的な処理のよさに気付くとともに、考えることの楽しさや美しさを理解する。また、「算数的活動」、「見通しをもち、筋道を立てて考え、表現する能力」の育成のために、実践的な活動を多く取り入れた授業を行う。			
学生に対する評価の方法 受講態度・関心意欲（約20%）、課題・レポート（約20%）、試験の結果（60%）などで総合的に評価を行う。 特に、試験の欠席は認めないので注意すること。不合格者は再試験を実施するが、再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス(授業の進め方・算数を学ぶことの意義・数学的背景) 第2回 数の表し方と記数法の歴史の概観（零の発見と位取り・記数法） 第3回 数の拡張と演算①（整数の加減乗除・九九） 第4回 数の拡張と演算②（小数・分数の加減乗除） 第5回 数と計算の意味とその活用（四則演算の性質・問題作成） 第6回 日常における数学的な事象の考察 第7回 数と計算領域のまとめ及びテスト 第8回 小学校における図形の指導目標と内容 第9回 「図形」：平面図形（三角形・四角形・正方形・長方形・円） 第10回 「図形」：平面図形（平行四辺形・ひし形・台形・多角形） 第11回 「図形」：対称・合同な図形がつくる美しい模様(敷き詰め) 第12回 「図形」：立体図形（立方体・直方体・球・展開図） 第13回 「図形」：立体図形（角柱・角錐・円柱・円錐） 第14回 図形領域のまとめ及びテスト 第15回 小学校学習指導要領の目標及び授業のまとめ （数と形についての関係及びその算数的考察）			
使用教科書 必要に応じて、そのつどレジュメを配付する。(参考書 小学校学習指導要領解説 算数編 文部科学省 東洋館出版社)			
自己学習の内容等アドバイス 各授業のまとめと課題ワークを指示するので、予習・復習をしておくこと。特に、提出を指示するワークシートは、期日までに提出すること。			

[授業科目名] 数と形		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 服部 周子
[単位数] 2	[開講期] 1 年次後期	[必修・選択] 選択	備考 子どもケア専攻
授業の到達目標及びテーマ 小学校・中学校の数と計算・図形の一連の学習の流れを振り返り、小学校での算数の指導の重要性を知る。数学を学ぶことの楽しさや意義を実感し、日常生活に活かし物事を合理的に処理する力を養う。			
授業の概要 ここでは数学的素養を養うことを目的とし、数に関する話題を広く取り上げ講義する。またその際、幼児・初等教育における算数の学習指導（数と計算の指導）の場を念頭に置く。 具体的には、「数とは何か」、「数とはどう表現するのか」、「数の計算はなぜできるのか」を追究する過程を通して、自然数、整数、分数、小数について、そのとらえ方と性質を様々な角度から述べる。人類がどのように数を数字で表したか、数詞の仕組みを見付け出したかという数学史の面から資料の考察をする。また、「数とはどのように用いるのか」を追究する過程を通して、数と図形の関わりについても考察する。			
学生に対する評価の方法 毎時の学習評価問題の取り組み及び授業への参画態度を基に評価する。（40％） 講義内容の理解と自己変革と自己実現という観点から、評価する。（20％） 講義内容の理解度の程度を評価するテストを第8回と第14回に行う。（40％）			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 集合と数（ピタゴラスの実験、幼児の数の認識） 第2回 数の表し方と記数法の歴史（4大文明の記数法） 第3回 零の発見と位取り記数法 第4回 n進数（2進数等を基に、十進位取り記数法以外の記数法） 第5回 数の拡張と演算 その1 第6回 数の拡張と演算 その2 第7回 数の拡張と演算 その3 第8回 四則演算の意味（加法、減法、乗法、除法）・小テスト 第9回 数と計算の意味の活用（指数計算、複利計算、対数計算、方程式解法） 第10回 数と計算の意味の活用（平方数やパスカルの三角形、ピタゴラス数） 第11回 図形の形と大きさ 第12回 小学校における図形の指導目標と内容 第13回 中学校における図形の指導目標と内容 第14回 三平方の定理の多様な証明方法・まとめのテスト 第15回 日常の事象の数学的な手法での観察			
使用教科書 「入門 算数学」 日本評論社 黒木哲徳 著 ≪参考書≫：小学校算数科学習指導書、中学校数学科学習指導書 文部科学省			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業範囲を教科書で予習しておく。 本日の授業範囲を教科書で復習しておく。 関連する内容を図書・インターネット等で調べる。			

[授業科目名] 確率と統計		[授業方法] 講義	[授業担当者] 森 千鶴夫
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 前期：管理栄養学部 後期：メディア造形学部
授業の到達目標及びテーマ 私達の身の回りには、人口、家計、小遣い、身長、体重など、いろんな種類の多くのデータがあり、その活用に迫られることが多くある。それらのデータを、パソコンを使って整理して、確率と統計の理論に基づいて解析し、意味付けを行なうことをテーマとする。 確率と統計の初歩的な理論を理解すること、身近なデータを、パソコンを使って整理し解析して、グラフ表現を行なう具体的な手法を体得することを到達目標とする。			
授業概要 確率について身の回りの出来事を例にとりて説明し、次に確率の延長としての確率分布（2項分布、ポアソン分布、正規分布、など）について述べる。続いて、身の回りのいろんなデータとその統計処理法について述べ、パソコンを使って、統計的データを整理して図形化し、種々の統計的数値を求める。			
学生に対する評価の方法 出席状況と授業態度（40%）、毎回行う簡単な演習問題（20%）、期末試験（40%）をもとにして総合的に判断する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 授業の目的と講義内容の概要、順列、組合せ 第2回 確率、2項分布 第3回 パソコンによる計算と表示 第4回 データ：データの収集、整理、平均値、広がり、標準偏差 第5回 パソコンによるデータの整理、種々の計算、表示 第6回 ポアソン分布、正規分布、 第7回 偏差値 第8回 パソコンによるポアソン分布、正規分布に関する計算とグラフ表現 第9回 最小2乗法：回帰直線、近似曲線 第10回 共分散、相関、相関係数 第11回 パソコンによる相関係数の計算、近似曲線による表現 第12回 推定と検定 第13回 生活と統計 物価指数、景気動向指数、ローレンツ曲線、ジニ係数 第14回 試験日 第15回 学習のまとめ			
		 <p>この図はお年玉つき年賀はがきが100枚ある場合に4等が1枚も当たらない確率は0.05（5%）であり、たとえば3枚当たる確率は0.23（23%）であることを意味する。この分布は2項分布と呼ばれる。このような計算をして図に示すことはEXCELを使えば簡単にできる。</p>	
使用教科書 毎回、プリントを配布する。 【参考図書】 室 淳子・石村貞夫著 「Excel でやさしく学ぶ統計解析」 東京図書			
自己学習の内容等アドバイス 上級生になると、種々の調査、実験、および研究のデータを扱うようになり、データの整理を行なって報告書を作成しなければならない。その際に、データの整理が統計学的手法によってなされ、意味のある統計的な数値を導き出されているかどうかは重要な事柄である。統計学的手法の有用さを十分に理解するように努めて欲しい。そのためには、アンケートデータや実験データなどに随時適用することを勧める。			

[授業科目名] 確率と統計		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 服部 周子
[単位数] 2	[開講期] 1年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 前期：子どもケア専攻 後期：幼児保育専攻
授業の到達目標及びテーマ <ul style="list-style-type: none"> ・基礎的な統計処理の手法を理解し、それをもとに身近な現象を理解したり分析したりできるようなる。 ・多くの演習を通して統計学の知識をマスターする。 ・統計学独特の専門用語を身につける。 			
授業の概要 <p>私達の身の回りにある自然現象や社会事象には、人口、家計、小遣い、身長、体重など、いろいろなデータがあり、その活用に迫られることが多くある。しかし、それらのデータを活用するには、科学的な分析方法によって解析し、意味付けを行って初めてその価値をもつ。統計学は、大量のデータの中にある法則性を見出す分析方法である。そこで、確率と統計の基礎的な手法を理解し、それをもとに、身近で具体的なデータを解析し、グラフ表現を行う手法を体得する。</p>			
学生に対する評価の方法 <p>毎時、具体的な統計処理あるいは学習評価問題と授業への参画態度を基に評価する。(40%) 講義内容の理解を評価するテストを第8回と第14回に行う。(40%) 自己実現、自己変革を果たしかたかを評価する。(20%)</p>			
授業計画(回数ごとの内容等) <p>第1回 統計学の考え方の基礎・分析概念 第2回 確率と確率分布の特徴 第3回 母集団と標本・標本抽出 第4回 階級分けと資料の作成 第5回 標本分布の特性値 ・中心的傾向の特性値 (中央値、最頻値、平均) 第6回 標本分布の特性値 ・変動の特性値 (分散、標準偏差、変動係数) (テスト) 第7回 確率とは・確率を表す方法と記号 第8回 確率変数と確率分布・第1章と第2章のテスト 第9回 二項分布 (離散型確率分布) 第10回 ポアソン分布 (離散型確率分布) 第11回 一様分布 (離散型一様分布・連続型一様分布) 第12回 正規分布 (標準化・正規分布表の読み方)・偏差値 第13回 統計的有意性(信頼係数・有意水準)・標本平均の分布 第14回 母平均μの推定平均・第3章と第4章のテスト (テスト) 第15回 t分布</p>			
使用教科書 <p>「はじめての統計学」 日本経済新聞社 鳥居泰彦 著</p>			
自己学習の内容等アドバイス <p>次回の授業範囲を教科書で予習しておく。 専門用語の意味を確実に理解するよう復習しておく。</p>			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
自然のしくみ		講義	井谷 雅治
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	1・3年次前期	選択 (教職必修)	幼児保育専攻のみ (小学校教員免許取得用に開講)
授業の到達目標及びテーマ 自然事象を通して、自然のしくみやきまりを追求し、自然のもつ偉大さ・巧みさを感動しながら自然は相互に関わりをもっていることに気付き、地球環境に配慮し、命を大切にできる人間としての生き方を学ぶことを目的とする。			
授業の概要 講義内容、観察・実験を通して積極的に参加し、理科の本質をつかもうとする態度や知識・理解・技能を身に付けるとともに、自然のもつ偉大さ・巧みさ・しくみに共感し、自然を愛する人間につとめる。			
学生に対する評価の方法 試験50%・小論文30%・授業態度20% なお、この授業は再評価を実施しない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回：自然科学概論 第2回：学習指導要領の解説 第3回：物質とエネルギー(1) 水溶液 第4回：物質とエネルギー(2) 熱と光と力 第5回：物質とエネルギー(3) 電気と磁石 第6回：生物とその環境(1) 身近な生き物 第7回：生物とその環境(2) 植物の生活 第8回：生物とその環境(3) 動物の生活 第9回：生物とその環境(4) 飼育と栽培 第10回：地球と宇宙(1) 地形と土地 第11回：地球と宇宙(2) 天気と季節 第12回：地球と宇宙(3) 地球と宇宙 第13回：地球と環境 第14回：筆記試験と自然界の事象についてのディスカッション 第15回：授業のまとめと小論文提出			
使用教科書 テキスト：プリント、小学校学習指導要領解説(理科編)、			
自己学習の内容等アドバイス <ul style="list-style-type: none"> ○ 自然現象のニュース・情報を基にした自己学習 ○ シラバスについての予習 ○ 講義内容の深化学習 			

[授業科目名] 自然のしくみ		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 井谷 雅治
[単位数] 2	[開講期] 1～2年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 自然事象を通して、自然のしくみやきまりを追求し、自然のもつ偉大さ・巧みさを感動しながら自然は相互に関わりをもっていることに気付き、地球環境に配慮し、命を大切にできる人間としての生き方を学ぶことを目的とする。			
授業の概要 講義内容を通して積極的に参加し、理科の本質をつかもうとする態度や知識・理解、技能を身に付けるとともに、自然のもつ偉大さ・巧みさ・しくみに共感し、自然を愛する人間につとめる。			
学生に対する評価の方法 試験50%・小論文30%・授業態度20%			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回：自然科学概論 第2回：学習指導要領の解説 第3回：物質とエネルギー(1) 水溶液 第4回：物質とエネルギー(2) 熱と光と力 第5回：物質とエネルギー(3) 電気と磁石 第6回：生物とその環境(1) 身近な生き物 第7回：生物とその環境(2) 植物の生活 第8回：生物とその環境(3) 動物の生活 第9回：生物とその環境(4) 飼育と栽培 第10回：地球と宇宙(1) 地形と土地 第11回：地球と宇宙(2) 天気と季節 第12回：地球と宇宙(3) 地球と宇宙 第13回：地球と環境 第14回：筆記試験と自然界の事象についてのディスカッション 第15回：授業のまとめと小論文提出			
使用教科書 テキスト：プリント、			
自己学習の内容等アドバイス <input type="radio"/> 自然現象のニュース・情報を基にした自己学習 <input type="radio"/> シラバスについての予習 <input type="radio"/> 講義内容の深化学習			

[授業科目名] 生命の科学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 日暮 陽子
[単位数] 2	[開講期] 1年次前期	[必修・選択] 選択	備考 ヒューマンケア学部
授業の到達目標及びテーマ 授業テーマ：「生命の科学」では、生体の基本構造である細胞を学ぶ。 到達目標：生体の基本知識の習得			
授業の概要 細胞の構造・機能、細胞間の情報伝達を理解したうえで、生体内で起こっている現象について講義をしていきます。生体の基本を学ぶことで、生体のしくみを考える基盤を作っていきましょう。			
学生に対する評価の方法 筆記試験を行う。評価は以下の配分で行う。 出席点：全出席で10点 試験点：中間試験（40点）・期末試験（50点）			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 生命科学とは 第2回 細胞：細胞の構成 第3回 細胞内小器官の機能 第4回 組織：上皮組織・結合組織・神経組織・筋組織 第5回 生体の構成：生命の物質的基盤 第6回 生命の設計図1 第7回 生命の設計図2 第8回 中間試験 第9回 生体内恒常性 第10回 代謝 第11回 エネルギー産生 第12回 情報伝達 第13回 食と健康 第14回 記憶 第15回 期末試験			
使用教科書 生命科学 羊土社 東京大学生命科学教科書編集委員会			
自己学習の内容等アドバイス 講義の内容を振り返り、教科書やノートを見直してみてください			

[授業科目名] 人間と地球環境		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 大矢 芳彦
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 私たちは地球上で生を受け、地球上で生活を営み、そして地球に還る。本講では、私たちの生活の場である「地球」あるいはそこに住む私たち「人類」というものを様々な観点から理解する。そして私たち人類が今後も地球と調和的に生きるためには何をすればよいか一人ひとりが考え、行動できる知識と方法を取得することを目的とする。			
授業の概要 授業方法は講義形式で行うが、画像や映像を取り入れてより理解が深まるよう工夫しながら解説する。前半は宇宙を知り、宇宙から地球と人類を探ると同時に生きている地球の現状について理解を深めていく。そして後半には地球の動きと私たちの生活との関係について概説する。ここでは特に、「自然災害」と「地球環境問題」についてその現状を認識する。			
学生に対する評価の方法 基本的には、平常の授業態度（10%）、最終時に行う試験（90%）であるが、自主レポートなどを書いたものはその内容によって評価に加える。また、授業中に無駄話をするなど他の学生の迷惑行為をした場合は別途減点する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 授業計画は、第1回のアンケート調査に基づいて決定されるが、大まかな授業計画は次のとおり。 第1回 ガイダンスとアンケート（講義の内容・目的と単位取得の方法など） 第2回 宇宙の大きさとその動き（宇宙における地球の位置付け） 第3回 星の一生（星の誕生から消滅まで宇宙で行われている現象の認識） 第4回 太陽系の構成（地球に近い天体、特に太陽と惑星の特徴） 第5回 地球の誕生（どのようにして地球は誕生したのかを探る） 第6回 生命が存在する環境と地球外生命体の可能性（生命は地球だけのものか） 第7回 生命の誕生（地球上で生命がいつに誕生したのかを探る） 第8回 生物の進化と地球環境の変化（生物の進化と地球環境との深い関連性を知る） 第9回 地震の原因と被害（災害の中で最も恐ろしいと言われる地震の原因を探る） 第10回 東海地震について（地震予知の現状と東海地震に対する対策の現状についての把握） 第11回 地球環境問題の素因（なぜ今、地球環境問題が叫ばれているのかその理由の認識） 第12回 エネルギー問題（エネルギー問題の現状とその対策の把握と未来のエネルギーについての考察） 第13回 地球温暖化（温暖化問題について地球科学的な見地からの分析と将来予測） 第14回 生物種の減少（現在の生物種の減少の現状と過去の生物の進化の歴史との比較） 第15回 定期試験			
使用教科書 「はるかなる地球」 大矢芳彦著 荘人社			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業範囲を教科書で予習しておくこと。専門用語の意味などを事前に調べておくこと。			

[授業科目名] 科学の歴史		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 松浦 俊輔
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 自然科学や、それと密接に関係する技術が、現代の私たちの社会生活や精神活動にとってどんな役割を担っているのかを理解します。自分の領分とは離れたところの話を、自分の中にあるものと関連づけて理解することが目標です。			
授業の概要 自然科学がどのように成立したか、科学的方法がどのように確立したか、その歴史的な由来や展開をふりかえることによって、科学的思考のあり方をいくつかの方向から捉えることによって、自然科学や科学技術の総合的なイメージを把握します。A（前期）は光と色を中心とした科学史の話題、B（後期）は自然の統一的理解のためのアイデアや実験という面からの話題を取り上げます。			
学生に対する評価の方法 ①日常の出席状況と、毎回提出してもらった授業の感想 ②期末試験（基礎知識の確認と論述。論述はあらかじめ課題を出しておき、原稿を用意して試験に臨んでもらいます）を総合評価（①50%+②50%）しますが、出席点が6割に達していない場合は、再評価なしの不合格とします。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス。 第2回 科学を論じることのイメージをつかむための資料を見てもらいます。 第3回 A自然哲学の誕生 B自然哲学の誕生 第4回 A中世からルネサンスへ Bアリストテレス 第5回 A望遠鏡と顕微鏡 Bギリシアの先駆的成果 第6回 A光の速さ Bアルキメデス 第7回 A光の正体とニュートン Bギリシアからイスラムへ 第8回 A電磁波としての光 Bルネサンス 第9回 A光、時間、空間 B天体の動き 第10回 A光の二重性 Bコペルニクスの展開 第11回 A科学と芸術（色彩と空間） Bチコ・ブラーエとケプラー 第12回 A科学と芸術（抽象化への道） Bガリレオ 第13回 A予備 Bニュートンのりんご 第14回 Aまとめ B様々な統一とまとめ 第15回 試験 なお、実際の反応を見て、進度を修正することがあります。			
使用教科書 教科書はとくに指定しません。授業時に資料を配付します。また、参考書については、授業時に提示します。			
自己学習の内容等アドバイス だんだん見えてくる(?)「科学的な扱い方」とはということかの理解をふまえて、自分の身のまわりにある素材について、科学的に考えてみることを繰り返してください。			

[授業科目名] 美術の世界		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 鷹巣 純
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 近代以前の日本絵画が問題としてきた視覚表現の諸要素を理解し、情報を視覚によって表現することの意味を知ることを目標とする。			
授業の概要 主に江戸時代以前の日本美術に属するさまざまな絵画の中に示される視覚イメージについて、毎回ひとつの着眼点を設定し、その意味や歴史的展開を紹介してゆく			
学生に対する評価の方法 期末試験およびレポート 原則として再評価は実施しない			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス 第2回 フィクションとしての絵画 第3回 凶像とは何か 第4回 絵の中の空間 第5回 絵の中の空間 第6回 絵の中の言葉 第7回 模倣と見立て 第8回 怪物の造形 第9回 変身のイメージ 第10回 腐乱死体の美術 第11回 絵画における描かないことと見えないこと 第12回 異界へのまなざし 第13回 試験 第14回 レポート講評 第15回 レポート講評			
使用教科書 なし			
自己学習の内容等アドバイス 毎回膨大なスライドを投影するので、記録用の撮影機材があるとよい。毎授業ごとに必ず復習し、ノートの内容と画像を結び付けておかないと、授業終盤でまとめて試験対策を講じようとしても内容を復元できなくなるので注意。			

[授業科目名] 音楽の世界		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 黄木 千寿子
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 西洋芸術音楽を聴く為にコンサート会場へと足を運ぶ愛好家の数は、年々減少している。その一方、ドラマやCM等のBGM、またネット上の音楽配信によって、西洋芸術音楽はポピュラー音楽と並び扱われ、知らず知らずに我々の耳に届く、意外に身近な存在でもある。この授業では、こうした西洋芸術音楽の流れを歴史的、文化的に理解することによって、教養としての西洋芸術音楽の知識を身につけることを到達目標とする。			
授業の概要 中世から現代まで、西洋芸術音楽の発展の歴史を概観する。各々の時代における社会的、文化的背景などを交えながら、比較的有名な楽曲を例に平易な解説を行い、西洋芸術音楽を鑑賞する力を養うとともに、雑多なジャンルの音楽が氾濫する現代において、西洋芸術音楽が果たしてきた役割を理解することを目的とする。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度（14%）、小テスト（26%）、最終筆記試験（60%）で総合的に評価を行う。試験の欠席は認めないので注意すること。再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション（西洋芸術音楽とは何か、講義内容の概要、参考書の紹介など） 第2回 中世音楽（グレゴリオ聖歌とその発展、ノートルダム楽派） 第3回 中世～ルネサンス（アルス・ノヴァ、フランドル楽派） 第4回 ルネサンス（16世紀、ジョスカン・デ・プレ他） 第5回 バロック①（マドリガーレ、オペラの誕生） 第6回 バロック②（協奏曲、バッハ、ヘンデル他） 第7回 ウィーン古典派①（前古典派、古典派の作曲技法） 第8回 ウィーン古典派②（ソナタ形式、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン） 第9回 ロマン派①（ロマン派の作曲技法、ショパン、シューマン他） 第10回 ロマン派②（ロマン派オペラ、ワーグナー、ブラームス他） 第11回 ロマン派③（民族主義の音楽） 第12回 世紀転換期から第1次世界大戦へ 第13回 20世紀①（ストラヴィンスキー、シェーンベルク他） 第14回 20世紀②（1945年以降） 第15回 最終筆記試験			
使用教科書 岡田暁生著『西洋音楽史』中公新書1816（中央公論新社）			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業範囲を教科書で予習することが望ましい。授業では音源を多用するため、聴き漏らさないよう注意する。			

[授業科目名] 音楽の世界		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 愛澤 伯友
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ <ul style="list-style-type: none"> ・「音楽とは何か」「芸術とは何か」「創作とは何か」を理解し、各自の領域で探求する。 ・「西洋音楽とは何か」「邦楽とは何か」を理解、探求する。 ・教養としての「音楽」を習得する。 			
授業の概要 「音楽」について、歴史、地理、文化、社会、宗教、民族、風俗、言語などのさまざまな角度からアプローチし、音楽の多様性の理解と同時に、本来のリベラルアーツとしての教養を高めます。授業は毎回のテーマを中心に、講義、音楽、映像など、さまざまなサンプルから深く考察していきます。			
学生に対する評価の方法 「授業ごとの参加度」(30%)－毎回のコメントにて確認、「期末レポート」(70%)－講義で習得した「芸術」「音楽」「教養」を各自が理解し、論述できるか。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 「音楽」とは何か?－オリエンテーション、音楽とは何か、西洋音楽と邦楽 第2回 日本の音楽(1)－邦楽は西洋音楽だった(奈良時代、音楽の伝来、邦楽) 第3回 日本の音楽(2)－舶来品の西洋音楽(明治時代、西洋音楽と邦楽) 第4回 テキストと音楽(1)－歌い方には4通りもある(テキストと音楽との関係、西洋詩学) 第5回 テキストと音楽(2)－和風ラップに至る道(日本語と音楽の関係、東遊歌、能楽) 第6回 宗教と音楽－感動『戦場のピアニスト』に隠された秘密(宗教、民族と音楽) 第7回 ポピュラー音楽－Mozartの時代にもポピュラー音楽はあった(大衆芸能と芸術の差異) 第8回 日本音楽の受容－エッフェル塔と三味線(パリ万博、異国趣味、印象派の音楽) 第9回 音律－ドレミは対数?(音響学基礎、音律、世界の音階) 第10回 『第9』とは－なぜ『第9』は年末恒例?(戦後西洋音楽受容史、西洋音楽の衰退) 第11回 著作権－自分の曲でも使用料払うの!?(音楽における国内、海外の著作権法の概説) 第12回 オペラ－愛の結末は・・・(古典派オペラ、イタリア・オペラ、楽劇) 第13回 電子音楽－電子立国ニッポンはすごい!(発振の原理、発展史、日本の技術とアーティスト) 第14回 民族音楽－音楽は世界非共通(民族音楽とその関連、民族音楽からの享受) 第15回 現代の音楽－音楽、なう!(20世紀後半からの現代音楽、音楽と社会)			
使用教科書 指定なし。毎回の授業で資料を配布する。参考資料などについては授業内で紹介する。			
自己学習の内容等アドバイス 授業で取り上げたテーマに関する楽曲や作品を鑑賞すること。また、作者、時代背景など、関連した項目についても幅広く調べること。			

[授業科目名] 文芸の世界		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 大島 龍彦
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 1～4年次：管理栄養学部・メディア造形学部 1～3年次：ヒューマンケア学部
授業の到達目標及びテーマ 短編小説の魅力 小説とは何か。短編小説の方法とその魅力について知る。 小説の方程式を知れば誰でも1編の小説は書けることを知る。 ☆実際に書いてみたい人は、「教養総合演習Ⅰ（短編小説を書く）」を受講してください。			
授業の概要 文芸作品には、詩歌・小説・戯曲（脚本・シナリオ）・評論・随筆など様々なスタイルがある。講義では、特に短編小説について学ぶ。『漢書芸文志』によれば、小説とは「街談巷語の説」である。だとすれば、小説では何をどう書いてもよいはずである。が、これまでに発表された小説には、本質らしきものや普遍的技法といったものがみられることを学ぶ。			
学生に対する評価の方法 テストと授業に取り組む姿勢、レポートなどの提出物によって評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 講義概説（出席とミニットペーパー・講義の目標とその方法） 第2回 文芸の世界概説（詩歌、台本、小説などについて） 第3回 志賀直哉の「山鳩」と小説の三要素について 第4回 小説の三要素と有史以来の作品について 例えば「千一夜物語」「聖書」「源氏物語」など 第5回 小説の構造1 例えば志賀直哉「出来事」 第6回 小説の構造2 例えば芥川龍之介「蜜柑」 第7回 小説のジャンルについて1 例えば川端康成「合掌」 第8回 小説のジャンルについて2 例えば内田百閒「風の神」・「山東京伝」 第9回 小説のジャンルについて3 例えばヘミングウェイ「老人と海」 第10回 模倣ということ 例えばレイモンド・チャンドラーと村上春樹など 第11回 模倣からオリジナルへ1 例えば芥川龍之介『今昔』から「鼻」へ 第12回 模倣からオリジナルへ2 例えば芥川龍之介『今昔』から「運」へ 第13回 人称（視点）の問題について 第14回 テスト 第15回 講義のまとめ なお、小説作法の方程式については各講義の中で少しずつ明らかになっていく。			
使用教科書 必要に応じてプリントを配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 予習・事前に配布する短編小説を分析しながら読んでくる。復習・本時にあつかった作品の鑑賞文を書く。			

[授業科目名] 演劇の世界		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 田尻 紀子
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 1～4年次：管理栄養学部・メディア造形学部 1～3年次：ヒューマンケア学部
授業の到達目標及びテーマ テーマ「浄瑠璃の成立と展開」 「文楽」として親しまれている人形浄瑠璃の成立と展開をたどりながら、演劇を通して日本の古典芸能や日本文化について学ぶことを目標とする。			
授業の概要 浄瑠璃は、江戸時代に「語り」と伴奏を伴った人形劇として完成されたが、その源流は、中世の『平家物語』（平曲）にまで遡る。本講義では、浄瑠璃の歴史的展開をたどりながら、大人気を博した近松門左衛門の世話浄瑠璃作品を紹介し、その特色について考察する。また、作品を鑑賞しながら、歌舞伎との関わりや、時代物の三大名作『菅原伝授手習鑑』『義経千本桜』『仮名手本忠臣蔵』についても言及したい。			
学生に対する評価の方法 学期末試験の成績や作品鑑賞時のレポートによって評価する。 授業への出席状況も反映されますので、欠席や遅刻には十分注意すること。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション・芸能の起源 第2回 時代の特色——中世—— 第3回 『平家物語』と「語り」の成立 第4回 平曲の衰退と早物語『浄瑠璃物語』の流行 第5回 浄瑠璃節と人形浄瑠璃の成立 第6回 時代の特色——近世—— 第7回 古浄瑠璃時代 第8回 近松門左衛門と世話物——『曾根崎心中』と『冥途の飛脚』—— 第9回 作品鑑賞① 第10回 合作時代における時代物 第11回 時代物三大名作② 第12回 作品鑑賞 第13回 時代物三大名作③ 第14回 定期試験 第15回 作品鑑賞			
使用教科書 必要に応じて資料を配付する。			
自己学習の内容等アドバイス 作品鑑賞に際しては、鑑賞のための資料をあらかじめ配付するので、事前に梗概や特色などについて予習しておくこと。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
スポーツと健康 I (実習 I)		実習	正 美智子
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
1	1 年次前・後期	選択	管理栄養学部
授業の到達目標及びテーマ I 自然に興味を持たせ、自然に上達させること II 各自の技能に応じてルールや審判法を高度なものにしていき、最終的に競技と呼べるところまでもっていく III バドミントンを楽しむこと、そして、楽しみ方を知ること			
授業の概要 スポーツや身体運動は、生涯にわたって健康的な生活を送るために、全ての人間に必要な不可欠なものである。本授業では、バドミントンを中心に理論に基づいた運動実践法を講義し、その具体的方法について実習する。			
学生に対する評価の方法 課題に対する取り組みと成果 (60%)、受講態度 (40%) など総合的に評価する。本授業は実習科目であるため、とくに授業欠席は減点の対象となるので注意すること。再評価は実施しない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 1回 実習 初歩的技能の習得 1. バドミントンの歴史 2. シャトルあそび 3. グリップ 2回 実習 初歩的技能の習得 ○運動特性、技術、用具などに関する知識の習得 1. ハイサービス 2. ストローク 3. 簡易ゲーム 3回 実習 初歩的技能の習得 ○各種グリップの理解 1. ショット ・ドライブ ・スマッシュ ・ヘヤピン ・ドロップ ・クリヤー ・ロブ 2. 簡易ゲーム (ハーフコートダブルスゲーム) の実践 4回 実習 初歩的技能の習得 ○ストロークの理解と競技規則に関する知識の習得 1. いろいろなサービス ・ショートサービス ・ドライブサービス ・クリックサービス 2. 簡易ゲーム (オールコート3対3のゲーム) の実践 5回 実習 基本的技能の習得 1. 高度なストローク 2. フットワーク 3. 基本フラインの組み合わせ練習 6回 実習 基本的技能の習得 ○ダブルスゲームの進め方の理解 1. ダブルスゲーム ・ダブルスのルール ・フォーメーション ・審判法 ・ゲームの実践 7回 講義 VTR (全日本バドミントン選手権大会ダブルスの部) を見る 1. トップアンドバック、サイドバイサイド 2. 入れ替わり (攻守) のタイミング 3. VTRを見て動きや打球技術のポイントをまとめ、レポートを提出する 8回 実習 基本的技能の習得 ダブルスゲームの実践 ○サービス中のフォルトの理解 9回 実習 基本的技能の習得 ダブルスゲームの実践 ○ラリー中のフォルトの理解 10回 実習 基本的技能の習得 ダブルスゲームの実践 ○セッティングの理解 11回 実習 応用技能の習得 公式試合形式でのチーム対抗リーグ戦Ⅰ 12回 実習 応用技能の習得 公式試合形式でのチーム対抗リーグ戦Ⅱ 13回 実習 応用技能の習得 公式試合形式でのチーム対抗リーグ戦Ⅲ 14回 実習 応用技能の習得 公式試合形式でのチーム対抗リーグ戦Ⅳ 15回 個人で取り組んだ課題の成果をまとめ、レポートを提出する ☆課題とは毎時間実施する 20 分間の有酸素運動 (ウォーキング、ジョギング、ランニング) のこと			
使用教科書 (参考図書) 大体連研修部作成教材 バドミントン (平成 20 年度作成 DVD 教材シリーズ)			
自己学習の内容等アドバイス バドミントンに必要な基礎体力を身につける努力をすること。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
スポーツと健康Ⅰ（実習Ⅰ）		実習	正 美智子
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
1	1～4年次前・後期	選択	メディア造形学部
授業の到達目標及びテーマ Ⅰ テニスの基本技術を習得し、ゲームができる。 Ⅱ 瞬発力、持久力、調整力などの体力を高める。 Ⅲ テニスを通してスポーツマンシップを涵養する。			
授業の概要 最近の身体運動に関する様々な現象についての科学的研究の進展は著しい。21世紀を健やかに生きるために、身体運動に関わる科学的知識と手段をテニスを実践的に学習する中で獲得する。 テニスは、現在国際的なスポーツであることや、年齢・性別などそれぞれに応じたプレイを楽しむことができるので生涯スポーツに適している。			
学生に対する評価の方法 課題に対する取り組みと成果（60%）、受講態度（40%）など総合的に評価する。本授業は実習科目であるため、とくに授業欠席は減点の対象となるので注意すること。再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 講義 1. ガイダンス 大学体育の意義、授業の目的や進め方について解説する。 2. スポーツのスキル 第2回 実習 テニスの基礎Ⅰ 打球技術 1. ラケットワーク 2. グランドストローク 第3回 実習 テニスの基礎Ⅰ 打球技術 1. ボレー 2. サービス 第4回 実習 テニスの基礎Ⅰ 打球技術 1. スマッシュ 第5回 講義 テニスの技術論 1. 技術構造及び基本技術について解説する。 2. 一流プレイヤーの動きを分析・解説するとともに受講生の動作について分析・解説する。 3. 打球技術及び動きのポイントについてまとめ、レポートを提出する。 第6回 実習 テニスの基礎Ⅱ 総合練習 第7回 実習 テニスの基礎Ⅱ ダブルスの基本戦術 1. フォーメーション 2. 連続プレイの組み立て 3. コンビネーションの理解と実践 第8回 実習 テニスの基礎Ⅱ ダブルスの応用戦術 1. フォーメーション 2. コンビネーション 3. コンビネーションの実践 第9回 実習 ルールとマナー 1. 試合の進行 2. 審判法 3. ルール 4. マナー 第10回 実習 テニスの基礎Ⅱ 基礎練習で習得した技術や戦術をゲームに応用し実践する。の応用 第11回 実習 応用技能の習得 ダブルス リーグ戦1 第12回 実習 応用技能の習得 ダブルス リーグ戦2 第13回 実習 応用技能の習得 ダブルス リーグ戦3 第14回 実習 応用技能の習得 ダブルス トーナメント戦1 第15回 実習 応用技能の習得 ダブルス トーナメント戦2 ◎雨天時やコートコンディション不良時は、アリーナまたはサブアリーナで実施する。			
使用教科書 (参考図書) VTR 神和住 純 監修 「ザ・ベスト・オブ・ウィンブルドン」 ポニーキャニオン VTR BBC 制作 「テニス教室決定版」 ポニーキャニオン			
自己学習の内容等アドバイス テニスに必要な基礎体力を身につける努力をすること。			

[授業科目名] スポーツと健康 I (実習 I)		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 笹川 慶
[単位数] 1	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 1年次：管理栄養学科 1～4年次：メディア造形学部
授業の到達目標及びテーマ フライングディスク フライングディスク(フリスビー)を用いた競技は近年注目されており、性別・年齢に関わらず、技能レベルに応じて誰でも手軽に楽しめるニュースポーツである。このようなフライングディスクの特性を理解しながら、身体を動かす喜びやゲームの楽しさや、異なる個性との関わりを通じて、互いに学び合い、助け合い、励ましあい、チームとしての強調性などを習得し、生涯を通してスポーツに親しむ習慣を養う。そこで、本講義ではチームスポーツを中心としたフライングディスク競技を可能な限り紹介、実践することを目的とする。			
授業の概要 心身の健康は万人共通の願いであり、健康の上こそ大なる個性の発展が期待できる。しかし、近年における機械文明の急速な発展に伴って心理的なストレスや運動不足が増すと共に、豊饒な食生活とも相俟って健康を損ねる機会が多発している。そこで本講義では、実際にスポーツ活動を行うことによって、心身の健康を維持増進させる方法のひとつである生涯スポーツへ自ら積極的に親しむ姿勢を養うことを目標とする。			
学生に対する評価の方法 <ul style="list-style-type: none"> ・授業への取り組み方、授業態度等から総合的に評価する ・出席が3分の2に満たないものは単位習得なしとする。 			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 履修に関するガイダンス・オリエンテーション 第2回 基本的技能Ⅰ (グリップ、スローイング、キャッチング) 第3回 基本的技能Ⅱ (バックハンドスロー、サイドアームスロー、ハンマー、など) 第4回 ドッチビー 第5回 他競技スポーツ 第6回 アルティメットについて (講義、班編制およびルール)スポーツ 第7回 ポートアルティメットⅠ 第8回 ポートアルティメットⅡ 第9回 基本練習とミニゲーム 第10回 他競技スポーツ 第11回 アルティメットの練習法 (基本動作とフォーメーション、ルール) 第12回 リーグ戦Ⅰ 第13回 リーグ戦Ⅱ 第14回 リーグ戦Ⅲ 第15回 トーナメント (リーグ戦Ⅲの結果をもとに)			
使用教科書 なし			
自己学習の内容等アドバイス 反復練習あるのみ。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
スポーツと健康 I (実習 I)		実習	森 奈緒美
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
1	1 年次前・後期	選択	前期：幼児保育専攻 後期：子どもケア専攻
授業の到達目標及びテーマ 1) 卓球、バレーボール、バドミントン及び身体育成、トレーニング、ストレッチ運動などの実技を行い、体力の向上を図ることができる。 2) 自己の体力の維持・増進のために必要な運動の理解を深め、各スポーツの運動量や運動強度などを把握して効果的な運動の実践ができる。			
授業の概要 本科目では、健康維持のために科学的理論に基づいた運動実践法について実習することを目的とする。また、スポーツの特性に触れた楽しさを享受する。			
学生に対する評価の方法 毎回の課題への取り組みの成果及び提出物 (50%)、授業態度 (35%)、学習成果及びレポート (15%) を総合的に判断して評価を行う。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第 1 回 授業の目的と内容の概要、授業の準備の仕方、授業日程の説明 第 2 回 スポーツの理論と実践法 卓球① 基礎技能の習得とゲームの実践 (ゲームの方法を学習し、技術や戦術を理解し工夫する。) (ゲームをグループごとに行い、スコア表により分析してゲーム内容の向上を図る。) (歩数計により卓球の運動量や運動強度を測る。) 第 3 回 卓球② 応用技能の習得とゲームの実践 第 4 回 卓球③ ゲーム内容の発展 第 5 回 スポーツの理論と実践法 バレーボール① 基礎技能の習得とゲームの実践 (ゲームの方法を学習し、技術や戦術を理解し工夫する。) (ゲームをグループごとに行い、スコア表により分析してゲーム内容の向上を図る。) (歩数計によりバレーボールの運動量や運動強度を測る。) (ゲームの合間には、ストレッチ運動、トレーニングを行う。) 第 6 回 バレーボール② 応用技能の習得とゲームの実践 第 7 回 バレーボール③ ゲーム内容の発展 第 8 回 スポーツの理論と実践法 バドミントン① 基礎技能の習得とゲームの実践 (ゲームの方法を学習し、技術や戦術を理解し工夫する。) (ゲームをグループごとに行い、スコア表により分析してゲーム内容の向上を図る。) (歩数計によりバドミンントンの運動量や運動強度を測る。) (ゲームの合間には、ストレッチ運動、トレーニングを行う。) 第 9 回 バドミントン② 応用技能の習得とゲームの実践 第 10 回 バドミントン③ ゲーム内容の発展 第 11 回 健康的な身体育成法の実践 第 12 回 表現的な身体育成法の実践 第 13 回 リズミカルな身体育成法の実践 第 14 回 歩数計による各スポーツの運動量や運動強度の分析を行う。体重、体脂肪率を自己点検する。 第 15 回 総括 <注意事項> 第 1 回の授業は、NIAS ホールで行う。運動着不要。筆記用具持参。貴重品等は自己管理する。 第 2 回以降の授業では、運動着及び体育館シューズ (室内用) を着用すること。			
使用教科書 授業の中でプリント等の資料を配付する。			
自己学習の内容等アドバイス 卓球、バレーボール、バドミンントンのルールの下調べをしておくこと。			

[授業科目名] スポーツと健康Ⅱ（実習Ⅱ）		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 高橋 篤史
[単位数] 1	[開講期] 1～4年次前期（集中）	[必修・選択] 選択	備考 口論義運動公園のプールを利用
授業の到達目標及びテーマ <ul style="list-style-type: none"> ・クロールを中心に四泳法について学び、ゆっくりと長く泳ぐことができるようになること。 ・水中で歩行などの運動を行い、自らの健康増進について理解を深める。 			
授業概要 <p>生命の源“水”。水と人とのかかわりは深く、人間の身体は水そのものといっても過言ではない。その人間が水中で運動すると、陸上では考えられない多くの運動効果が得られる。水泳は、全身運動であり、幼児期から高齢期までの一生涯を通じて行なえるスポーツである。</p> <p>授業では水中運動を通じて健康の維持増進を目指す。</p>			
学生に対する評価の方法 <p>出席状況（60%）、授業態度（20%）、技術習得状況等（20%）、について総合的に評価する。</p> <p>実技が中心であることから履修者は積極的にカラダを動かすことが望ましい。</p> <p>本授業では再評価を実施しない。</p>			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション、水の特性、水泳理論等講義 第2回 水中ウォーキング、正しい姿勢の習得、クロール（キック・プル） 第3回 水中ウォーキング、クロール（姿勢・呼吸の習得）、背泳（姿勢・キック） 第4回 クロール、背泳、平泳（キック） 第5回 クロール、背泳、平泳 第6回 クロール、バタフライ 第7回 4泳法のテスト、アクアエクササイズ ※ 第1回は教室での授業とし、第2回よりプールへ移動する。 ※ 第2回からは口論義運動公園まで、往復徒歩で移動する。（片道徒歩約30分・雨天時） ※ 授業は二時間続きで行い、移動の時間もウォーキング運動ととらえる。 ※ 移動時のウォーキングには適した服装（ジャージ、夏場はハーフパンツ等）と運動靴を用意すること。			
使用教科書 特に使用しない			
自己学習の内容等アドバイス <p>実習期間中は春から夏にかけているため気温の変化が大きいことが考えられる。日頃から体調管理を行い、実習に取り組むことを心がけてほしい。</p> <p>実習の回数は限られていることから、実習以外でも積極的に水中運動に親しみ、理解を深めてもらいたい。</p>			

[授業科目名] スポーツと健康Ⅱ（実習Ⅱ）		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 正 美智子
[単位数] 1	[開講期] 1～4年次後期（集中）	[必修・選択] 選択	備考 全学部対象、現地実習（3泊4日）

授業の到達目標及びテーマ

冬季スポーツ種目として、スノーボードを実施する。
授業の目的は、冬の自然環境の中に身を置き、各種目と自然との対話を通して、人類のみが有する運動文化としての価値を認識する。また、自然環境と人間との関わり方（自然との交流）、スノーフィールドを仲間と一緒に楽しむ基本的な技術やマナーを体験を通して学ぶ。

授業の概要

授業は、学内授業および、現地授業（実習）より構成する。学内授業はスノーフィールドでの現地実習がより円滑に効率よく進められるようにするために行う。現地実習は、各自の技能段階に応じ、初心、初級の班別に細分して実施する。日程は、午前および午後にスキー場またはスノーフィールドにて実習を行い、夕食後は、講義、全体会等を通して一層の理解を深める。

学生に対する評価の方法

技術能力（30%）、受講態度（50%）、レポート等（20%）を参考に総合的に評価する。本授業は実習科目であるため、とくに授業欠席は減点の対象となるので注意すること。再評価は実施しない。

授業計画（回数ごとの内容等）

- 1回 [学内授業]
1. 歴史、魅力と概念
2. 基礎技術のVTRを教材に運動メカニズム等基礎知識の説明
- 2回 [学内授業]
1. 現地授業における生活上の諸注意を行う
2. 安全指導
3. 基礎体力トレーニングプログラムの実施について
- 3回～15回 [現地授業]
スケジュール

1日目	2日目	3日目	4日目
8:15 大学発 8:30 上社発	7:30 起床・洗面 朝食 8:30 集合・移動 9:30 実習	7:30 起床・洗面 朝食 8:30 集合・移動 9:30 実習	7:30 起床・洗面 朝食 8:30 集合・移動 9:30 実習 <バジジテスト> 閉講式
昼食 12:00 研修所着 12:30 集合・移動 13:00 開講式 13:30 実習	12:00 昼食 13:30 実習	12:00 昼食 13:30 実習	12:00 昼食 13:00 集合・移動 14:00 研修所出発
16:00 集合・移動 17:00 入浴 夕食	16:00 集合・移動 17:00 入浴 夕食 19:00 講義 「滑走理論」 (20:30迄)	16:00 集合・移動 17:00 入浴 夕食 19:00 講義 「安全なスノーボード を楽しむために」 (20:30迄)	
22:30 消灯・就寝	22:30 消灯・就寝	22:30 消灯・就寝	

使用教科書

教科書は使用しないが、資料を作成し配布する
(参考図書) 日本スノーボード協会著作・編集 「J S B Aスノーボード教程」 山と溪谷社

自己学習の内容等アドバイス

とにかく基礎体力を実習前に養っておくこと。

[授業科目名] スポーツと健康科学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 正 美智子
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 管理栄養学部・メディア造形学部
授業の到達目標及びテーマ 「運動やスポーツは健康に良いのか、悪いのか」をテーマに、運動の功罪から健康とスポーツ・身体運動の関係を考える。そして「よく生きてゆく人間」を目指して、科学的な見地から自分自身の姿や生きていることメカニズムを心得て生活してもらいたい。そして、授業の成果として、生涯にわたる身体の健康にたいする意識と活動を期待する。			
授業の概要 本講義では、現代生活における健康と身体運動の意味、健康と身体運動のかかわり、身体運動のメカニズム、具体的な身体運動の実践方法などについて解説する。			
学生に対する評価の方法 期末試験（50%）、課題の提出（10%）、受講態度（40%）を総合して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 1回 I－1. 身体は細胞のすみか、そして主は私 1) 自分を見る目をつくる 2回 2) 身体運動の意味 3回 3) 地球誕生のスケールの中に人間をおいてみる 4回 2. 宇宙空間における生体変化 5回 3. 運動しているとき、身体の中で何がおこっているのかー ヒトは動くようにできているー 6回 II－1. 生涯発達と健康 1) 発達と健康科学 7回 2) 身体能力の年齢的变化(ライフステージ)に応じた健康スポーツ 8回 III－歩行の生涯健康 1. DNAの持つはるかな記憶 2. ヒトがサルと別れた日 9回 3. 歩行の定義 10回 4. 歩行の運動学的意義 1) 歩く(ウォーキング)速さと歩幅 2) 歩く速さとエネルギー消費量 11回 3) 歩行ー健康に良い有酸素性運動ー 12回 4) 歩行と健康 5) 歩行と脳 13回 IV－運動とからだの健康 1. 運動不足と健康障害 2. 肥満の予防・解消ー基礎代謝量・活動代謝量を高めるためのトレーニング 14回 3. 健康的に痩せるとはどういうことか V－運動の功罪 15回 期末試験			
使用教科書 生涯発達の健康科学 藤井勝紀共著（杏林書院）			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業範囲を教科書で予習しておくこと。専門用語の意味等を事前に調べておくこと。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
スポーツと健康科学		講義	森 奈緒美
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	1年次前期	選択	ヒューマンケア学部
授業の到達目標及びテーマ 1) 健康な生活を送るために必要となるスポーツや運動に関する科学的な基礎知識を理解する。 2) 生涯にわたる継続的なスポーツ・運動実践による体力の維持・増進を図る方法について理解する。			
授業の概要 本科目では、スポーツと健康に関する科学的知識の習得を目的とする。運動と健康、生活習慣病予防と運動、健康のための効果的な運動実践法、生涯スポーツ、運動生活の設計、事故予防への配慮、などの内容を取り上げる。			
学生に対する評価の方法 毎回の課題への取り組みの成果及び提出物（50%）、授業態度（30%）、レポート（20%）を総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 授業の目的と講義内容の概要、自己学習の仕方、参考図書の紹介、授業日程の説明 第2回 スポーツ・運動の意義と健康との関わり 第3回 生活習慣病予防のための運動の理論と実践法 第4回 定期的な運動実践の効果及び運動例 体脂肪率からみたウエイトコントロールの重要性 第5回 歩数による日常生活の運動量の把握 生活習慣チェックリストを用いた健康生活の自己点検 第6回 健康のための個人に応じた運動内容、運動量、運動強度、時間、頻度などを配慮した運動プログラムについて 生活習慣病予防のための運動実践記録をまとめ、レポートを提出する。 第7回 運動施設の整備・拡充について 第8回 運動クラブの育成・援助について 第9回 運動プログラム・行事の設定・提供について 第10回 運動生活の類型、構造及び運動者行動 第11回 運動と体力及びトレーニングの原則について 第12回 運動の安全な行い方と熱中症を予防する具体的方法 第13回 健康のための生涯スポーツの理論と実践法 第14回 課題のまとめ 第15回 総括			
使用教科書 授業の中でプリント等の資料を配付する。 参考図書（購入は自由）：「健康とスポーツ概論 ― 運動と健康の理論 ―」 芝山正治他著 圭文社			
自己学習の内容等アドバイス 専門用語について復習しておくこと。			

[授業科目名] 英語コミュニケーション I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] ファルク・スコット・シキ ポージン・ポーター・モヤ ポッティンジャー・マクドナルド
[単位数] 1	[開講期] 1年次前期	[必修・選択] 選択（一部必修）	備考 ※ヒューマンケア学部は必修
授業の到達目標及びテーマ 英語ネイティブスピーカーが担当し、授業進行は基本的に英語で行う。ネイティブの発話に慣れ、基本的なコミュニケーション能力の養成を目的とする。			
授業の概要 自己紹介に始まり、身近な生活に関わる話題について表現できるように指導する。その為に先ず、自然の速度で話される英語を理解する訓練をしながら、正しい発音の仕方、さまざまな実用的な英語表現を習得させる。クラス内の、実質的で有効なコミュニケーションを可能にするために少人数クラスを設定する。 尚、具体的な授業計画は、各担当者がそれぞれ授業開始時にプリントもしくは口頭で説明する。			
学生に対する評価の方法 出席状況30%、授業参加貢献度30%、最終オーラルテスト40%の割合で評価する。再評価は行わない。出席数は、授業参加貢献度評価にも影響する。全授業回数の3分の1以上の欠席者には単位は与えられない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第01回 Introducing Self and Others.（自己や周りの人の紹介） 第02回 Talking about Daily Routine.（日常生活について語る） 第03回 Asking to do Something.（してもらいたいことをお願いする） 第04回 Talking about Likes / Dislikes.（好き・嫌いについて語る） 第05回 Talking about Experiences.（自分の経験談を語る） 第06回 Exchanging Personal Information.（個人のアピールを試みる） 第07回 Talking about Frequency of Activities.（クラブやサークルについて語る） 第08回 Talking about Past Schedule.（今までのスケジュールを紹介する） 第09回 Describing Locations of Places.（場所の具体的な位置を述べる） 第10回 Talking numbers: Time, schedule, and prices.（数表現についての練習：時間、計画、値段など） 第11回 Checking / Confirming Information.（情報の精査と確認） 第12回 Positive / Negative Tag Questions.（肯定形・否定形の付加疑問文の練習） 第13回 Talking about Future Plans.（先々の計画について語る） 第14回 Review Activities / Prep for final oral Test.（総復習・最終オーラルテストの準備） 第15回 Final oral Test in small groups.（小グループごとの最終オーラルテストを実施）			
使用教科書 原則として、教科書は購入・使用しない。時折、様々な種類の本よりコピーしたものがプリントで配布される。学生は自分の英日・日英辞書を持参することが好ましい。			
自己学習の内容等アドバイス 機会をみつけて、ラジオ・テレビ・インターネットなどで英会話番組を聴いて、観て英語聞き取り練習をする。多く英語発話を聴くと、その分耳が慣れ、英語に触れるのが楽しくなる。また、外国映画の字幕スーパーを見ないで観賞することも好ましい。			

[授業科目名] 英語コミュニケーションⅡ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 安藤・ファルク・スコット・シキ ボージン・ポーター・モヤ マクドナルド・ポッティンジャー
[単位数] 1	[開講期] 1年次後期	[必修・選択] 選択（一部必修）	備考 ※ヒューマンケア学部は必修
授業の到達目標及びテーマ 英語コミュニケーションⅠに引き続き、さらに進んだコミュニケーション能力の増進を目的とする。日常生活上想定されるさまざまなシチュエーションに対応できるようよう訓練する。			
授業の概要 徹底的なパターン練習によって基本表現を習得したうえで、より幅広い会話範囲を維持できるように、語彙力の増強に努める。想定される一般的なシチュエーションを発展させることによって、より現実的な応用力を高める。英語コミュニケーションⅠと同様、小人数クラスで行う。 尚、具体的な授業計画は、各担当者がそれぞれ授業開始時にプリントもしくは口頭で説明する。			
学生に対する評価の方法 出席状況30%、授業参加貢献度30%、最終オーラルテスト40%の割合で評価する。再評価は行わない。出席数は、授業参加貢献度評価にも影響する。全授業回数の3分の1以上の欠席者には単位は与えられない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第01回 Responding to a question or statement. Following up a conversation. (質問および提示に対して回答する。英会話を続ける。) 第02回 Agreeing and disagreeing an opinion. Asking for and giving shorter directions. (意見に対して賛成したり反対したりする。簡単な指示の内容を尋ねたり、与えたりする。) 第03回 Giving an opinion. Giving reasons. Starting and following up conversation. (意見を述べる。理由を述べる。会話を始めて、そのまま続ける。) 第04回 Giving instructions. Asking for help. Commenting. (指示を与える。助けを求める。感想を述べる。) 第05回 Inquiring and giving information about times and prices. (時間と値段について尋ねたり情報を与えたりする。) 第06回 Getting attention. Talking about countries, cities, travel abroad and entertainment. (注意をこちらに向ける。国、都市、海外旅行そして娯楽について話合う。) 第07回 Confirming and giving advice. Saying good-bye. Talking about friends. (助言を確認したり与えたりする。お別れの挨拶。友達のことを語る。) 第08回 Talking about holidays/events plans. Ending and following up a conversation. (休暇やイベント計画について語る。会話を終わらせるまたはそのまま続ける。) 第09回 Talking about New Year's custom and entertainment. Talking about similarities. (新年の習慣や楽しみ方について語る。他国との類似点を語る。) 第10回 Responding to happy/unhappy news. (幸福なもしくは不幸な知らせに対応する。) 第11回 Asking people to do things formally and informally. (人々に型にはめて行動すること、また型にはまらないで行動することを依頼する。) 第12回 Inquiring and giving information about drugs/medicines. Confirming a statement. (薬についての情報を尋ねたり教えたりする。提示内容を確認する。) 第13回 Inquiring and giving information about tours abroad. English for Study Abroad. (海外旅行について尋ねたり教えたりする。海外で学ぶ英語) 第14回 Excitements. Thanks. Closing remarks. (感激の言葉。感謝の言葉。言及を終える。) 第15回 Final Oral test in small groups. (小グループでの最終会話テスト)			
使用教科書 原則として、教科書は購入・使用しない。時折、様々な種類の本よりコピーしたものがプリントで配布される。学生は自分の英日・日英辞書を持参することが好ましい。			
自己学習の内容等アドバイス 機会をみつけて、ラジオ・テレビ・インターネットなどで英会話番組を聴いて、観て英語聞き取り練習をする。多く英語発話を聴くと、その分耳が慣れ、英語に触れるのが楽しくなる。また、外国映画の字幕スーパーを見ないで観賞することも好ましい。			

[授業科目名] 英語コミュニケーションⅢ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] S.ポージン
[単位数] 1	[開講期] 2年次前・後期 ※4年次前期	[必修・選択] 選択	備考 ※ヒューマンケア学部 08 生のみ 開講期：4年次前期／単位：2単位
<p>授業の到達目標及びテーマ <u>This class has 3 goals</u> 1. Learn vocabulary 2. Practice speaking 3. Use English in a game or activity</p>			
<p>授業の概要 Most of the lessons will begin by a short free talk between the teacher and the course participants individually or a game between the teacher and the whole class. Below is a tentative study plan for 15 lessons comprising communication skills and areas. However, there will be some changes in the order and the contents according to the member' interests, learning needs, and spoken abilities.</p>			
<p>学生に対する評価の方法 Grading is based on the following 1. being active in class 50 2. group activities 30 3. speaking/interview test 20 Total 100</p>			
<p>授業計画（回数ごとの内容等） 第01回 Introduction to this class. 第02回 Speaking about yourself. 第03回 Speaking about daily life 第04回 Describing people 第05回 Group Activity Preparation 第06回 Group Activity 第07回 Speaking about past activities 第08回 Speaking about plans 第09回 Giving instructions 第10回 Group Activity Preparation 第11回 Group Activity 第12回 Inviting, accepting and rejecting invitations 第13回 Review for test 第14回 Vocabulary/interview test 第15回 Last class. Speaking about your future</p>			
<p>使用教科書 No textbook is required for this class. The teacher will provide all materials for this class..</p>			
<p>自己学習の内容等アドバイス Students are recommended to review contents they have studied in the Eigo Communication I and II, and / or listen to English conversation programs available on radio, TV and the Internet before taking the Eigo Communication III course.</p>			

[授業科目名] 総合英語 I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 安藤(直)・加藤(直)・増田 足立・杉浦(恵)・森(明)
[単位数] 2	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 選択 (一部必修)	備考 ※ヒューマンケア学部は必修
授業の到達目標及びテーマ 英文で書かれた専門書や雑誌、各種文献はもちろん、情報時代の今日、インターネットで海外の最新情報を得るために英語の読解力は不可欠である。本講では、英語で書かれた文章の意味を正確に理解する能力の習得を目的とする。			
授業の概要 語と語の有機的な関係を重視したフレーズ・リーディングから、パラグラフ・リーディングへと読み進める訓練をする。対象によっては精読よりもむしろ早く要点を把握することが優先される場合もあり、それぞれの目的に応じた読み方を学習する。英訳量を増やし、経験からそのテクニックを学ぶ。 尚、具体的な授業計画は、各担当者がそれぞれ授業開始時にプリントもしくは口頭で説明する。			
学生に対する評価の方法 テストもしくは課題60%、出席状況20%、授業受講態度・姿勢20%で評価する。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 講義 授業計画・試験方法(評価方法)についての説明 今後の授業受講上の注意、勉強方法、授業進行詳細などを説明する。 第2回 演習 英文和訳① 英語講読の基本として、ベーシックイングリッシュの英訳を試みる。 第3回 演習 英文和訳② 第2回からステップアップして、段階的に英文内容および長さのレベルを上げる。 第4回 演習 英文和訳③ 第3回で行った和訳用教材のレベルを上げる。 第5回 演習 英文和訳④ 今後順次、教材レベルを向上させて行く。 第6回 演習 平常テスト実施 第5回までの授業で行った英訳の成果をレベル的に精査する。 第7回 演習 英文和訳⑤ 第6回での結果を見て、教材内容レベルを定め、それに応じた英文内容で和訳を行う。 第8回 演習 英文和訳⑥ 第7回の教材をステップアップさせた英文で和訳を行う。 第9回 演習 英文和訳⑦ 第8回の教材をステップアップさせた英文で和訳を行う。 第10回 演習 英文和訳⑧ 第9回の教材をステップアップさせた英文で和訳を行う。 第11回 演習 英文和訳⑨ 第10回の教材をステップアップさせた英文で和訳を行う。 第12回 演習 英文和訳⑩ 第11回の教材をステップアップさせた英文で和訳を行う。 第13回 演習 復習・質疑応答 いままでの英文和訳の中でよく理解できなかった部分をピックアップして再検討する。 第14回 演習 最終テストもしくは課題訳提出 担当者が一定の英文を提示し、テスト形式解答もしくは課題として提出する。 第15回 予備日 学生の習熟度合による、進度遅延の場合に備える。			
使用教科書 最初の授業にて、もしくは授業ごとに担当者がプリントなどで配布する。原則として教科書は使わない。			
自己学習の内容等アドバイス 総合英語 I (前期) では、主として英文和訳を学習するので、英語本や雑誌、またインターネットなどで英語の文章に触れる機会をできるだけ多く持つように心がけてほしい。			

[授業科目名] 総合英語Ⅱ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 安藤(直)・加藤(直)・増田 足立・杉浦(恵)・森(明)
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択(一部必修)	備考 ※ヒューマンケア学部は必修
授業の到達目標及びテーマ 総合英語Ⅰで習得した英語読解力に基づいて、正しい英語表現力を養うことを目標とする。日本語の内容をそれぞれの目的に応じ正確に英語で表現するためには、多くの英文に接し、語彙・語法・英語特有の表現などについて知ることが必要である。			
授業の概要 本講では現代社会のさまざまな問題や、興味深い身近な話題を扱ったマテリアルを用いて実用的な語彙、語法を習得させながら、英語表現の訓練をする。単に機械的な和文英訳ではなく、自己表現につながるものとして、英語の文章を書く能力を高めたい。量を重ね、テクニックを習得する。 尚、具体的な授業計画は、各担当者がそれぞれ授業開始時にプリントもしくは口頭で説明する。			
学生に対する評価の方法 テストもしくは課題60%、出席状況20%、授業受講態度・姿勢20%で評価する。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回 講義 授業計画・試験方法(評価方法)についての説明 今後の授業受講上の注意、勉強方法、授業進行詳細などを説明する 第2回 演習 和文英訳① 和文英訳の基本として、ベーシックイングリッシュの英訳を試みる。 第3回 演習 和文英訳② 第2回からステップアップして、段階的に和文内容および長さのレベルを上げる。 第4回 演習 和文英訳③ 第3回で行った英訳用教材のレベルを上げる。 第5回 演習 和文英訳④ 今後順次、教材レベルを向上させて行く。 第6回 演習 平常テスト実施 第5回までの授業で行った英訳の成果をレベル的に精査する。 第7回 演習 和文英訳⑤ 第6回での結果を見て、教材内容レベルを定め、それに応じた和文内容で英訳を行う。 第8回 演習 和文英訳⑥ 第7回の教材をステップアップさせた和文で英訳を行う。 第9回 演習 和文英訳⑦ 第8回の教材をステップアップさせた和文で英訳を行う。 第10回 演習 和文英訳⑧ 第9回の教材をステップアップさせた和文で英訳を行う。 第11回 演習 和文英訳⑨ 第10回の教材をステップアップさせた和文で英訳を行う。 第12回 演習 和文英訳⑩ 第11回の教材をステップアップさせた和文で英訳を行う。 第13回 演習 復習・質疑応答 いままでの和訳英訳の中でよく理解できなかった部分をピックアップして再検討する。 第14回 演習 最終テストもしくは課題形式英作文提出 担当者が一定の和文を提示し、テスト形式解答をする。もしくは課題英作文を提出する。 第15回 予備日 学生の習熟度合による、進度遅延の場合に備える。			
使用教科書 最初の授業にて、もしくは授業ごとに担当者がプリントなどで配布する。原則として教科書は使わない。			
自己学習の内容等アドバイス 総合英語Ⅱ(後期)では、主として和文英訳を学習するので、本や雑誌、またインターネットなどで自分が英語に訳せそうな日本語の文章に触れ、実際に英語で表現してみる。(初段階では翻訳ソフトを使ってもらわない。但し、翻訳ソフトの訳は間違いが多々あるので、のち修正する必要がある。			

[授業科目名] 総合英語Ⅲ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 林 久男
[単位数] 2	[開講期] 3年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 管理栄養学部・メディア造形学部
授業の到達目標及びテーマ 家族的な明るい雰囲気の中で、異国語としての英語を話す・聴く・書く・読むの4技能を通じて、英語国の文化・歴史・習慣などを学習する。			
授業の概要 異国を理解するには、母国の事情も知っていると、比較しながら、効果的に学習できるから、日本の民話や詩歌を英語で読んでみる。インターネットから、新しい海外情報も入手して、ニュース英語の読み方も、身に付けてもらいたい。英語国の人情を、少しでもわかるために、ジョークを英語で読む機会も作りたい。日本の小咄・落語も、英語で鑑賞する。英会話で雑談する教材も用意。			
学生に対する評価の方法 平常の出席率と授業に対する取り組む姿勢（50％）と14回目の授業で実施する試験結果（50％）を総合的に判断して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 宮沢賢治の「雨にも負けず…」を英語で読む。 第2回 英会話の練習。 第3回 ネットからの教材。 第4回 英語のジョーク。 第5回 日本の小咄を英語で読む。 第6回 ピーター・ラビットを読む。 第7回 海外ニュースを読む。 第8回 日本の昔話を英語で読む。 第9回 専門科目からの教材。 第10回 英語の歌。 第11回 英語のなぞなぞ問題。 第12回 専門科目からの教材。 第13回 定期試験についての傾向と対策。 第14回 定期試験。 第15回 落語を英語で楽しむ。			
上記の授業計画は、受講生の興味と進捗状況に応じて、臨機応変に順番を変更したり、一部内容を変えることもありうる。			
使用教科書 毎回、プリントを用意するので、特定のテキストは、採用しない。常に、辞書を持参してほしい（できれば、昔からの紙の辞書を）			
自己学習の内容等アドバイス 語学学習の基本は、単語力と基本文法力。予習より復習に重点を置いて、毎回新出単語と語句を見直すこと。習った英文を音読練習することの努力を忘れないでください。			

[授業科目名] 総合英語Ⅲ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 林 久男
[単位数] 2	[開講期] 3年次前・後期 ※4年次前期	[必修・選択] 選択	備考 ヒューマンケア学部 ※08生のみ：4年次前期
授業の到達目標及びテーマ 家族的な明るい雰囲気の中で、異国語としての英語を話す・聴く・書く・読むの4技能を通じて、英語国の文化・歴史・習慣などを学習する。			
授業の概要 異国を理解するには、母国の事情も知っていると、比較しながら、効果的に学習できるから、日本の民話や詩歌を英語で読んでみる。インターネットから、新しい海外情報も入手して、ニュース英語の読み方も、身に付けてもらいたい。英語国の人情を、少しでもわかるために、ジョークを英語で読む機会も作りたい。日本の小咄・落語も、英語で鑑賞する。			
学生に対する評価の方法 平常の出席率と授業に対する取り組む姿勢（50%）と14回目の授業で実施する試験結果（50%）を総合的に判断して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 宮沢賢治の「雨にも負けず…」を英語で読む。 第2回 英会話の練習。 第3回 ネットからの教材。 第4回 英語のジョーク。 第5回 日本の小咄を英語で読む。 第6回 ピーター・ラビットを読む。 第7回 海外ニュースを読む。 第8回 日本の昔話を英語で読む。 第9回 ネットからの教材。 第10回 英語の歌。 第11回 英語のなぞなぞ問題。 第12回 ネットからの教材。 第13回 定期試験についての傾向と対策。 第14回 定期試験。 第15回 落語を英語で楽しむ。 上記の授業計画は、受講生の興味と進捗状況に応じて、臨機応変に順番を変更したり、一部内容を変えることもありうる。			
使用教科書 毎回、プリントを用意するので、特定のテキストは、採用しない。常に、辞書を持参してほしい（できれば、昔からの紙の辞書を）			
自己学習の内容等アドバイス 語学学習の基本は、単語力と基本文法力。予習より復習に重点を置いて、毎回新出単語と語句を見直すこと。習った英文を音読練習することの努力を忘れないでください。			

[授業科目名] 実践英語 I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 林 久男
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考 管理栄養学部・ヒューマンケア学部
授業の到達目標及びテーマ 英語検定2級に合格するための英語力を養成すること。現代英語に多面的に取り組む。			
授業の概要 異国語としての英語学習を通して、自国語と比較しながら、英語国の文化・歴史・習慣などを学びたい。英語を読む・聴く・話す・書くという4技能を重点に置きながら、家族的雰囲気の中で、みんなと一緒に楽しく、英語に慣れるような授業をめざす。			
学生に対する評価の方法 平常の出席率と授業に対する取り組む姿勢（50％）と14回目の授業で実施する試験結果（50％）を総合的に判断して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 授業の内容説明。過去の問題を利用して基礎力養成。 第2回 英検2級問題の出題形式を解説。 第3回 文法問題を中心に解く。 第4回 同上 第5回 比較的短い英文を解釈する。 第6回 同上 第7回 Eメールの英文を解説する。 第8回 同上 復習の単語小テスト 第9回 やや長い英文を速読して、大意を把握する訓練。 第10回 同上 第11回 リスニングテストの実施。 第12回 長文英語の内容理解の方法を説明する。 第13回 同上 第14回 定期試験 第15回 二次面接試験の解説と実施。 上記の授業計画は、学生の反応・関心と進捗状況に応じて、臨機応変に順番を変更したり、一部内容を変更したりすることもあります。			
使用教科書 「7日間完成英検2級予想問題ドリル（旺文社）」			
自己学習の内容等アドバイス 語学学習の基本は、単語力と基本文法力。予習より復習に重点を置いて、毎回新出単語と語句を見直すこと。習った英文を音読練習することの努力を忘れないでください。			

[授業科目名] 実践英語 I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 森 明智
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考 メディア造形学部
授業の到達目標及びテーマ 本授業は「実用英語技能検定試験（英検）2級」合格のための実力を養う事を目的としている。英検2級の問題は簡単ではないが、合格のためには満点を取る必要は全くない。よって、一次試験においては「各セクションの攻略」、二次試験においては、「英語面接の練習」という準備の有無が合格への大きな決め手となる。このため、各問題に取り組む中で、それぞれの正解・不正解の「理由・意図」をおさえ、「合格のための自分の指針を知る事」が授業のテーマになる。			
授業の概要 15回という限られた授業数の中で短期間集中的な問題演習となる。英検2級の出題形式を体験し、それぞれの問題の意図を探り適確に応答するコツをつかめる授業となるよう配慮する。授業の後半では二次試験(英語面接)の準備も行う。授業の開始時には簡単な復習の時間がある。 時間が許す限り、問題演習のみならずさまざまな言語材料(映画、TVドラマ、インターネット)を提供する予定。『自分の得意とする英語学習法』を見出し、「英語の授業以外でも英語に親しめる方法」見出して欲しい。本授業はComputer LABにて行うため、コンピュータを用いた英語学習を身につける良い機会にもなる。授業への要望などは、積極的に受け入れる方針であるため、遠慮なく要望を述べてもらいたい。英検2級は就職の際に、履歴書において十分なアピールとなる資格である。その事を念頭に置いて、真剣な取り組みを求める。			
学生に対する評価の方法 出席、授業に対する取り組み(30%)、課題提出(30%)、および確認テスト(3回)での得点(40%)を考慮して評価する。なお、課題については、問題を解答し、電子メールにて答案内容を提出すること。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回目は、授業内容の説明および自分の長所短所を知るための模擬試験の場である。 第2回～第6回までは、英検2級の「語彙力・英熟語の習得・語順整序・(読解練習)」の問題演習と攻略を行う。第7回～第11回までは、「リスニング」の問題演習と攻略を行う。第13回と第14回では、2次試験対策を行うが、あくまで予定であり、授業の様子を見て変更する可能性はある。 第1回 授業および英検2級についての説明。受講生の英検へのニーズ調査。 第2回 語い問題 (part1) 第3回 語い問題 (part2) 第4回 語法問題 (part1) 第5回 語法問題 (part2) 第6回 語順整序 (part1) + 復習 第7回 第1回確認テスト 第8回 リスニング演習 (part1) 第9回 リスニング演習 (part2) 第10回 リスニング演習 (part3) 第11回 リスニング演習 (復習) 第12回 第2回確認テスト 第13回 2次試験対策 (英語面接) (part1) 第14回 2次試験対策 (英語面接) (part2) 第15回 第3回確認テストおよび総括第1回			
使用教科書 英検2級 頻出度別問題集 (CD付き) (高橋書店)			
自己学習の内容等アドバイス 英語の運用能力は、「正しい英文に触れて覚えてしまう事」に最大のポイントがある。授業内で出てきた英文は、できるだけ復習の中で覚えてしまうようにする事。授業内でも復習の機会があるので、活用する事。			

[授業科目名] 実践英語Ⅱ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 林 久男
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考 管理栄養学部・ヒューマンケア学部
授業の到達目標及びテーマ TOEICテストで、目的に応じた高得点を獲得するための英語力を養成すること。現代英語に多面的に取り組む。			
授業の概要 出題形式を分かりやすく解説する。過去の問題を参考にして、問題形式に慣れるように、練習を繰り返す。英語学習を通して、英語国の文化・歴史・習慣なども、詳しく面白く説明していく。もちろん、英語を読む・聴く・話す・書くという4技能を重点において、授業を進める。家族的雰囲気の中で、みんなで楽しく、英語に触れて、親しめる工夫をしたい。			
学生に対する評価の方法 平常の出席率と授業に対する取り組む姿勢（50%）と14回目の授業で実施する試験結果（50%）を総合的に判断して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 授業の内容説明。過去の問題を参考に、出題形式を解説。 第2回 写真描写問題を解説。 第3回 応答問題を解説。 第4回 会話問題を解説。 第5回 説明文問題を解説。 第6回 短文穴埋め問題を解説。 第7回 長文穴埋め問題を解説。 第8回 読解問題を解説。 第9回 復習単語小テスト。 第10回 弱点の補強。 第11回 同上 第12回 応用問題。 第13回 定期試験の傾向と対策 第14回 定期試験 第15回 全体的総復習&まとめ 上記の授業計画は、受講生の興味と進捗状況に応じて、臨機応変に順番を変更したり、一部内容を変えることもありうる。			
使用教科書 「TOEICテスト対策実況中継（コスモピア）」			
自己学習の内容等アドバイス 語学学習の基本は、単語力と基本文法力。予習より復習に重点を置いて、毎回新出単語と語句を見直すこと。習った英文を音読練習することの努力を忘れないでください。			

[授業科目名] 実践英語Ⅱ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 森 明智
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考 メディア造形学部
授業の到達目標及びテーマ 本授業は、今日の日本企業で広く採用される英語能力判定試験である TOEIC 試験の対策を目的としている。目標を履歴書に書ける点数である“500 点”達成と定めるが、内容は決して容易な問題ばかりではない。当然ながら教員は授業に投入するが、履修生の頑張りをも期待する。TOEIC という試験の「Listening」、および「Reading」の 2 セクションからなるが、その双方を体験し、攻略のための力の養成が授業のテーマになる。			
授業の概要 <u>TOEIC の問題形式はかなり固定されているが、限られた時間内で数多くの問題(200 問)が出る。そのため、じっくり考えながら問題を解く手法や、一文ずつ訳して解答する手法は適切ではない。「問題からいち早く最低限の情報を読み取り解答する」ことが要求される。</u> ただ、そのためには、普段の取り組みの中でポイントをつかむ意識を持つ必要がある。授業では「リスニング」「リーディング」双方をバランスよく取り入れて進む予定であるが、合理的かつ実効性のある試験対策の場にしていきたい。また、授業への受講生からの要望などを取り入れていく予定である。積極的に要望等、伝えてもらいたい。コンピューターを各々人に備えた教室での授業となる。			
学生に対する評価の方法 出席 (20%)、授業態度 (20%)、課題 (20%) に加え、2 回の確認テストでの得点(40%)			
授業計画 (回数ごとの内容等) TOEIC の試験形式は、以下の形となっている。 ①リスニング(聞き取り ⇒ 4 種類) (1) 写真問題(10 問) (2) 質問と返答の問題(30 問) (3) 会話文問題(30 問) (4) モノログ(一人語り)の問題(30 問) ②リーディング(読み取り ⇒ 3 種類) (1) 短文穴埋め問題(40 問) (2) 長文穴埋め問題(12 問) (3) 短文読解問題(48 問) 使用するテキストは上記の 7 つのセクションを、それぞれのユニットに含んだ内容の構成となっている。下記の通り、様々な話題があるので楽しみつつ取り組む事も良い。 (〔 〕の中は発音と構文のテーマ)			
第 1 回 授業および TOEIC に関する説明と TOEIC に対する受講生のニーズの調査。 第 2 回 テキスト Lesson1 (旅行) [接尾辞による品詞の見極め] 第 3 回 テキスト Lesson2 (日常生活) [注意すべき主語と動詞の一致] 第 4 回 テキスト Lesson3 (健康) [動詞の後の動名詞・不定詞の選択] 第 5 回 テキスト Lesson4 (外食) [分詞の叙述用法と限定用法] 第 6 回 テキスト Lesson5 (出来事) [関係詞の制限用法と非制限用法] 第 7 回 第 1 回確認テスト 第 8 回 テキスト Lesson6 (遊び) [注意すべき受動態] 第 9 回 テキスト Lesson7 (メディア) [同形の単語の品詞の見極め] 第 10 回 テキスト Lesson8 (オフィス) [3 つの完了形の違い] 第 11 回 テキスト Lesson9 (人材) [比較を使った慣用表現] 第 12 回 テキスト Lesson10 (金融) [置詞・接続詞いずれにも使える語] 第 13 回 テキスト Lesson 11 (昇進) [従属節における主語の省略] 第 14 回 テキスト Lesson12 (購買) [代名詞の特殊な用法] 第 15 回 全体総括と今後の指針の指示。第 2 回確認テスト ※ クラスの全体的な英語運用能力によって、授業内容は変更される可能性がある。			
使用教科書 THE NEXT STAGE TO THE TOEIC TEST Pre-intermediate 金星堂			
自己学習の内容等アドバイス 英語の運用能力は、「正しい英文に触れて覚えてしまう事」に最大のポイントがある。授業内で出てきた英文は、できるだけ復習の中で覚えてしまうようにする事。授業内でも復習の機会があるので、活用する事。			

[授業科目名] 実践英語Ⅱ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] M.ファルク
[単位数] 2	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 選択	備考 ファッション造形学科
授業の到達目標及びテーマ 今日広く社会で評価されている英語力試験である TOEIC 450-500 点以上達成を目標とし、文法、リスニング、リーディングを中心とする試験対策と問題練習のための演習である。目的達成のための (Task-based) リスニング、英文法および語法に関する CR (Conscious Raising)、英文による情報の要点理解等具体的な実践を通し、試験対策を合理的かつ実効性のあるものにする。			
授業の概要 Most of the TOEIC study areas below are taught through quizzes, and simulation activities. At the beginning, the students will take an original and complete TOEIC test with no preparation. Later, they learn and practice the required TOEIC test taking /learning skills in pairs, groups and with the whole-class; and then take the original complete TOEIC test again. During the study, the students will work with the teacher individually to get confidence in understanding the TOEIC strategies according to their own abilities. . Below is a tentative study plan for 15 lessons. However, there will be some changes in the order and the contents according to the students' interests, and learning needs.			
学生に対する評価の方法 学期中のテストは実施しません。成績評価は、平常の課題作成 (50%)、授業内における授業に関する討論への参加度 (50%) で決まる。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 授業目的と実践テスト1ー宿題。 第2回 聴解テスト パート1：実践テスト1について解説と話し合い。 第3回 聴解テスト パート1：実践テスト1について解説と話し合いおよび実践テスト2ー宿題。 第4回 聴解テスト パート2：質疑応答および実践テスト2についての話し合い。 第5回 聴解テスト パート2：質疑応答および実践テスト2についての話し合い。 第6回 聴解テスト パート3：簡単な英会話、実践テスト2についての話し合いおよび実践テスト3ー宿題。 第7回 聴解テスト パート3：簡単な英会話および実践テスト3についての話し合い。 第8回 聴解テスト パート4：簡単な英会話および実践テスト3についての話し合い。 第9回 聴解テスト パート4：簡単な英会話、実践テスト3についての話し合いおよび実践テスト4ー宿題。 第10回 読解テスト パート5：文法・英文構成および実践テスト4についての話し合い。 第11回 読解テスト パート5：文法・英文構成および実践テスト4についての話し合い。 第12回 読解テスト パート6：読解、モデルテスト4についての話し合いおよび実践テスト5ー宿題。 第13回 読解テスト パート6：読解および実践テスト5についての話し合い。 第14回 読解テスト パート6：読解および実践テスト5についての話し合い。 第15回 読解テスト パート6：読解および実践テスト5についての話し合い。			
使用教科書 教科書: Anne Tayer. <i>Target TOEIC</i> (2 nd Edition). Compass Publishing.2006. (about 3,000 yen) TOEIC 情報: http://myhome.shinbiro.com/~jinkag/toEIC.htm			
自己学習の内容等アドバイス 受講を希望する学生は、上記の書籍と以下のウェブサイトから事前に授業に必要な情報を得てほしい。 URL: http://nuas611d.nuas.ac.jp/mfarooq/frqHP/default.html			

[授業科目名] 実践英語Ⅲ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 森 明智
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 本授業は、TOEFL (Test of English as a Foreign Language)の試験対策を目標としている。将来、英語圏の大学や大学院において本格的な海外留学を希望している学生やさらに高い英語力を付けたい学生に向けて、学術的な英語力をつける内容が授業のテーマである。(TOEIC 対策ではない点に注意する事)			
授業の概要 現在の TOEFL は、Listening、Reading、Writing、Speaking の 4 セクションから成るが、名古屋学芸大学が実施する留学システム内の TOEFL では、Listening、Grammar、Reading の 3 セクションになり、試験形式が変わる。よって、初回の授業で、受講希望者のニーズを確認する予定である。基本的に、本授業では短時間で結果が出やすい Listening のセクションに特に着目して授業内容を進めていく。ただ、Grammar や、Speaking・Writing のセクションも、解答のコツがあるため、スコアをあげるための方法を示したい。また、様々な言語材料 (映画、音楽、インターネットなど) を、時間が許す限り授業で紹介する。授業では、Computer Lab にて問題演習する機会を設ける予定である。コンピュータを用いた英語学習方法を身につける良い機会にしたい。大学での外国留学を考えている意欲ある学生の真剣な取り組みを求める。			
学生に対する評価の方法 出席、授業に対する取り組み (30%)、課題提出 (30%)、および模擬テスト 2 回 (40%) での得点を考慮して評価する。			
授業計画 (回数ごとの内容等) <ul style="list-style-type: none"> ・ TOEFL への準備段階として、第 2 回～第 7 回までは一文ずつに区切った形で TOEFL の英文に取り組み、さらに学術的な語いに触れていくための内容を行う。 ・ スコアアップへの実践力を高めるため、第 9 回からは TOEFL の実際の問題に似た形の英文を対象にしつつ授業内容を進めていく。 ・ 時間が許す限り、毎回の授業で Grammar や Speaking・Writing の攻略も授業内容に含める。 第 1 回 講義に関する Introduction、および TOEFL についての説明。受講生の TOEFL へのニーズ調査。受講生の事前の英語力を調査するための模擬試験(成績には何ら関係しない) 第 2 回 問題演習: Listening (4～5 語のディクテーション / 5～6 語のディクテーション) + α ① 第 3 回 問題演習: Listening (ディクテーション否定形 / 否定形(not の短縮形)) + α ② 第 4 回 問題演習: Listening (ディクテーション l と r / 発音とスペル) + α ③ 第 5 回 問題演習: Listening (二重母音 / 長い名詞句) + α ④ 第 6 回 問題演習: Listening (慣用表現 / 7～8 語のディクテーション) + α ⑤ 第 7 回 問題演習: Listening (第 2 回から第 7 回までの復習) + α ⑥ 第 8 回 第 1 回模擬試験実施 (授業内) および既習事項確認 第 9 回 問題演習: Listening (ノートの取り方 / 話し言葉の特徴) + Grammar & Speaking 第 10 回 問題演習: Listening (使役動詞 / 助動詞(could/should/would)) + Grammar & Speaking 第 11 回 問題演習: Listening (口語表現 / 句動詞・イディオム) + Grammar & Speaking 第 12 回 問題演習: Listening (基本動詞 学生生活のキーワード①) + Grammar & Writing 第 13 回 問題演習: Listening (学生生活のキーワード② / 健康相談) + Grammar & Writing 第 14 回 問題演習: Listening (第 9 回から第 13 回までの復習) + Grammar & Writing 第 15 回 第 2 回模擬試験実施 (授業内) および総括			
使用教科書 TOEFL テストリスニング問題 350 喜田慶文 著 (旺文社)			
自己学習の内容等アドバイス 英語の運用能力は、「正しい英文に触れて覚えてしまう事」に最大のポイントがある。授業内で出てきた英文は、できるだけ復習の中で覚えてしまうようにする事。授業内でも復習の機会があるので、活用する事。			

[授業科目名] フランス語 I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 田村 真理
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 視聴覚教材の付いた教科書を用いて、フランス語の基礎を学習する。単語、表現、基本的な文法規則を学び、コミュニケーションの四つの能力すべて（読む、書く、聞く、話す）において均等に使えることをめざす。また、フランスの文化についての理解も深める。フランス語検定試験の5級が目標。			
授業の概要 教科書の各課は会話と練習問題で構成されている。会話で重要な単語、表現、文法事項を学び、練習問題で理解と定着をはかる。ほぼ2週に1課のペースで進み、各課毎に小テストを行う。			
学生に対する評価の方法 各課で小テストを行い、それを60点満点に換算し、出席点（全部出席すると40点、1回欠席するとマイナス5点）とあわせ60点以上を合格とする。遅刻は欠席とし、5回欠席すると失格。再試験は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 授業について説明、第0課（アルファベと基本表現） 第2回 第0課の復習、第1課（国籍を言う） 第3回 第0課のテスト、第1課復習、第2課（名前・職業を言う） 第4回 第1課のテスト、第2課復習、フランス語の発音と綴りの読み方 第5回 第2課のテスト、第3課（もちものをたずねる） 第6回 第3課復習、第4課（趣味を語る） 第7回 第3課のテスト、第4課復習、第1～第4課復習の練習問題 第8回 第4課のテスト、第5課（誰か尋ねる） 第9回 第5課復習、第6課（したいことを尋ねる） 第10回 第5課テスト、第6課復習、第7課（住んでいるところを言う） 第11回 第6課テスト、第7課復習、第8課（何をしているか尋ねる） 第12回 第7課テスト、第8課復習、第5～第8課の練習問題 第13回 第8課テスト、第9課（家族を語る） 第14回 第9課復習、第10課（年齢を言う） 第15回 第9課テスト、第10課復習			
使用教科書 藤田裕二著、『パスカル・オ・ジャポン』、白水社			
自己学習の内容等アドバイス 復習してテストに備えること			

[授業科目名] フランス語Ⅱ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 田村 真理
[単位数] 2	[開講期] 1年次後期 2～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ フランス語Ⅰに続き、フランス語の基礎を学習する。単語、表現、基本的な文法規則を学び、コミュニケーションの四つの能力すべて（読む、書く、聞く、話す）において均等に使えることをめざす。 また、フランスの文化についての理解も深める。 フランス語検定試験の4級が目標。			
授業の概要 教科書の各課は会話と練習問題で構成されている。はじめの数回はフランス語のⅠで学習した内容を復習し、その後は各課の「会話」を通じて、重要な単語、表現、文法事項を学び、「練習問題」で理解と定着をはかる。ほぼ2週に1課のペースで進み、各課毎に小テストを行う。			
学生に対する評価の方法 各課で小テストを行い、それを合計して60点満点に換算し、出席点（全部出席すると40点、1回欠席するとマイナス5点）とあわせて60点以上を合格とする。遅刻は欠席とし、5回欠席すると失格。再試験は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 フランス語Ⅰで学んだ内容の復習（第0課～第3課） 第2回 同上（第4課～第6課） 第3回 同上（第7課～第9課） 第4回 第10課（年齢を言う） 第5回 第10課復習、第11課（時刻を言う） 第6回 第10課テスト、第11課復習、第9～第11課の練習問題 第7回 第11課テスト、第12課（紹介する） 第8回 第12課復習、第13課（日課を説明する） 第9回 第12課テスト、第13課復習、第14課（量を表す） 第10回 第13課テスト、第14課復習、第15課（天候を言う） 第11回 第14課テスト、第15課復習、第12～第15課の練習問題 第12回 第15課テスト、第16課（比較する） 第13回 第16課復習、第17課（過去のことを語る） 第14回 第16課テスト、第17課復習、第18課（未来のことを語る） 第15回 第17課テスト、第18課復習			
使用教科書 藤田裕二著、『パスカル・オ・ジャポン』、白水社			
自己学習の内容等アドバイス 必ず復習し、テストのために準備して下さい。			

[授業科目名] 中国語 I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 李 萍
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 本授業は半年で中国語の発音要領、基礎的文法と初歩的な会話を身に付けることを目標とする。			
授業の概要 中国語はリズム感がとても大事なので、まず発音をしっかり教える。正確な発音から簡単な会話に入り、さらに短文を理解するために、必要な文法を系統的に教えていく。授業は教材に沿って進行する。			
学生に対する評価の方法 期末試験の成績を基本点数として、授業中の練習の出来具合と授業への態度を参考にしながら、プラス・マイナスして総合点を出す。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 履修に関するガイダンス・オリエンテーション 第2回 第1課 中国語の特徴と発音要領及びその構成を説明する。 第3回 第2課 母音・子音と声調(アクセント)を組んで発音の練習をさせる。 第4回 第3課 「自己紹介」。人称代名詞と平叙文、否定文の学習。 第5回 第3課の要点、難点を詳細に説明する。本文を真似して、トレーニングを行う。 第6回 第4課 「これは誰のですか?」。指示代名詞、疑問詞、副詞と疑問文の学習。 第7回 第4課の要点、難点を詳細に説明する。本文を真似して、トレーニングを行う。 第8回 第5課 「あなたはどこに行きますか?」。動詞の学習。 第9回 第5課の要点、難点を詳細に説明する。本文を真似して、トレーニングを行う。 第10回 第6課 中国語と中国事情 第11回 第7課 「これはどうですか?」。形容詞の学習。 第12回 第7課の要点、難点を詳細に説明する。本文を真似して、トレーニングを行う。 第13回 「チャレンジ問題」を用いて学習する。 第14回 総合的復習。 第15回 全体のまとめ。 (受講者の理解度をみながら進度を調整する)			
使用教科書 プレントを配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 前回の授業で学習した内容を復習してほしい。			

[授業科目名] 中国語Ⅱ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 李 萍
[単位数] 2	[開講期] 1年次後期 2～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ この授業では、それぞれの場面を設定して、受講者が自分なりの会話能力を形成していくための手がかりをつかませる。中国語での会話資質を向上させることを目的とする。			
授業の概要 この授業は「中国語Ⅰ」を修了した学生が受ける科目である。まず前半で習得したものを復習して、正確な発音に直す。「中国語Ⅰ」につづいてテキストの後半に沿って教え、文法も「中国語Ⅰ」の後につづく。各課が終わったごとに、本文の会話を真似して、それぞれ自分の事情に合う言葉に書き直す。その後、それらの短文で会話を練習する。			
学生に対する評価の方法 期末試験の成績を基本点数として、授業中の練習の出来具合と授業への態度を参考にしながら、プラス・マイナスして総合点を出す。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 履修に関するガイダンス・オリエンテーション 第2回 第8課 「中国語Ⅰ」で学んだ疑問詞、動詞、形容詞を復習する。 第3回 第9課 「中国語Ⅰ」で学んだ文の表現を復習する。 第4回 第10課 「あなたは食事をしましたか?」。過去形、完了文を学習する。 第5回 第10課の要点、難点を詳細に説明する。本文を真似して、トレーニングを行う。 第6回 第11課 「彼はいつ用事がありますか?」。時間の表現を学習する。 第7回 第11課の要点、難点を詳細に説明する。本文を真似して、トレーニングを行う。 第8回 第12課 「あなたの家は遠いです遠くないか?」。介詞、反復疑問文を学習する。 第9回 第12課の要点、難点を詳細に説明する。本文を真似して、トレーニングを行う。 第10回 第13課 中国語と中国事情 第11回 第14課 「あなたは何時から始まりますか」。助動詞を学習する。 第12回 第14課の要点、難点を詳細に説明する。本文を真似して、トレーニングを行う。 第13回 「チャレンジ問題」を用いて学習する。 第14回 総合的復習。 第15回 全体のまとめ。 (受講者の理解度をみながら進度を調整する)			
使用教科書 プリントを配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 前回の授業で学習した内容を復習してほしい。			

[授業科目名] 日本語表現		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 大島 龍彦
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 管理栄養学部 前期・後期リポート
授業の到達目標及びテーマ 特に書くことに対する抵抗感を払拭し、書くことが楽しく感じられる心を養い、読者を逃さず最後まで付き合ってもらえる文章の書き方（技法）を学ぶ。			
授業の概要 日本語表現の扱う範囲は、音声言語と文章言語である。が、講義では特に後者について学ぶ。書きたい事柄を多く持つ方法や、書かなければならない事柄へのアプローチの方法と、それらを表現する方法の具体について学ぶ。			
学生に対する評価の方法 テストと授業に取り組む姿勢、レポートなどの提出物によって評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 講義概説（出席とミニットペーパー・講義の内容とその方法・学ぶということ） 第2回 書けることの再発見とその内容 第3回 何を書くか。如何に書くか。知っていることしか書けない。 第4回 起承転結と序破急ということ。「起」に全力を出す。 第5回 「書き出し」と「主題」 第6回 明快な文章は一文が短い。 第7回 時間軸と方向軸について 第8回 文章のレッスンに「接続語」はいらない。 第9回 強い名詞と形容語 第10回 写生文と報告文について 第11回 小論文について（論より証拠） 第12回 履歴書で学ぶ日本語表現 1 第13回 履歴書で学ぶ日本語表現 2 第14回 テスト 第15回 講義のまとめ			
使用教科書 必要に応じてプリントを配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 書くことは書き慣れることが大切。毎日数行日記を書くこと。日常生活に目をこらし、話したくなることをメモしておく。			

[授業科目名] 日本語表現		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 鈴木 互
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 1～4年次：メディア造形学部 1～3年次：ヒューマンケア学部
授業の到達目標及びテーマ 特に書くことに対する抵抗感を払拭し、書くことが楽しく感じられる心を養い、読者を逃さず最後まで付き合ってもらえる文章の書き方（技法）を学ぶ。			
授業の概要 日本語表現の扱う範囲は、音声言語と文章言語である。が、講義では特に後者について学ぶ。書きたい事柄を多く持つ方法や、書かなければならない事柄へのアプローチの方法と、それらを表現する方法の具体について学ぶ。			
学生に対する評価の方法 テストと授業に取り組む姿勢、レポートなどの提出物によって評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 講義概説と作文 第2回 書けることの再発見とその内容 第3回 何を書くか。如何に書くか。知っていることしか書けない。 第4回 起承転結と序破急ということ。「起」に全力を出す。 第5回 「書き出し」と「主題」 第6回 明快な文章は一文が短い。 第7回 時間軸と方向軸について 第8回 文章のレッスンと作文 第9回 強い名詞と形容語 第10回 写生文と報告文について 第11回 小論文について（論より証拠） 第12回 履歴書で学ぶ日本語表現 1 第13回 履歴書で学ぶ日本語表現 2 第14回 テスト 第15回 講義のまとめ			
使用教科書 必要に応じてプリントを配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 書くことは書き慣れることが大切。毎日数行日記を書くこと。日常生活に目をこらし、話したくなることをメモしておく。			

[授業科目名] 総合講座 I		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 井形 昭弘・折笠 和文 松本 高志 他
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 高齢化および少子化という日本社会の現状に関して偏らない理解を持ち、将来の生活を考えるための視点を持てるようにすることを授業の目標とする。			
授業の概要 少子化・高齢化が急速に進行する社会の状況を正確に認識することは大切である。そして、それとともに、老年期は「余生」ではなく、「人生の収穫の時期であり、生の味わいを真に見つめる時期である」と捉えることも同様に大切である。そのためには何が必要か。自らの生をどのように生き、他者の生をどのように支援することができるか。以上のような問題を多面的に検討する。			
学生に対する評価の方法 総合的学習において、研究または作品を発表する学生に対しては、その発表内容を評価して成績とする。これを希望しない学生は、レポートを提出して評価を受けるものとする。			
授業計画（回数ごとの内容等） 《オリエンテーション》 第1回 総説 科目の位置づけや問題のありかについて解説をする。 併せて、学習の仕方についても助言をし、単位認定の方法についても説明する。 《医学の立場から》 第2回 高齢化社会の姿 長寿世界一となった日本は、諸外国の模倣ではなく自らの手で未来長寿社会を築く責務を担うに至った。その高齢化社会の本質とは何か解説する。 第3回 介護保険 平成12年に導入した介護保険について、その特徴、導入の経緯、導入後5年の現状や見直しについて解説する。 第4回 高齢社会の健康科学 遺伝的因子より環境的因子が人間の寿命に影響を与えると認識され始めている。長寿と生活習慣との関係について解説する。 第5回 ターミナルケア 高齢社会を迎え「ターミナルケア」の必要性が高まってきている。「ターミナルケア」の役割、その重要性について解説する。 第6回 高齢社会の生と死 成熟した高齢社会では死の問題は避けて通れない。高齢者の死生観、生き甲斐、生きる幸せ、終末期のあり方について高齢者の立場から考えてみる。			

《社会科学の立場から》

第7回 高齢社会と経済成長

高齢者の増加は日本経済にとって経済成長を鈍化させるのか、あるいは、労働生産性や労働力はどうなっていくのかなど、経済的視点から高齢社会を論じる。

第8回 高齢社会と財政負担

高齢社会による財政負担および社会保障給付の問題を扱う。未曾有の高齢社会において、大きな支出項目となる財政負担、あるいは年金、医療費、福祉など、さまざまな面から功罪両面を論じる。

第9回 高齢社会による期待成長産業

シルバー産業、生活支援産業、ビジネス支援産業など、高齢化によって成長が期待される産業と産業構造の変化などについて論じる。

第10回 マーケティング論の立場から高齢社会を考える。

マーケティングの発想—消費者行動論の立場から、今後の高齢社会のあり様を考える。

《総合的学習》

第11回 総合的学習

小グループに分かれるなどして、各自が調べてきたことや考えたことなどを紹介しあい、相互に学ぶことを試みる。プレゼンテーションも試みる。

《人文科学の立場から》

第12回 「ふるさと学」

私たちはどのように「ふるさと」を持つのだろうか。必要とするのだろうか。どのようにして充実した環境を得て、如何に質の高い生活を得るかという問題を、少子高齢社会の「ふるさと」の姿という観点から論じる。

第13回 「老」の価値

「老」の文化論をともに考えてみたい。私たちの祖先は、「生老病死」をどのように受け止めてきたのだろうか。今ここにいる私たちには、「生老病死」をどのように見つめることができるだろうか。

第14回 ライフ・サイクル

「ライフ・サイクル」論について基本的な解説をする。併せて、諸民族のライフ・スタイルと、彼らが加齢 (aging) をどのように受け止めているか、いくつかの具体例をも紹介し、その智慧に学ぼうとする。

《まとめ》

第15回 まとめ

レポートの書き方について説明し、全体的なまとめを行う。

使用教科書

教科書は特に定めず、必要に応じて教材プリント等を用いる。

自己学習の内容等アドバイス

授業の中で、必要に応じて課題を与える。「総合的学習」でプレゼンテーションに参加する学生は、事前に相談をし、指導を受け、十分な準備をすることが必要となる。

[授業科目名] 総合講座Ⅱ		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 井形 昭弘・折笠 和文 松本 高志 他
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ <p>本科目は、「あなた（学生）にとって、環境問題とは何か」という問いかけを一貫した柱とするものである。地球環境の諸問題を理解し、率先して行動しようとする意識を持つことができるようになることを、授業の目標とする。</p>			
授業の概要 <p>環境に関わる危機的な兆候や状況が繰り返し問題にされているが、それらに関する情報は、未だ十分に公開されているとはいえない。このような中で、私たちはどのように行動することができるのか、必要なのかということ、さまざまな角度から解説する。</p>			
学生に対する評価の方法 <p>総合的学習において、研究または作品を発表する学生に対しては、その発表内容を評価して成績とする。これを希望しない学生は、レポートを提出して評価を受けるものとする。</p>			
授業計画（回数ごとの内容等） 《オリエンテーション》 第1回 総説 「環境問題」について、現代文明のあり方の問題として捉えることから始める。併せて、学習の仕方についても助言をし、単位認定の方法を説明する。 《自然科学の立場から》以下3回は、外部講師が参加する。 第2回 自然科学の立場から見た地球環境 地球の歴史から人類の誕生、そして文明の起源を解説することから始める。文明の歴史は、環境への適応と、そして同時に環境への負荷の歴史でもある。 第3回 水とゴミ(1) 水などの資源に始まり、廃棄物の問題にいたるまで、第一線の研究者としてだけでなく、現場の陣頭指揮に当たった立場から、ありのままをわかりやすく紹介する。 第4回 水とゴミ(2) 環境の浄化やリサイクルの問題などを取りあげる。 《医学その他の立場から》 第5回 水俣病問題を考える 公害の原点とされている水俣病は50年前に水俣市の化学工場（当時新日本窒素、現在チッソ）から排出されたメチル水銀が魚類に蓄積し、それを多食した住民が罹患した。長く鹿児島で過ごし、この問題に深く関与してきた。その経緯を述べ、公害問題をともに考えてみたい。 第6回 屋久島の事例から考えること 富士山が世界遺産への登録を拒否されたことを知っているだろうか。その理由は散乱するゴミである。一方、屋久島は1993年に世界遺産に登録された。私たちの生活と環境との関わりをみつめるうえで、極めて貴重な事例となっている。長くその現場に取り組んできた立場から解説する。 第7回 放射能について 核兵器の脅威、放射能の害などについて解説する。原爆による被害の状況などを具に証言するゲスト・スピーカーが参加する予定である。			

《生物学の立場から》以下2回は外部講師が参加する。

第8回 環境問題と生物(1)

生態系はどのように連鎖しているか。そこで環境破壊が行なわれると、生命はどのような影響を受けるか。長く現場で取り組んできたこの分野の専門の講師を迎えて実施する。

第9回 環境問題と生物(2)

生物の棲息環境の保護について、具体的な取り組みの事例を紹介しながら、そのさまざまな問題点を考えていく。

《総合的学習》

第10回 総合的学習

小グループに分かれるなどして、各自が調べてきたことや考えたことなどを紹介しあい、相互に学ぶことを試みる。

《社会科学の立場から》

第11回 経済成長と環境

高度経済成長期から、安定成長期、グローバル化が進展した時期、バブル崩壊後といった、それぞれの局面の経済活動と、それに派生した環境問題を取り上げる。

第12回 環境ビジネス企業の最前線

環境を悪化させない社会経済システムの構築に向けた取り組みについて論じる。また、環境ビジネス企業最前線の取り組みも解説する。

《人文科学の立場から》

第13回 環境に関する教育・思想の潮流と具体的な取り組み

「環境」は今、どのように論じられているか。それらのいくつかを解説し、身近な取り組みについても紹介する。

第14回 リンゴの教え・海の教え

環境の問題に取り組んだ人々の事例と、そこから学ぶことのできる教訓について解説する。

第15回 環境人類学の黎明

世界の諸国・諸民族は、環境の問題にどのように直面してきたか、また取り組んできたか。それらの事例から、今後の人類のあるべき姿についても考えたい。

使用教科書

教科書は特に定めず、必要に応じて教材プリント等を用いる。

自己学習の内容等アドバイス

授業の中で、必要に応じて課題を与える。「総合的学習」でプレゼンテーションに参加する学生は、事前に相談をし、指導を受け、十分な準備をすることが必要となる。

[授業科目名] 教養総合演習 I (短編小説を書く)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 大島 龍彦
[単位数] 2	[開講期] 3 年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 前期・後期リピート
授業の到達目標及びテーマ 小説作法を実践的に学び、1 編の短編小説を書き上げる。			
授業の概要 近現代の短編小説を分析（図形化）し、基本的な小説の作り方を知る。授業では小説執筆の 1 つのプロセスを学び、1 編の短編小説を完成させる。本授業では、「創作」という行為と作品の間のせめぎ合いを体験し、制作の苦悩と歓びとを体験する。			
学生に対する評価の方法 期末試験は実施しない。成績は、受講態度、予習、復習、提出作品など、総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1 回 授業概説（ある小説の分析「作図」を通して、今後行うべき作業について概説する） 第 2 回 あるテーマとその描き方について学ぶ。 第 3 回 テーマの見つけ方・各自 10 のテーマを設定する。 第 4 回 初めに主題文あり。主題文からストーリーへ。10 のテーマのうち、5 つのストーリーを書く。 第 5 回 小説にプロットは欠かせない。5 つのうち、3 つの設計図（小説の姿）を書く。 第 6 回 3 つの設計図にそれぞれ登場する人物の履歴書作り。 第 7 回 場面と 3 つの作品の参考資料の収集。 第 8 回 3 つの設計図から 1 編を選び、ストーリー・プロット（作図）・登場人物等を再考する。 第 9 回 1 編の小説を書き始める。 第 10 回 1 編の小説を書き終わる。 第 11 回 第 1 回改訂作業（登場人物は機能しているか） 第 12 回 第 2 回改訂作業（導入部は読者の心を掴むか・障害物は適切か） 第 13 回 第 3 回改訂作業（伏線・ユーモア・小道具などは適切か） 第 14 回 各自朗読と批評 1 第 15 回 各自朗読と批評 2			
使用教科書 必要に応じてプリントを配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 次回のシラバスの内容に留意して自主的に準備してくる。また、演習中に実践したことを再考するなど、特に復習に力を入れると学習効果が上がる。			

[授業科目名] 教養総合演習 I (『アジアの歴史』を読む)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 加藤 英明
[単位数] 2	[開講期] 3年次前・後期	[必修・選択] 選択	[備考]
授業の到達目標及びテーマ 松田壽男博士の名著『アジアの歴史』を講読する。 本書は、アジアの地理、風土、歴史を、世界史的視野において分析・通観したもので、出色の概説書である。これを学ぶことによって、近隣アジアの基礎知識を身につけつつ、社会人としての力量向上をめざす。			
授業の概要 従来型の「世界史」に対する批判の書であり、また一方で平易な入門書でもある本書を、丹念に読み、これを報告発表することによって、地理的・歴史的知識、あるいは専門用語や教養常識を蓄積するとともに、読解力、要約力、批判力、報告力（レポート作成技術を含む）を養う。			
学生に対する評価の方法 試験は行わない。成績は、平常の演習内での報告・発表、質疑応答など授業参加状況によって、総合的に評価する。再評価は行わない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス 第2回 報告分担 第3回 「世界史とアジア」「歴史と風土」 第4回 「アジア史の基礎」 第5回 「黄土の文化」「中国の北と南」 第6回 「インド文化のひろがり」 第7回 「海洋に生きる人たち」 第8回 「地中海という世界」 第9回 「イラン文化のかがやき」 第10回 「アジアの十字路」「西域の文化」 第11回 「漢民族の栄光」 第12回 「絹馬の交易」「ステップの道」 第13回 「トルコ＝イスラーム」 第14回 「世界史の転換」 第15回 総括			
使用教科書 松田壽男『アジアの歴史』（岩波現代文庫） 『世界史年表・地図』（吉川弘文館） 『なるほど知図帳 2011 世界』（昭文社）			
自己学習の内容等アドバイス テキストを読む際に、地名は歴史地図・現代地図で、歴史上の事柄は年表で確認しておくこと。			

[授業科目名] 教養総合演習 I (マーケティング)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 折笠 和文
[単位数] 2	[開講期] 3 年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 ※募集人数は 15 名前後
授業の到達目標及びテーマ マーケティングの理論と実践をテーマとして、各専攻学生の興味ある問題提起とマーケティングの理解および問題解決能力の育成を目的とする。学部・学科のそれぞれの専門教育と連動させ、マーケティング的な発想を培うまたとない機会となるであろう。			
授業の概要 マーケティングは、企業の経営戦略の考え方を学ぶためにも、賢い消費者になるためにも必要である。幸い、本学では管理栄養学科—食品流通、食品マーケティング、映像メディア学科—メディアを介したマーケティング活動、デザイン学科—普及活動や広告デザインとしての広告論、ファッション学科—流行理論や販売促進のためのプロモーション戦略、ヒューマンケア学部—各種子どもの市場調査とマーケティングの模索などを学ぶ。			
学生に対する評価の方法 積極性や問題意識、自分の専攻分野に関するマーケティング的発想・応用度ならびにレポート等で評価する。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第 1 回 サブゼミ (演習) の概要とマーケティングとは何かを説明する。 第 2 回 マーケティングの歴史と理論 (平易に解説) 第 3 回 マーケティングの基本理論 (輪読) 第 1 章—製品戦略に関する解説・説明 第 4 回 マーケティングの基本理論 (輪読) 第 2 章—価格戦略に関する解説・説明 第 5 回 マーケティングの基本理論 (輪読) 第 3 章—プロモーション (広告等) に関する解説・説明 第 6 回 マーケティングの基本理論 (輪読) 第 4 章—流通チャネルに関する説明・解説 第 7 回 マーケティングの最近の手法 (気付かないで多用している身近な話題) 第 8 回 マーケティングに関連する、各自興味ある問題テーマ等について話し合う。 第 9 回 消費者行動論 第 10 回 市場調査、マーケティング・リサーチ 第 11 回 各自あるいはグループの興味あるテーマとマーケティングの接点を見出し、問題意識をまとめて発表 (1~3 人程度で発表し討論を行う) 第 12 回 各自あるいはグループの興味あるテーマとマーケティングの接点を見出し、問題意識をまとめて発表 (1~3 人程度で発表し討論を行う) 第 13 回 各自あるいはグループの興味あるテーマとマーケティングの接点を見出し、問題意識をまとめて発表 (1~3 人程度で発表し討論を行う) 第 14 回 総括 第 15 回 レポート等の提出と半期を振り返って。			
使用教科書 未定			
自己学習の内容等アドバイス 基本となるマーケティングの理論を短期間でマスターすること。			

[授業科目名] 教養総合演習 I (健やかにダイエット)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 正 美智子
[単位数] 2	[開講期] 3 年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 受講対象者については要件参照
授業の到達目標及びテーマ ・身体についての問題点や課題を自ら発見・理解できる能力の育成を目的とする。 ・演習のテーマ：「からだを変える、からだは変わる “健やかにダイエット” 」 <受講の要件> ①体格指数(BMI)25 以上 ②体脂肪率 男子 25%以上、女子 30%以上 ③腹囲 男子 85cm、女子 80cm 以上 ①②③のいずれか一つ以上、該当する学生が対象			
授業の概要 本演習は、「肥満に対する効果的な運動」と「肥満対策を主にした有益な食習慣」について実体験をし、健康体重への減量に対する気運を高めること及び知識を行動につなげる「ヘルスリテラシー」の確立を目指す。			
学生に対する評価の方法 受講態度および課題に対する取組みの姿勢(40%)とレポートのできばえ(60%)を総合的に評価する。 なお、期末試験および再評価は実施しない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第 1 回 身体と運動を考える (サイエンスを学ぶ) ○ 文献研究 1 第 2 回 身体と運動を考える (サイエンスを学ぶ) ○ 文献研究 2 第 3 回 身体運動の展開 (栄養及び食習慣と運動の関係を理解し、応用する) ○ 運動前 身体組成の計測及び体力測定 ○ ライフコーダ (生活習慣記録機) の使用説明 第 4 回 身体運動の展開 1 ○ ライフコーダによる 1 週間分のデータを分析する ○ コンバインドトレーニングの実施 (レジスタンストレーニング、エアロビクス) 第 5 回 身体運動の展開 2 第 6 回 身体運動の展開 3 第 7 回 身体運動の展開 4 第 8 回 身体運動の展開 5 第 9 回 身体運動の展開 6 第 10 回 身体運動の展開 7 第 11 回 身体運動の展開 8 第 12 回 身体運動の展開 9 第 13 回 身体運動の展開 10 ○ コンバインドトレーニングの実施 ○ 運動後 身体組成の計測及び体力測定 第 14 回 データをまとめて結果を考察する (レポート作成) 第 15 回 データをまとめて結果を考察する (レポート作成)			
使用教科書 必要に応じて、資料を配布する			
自己学習の内容等アドバイス ・運動している自分自身を科学する。 「やってみるごと」→「やったことを言葉にすること」→「やったことの【理】を知ること」 ・知識を豊富にするために身体に関する図書を多く読むこと。			

[授業科目名] 教養総合演習 I (諸外国事情)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] M. ファルク
[単位数] 2	[開講期] 3 年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 前・後期は同内容でリピート
授業の到達目標及びテーマ この授業の目的は、1) 各学生の専門分野 (管理栄養など) に関連する話題のプレゼンを行う 2) プレゼンに際して、学生間で英語で相互に意見交換する、などの基礎的技術を養う。個人個人の学習を把握するため、受講人数は10～15人くらいを予定している。 英語でプレゼンテーション・この授業を受けるにあたり、文法や語彙などの英語基礎学力は問わない。どのようにして面白いプレゼンができるかということを目指し、いかなる学生も受講できる。			
授業の概要 下記に挙げたほとんどの学習材料は、実生活、クイズ、疑似活動などを取り上げたもので、先ず初めは学生たちが事前準備なしで口頭によるプレゼンを行なう。後に計画を練ったり、準備したりして、更にプレゼンを進めて行く。学習期間中、学生は自信を持って計画を立案したり、自分のプレゼンを作成していくために、個々に教員と共に勉強して行く			
学生に対する評価の方法 成績評価の内訳は次の通り；レポート提出 (50%)、オーラルテストとしてのパワーポイントを使った自身の専門に関するプレゼン発表 (50%)。原則として、再評価は行わない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回～第5回 基礎英語コミュニケーションスキル (実践/復習) 第6回～第7回プレゼン一般を立案するための基礎技術 第8回～第9回一般的なプレゼンを構築するための基礎技術 第10回～第14回自己の専門分野に関連した内容のプレゼン実習 第15回最終オーラル試験として、自分の専門分野に関する内容のプレゼンを準備・実践する			
使用教科書 ・Jones, L. and Alexander, R. 2000. <i>New International Business English</i> . CPU. 学生は教科書購入の必要なし。上記の参考文献からのプリント類が準備される。ネット上からも教材を得る。			
自己学習の内容等アドバイス 受講を希望する学生は、上記の書籍と以下のウェブサイトから事前に授業に必要な情報を得てもらいたい。 URL: http://nuas611d.nuas.ac.jp/mfarooq/frqHP/default.html			

[授業科目名] 教養総合演習 I (諸外国事情)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 安藤 直
[単位数] 2	[開講期] 3年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 前・後期は同内容でリピート
授業の到達目標及びテーマ 基本的な英文を文法・語彙選択などを間違わずに作成する。英訳だけではなく、英作方法を修得する。 註) 「基礎英語学力向上のための Web 授業」がネット上に公開されているので、学内での空き時間ならびに自宅など学外での余暇の時間に各自が自由に学習できる。(学外から当該サイトへのアクセスには、大学ネットワークにログインする各自の ID・パスワードが必要) URL: http://nuas611d.nuas.ac.jp/			
授業の概要 各自が英語を母国語とする国をひとつ選び、その文化、歴史、政治、法律、習慣、日常生活などをインターネットや文献で調べ上げ、自分の意見や感想、コメントを加えた報告レポートを英語で書く。1,500～2,000語を目標とする。個人の学習内容や進捗度合いを見極めるために、10～15人を予定。使用教室は、E-31(東館3階同時通訳演習室)を予定している。(空きがない場合は小教室)			
学生に対する評価の方法 レポート内容70%、授業貢献度20%、授業受講態度・姿勢10%で評価する。 原則として、再評価は行わない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第01回 講義 授業計画・評価方法についての説明、およびレポートの書き方を教授 第02回～04回 演習 諸外国の情報を入手し、日本語でまとめ上げる。 第05回～08回 演習 日本語での情報内容を英語に訳し、自分のコメントも加える。 第09回～13回 演習 各自が訳した英文を担当教員がチェックし、修正しながら指導する。 第14回 演習 レポート提出 (個々にチェックを行い、修正箇所がある場合は次週に再提出) 第15回 演習 レポート最終提出 (完成版)			
使用教科書 原則として教科書は使わない。インターネットや雑誌などから情報を入手する。			
自己学習の内容等アドバイス 授業受講前に各自が雑誌やインターネットで必要な情報を入手し、学習材料として準備する。			

[授業科目名] 教養総合演習 I (オペレーションズ・リサーチ)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 堀尾 正典
[単位数] 2	[開講期] 3年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 人が生活していくと、その身の回りには多くの課題や問題が発生する。我々は、それら問題を解決するために多くの判断を下していかなければならない。一般にそれら判断は、現在の状況や過去の経験、直感などを基に下されることが多い。だが、そのような問題の中には数理的な要素を加味して対処した方が、遙かに確実に効果的な結果が得られるものも多数存在している。このように、様々な問題に対して数理的なアプローチで効果的な施策を考え解決を試みる学問が、オペレーションズ・リサーチ (OR) である。この演習では、OR の基本を学び、様々な身近な問題に対して、数理的な要素を考慮して問題解決ができるような能力の育成を目指す。			
授業の概要 本授業では、まず OR でよく出現する実社会における幾つかの問題に対する数理的な解決方法を、EXCEL を使った演習を通じて学ぶ。その後、各自が自分で問題を設定し同様に解決を試みる。最後にこれら演習をレポートとしてまとめる。 なお、この科目受講に際しては、情報リテラシー（もしくは情報処理1）、表計算演習（または情報処理2）を事前に修得しているか、もしくはこれらに対して同等以上のスキルを有することが望まれる。			
学生に対する評価の方法 期末試験は実施しない。成績は受講態度、指定課題（EXCEL のワークシート）などから総合的に評価する。なお、原則再評価は実施されないので注意されたし。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション（書注意、講義内容、成績評価方法など） 第2回 簡単な生産計画問題を使い線形計画法の基本を学習する。 第3回 EXCEL のソルバー機能を使って実際に解く。 第4回 自分の身近な問題へ適用してみる。 第5回 シミュレーションによる問題解決方法を学習する。 第6回 EXCEL を用いて、金利返済やバスの乗車など身近な問題をシミュレーションで解いてみる。 第7回 実際の自分の問題へ適用してみる。 第8回 PERT/C PMを用いた工程管理を学習する。 第9回 EXCEL を用いて、工程管理を行う 第10回 卒業研究や卒業作品作成のスケジュール管理などに適用してみる 第11回 AHP による意志決定手法を学習する。 第12回 EXCEL を用いた演習を行う。 第13回 その結果を自分の就職活動の意志決定に適用してみる。 第14回 今までの学習結果を整理し、レポートとしてまとめる。 第15回 同上			
使用教科書 なし（授業内で参考となるデータファイルを配布する）			
自己学習の内容等アドバイス 時間外において、授業で実施した問題を自分の力でもう一度繰り返し挑戦するなどの復習が重要になる。授業内容が十分に理解できなかった場合や進度に遅れがちな場合は特にこのようなフォローを必ず行っておく。			

[授業科目名] 教養総合演習 I (宗教心理学)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 松本 高志
[単位数] 2	[開講期] 3 年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 15 名前後を募集する。
授業の到達目標及びテーマ 宗教が、その周辺の諸文化と密接に結びつき、生活の中に根付いているその様相を研究テーマとする。それらさまざまな文化・社会の中に宗教的要素が内在していることを感じ取り、それらについて宗教心理学という新しい視点から考えることができるような力を養うことを目標とする。学期末には研究レポートを作成する。			
授業の概要 研究のための視点として宗教心理学を講じると共に、それに並行してさまざまな宗教文化についても解説し、心理学的な分析をする。 受講者は、その希望に応じて研究テーマを選び、個別指導を受けながら取り組むことになる。 「宗教と文化」単位取得者の履修が望ましい。			
学生に対する評価の方法 授業中の研究報告と、研究レポートを総合的に評価する。なお、原則として再評価は行わない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第 1 回 宗教心理学とは何か 心理という人間一般の地平で宗教を眺めようとすることは、宗教を人間性に内在するものとして研究しようとすることを意味する。その基本的な立場と方法について解説する。個人指導のための日時の調整もする。 第 2 回 心の深層と象徴 宗教の周辺文化の中では、「宗教」は直接的な教説として現われず、さまざまな象徴の形で表される。象徴というものの意味と現れを探る。童話『花咲き山』・『100 万回生きたねこ』などを題材に解説する。 第 3 回 元型(1) ユングが提唱した元型という概念に触れ、その中から「太母」「影」を紹介する。「鬼子母神」説話・『ジキルとハイド』・『山月記』その他を題材に解説する。 第 4 回 元型(2) 「マンドラ」や「異性像」などについて解説する。『曼荼羅』や、『ピーターパン』・「一寸法師」説話・「トリスタンとイゾルデ」伝説などを題材とする。 第 5 回 神話に学ぶ愛のかたち 神話やさまざまな物語の中には、さまざまな愛のかたちが描かれる。前回に続いて「異性像」を取り上げ、そこに物語られるものについて考察する。マーリン (アーサー王伝説)・かぐや姫などを題材とする。 第 6 回 変容 一般に「瞑想」と呼ばれる行為を中心に考察する。それは宗教的「行」としてだけでなく、私たちの日常生活の中にも存在し得る。錬金術・茶道・キャンプファイアー・箱庭などを題材に解説する。 第 7 回 「身体」の宗教心理学 「行」と呼ばれる行為の形で、身体は、宗教という文化やその周辺の文化と深く結びつく。それが私たちの日常生活の中にもあり得るものであることについては、第 6 回に解説した。これに深く関わる「身体」性を探究する。スポーツ・装飾・「パフォーマンス」などについても触れる。			

第8回 「回心」の研究

「回心」研究の歴史は、キリスト教布教の試行錯誤の歩みの中に綴られてきた。それらに少し触れた後、現代版「回心」論と言えるような領域を紹介する。『あゝ無情』その他を題材とする。

第9回 宇宙飛行士の悟り

「個」を超える心について、易しく考えたい。それは、異なるものとの融和し、一体化しようとする心である。何も難しくはない。飛行士たちは宇宙空間を飛んだだけで、それを直観したのだから。

第10回 生と死の心理

前回に引き続く内容である。生と死をめぐる諸問題から、現代の科学的な宗教研究にいたるまでを解説する。

第11回 芸術と宗教

芸術や芸術家の生涯を取り上げ、宗教文化との関わりを探る。題材については、バッハやゴッホなどを予定しているが、受講生の希望にできるだけ沿う形で勧める。

第12回 教育と宗教

西洋でも東洋でも、教育という営みに宗教は深く関わる。それは何故か。教育史を概観しながら解説する。

第13回 演習レポートの書き方(1)

最初に、演習レポートに求める要件を提示する。その中には、本演習に独自のものも含まれる。さらに、レポートをまとめる手順や作法など具体的なことからについて解説をする。原稿の整理作業に着手する。

第14回 演習論文の書き方(2)

レポートをまとめる手順や作法など具体的なことからについて解説をする。原稿の整理作業を更に進める。

第15回 演習論文の書き方(3)

レポートをまとめる手順や作法など具体的なことからについて解説をする。原稿の整理作業を更に進める。

使用教科書

プリント及び受講生の作成するレジュメなどが教材となる。参考図書類については授業中に紹介する。

自己学習の内容等アドバイス

受講生は学期中に少なくとも1冊、あるいはそれ以上の書籍を読むことになる。それらについては、個別に指導をする。

[授業科目名] 教養総合演習Ⅱ（人間性研究）		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 松本 高志
[単位数] 2	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択	備考 15名前後を募集する。
授業の到達目標及びテーマ 「人と思想」をテーマとする。 学生時代に深く傾倒する一人の人物と出会うこと、それも、歴史、風土、人間関係、さまざまな文化的背景などの複合的な研究を通して触れることは極めて有意義である。人間性について、その幅広さや奥深さを知り、その業績だけでなく、思想的遍歴から一つひとつの努力や工夫といった細部にいたるまで研究し、将来の判断や行動の指針について考察できるようになることを目標とする。			
授業の概要 「人間性」について解説し、併せて研究方法について説明する。これと並行して、受講生は一人の人物を選び、著作・作品研究などを通して、「思想」という面を切り口として、その人間性を研究する。 「哲学へのいざない」「宗教と文化」「現代社会と倫理」のうち少なくとも1科目の単位の取得者が望ましい。			
学生に対する評価の方法 授業中の研究報告と、研究レポートを総合的に評価する。なお、原則として再評価は行わない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 「人間性」とは何か なぜ、人は時に、特定の人物に強く惹かれるのか。その人の生き方、思想、成し遂げたことの中に、何を感じるのか。その秘密について、共に考える。個人指導のための日時の調整についても話し合う。 第2回 人間性研究の方法論 研究のための方法論を概説する。一人の人間を研究するためには、資料の収集と精査、歴史的社会的背景、ライフ・ヒストリーの研究など、様々な作業が必要になる。そのための全体的な概論である。 第3回 資料について 資料をどのように読みこなしていくか、その方法や留意点について解説する。 第4回 日記・手記・伝記・評伝 日記や手記を読むのには注意が必要である。また伝記・評伝にも、筆者の人間観や価値観が反映するものである。それらの点について解説する。 第5回 人物の背景 歴史的社会的、そして文化的背景を決して見逃すことはできない。現代という観点からのみ見ることは危険である。この点について解説する。 第6回 ライフ・サイクル ライフ・サイクルという概念について、まず解説をする。それから、偉人と呼ばれる人々が、しばしば個人的なライフ・サイクルを描き出すことについて解説する。 第7回 契機 個人的なライフ・サイクルを描き出すということについて、「契機」という問題を考えていく。そのために、「共時性」についても若干の解説を行う。			

第8回 評価

歴史上の人物には「評価」がつきまとう。受講者の演習論文にこれを加えることは求めないが、実質的に、その内容に書き込まれやすいものである。

第9回 歴史的影響(1)

歴史的影響というとその範囲は広いが、近接する文化的領域などへの影響、そして、後継者や賛同者など、さまざまな面を考えなければならない。それらを挙げながら、中でも、近接する文化的領域などへの影響を中心に考える。

第10回 歴史的影響(2)

後世の人物への影響などを中心に考える。

第11回 「人間性研究」のまとめ(1)

全員が、やがて何らかのまとめを行うことになる。結論とまではいかななくても、それに近い考察の仕方というものがあるはずである。これまでに触れた視点・考察点のすべてを、受講生の演習論文に求めるわけではない。各自が望む、そしてそれぞれにふさわしい力の入れ方がある。それらを解説する。

第12回 「人間性研究」のまとめ(2)

前回の解説を振り返りながら、各自のまとめの作業に入る。

第13回 演習レポートの書き方(1)

最初に、演習レポートに求める要件を提示する。その中には、本演習に独自のものも含まれる。さらに、レポートをまとめる手順や作法など具体的なことからについて解説をする。原稿の整理作業に着手する。

第14回 演習論文の書き方(2)

レポートをまとめる手順や作法など具体的なことからについて解説をする。原稿の整理作業を更に進める。

第15回 演習論文の書き方(3)

レポートをまとめる手順や作法など具体的なことからについて解説をする。原稿の整理作業を更に進める。

使用教科書

プリント及び受講生の作成するレジュメなどが教材となる。参考図書類については授業中に紹介する。

自己学習の内容等アドバイス

受講生は学期中に少なくとも1冊、あるいはそれ以上の書籍を読むことになる。それらについては、個別に指導をする。

[授業科目名] 情報基礎論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 望月 達彦
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 1. コンピュータの基礎知識と技術を習得する。 2. パソコンの基本的な問題に対処できる。			
授業の概要 コンピュータを効果的に利用する為には、ハードウェア／ソフトウェアを中心とした、基礎的知識が必要である。本講義では、我々の日常生活とコンピュータとの係わりを考え、人間の仕組みと対比して、コンピュータの仕組みや情報の扱い方、並びに、ハードウェアとソフトウェアの基礎的な知識を学ぶと共に、それらの知識の必要性について理解し、考える。			
学生に対する評価の方法 以下に述べる各項目の得点を合計し、評価する。 <ul style="list-style-type: none"> ・試験（80%）：第15回授業時に実施する。 ・授業参画態度（20%）：授業に対する意欲的な取り組みを評価する。 			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス（授業の基本方針と期間の授業計画） 第2回 コンピュータの特徴（世界最初のコンピュータ、コンピュータの特徴） 第3回 ハードウェアとソフトウェア、コンピュータの五大機能と五大装置 （ハード／ソフトの定義、コンピュータの五大装置・五大機能、CPU） 第4回 デジタルとアナログ（デジタル／アナログの定義、デジタルの利点、デジタル化の方式） 第5回 基数変換（2進数、16進数、基数変換） 第6回 数値表現①（固定小数点数と補数、浮動小数点数と精度・誤差） 第7回 数値表現②（ゾーン10進数、パック10進数） 第8回 文字表現（1バイト系コード、2バイト系コード） 第9回 命令とプログラム （命令とプログラム、プログラム記憶方式、ノイマン式コンピュータ、第五世代コンピュータ） 第10回 補助記憶装置（ハードディスク、フロッピーディスク、CD） 第11回 補助記憶装置（DVD、光磁気ディスク、半導体ディスク） 第12回 入出力インタフェース（シリアルインタフェース、パラレルインタフェース） 第13回 入出力装置（入力装置、出力装置） 第14回 ソフトウェア（オペレーティングシステム、アプリケーションソフトウェア） 第15回 試験			
使用教科書 なし 但し、随時プリント等の補足資料を配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 本講義は、情報処理技術者試験の「ITパスポート試験」と「基本情報技術者試験」の内容を含んでいるので、関連の書籍が参考になる。			

[授業科目名] 情報倫理		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 折笠 和文
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 昨今のインターネットや携帯電話等によって、不特定多数の人との交流が盛んになったが、便利であるが故の利便性と危険性の両面も潜んでいる。そうした危険性に巻き込まれないために、あるいは快適な生活を送るためにも、現代人の必須ともいわれる「情報倫理」の知識と規範を学ぶことが求められる。以上のさまざまな問題点を認識し、危険性の潜む現代社会を理解することが到達目標である。			
授業の概要 インターネット社会の功罪（光と影）、個人情報、知的財産、インターネット・ビジネスの功罪、インターネット犯罪の具体例、情報セキュリティ対策など、情報倫理の問題等を広範に学ぶことを目的とする。			
学生に対する評価の方法 学期末試験（70点）、単元ごとの達成度小テスト（5回分合計30点）、出席回数等を考慮して、総合的に評価する。 ※病欠および就職試験等（やむを得ない場合）以外は、再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 情報倫理の範囲と方法（倫理学とは、情報倫理とは、現代倫理学の特質など） 第2回 情報社会（インターネット社会の光と影、情報の働きと性質、情報の信頼性） 第3回 個人情報と知的財産（個人情報とは、知的財産権、著作物と著作権） ※第1回達成度小テスト 第4回 社会生活における情報（新しい文化形態としての学習環境の変化、医療・福祉・公共サービス、ビジネスの変化） 第5回 身近な生活における情報（生活スタイル・携帯電話の普及による変化、健康面への影響、コンピュータや情報通信技術の悪用による影響） ※第2回達成度小テスト 第6回 電子メールによる情報の受信・発信（電子メールのマナー・内容、メーリングリスト） 第7回 Webページによる情報の受信・発信（Webページの構成・活用、情報の信憑性、発信する責任、ネット上でのコミュニケーション） 第8回 情報セキュリティ（セキュリティとは、認証とパスワード、暗号とセキュリティ） ※第3回達成度小テスト 第9回 コンピュータの被害（不正アクセス、コンピュータウイルス、スパムメール・チェーンメール） 第10回 ネット社会における被害と対策（インターネット上の有害情報や犯罪行為） ※第4回達成度小テスト 第11回 ネット社会における被害と対策（インターネット上の違法行為） 第12回 ネット社会における被害と対策（ネット上でのトラブル） 第13回 まとめ：ネット社会における問題点と解決すべき強化面 ※第5回達成度小テスト 第14回 まとめ：健全な情報社会のあり方を考える 第15回 学期末試験			
使用教科書 『情報倫理』 情報倫理教育研究グループ著（実教出版）420円			
自己学習の内容等アドバイス 簡単な「達成度小テスト」のためにも、復讐あるいはテキストの準備は不可欠である。			

[授業科目名] 情報処理 I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 濱島 秀樹
[単位数] 2	[開講期] 1 年次前期	[必修・選択] 必修	備考 子どもケア専攻
授業の到達目標及びテーマ レポート作成とは、大きく考えると、与えられた状況で、いかに効果的な情報を的確に収集、整理し、自らの考え方を論理的に提供できるのかという力が試されていることになる。本授業では、レポート作成という演習を通じ、PC操作能力と情報の取捨選択、発信能力（この演習では、このようなコンピュータリテラシーとメディアリテラシーを統合して情報リテラシーと呼んでいる）を学ぶことが大きな目的である。			
授業の概要 この授業は、教養のコンピュータ演習系科目の基礎となる科目である。大学生活では、多くの場面で、学習や研究の成果としてさまざまなレポートを作成しなければならない。効果的なレポートを作成するためには、インターネットを含めたコンピュータの活用能力に加え、テーマの決め方、調査の進め方、内容のまとめ方といったレポートそのものの作成技法も重要になってくる。そこで、この授業ではコンピュータの基本から学習を始め、よりよいレポートを効率的に作成するために必要となる考え方や知識を学ぶ。最後に自ら決めた自由なテーマに沿ってレポートの作成を試みる。 具体的な演習内容として、 <ul style="list-style-type: none"> ・ パーソナルコンピュータの基本的な取り扱い（WWW や電子メールによる情報の検索・送受など） ・ ワードプロソフト（Microsoft Word）の基本操作 ・ レポートの書き方とワードプロソフトを用いたレポートの作成 といった点が学習の中心になる。演習では、単にパソコンの操作技能だけでなく、ネットワーク社会におけるマナーやソフトウェアの著作権、論理的なレポートを書くために必要な考え方や、ふさわしい情報の取捨選択といった事柄にまで話題が及ぶことになるであろう。			
学生に対する評価の方法 普段の受講態度(20%程度)、授業内で提出する基本課題（20%程度）とレポート課題（60%程度）で評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーションとPCの基本(受講上の諸注意や講義概要、成績の評価方法などについて説明)。 第2回 PCの基本操作（パーソナルコンピュータについての概論、各種基本操作、タッチタイプ） 第3回 インターネットとメール（インターネットの歴史と発展経緯、ネットワーク社会の光と陰、WWW による情報の検索、電子メールの送受方法、各種パスワードの変更方法） 第4回 ビジネス文書と基本書式（ビジネス文書とは、基本的な書式機能） 第5回 作表（作表、イラスト、文字装飾） 第6回 描画（図形描画） 第7回 基本課題その1（学習した機能を使い複合文書を作成） 第8回 基本課題その2（同上） 第9回 レポートの書き方1（論理的な文章について） 第10回 レポートの書き方2（大学におけるレポートとは、書き方、レポートフォーマットについて） 第11回 レポート課題の作成1（最近のニュースなどより各自が自由にテーマを決める） 第12回 レポート課題の作成2（インターネットなどを利用した文献調査） 第13回 レポート課題の作成3（章立て・執筆） 第14回 レポート課題の作成4（推敲・添削・修正） 第15回 レポート課題提出（提出）			
使用教科書 なし。参考図書は必要に応じ紹介する。			
自己学習の内容等アドバイス レポート作成では、図書館や自宅などでの積極的な情報収集が望まれる。			

[授業科目名] 情報処理 I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 堀尾 正典
[単位数] 2	[開講期] 1 年次前期	[必修・選択] 必修	備考 幼児保育専攻
授業の到達目標及びテーマ レポート作成とは、大きく考えると、与えられた状況で、いかに効果的な情報を的確に収集、整理し、自らの考え方を論理的に提供できるのかという力が試されていることになる。本授業では、レポート作成という演習を通じ、PC操作能力と情報の取捨選択、発信能力（この演習では、このようなコンピュータリテラシーとメディアリテラシーを統合して情報リテラシーと呼んでいる）を学ぶことが大きな目的である。			
授業の概要 この授業は、教養のコンピュータ演習系科目の基礎となる科目である。大学生活では、多くの場面で、学習や研究の成果としてさまざまなレポートを作成しなければならない。効果的なレポートを作成するためには、インターネットを含めたコンピュータの活用能力に加え、テーマの決め方、調査の進め方、内容のまとめ方といったレポートそのものの作成技法も重要になってくる。そこで、この授業ではコンピュータの基本から学習を始め、よりよいレポートを効率的に作成するために必要となる考え方や知識を学ぶ。最後に自ら決めた自由なテーマに沿ってレポートの作成を試みる。 具体的な演習内容として、 <ul style="list-style-type: none"> ・ パーソナルコンピュータの基本的な取り扱い（WWW や電子メールによる情報の検索・送受など） ・ ワードプロソフト（Microsoft Word）の基本操作 ・ レポートの書き方とワードプロソフトを用いたレポートの作成 と言った点が学習の中心になる。演習では、単にパソコンの操作技能だけでなく、ネットワーク社会におけるマナーやソフトウェアの著作権、論理的なレポートを書くために必要な考え方や、ふさわしい情報の取捨選択といった事柄にまで話題が及ぶことになるであろう。			
学生に対する評価の方法 普段の受講態度(20%程度)、授業内で提出する基本課題（20%程度）とレポート課題（60%程度）で評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーションとPCの基本(受講上の諸注意や講義概要、成績の評価方法などについて説明)。 第2回 PCの基本操作（パーソナルコンピュータについての概論、各種基本操作、タッチタイプ） 第3回 インターネットとメール（インターネットの歴史と発展経緯、ネットワーク社会の光と陰、WWW による情報の検索、電子メールの送受方法、各種パスワードの変更方法） 第4回 ビジネス文書と基本書式（ビジネス文書とは、基本的な書式機能） 第5回 作表（作表、イラスト、文字装飾） 第6回 描画（図形描画） 第7回 基本課題その1（学習した機能を使い複合文書を作成） 第8回 基本課題その2（同上） 第9回 レポートの書き方1（論理的な文章について） 第10回 レポートの書き方2（大学におけるレポートとは、書き方、レポートフォーマットについて） 第11回 レポート課題の作成1（最近のニュースなどより各自が自由にテーマを決める） 第12回 レポート課題の作成2（インターネットなどを利用した文献調査） 第13回 レポート課題の作成3（章立て・執筆） 第14回 レポート課題の作成4（推敲・添削・修正・提出） 第15回 レポート課題提出（提出）			
使用教科書 なし。授業内でテキストの代わりとなるレジュメを公開するので、各自利用されたし。			
自己学習の内容等アドバイス レポート作成では、図書館や自宅などでの積極的な情報収集が望まれる。			

[授業科目名] 情報リテラシー		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 堀尾 正典・内田 君子
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 管理栄養学部・メディア造形学部
授業の到達目標及びテーマ レポート作成とは、大きく考えると、与えられた状況で、いかに効果的な情報を的確に収集、整理し、自らの考え方を論理的に提供できるのかという力が試されていることになる。本授業では、レポート作成という演習を通じ、PC操作能力と情報の取捨選択、発信能力（この演習では、このようなコンピュータリテラシーとメディアリテラシーを統合して情報リテラシーと呼んでいる）を学ぶことが大きな目的である。			
授業の概要 この授業は、教養のコンピュータ演習系科目の基礎となる科目である。大学生活では、多くの場面で、学習や研究の成果としてさまざまなレポートを作成しなければならない。効果的なレポートを作成するためには、インターネットを含めたコンピュータの活用能力に加え、テーマの決め方、調査の進め方、内容のまとめ方といったレポートそのものの作成技法も重要になってくる。そこで、この授業ではコンピュータの基本から学習を始め、よりよいレポートを効率的に作成するために必要となる考え方や知識を学ぶ。最後に自ら決めた自由なテーマに沿ってレポートの作成を試みる。 具体的な演習内容として、 <ul style="list-style-type: none"> ・ パーソナルコンピュータの基本的な取り扱い（WWWや電子メールによる情報の検索・送受など） ・ ワードプロソフト（Microsoft Word）の基本操作 ・ レポートの書き方とワードプロソフトを用いたレポートの作成 といった点が学習の中心になる。演習では、単にパソコンの操作技能だけでなく、ネットワーク社会におけるマナーやソフトウェアの著作権、論理的なレポートを書くために必要な考え方や、ふさわしい情報の取捨選択といった事柄にまで話題が及ぶことになるであろう。			
学生に対する評価の方法 普段の受講態度(20%程度)、授業内で提出する基本課題(20%程度)とレポート課題(60%程度)で評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーションとPCの基本(受講上の諸注意や講義概要、成績の評価方法などについて説明)。 第2回 PCの基本操作（パーソナルコンピュータについての概論、各種基本操作、タッチタイプ） 第3回 インターネットとメール（インターネットの歴史と発展経緯、ネットワーク社会の光と陰、WWWによる情報の検索、電子メールの送受方法、各種パスワードの変更方法） 第4回 ビジネス文書と基本書式（ビジネス文書とは、基本的な書式機能） 第5回 作表（作表、イラスト、文字装飾） 第6回 描画（図形描画） 第7回 基本課題その1（学習した機能を使い複合文書を作成） 第8回 基本課題その2（同上） 第9回 レポートの書き方1（論理的な文章について） 第10回 レポートの書き方2（大学におけるレポートとは、書き方、レポートフォーマットについて） 第11回 レポート課題の作成1（最近のニュースなどより各自が自由にテーマを決める） 第12回 レポート課題の作成2（インターネットなどを利用した文献調査） 第13回 レポート課題の作成3（章立て・執筆） 第14回 レポート課題の作成4（推敲・添削・修正・提出） 第15回 レポート課題提出（提出）			
使用教科書 なし。授業内でテキストの代わりとなるレジュメを公開するので、各自利用されたし。			
自己学習の内容等アドバイス レポート作成では、図書館や自宅などでの積極的な情報収集が望まれる。			

[授業科目名] 情報処理Ⅱ（表計算）		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 濱島 秀樹
[単位数] 2	[開講期] 1 年次後期	[必修・選択] 選択	備考 子どもケア専攻
授業の到達目標及びテーマ <p>学校あるいは企業内でのパソコン利用形態は、ワープロソフトや電子メールとならび、表集計ソフトの利用頻度が高い。これは、表集計ソフトはデータの管理や計算を得意とし、電卓代わりの簡単な利用から複雑なプログラミングに近い作業まで利用者の工夫とアイディアに応じて様々な活用が可能になるからである。学習した事柄は現在の生活に対して有益になることはもちろんであるが、なによりも演習を通じて学ぶ、問題に対するこのような試行錯誤の取り組みは、将来の自分にも必ずプラスとなるであろう。なぜならば、このような行為の積み重ねこそが、大きな問題解決能力の育成につながるからである。</p>			
授業の概要 <p>本科目は、表集計ソフトを用いて様々なデータ・情報の収集、管理、分析について学ぶ。演習は、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・代表的な表計算ソフト EXCEL の基本操作や機能について ・アンケートによるデータ収集方法について ・実践的な活用法 <p>を学習した後、学生諸君が保健あるいは心理アンケート等を行い、収集したデータを計算・管理できるワークシートの作成を行う。各自が、性質の異なったデータに対して、適切な機能を選択し、それぞれの創意工夫と試行錯誤で完成を目指すことになる。本講義を通じて、そのような問題解決に対する楽しさを体験していただければと考える。</p>			
学生に対する評価の方法 <p>受講態度（15 点程度）、授業内で提出する課題（85 点程度）の完成度で総合的に判断して評価する。課題点は、必修部分が 50 点満点であり、残りは、収集したデータを計算式に実現できた場合、その実現難易度に応じて 35 点を満点とした工夫点として加える。</p>			
授業計画（回数ごとの内容等） <p>第 1 回 オリエンテーション(受講上の諸注意や講義概要、成績の評価方法などについて説明)とデータの入力・編集の基本。 第 2 回 書式、印刷、リンク貼り付けなど基本操作の説明 第 3 回 計算機能についての学習 第 4 回 グラフ機能についての学習 第 5 回 データベース機能についての学習（アンケート作成と集計の方法） 第 6 回 関数の基本、絶対番地、混合番地、IF 関数の基本 第 7 回 IF 関数の入れ子 第 8 回 IF 関数と論理積・論理和 第 9 回 日付処理の方法 第 10 回 検索行列関数の使い方 第 11 回 カレンダーを作る 第 12 回 保健あるいは心理アンケートの作成と実施 表集計ソフトを利用して、アンケート用紙を作成する。 第 13 回 アンケートから得たデータの打ち込みと分析その 1 第 14 回 データの分析その 2 と解釈 第 15 回 計算表と作図を含めたレポート作成（提出）</p>			
使用教科書 <p>なし。参考図書は必要に応じ紹介する。</p>			
自己学習の内容等アドバイス <p>授業内の内容を一人で繰り返し独習するなどの復習を時間外に行うことが、理解の定着には効果的である。</p>			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
情報処理Ⅱ（表計算）		演習	堀尾 正典
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	1年次後期	選択	幼児保育対象
授業の到達目標及びテーマ <p>企業内でのパソコン利用形態は、ワープロソフトや電子メールとならび、表集計ソフトの利用頻度が高い。これは、表集計ソフトはデータの管理や計算を得意とし、電卓代わりの簡単な利用から複雑なプログラミングに近い作業まで利用者の工夫とアイディアに応じて様々な活用が可能になるからである。学習した事柄は現在の生活に対して有益になることはもちろんであるが、なによりも演習を通じて学ぶ、問題に対するこのような試行錯誤の取り組みは、将来の自分にも必ずプラスとなるであろう。なぜならば、このような行為の積み重ねこそが、大きな問題解決能力の育成につながるからである。</p>			
授業の概要 <p>本科目は、表集計ソフトを用いて様々なデータ・情報の収集、管理、分析について学ぶ。演習は、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・代表的な表計算ソフト EXCEL の基本操作や機能について ・アンケートによるデータ収集方法について ・実践的な活用法 <p>を学習した後、学生諸君が今行っている（あるいは、過去に行っていた、または架空のものでもよい）アルバイトに対して、その1ヶ月分の給与を計算・管理できるワークシートの作成を行う。各自が、雇用条件の異なるアルバイトに対して、実現すべき機能を選別し、それぞれの創意工夫と試行錯誤で完成を目指すことになる。本講義を通じて、そのような問題解決に対する楽しさを体験していただければと考える。</p>			
学生に対する評価の方法 <p>受講態度（15点程度）、授業内で提出する課題（85点程度）の完成度で総合的に判断して評価する。課題点は、必修部分が50点満点であり、残りは、複雑な雇用条件を計算式に実現できた場合、その実現難易度に応じて35点を満点とした工夫点として加える。</p>			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション(受講上の諸注意や講義概要、成績の評価方法などについて説明)とデータの入力・編集の基本。 第2回 書式、印刷、リンク貼り付けなど基本操作の説明 第3回 計算機能についての学習 第4回 グラフ機能についての学習 第5回 データベース機能についての学習（アンケート作成と集計の方法） 第6回 関数の基本、絶対番地、混合番地、IF関数の基本 第7回 IF関数の入れ子 第8回 IF関数と論理積・論理和 第9回 日付処理の方法 第10回 検索行列関数の使い方 第11回 カレンダーを作る 第12回 バイト給与計算表の作成1（実現機能の検討） <p>表集計ソフトを利用して、自分自身が現在行っているアルバイトなどに対し、その1ヶ月分の勤怠と給与状況を計算管理できるようにする。作成するものは、実際の学生生活に利用できるようなものであること。</p> 第13回 バイト給与計算表の作成2（必須機能の実現） 第14回 バイト給与計算表の作成3（工夫機能の実現） 第15回 バイト給与計算表の採点（課題提出）			
使用教科書 なし。授業内でテキストの代わりとなるレジュメを公開するので、各自利用されたし。			
自己学習の内容等アドバイス 授業内の内容を一人で繰り返し独習するなどの復習を時間外に行うことが、理解の定着には効果的である。			

[授業科目名] 表計算演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 堀尾 正典
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考 1年次：管理栄養学部 1～4年次：メディア造形学部
授業の到達目標及びテーマ 企業内でのパソコン利用形態は、ワープロソフトや電子メールと並び、表集計ソフトの利用頻度が高い。これは、表集計ソフトはデータの管理や計算を得意とし、電卓代わりの簡単な利用から複雑なプログラミングに近い作業まで利用者の工夫とアイデアに応じて様々な活用が可能になるからである。学習した事柄は現在の生活に対して有益になることはもちろんであるが、なによりも演習を通じて学ぶ、問題に対するこのような試行錯誤の取り組みは、将来の自分にも必ずプラスとなるであろう。なぜならば、このような行為の積み重ねこそが、大きな問題解決能力の育成につながるからである。			
授業の概要 本科目は、表集計ソフトを用いて様々なデータ・情報の収集、管理、分析について学ぶ。演習は、 <ul style="list-style-type: none"> ・代表的な表計算ソフト EXCEL の基本操作や機能について ・アンケートによるデータ収集方法について ・実践的な活用法 を学習した後、学生諸君が今行っている（あるいは、過去に行っていた、または架空のものでもよい）アルバイトに対して、その1ヶ月分の給与を計算・管理できるワークシートの作成を行う。各自が、雇用条件の異なるアルバイトに対して、実現すべき機能を選別し、それぞれの創意工夫と試行錯誤で完成を目指すことになる。本講義を通じて、そのような問題解決の楽しさを体験していただければと考える。			
学生に対する評価の方法 受講態度（15点程度）、授業内で提出する課題（85点程度）の完成度で総合的に判断して評価する。課題点は、必修部分が50点満点であり、残りは、複雑な雇用条件を計算式に実現できた場合、その実現難易度に応じて35点を満点とした工夫点として加える。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション(受講上の諸注意や講義概要、成績の評価方法などについて説明)とデータの入力・編集の基本。 第2回 書式、印刷、リンク貼り付けなど基本操作の説明 第3回 計算機能についての学習 第4回 グラフ機能についての学習 第5回 データベース機能についての学習（アンケート作成と集計の方法） 第6回 関数の基本、絶対番地、混合番地、IF関数の基本 第7回 IF関数の入れ子 第8回 IF関数と論理積・論理和 第9回 日付処理の方法 第10回 検索行列関数の使い方 第11回 カレンダーを作る 第12回 バイト給与計算表の作成1（実現機能の検討） 表集計ソフトを利用して、自分自身が現在行っているアルバイトなどに対し、その1ヶ月分の勤怠と給与状況を計算管理できるようにする。作成するものは、実際の学生生活に利用できるようなものであること。 第13回 バイト給与計算表の作成2（必須機能の実現） 第14回 バイト給与計算表の作成3（工夫機能の実現） 第15回 バイト給与計算表の採点（課題提出）			
使用教科書 なし。授業内でテキストの代わりとなるレジュメを公開するので、各自利用されたし。			
自己学習の内容等アドバイス 授業内の内容を一人で繰り返し独習するなどの復習を時間外に行うことが、理解の定着には効果的である。			

[授業科目名] 表計算演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 古藤 真
[単位数] 2	[開講期] 1 年次後期	[必修・選択] 選択	備考 管理栄養学部
授業の到達目標及びテーマ 到達目標は、マイクロソフトオフィススペシャリスト(MOS) Excel2007 を取得できる範囲、内容、難易度とする。また、学生の到達度によっては、Excel の応用として、モデル化とシミュレーションまで学び、傾向分析やABC分析などの各種のデータ分析手法の基礎と、マクロ(VBA)を利用する応用能力まで発展させる。			
授業の概要 表計算ソフトあるいはスプレッドシートともいう(Microsoft Excel)を用いて、表やグラフの作成、統計処理等における基本知識の再確認と効率的な作成技法について学ぶ。機能や操作方法だけでなく、わかりやすく表現力のある資料を短時間に作成できるように努める。応用能力として、複雑な計算やシミュレーション、データの集計や統合あるいは抽出というデータベース処理の基礎までを学ぶ。			
学生に対する評価の方法 授業への参画態度(20%)、実技試験(60%)、情報リテラシーを身につけさせる自習型の Web テスト(20%)などで総合的に評価する。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 ガイダンスおよび基本操作 受講する上での諸注意や演習の概要、成績の評価方法など 第2回 Excel の基礎知識 データ入力 第3回 Excel 入門 簡単な表の作成 ファイル操作 プリンタの操作 演習室利用の際の諸注意 第4回 ワークシートの活用1 第5回 ワークシートの活用2 第6回 ワークシートの活用3 第7回 グラフ1 第8回 グラフ2 第9回 データベース1 第10回 データベース2 第11回 データベース3 第12回 Excel の応用1 第13回 Excel の応用2 第14回 実技試験1 第15回 実技試験2			
使用教科書 Windows Vista 対応 30 時間でマスター Excel 2007 実況出版編集部編 (実教出版)			
自己学習の内容等アドバイス ソフトウェアの修得には、短期間で集中して演習することも必要です。時間があれば教科書を自習すること。Web テストの URL は、授業の中で連絡します。随時実施すること。			

[授業科目名] ネットワーク論 ／情報処理Ⅲ（ネットワーク論）		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 望月 達彦
[単位数] 2	[開講期] 2～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 1. ネットワークに関する基礎知識と技術を習得する。 2. パソコンをLANやインターネットに接続する時の基本的な問題に対処できる。			
授業の概要 今日のこのようなネットワーク社会においては、コンピュータはLANやインターネットなどに接続されていることは必須となっており、ネットワークに関する幅広い知識や技術が要求されている。本講義では、LANとインターネットを中心としたこれらの基礎知識について学ぶ。			
学生に対する評価の方法 以下に述べる各項目の得点を合計し、評価する。 <ul style="list-style-type: none"> ・試験（80％）：第15回授業時に実施する。 ・授業参画態度（20％）：授業に対する意欲的な取り組みを評価する。 			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス（授業の基本方針と期間の授業計画） 第2回 ネットワークの概要 （LANとWAN、ネットワークを構築するハードウェア、クライアント／サーバ・システム） 第3回 OSI参照モデル（OSI参照モデルの概要） 第4回 TCP/IP①（TCP/IPの概要、TCP/IPとOSI参照モデル） 第5回 TCP/IP②（IPアドレス、サブネットマスク） 第6回 LAN①（LANの特徴、伝送媒体の種類） 第7回 LAN②（LANの種類、プロトコル） 第8回 WAN①（WANの構成とインターフェース、伝送制御） 第9回 WAN②（電気通信サービス） 第10回 インターネット①（インターネットの特徴、接続技術、ドメイン名） 第11回 インターネット②（インターネットのサービス） 第12回 インターネット③（インターネットの接続方法） 第13回 ネットワークセキュリティ（セキュリティの概念、不正アクセス行為と対策、ウイルス） 第14回 ネットワーク関連知識（ネットワーク管理ツール、OS、符号化と伝送技術、関連法規） 第15回 試験			
使用教科書 なし 但し、随時プリント等の補足資料を配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 本講義は、情報処理技術者試験の「ITパスポート試験」と「基本情報技術者試験」の内容を含んでいるので、関連の書籍が参考になる。			

[授業科目名] プレゼンテーション演習 ／情報処理IV(プレゼンテーション)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 内田 君子
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 本科目のテーマは、自分が発見したことや考え、アイデアなどを表現するための道具としてプレゼンテーションソフト（Microsoft PowerPoint）を活かしながら課題探求することである。 特に課題の作成・発表・評価を主体とし、具体的なテーマに基づいたプレゼンテーションの実際を体験しながら、効果的なプレゼンテーションを行うための知識と技術を習得することを到達目標とする。			
授業の概要 ビジネスの現場では、プレゼンテーション能力のある人、クリエイティブな能力のある人の活躍がめざましくなっている。 そこで本科目は、プレゼンテーションの基本的理解、資料の作成法の習得、プレゼンテーションのスキル習得、聴者・評価者としての態度の理解と習得、という四つの側面から展開する。 具体的な授業の進め方として、プレゼンテーションの基礎知識、プレゼンテーションソフトの機能と操作、効果的なプレゼンテーションテクニック、課題の作成・発表・評価等の各項目について学習して行く。			
学生に対する評価の方法 プレゼンテーションの結果(50%)、提出を義務付けた課題(30%)、授業における取組状況 (20%)により評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス（授業概要や受講上の諸注意、評価方法の説明、パソコンリテラシーのチェックなど） 第2回 プレゼンテーションの基礎（プレゼンテーションの概要とPowerPointの基本操作） 第3回 プレゼンテーションデータ作成の基礎1（テキストデータによるスライドの作成） 第4回 プレゼンテーションデータ作成の基礎2（スライドの編集・加工、印刷） 第5回 プレゼンテーションデータ作成の基礎3（図表やグラフの利用） 第6回 プレゼンテーションデータ作成の基礎4（スライドマスタの利用、特殊効果の設定） 第7回 復習問題 第8回 プレゼンテーションの実践1（オリジナルプレゼンテーションのテーマ設定、ストーリーシートの作成） 第9回 プレゼンテーションの実践2（情報の収集、スライドの作成） 第10回 プレゼンテーションの実践3（スライドの作成） 第11回 プレゼンテーションの実践4（シナリオの作成） 第12回 プレゼンテーションの実践5（発表する技術、発表を聞く技術、討論の技術、評価の技術について） 第13回 プレゼンテーションの実践6（リハーサルの実施、チェックシートによる自己評価） 第14回 発表1（プレゼンテーションの実施と聞き手による評価） 第15回 発表2（プレゼンテーションの実施と聞き手による評価）			
使用教科書 実教出版編集部（編）『30時間でマスター プレゼンテーション+PowerPoint2007』実教出版			
自己学習の内容等アドバイス 課題を出すので、その内容を中心に復習してくること。			

[授業科目名] データベース演習 ／情報処理VI (データベース)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 内田 君子
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 本科目のテーマは、データベースシステムを用いて身近な問題を解決することができる実践的な情報処理能力の育成である。 特に実務を想定した例題演習を主体とし、データベースソフト (Microsoft Access) を利用してリレーショナルデータベースを作成し、必要な情報を適切かつ効率的に引き出すための基礎的な知識と技術の習得を到達目標とする。			
授業の概要 研究やビジネスにおける活動を高度化、効率化する上で、データベースの活用は不可欠の要素となっている。特に産業界では、データベース技術を持つ人材のニーズが高まっている。 そこで本科目は、データベースの基本構成および概念の理解、データベースを使用するための概念や方法の理解、データベース設計の基礎の理解、という三つの側面から展開する。 具体的な進め方として、リレーショナルデータベースの仕組み、データベースソフトの機能と操作、データベースの作成 (テーブル)、データの抽出や集計 (クエリ)、データ入力画面の作成 (フォーム)、各種報告書や宛名ラベルの印刷 (レポート) 等の各項目について学習していく。			
学生に対する評価の方法 期末試験 (50%)、提出を義務付けた課題 (30%)、授業における取組状況 (20%) により評価する。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 ガイダンス (授業概要や受講上の諸注意、評価方法の説明、パソコンリテラシーのチェックなど) 第2回 データベースの基礎1 (リレーショナルデータベースとは、データベースソフト Access の基本操作) 第3回 データベースの基礎2 (データの検索、並べ替え、印刷) 第4回 テーブルの作成1 (テーブルとは、データの形式、データの入力) 第5回 テーブルの作成2 (入力支援機能の活用、効率的なデータ入力) 第6回 フォームの作成 (フォームとは、使いやすいフォームの特徴、各要素の編集) 第7回 クエリの作成1 (クエリとは、選択条件の作成) 第8回 クエリの作成2 (集計処理、式ビルダの利用、関数の利用) 第9回 クエリの作成3 (アクションクエリの利用) 第10回 データベースの設計1 (新規テーブルの作成、フォームの設計) 第11回 データベースの設計2 (リレーションシップの設定、データの入力) 第12回 データベースの設計3 (リレーションシップされたクエリの作成と計算) 第13回 レポートの作成 (レポートとは、書式や配置のアレンジ、印刷時の機能) 第14回 全体の復習 第15回 期末試験			
使用教科書 実教出版編集部 (編) 『30時間でマスター Access2007』実教出版			
自己学習の内容等アドバイス 課題を出すので、その内容を中心に復習してくること。			

[授業科目名] プログラミング演習 ／情報処理Ⅶ（プログラミング）		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 堀尾 正典
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ <p>本科目の目的は、プログラミングの基本を学習し、論理的な思考法を身につけることにある。プログラミングの学習は、コンピュータの本格活用を目指す者にとっても重要となるばかりでなく、学ぶことにより、コンピュータの適用範囲を広げ、道具としてのコンピュータの本質的な面白さにも気づくことができるはずである。</p> <p>本講義受講後、直ちに本格的プログラマーへの道が開かれるほど、プログラミングは安易なものではないことは心しておいていただきたいが、将来の挑戦に対する足がかりには十分なるであろう。</p>			
授業の概要 <p>本演習では、プログラミング技法の基礎について学ぶ。学ぶ言語は、プログラミング初心者でも手軽に楽しく学べる点などを配慮して、ホームページに対して動的なアクションを与えることができるJavaScriptを用いる。具体的には、まずホームページ作成の基本を解説した後、Java スクリプトについて学び、プログラミングを行う上での基本的な考え方（逐次、分岐、繰り返し、関数、配列）を、練習問題を通じて学習していく。Java スクリプトをきちんと理解すれば、高度なホームページの作成や複雑なページのソースコードの理解も可能になるだろう。</p> <p>なお、本科目はでは情報の教職課程の履修を目指す学生（映像メディア学科2年以上で教職を選択する者）を優先とし、希望者多数の場合は、抽選となる場合もありうるので注意いただきたい。</p>			
学生に対する評価の方法 <p>普段の受講態度(20%)、授業内で提出する演習課題(80%)を総合的に判断して評価する。</p>			
授業計画（回数ごとの内容等） <p>第1回 オリエンテーション（諸注意）、プログラミング概論（プログラミングとは、機械語とコンパイルについて、各種言語の歴史、特徴など）、エディタの使い方。</p> <p>第2回 HTML と CSS について（ホームページ作成・表示の基本的な仕組みなどについて学習）</p> <p>第3回 主なタグ（HTML 言語を用いて簡単な Web ページの作成）</p> <p>第4回 JavaScript の概要（基本構造、変数、オブジェクト、演算子）</p> <p>第5回 入出力の方法（プロンプト、テキストボックスによるデータの入出力）</p> <p>第6回 分岐1（IF の基本的な使い方）</p> <p>第7回 分岐2（条件分岐の応用）</p> <p>第8回 繰り返し1（繰り返し処理の作り方）</p> <p>第9回 繰り返し2（多重ループ）</p> <p>第10回 関数（関数とは、作り方、呼び出し方）</p> <p>第11回 配列（配列とは、配列の利用方法）</p> <p>第12回 課題作成1（簡単なゲーム作成など、いくつかのプログラムを課題として作成する）</p> <p>第13回 課題作成2</p> <p>第14回 課題作成3</p> <p>第15回 評価</p>			
使用教科書 <p>なし。授業内でテキストの代わりとなるレジュメを公開するので、各自利用されたし。</p>			
自己学習の内容等アドバイス <p>授業内だけでプログラミングの考え方を習得することは、きわめて困難であろう。時間外で、授業中に出された練習問題を各自、繰り返し復習していくことが重要である。</p>			

[授業科目名] システム開発と運用論 ／情報処理Ⅷ（システム開発と運用）		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 望月 達彦
[単位数] 2	[開講期] 2～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 1. 情報システムの開発、運用、管理に関する基本知識や各種技法を理解する。 2. 経験者の指導の下で、情報システムの開発、運用、管理等の実務ができる。			
授業の概要 情報システムの開発、運用、管理に関する知識や技法は、情報システムだけではなく、一般の業務の遂行においても必要であり、それらを踏まえた上で、情報システムの開発業務に関わる場合に必要な、基本知識と各種技法を学ぶ。本講義では、開発技法、ソフトウェアの再利用、開発の準備、要件定義、分析・設計技法、外部設計、内部設計、プログラム設計、プログラミング技法、テスト・レビュー技法、システム構成技術、システムの性能と信頼性の項目に分類し、各々の詳細についてその基本を学習する。			
学生に対する評価の方法 以下に述べる各項目の得点を合計し、評価する。 <ul style="list-style-type: none"> ・試験（80%）：第15回授業時に実施する。 ・授業参画態度（20%）：授業に対する意欲的な取り組みを評価する。 			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 受講ガイダンス（授業の目的、授業計画、評価方法等の受講ガイダンス） 第2回 システム開発の概要（システムの定義、システム化とは、システム開発の概要） 第3回 システム開発（システム開発技法、開発コストモデル） 第4回 ソフトウェアの再利用（サブルーチン、関数、プログラム属性、リバースエンジニアリング） 第5回 システム化開発の準備（準備の手順） 第6回 システム化要件定義（調査方法、分析方法、分析設計図法） 第7回 システム設計技法（プロセス中心設計、データ中心設計、オブジェクト指向設計） 第8回 外部設計 （要件定義の確認、サブシステム分割、画面設計、報告書設計、コード設計、論理データ設計） 第9回 内部設計（プログラム分割、物理データ設計、入出力詳細設計、レビュー） 第10回 プログラム設計（構造化設計、モジュール分割技法、モジュールの独立性、レビュー） 第11回 プログラミング （モジュール設計、構造化プログラミング、プログラミング手法、コーディング、成果物） 第12回 テストとレビュー （ボトムアップアプローチ、テスト手法、デバッグ手法、レビュー手法、テスト管理） 第13回 システム構成技術（システムの構成、処理形態） 第14回 システムの性能と信頼性（稼働率、処理能力、性能評価法、信頼性の指標） 第15回 試験			
使用教科書 なし。 但し、随時プリント等の参考資料を配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 本講義は、情報処理技術者試験の「基本情報技術者試験」の内容を含んでいるので、関連の書籍が参考になる。			

[授業科目名] 管理栄養士概論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 立花 詠子
[単位数] 2	[開講期] 1 年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 管理栄養士にとって必要な「コミュニケーション能力」「プレゼンテーション能力」を身につけるために、自分の意見を持ち、相手と意見交換できるようになることを到達目標とする。また、これから勉強する内容の必要性について理解することも目標とする。			
授業の概要 医学および医療技術の進歩により医療が高度化すると同時に、管理栄養士の役割も大きく変化している。特に管理栄養士は疾病者への栄養指導や個人を対象とした高度な栄養指導が求められるようになった。そこで、管理栄養士とはどういうものか、理解をしてもらうための入門的な講義を行う。また、管理栄養士を目指す者としての自覚を持ってもらうために、各自の食生活や生活状況を見直すことで、現代の栄養問題や栄養指導方法について考えたり、自分の意見を発表したりする。現代社会における管理栄養士の役割について理解をすると共に、将来、どのような職種につくか目標設定の足がかりになるようにする。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度 (30%)、毎回授業内で行うレポート (30%)、期末試験 (40%) 等で、総合的に評価する。期末試験の欠席は認めない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 管理栄養士とは。 どうして管理栄養士になりたいの? (目標設定) 第2回 管理栄養士になるために必要な知識とは? (これから勉強する内容などについて理解を深める) 第3回 栄養士・管理栄養士の歴史 昔と今との違い。 第4回 栄養が足りているとは? (食事のバランスや栄養量の設定) 第5回 現代の栄養・食生活の問題点と「サプリメント」 第6回 「健康」とは? (健康の定義) 第7回 管理栄養士の職場紹介① スポーツ栄養士、食品会社の栄養士、研究教育職の栄養士 第8回 管理栄養士の職場紹介② 給食施設、老人保健施設 第9回 管理栄養士の職場紹介③ 病院 第10回 管理栄養士の職場紹介④ 地域における栄養士・保健所など 第11回 管理栄養士の職場紹介⑤ 栄養教諭 第12回 健康診断・栄養評価① (栄養評価の方法) 第13回 健康診断・栄養評価② (栄養評価の方法) 第14回 まとめ 第15回 試験日			
使用教科書 特になし (随時、プリント等を配布したり、パワーポイント等を使用したりする)			
自己学習の内容等アドバイス 毎日、新聞に目を通したりニュースを見たりして、社会で何が起きているかを理解しておくこと。また、その事柄について、自分の意見を持つようにすること。			

[授業科目名] 基礎化学 I (基礎生化学を含む)		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 間崎 剛
[単位数] 2	[開講期] 1 年次前期	[必修・選択] 必修	備考 基礎化学 II の後に開講する
授業の到達目標及びテーマ 生化学とは、生体内での化学物質の変化(代謝)を学ぶ学問である。また、我々が摂取する食物が製造、加工、調理される過程には、種々の化学変化がともなう。本授業では化学反応や有機化学の基礎を学び、生化学や食品学などの専門基礎科目の学習に必要な基盤を築くことを到達目標とする。さらに授業の後半(基礎生化学)では生体を構成する化学物質について学び、生化学の学習に必要な知識を習得することを到達目標とする。			
授業の概要 この授業では最初に、化学物質の変化、すなわち化学反応を軸にして講義を行う。物質変化にともなうエネルギー変化を理解することが、化学反応を正しく理解するポイントとなる。そして、この授業の中盤では、生体や食物を構成する物質を理解する上で必要な有機化学の基礎を説明する。分子の構造を立体的にイメージすることと、その構造や官能基がもたらす性質と反応性を整理して理解できるかが、ポイントとなる。そして最後に、生体や食物を構成する重要な有機化合物を紹介する。			
学生に対する評価の方法 授業の最終日に実施する試験の得点により、評価する(100%)。試験を欠席した場合は、単位を認めない。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回 化学反応(反応式、反応熱、エントロピー、自由エネルギー、活性化エネルギー、反応速度、触媒) 第2回 化学平衡(可逆反応と不可逆反応、平衡状態、平衡定数(K)、ルシャトリエの原理) 第3回 水素イオン濃度と pH(水のイオン積、水素イオン指数(pH)) 第4回 酸と塩基(定義、価数、規定度、電離度、解離定数(K)、中和反応、塩の加水分解、緩衝作用) 第5回 酸化と還元(定義、酸化数、酸化還元反応) 第6回 酸化剤と還元剤(半反応式、イオン化列、標準酸化還元電位、活性酸素種、抗酸化物質) 第7回 有機化学の一般(命名法、示性式、異性体、光学活性、フィッシャー投影式、共役二重結合、共鳴) 第8回 炭素骨格による分類(鎖式炭化水素、脂環式炭化水素、芳香族炭化水素、複素環式化合物) 第9回 官能基(水酸基、カルボニル基、カルボキシル基、アミノ基、エーテル結合、エステル結合) 第10回 有機化合物の反応(置換、付加、脱離、加水分解、縮合、重合、酸化還元、転移、けん化) 第11回 糖質(構造と特徴、単糖類とその誘導体、二糖類、オリゴ糖類、多糖類、グリコシド結合) 第12回 脂質(脂肪酸、イコサノイド、トリグリセリド、リン脂質、糖脂質、イソプレノイド、ステロイド) 第13回 アミノ酸とタンパク質(種類、構造と特徴、等電点、ペプチド結合、タンパク質の立体構造) 第14回 核酸(ヌクレオシドとヌクレオチド、DNA、RNA、染色体) 第15回 試験			
使用教科書 【参考図書】 「イラストレイテッド ハーパー・生化学」上代淑人(監訳) (株)丸善 「生命科学系のための基礎化学」Mitch Fry, Elizabeth Page(著)、林利彦(訳) (株)東京化学同人 「管理栄養士・栄養士のために アクセス 生体機能成分」五明紀春(他共著) (株)技報堂出版			
自己学習の内容等アドバイス 今回の授業項目を、教科書などを読んで予習しておくこと。その際、専門用語の意味などを調べつつ、内容の理解につとめること。また、授業後は必ず復習し、授業で登場した事項の理解と習得につとめること。			

[授業科目名] 基礎化学Ⅱ		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 間崎 剛
[単位数] 2	[開講期] 1年次前期	[必修・選択] 選択	備考 基礎化学Ⅰの前に開講する
授業の到達目標及びテーマ 我々の体や、我々が摂取する食物は化学物質から構成されている。したがって、食物の役割と体内における変化、生体の仕組みを理解するためには、化学の知識が必要となる。この授業では、本学部の専門基礎科目（基礎化学Ⅰ、基礎生化学など）の学習に必要な化学の基盤を築くことを到達目標とする。			
授業の概要 「化学物質の構造」と「化学物質の状態」を軸にして講義を行う。目では確認できない原子と原子のつながりや分子の振る舞いなどを身近な物質の性質と如何に照らし合わせて考え、理解できるかが、この科目を習熟する上でのポイントとなる。			
学生に対する評価の方法 授業の最終日に実施する試験の得点により、評価する（100%）。試験を欠席した場合は、単位を認めない。なお、本授業は再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 物質の成り立ち（純物質と混合物、単体と化合物） 第2回 原子（構造、構成粒子、周期表、元素記号、同位体、半減期） 第3回 電子（電子配置、基底状態と励起状態、周期律） 第4回 原子の安定化（八電子則、イオン化エネルギー、電子親和力、イオン結合、金属結合） 第5回 共有結合（分子、電子式、共有結合、配位結合） 第6回 混成軌道（混成、 σ 結合と π 結合、分子の形） 第7回 分子間力（電気陰性度、分子の極性、分子間力、種々の結晶） 第8回 物理量（SI単位とSI接頭語、原子量、分子量と式量、物質質量、有効数字） 第9回 状態変化（物質の三態、融解と凝固、蒸発と凝縮、昇華、融点と沸点） 第10回 蒸発と沸騰（摂氏温度と絶対温度、蒸気圧、状態図） 第11回 水の性質（水素結合、表面張力、比熱、比容と密度、溶解） 第12回 溶液（溶質、溶媒、溶解と析出、溶解度、溶解熱、電離、沸点上昇と凝固点降下、浸透圧） 第13回 コロイド（分類、性質、透析、ゾルとゲル） 第14回 絶対量と相対量（密度と比重、質量濃度、モル濃度、パーセント濃度、含有率、溶液の希釈） 第15回 試験			
使用教科書 【教科書】 「食を中心とした化学」北原重登、塚本貞次、野中靖臣、水崎幸一（著）（株）東京化学社 【参考図書】 「視覚でとらえる フォトサイエンス化学図録」数研出版編集部（編集）（株）数研出版			
自己学習の内容等アドバイス 今回の授業項目を、教科書などを読んで予習しておくこと。その際、専門用語の意味などを調べつつ、内容の理解につとめること。また、授業後は必ず復習し、授業で登場した事項の理解と習得につとめること。			

[授業科目名] 生命の科学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 早戸 亮太郎
[単位数] 2	[開講期] 1 年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 本授業の到達目標は、管理栄養士を目指す大学生として必要な生命科学の基礎知識を修得する事である。			
授業の概要 生物は有機分子の集合体であり、一つ一つの構成要素は精巧に作られている。それらが巧妙に相互作用することで人体は恒常性を維持し、その人体を構成する細胞では代謝や増殖、遺伝という生命の特徴を具現化している。これら生物の基本的な事象を理解する。人体の機能と構造の基本を理解するために、生物の生命現象の仕組みについて学ぶ。			
学生に対する評価の方法 出席状況、授業態度、期末試験を総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 生命とは何か、生命の起源 第2回 生命の物質的基盤（糖、脂質） 第3回 生命の物質的基盤（タンパク質） 第4回 生命の物質的基盤（核酸） 第5回 遺伝（染色体、複製、転写、翻訳） 第6回 細胞の構造と機能（生体膜、細胞内小器官） 第7回 細胞内輸送（タンパク質の合成と輸送） 第8回 細胞周期（M 期、G1 期、S 期、G2 期） 第9回 組織の分類（上皮組織、結合組織） 第10回 組織の分類（筋組織） 第11回 組織の分類（神経組織） 第12回 シグナル伝達（細胞内、細胞間シグナル伝達） 第13回 エネルギーと代謝（酵素、呼吸、生体エネルギー） 第14回 ホメオスタシス（体温、血中イオン、pH、フィードバック） 第15回 期末試験			
使用教科書 教科書：理工系のための生物学（坂本順司著、裳華房）、人体の構造と機能および疾病の成り立ち（加藤昌彦著、東京教学社、2008年）の2冊。教科書を併せて、適宜プリントを配布。 参考書：トートラ人体解剖生理学（原書7版、G. J. Tortra 著、佐伯他訳、丸善、2007）。			
自己学習の内容等アドバイス 生体の構造や仕組みには必ず理由がある。この理由を“暗記”ではなく“理解”する。 授業終了後は早めに復習すること。また専門用語が多数出てくるので、それらの意味を理解すること。			

[授業科目名] 食事計画実習		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 岡田 希和子
[単位数] 1	[開講期] 1 年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 食事指導の基礎となる知識を習得し、管理栄養士としての実践活動に欠かせない調理力を養う。			
授業の概要 食事は、私たちの心身の健康を維持・増進させるために欠くことのできない栄養源であるとともに、嗜好を満足させ、人と食事をともにすることによって心の充実をはかることができる場でもある。日常食に視点を置き、食材・食品に関する管理栄養士として必要な基礎知識を習得する。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度(20%)、各授業項目の評価(30%)、レポート(50%)などで総合的に評価を行う。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 食事計画、食品成分表の活用、調理形態と栄養(1-1) 第2回 指定献立実習 1(1-2) 第3回 主材料指定献立作成 1(1-3) 第4回 指定献立実習 2(2-1) 第5回 主材料指定献立作成 2(2-2) 第6回 主材料指定献立実習 1(3-1) 第7回 材料指定献立作成(3-2) 第8回 主材料指定献立実習 2(4-1) 第9回 対象者指定嗜好品献立作成 1(4-2) 第10回 対象者指定嗜好品献立作成 2(4-3) 第11回 材料指定献立実習(5-1) 第12回 対象者指定嗜好品献立実習 1・2(6-1) 第13回 実習室片付け、大掃除(6-2) 第14回 学外授業(7-1) 第15回 レポート(7-2) ※ 電卓持参、白衣、帽子、上履き、手拭タオルを必携すること。			
使用教科書 「食育に役立つ調理学実習」(建帛社) 五訂食品成分表 (女子栄養大学出版)			
自己学習の内容等アドバイス 次回の実習献立について、使用食材の扱い方、作成手順を予習しておくこと。 実施献立の評価を適切に行うこと。			

[授業科目名] 管理栄養士特講（エキサイティング）		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 山中 克己・田村 明
[単位数] 2	[開講期] 1年次	[必修・選択] 選択	備考 前期・後期合わせて15回以上実施
授業の到達目標及びテーマ 大学人としての知識・教養、および管理栄養士としての意識を高めることが目的である。 いろいろな分野を幅広く学び、大きな人間として成長するため、積極的に履修して欲しい。			
授業の概要 学内外を問わず、その道で活躍されておられるプロフェッショナルに、オムニバス形式で講義して頂く。 平成22年度に開講した内容を下に示すが、平成23年度も各界よりお招きして実施する予定である。			
学生に対する評価の方法 講演を聴いたうえでの感想を含めたレポートを毎回提出。講演内容が網羅されているか、それぞれの講演を聴いたうえでの考察などより評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等）			
回数	授 業 内 容	講 師	
1回	言葉のおしゃれ	中日文化センター話し方教室 講師 川嶋郁子先生	
2回	特定健診・特定保健指導 ー制度と実践ー	半田市医師会健康管理センター 瀧塚綾子・榊原洋江先生	
3回	アジアの保健・医療とNGO	アジア保健研修所 中島隆宏先生	
4回	今こそ栄養士の出番	(社)愛知栄養士会 会長 小野寺定幸先生	
5回	医療における管理栄養士・看護の視点から	日進おりど病院 看護部長 石田邦子先生	
6回	有機農法による野菜・米作り	歯科医院 歯科医師 中里博泰先生	
7回	おいしさの科学	味の素(株)広報普及チーム 専任課長 澤 晶子先生	
8回	食もケアなり ー管理栄養士の現場からー	富田浜病院健康増進センター 次長 福田珠美先生	
9回	食育と栄養管理 ー栄養教諭の現場からー	瀬戸市立西陵小学校 栄養教諭 石川桂子先生	
10回	健診結果の見方について	名古屋学芸大学管理栄養学部 教授 北川元二先生	
11回	口腔機能と栄養	愛知学院大学歯学部 教授 中垣晴男先生	
12回	病院における一歩先行く栄養管理	名古屋記念病院 副院長 武内有城先生	
13回	果物と食事バランスガイドで健康を守る	独立行政法人 果樹研究所 専門員 田中敬一先生	
14回	オーストラリアと日本の架け橋に携わって	オーストラリアカトリック大学 ISS 小野尚美先生	
15回	バンガラディッシュの食文化について	愛知がんセンター 研究員 タニア イスラム先生	
16回	映画のウソを愉しむ	名古屋学芸大学メディア造形学部 教授 渡部 眞先生	
使用教科書 教科書は使用しない。適宜、プリント等を配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 予習の必要はないが、この科目専用の講義ノートを準備すること。			

[授業科目名] 解剖生理学 I		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 早戸 亮太郎・日暮 陽子
[単位数] 2	[開講期] 1 年次後期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 本授業の到達目標は、各器官がどのような構造をもち、それを構成する細胞がどのような仕組みを担っているかを知り、人体がどのように内部環境を維持しているか理解することである。			
授業の概要 解剖生理学 I では、人体の構造と機能を把握する。そのためには、器官ごとに細胞や組織のレベルで構造と機能を知るとともに、各器官の位置関係や機能の関連性を理解する。管理栄養士として、健康の維持を考えるうえで、あるいは疾病の予防や治療を考えるうえで基礎となる専門分野の一つである。			
学生に対する評価の方法 出席状況、授業態度、期末試験を総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1 回 細胞生理学：細胞の構造と機能、細胞間相互作用 第 2 回 筋生理学：筋細胞の構造と種類、その収縮機序 第 3 回 神経生理学：膜の興奮性とイオンチャネル、興奮の伝達 第 4 回 感覚生理学：体性感覚、特殊感覚 第 5 回 運動機能：筋と運動ニューロン、脊髄反射と脳幹反射の仕組み 第 6 回 自律機能：自律神経系、視床下部と辺縁系 第 7 回 高次神経機能：脳機能、統合機能 第 8 回 循環系：循環系の基本的性質、心臓の構造と機能 第 9 回 循環系：血液循環、循環系の調節 第 10 回 呼吸器系：呼吸器の構造と機能 第 11 回 呼吸器系：呼吸調節、酸と塩基調節 第 12 回 腎：腎臓の構造と機能 第 13 回 腎：体液量調節、酸と塩基調節 第 14 回 骨格系：骨の構造と機能 第 15 回 期末試験			
使用教科書 教科書：トートラ人体解剖生理学（原書 7 版、G. J. Tortora 著、佐伯他訳、丸善、2007）。 教科書に併せて適宜、プリントを配布。 参考書：標準生理学第 7 版（本郷・広重監修、医学書院、2009）			
自己学習の内容等アドバイス 生体の構造や仕組みには必ず理由がある。この理由を“暗記”ではなく“理解”する。 授業終了後は早めに復習すること。また専門用語が多数出てくるので、それらの意味を理解すること。			

[授業科目名] 解剖生理学Ⅱ		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 岸 恭一
[単位数] 2	[開講期] 1 年次後期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 体液、消化吸収、ホルモン、生殖等について、細胞レベルから、組織、器官、器官系レベルにわたり、構造と機能を関連づけて、正常な人体の仕組みを学ぶ。 それらを通して、生きているとはどういうことか、どのように生命は維持されているのか、環境への適応など、生命現象の機序について理解することを目標とする。			
授業の概要 解剖生理学の講義はⅠとⅡに分けられているが、Ⅱでは植物性機能、すなわち植物と動物に共通して見られる機能を主に学ぶ。すなわち、体液の恒常性、血液、消化器系、内分泌系など、個体の生命の維持に関する機能と、種の保存のための生殖器系などについて理解する。 講義は教科書を中心に、適宜プリントを配布して行う。			
学生に対する評価の方法 原則として筆記による期末試験を用いて評価するが、場合により出席状況、講義中の質問に対する返答なども考慮する。 原則として再評価も筆記試験とする。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1 回 解剖生理学序論、恒常性の維持、人体の構成 第 2 回 体液：体液の区分、電解質、酸塩基平衡 第 3 回 血液 1：血液の働き、血球成分 第 4 回 血液 2：血漿成分、血液凝固、血液型 第 5 回 生体防御機能：リンパ・免疫系、皮膚 第 6 回 消化器系 1：口腔、食道、胃、肝臓 第 7 回 消化器系 2：膵臓、小腸、大腸 第 8 回 消化器系 3：栄養素の消化と吸収 第 9 回 体温の調節：熱の産生と放散、体温調節中枢 第 10 回 内分泌系 1：ホルモンの作用機序、視床下部、下垂体 第 11 回 内分泌系 2：甲状腺、副甲状腺、膵島、副腎 第 12 回 内分泌系 3：その他のホルモン 第 13 回 生殖器系 1：男性生殖器 第 14 回 生殖器系 2：女性生殖器 第 15 回 まとめと期末試験			
使用教科書 「トートラ人体解剖生理学」(佐伯由香他編訳、丸善) 参考書として「標準生理学」(本郷利憲他監修、医学書院)を推奨する。			
自己学習の内容等アドバイス 前期講義科目の「生命科学」と「基礎化学」をよく復習しておくこと。 講義中に理解し、覚えるように心がけること。期末試験前の一夜漬けでは身につかない。 疑問があれば、講義中・講義後を問わず、その都度質問すること。			

[授業科目名] 生化学 I		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 田村 明
[単位数] 2	[開講期] 1 年次後期・2 年次前期	[必修・選択] 必修	備考 1 年次(11 生)：1・2 組対象 2 年次(10 生)：3・4 組対象
授業の到達目標及びテーマ エネルギーを産生するための異化代謝や体構成成分をつくるための同化代謝など、私たちの体内で生じる巧妙なからくりを化学的に理解することが目標である。			
授業の概要 摂取した「ご飯」は、体内で数多くの酵素反応を受けてエネルギーを産生し、最終的には「二酸化炭素」と「水」になって排泄される。このような生体内で生じる様々な物質変化を化学的に理解することは、人間栄養学が中心となる管理栄養士にとって極めて大切である。そこで、講義内容をより深く理解するために、①生化学実験を講義の合い間に織り交ぜる、②復習を兼ねた課題を発表する演習時間を講義時間内に設定する。			
学生に対する評価の方法 演習時間に対する取り組み態度 (30%)、授業中に実施する小テスト (30%) および学期末に実施する試験 (40%) などより総合的に評価する (不合格者には再評価を実施します)。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 はじめに： 授業運営の方法と講義内容の説明 第2回 人体の構造： 人体の構成 (細胞・組織・器官、細胞膜・細胞小器官、細胞の増殖分化) 第3回 生体のエネルギーと代謝 生体のエネルギーとは、エネルギー源と代謝、生体酸化、酸化的リン酸化 第4回 アミノ酸・タンパク質の構造・機能と代謝-1 アミノ酸の種類・特徴、非必須アミノ酸の生合成、アミノ酸代謝、アミノ酸由来生理活性物質 第5回 アミノ酸・タンパク質の構造・機能と代謝-2 生理活性ペプチドの種類・特徴、タンパク質の構造・機能および合成と分解 第6回 酵素反応： 一般的性質、特異的作用、活性の調節、補酵素 第7回 糖質の構造・機能と代謝-1 糖質の化学、糖質の代謝 (解糖系、クエン酸回路) 第8回 糖質の構造・機能と代謝-2 糖質の代謝 (ペントースリン酸回路、グリコーゲンの合成・分解、糖新生) 第9回 脂質の構造・機能と代謝-1 脂質の化学、脂質の代謝 (脂肪酸の生合成、脂肪酸の酸化、トリグリセリドの合成と分解) 第10回 脂質の構造・機能と代謝-2 脂質の代謝 (不飽和脂肪酸とエイコサノイドの代謝、コレステロールの代謝、脂質の体内輸送) 第11回 核酸・遺伝子の構造・機能と代謝-1 DNA, RNA、遺伝子、ゲノムの化学、遺伝子操作、プリン、ピリミジン塩基の代謝 第12回 核酸・遺伝子の構造・機能と代謝-2 DNA の複製、遺伝子発現 (転写、翻訳、翻訳後の調節) 第13回 個体の恒常性とその調節機構-1 細胞間情報伝達、内分泌系と神経系による調節、受容体による情報伝達、細胞内シグナル伝達 第14回 個体の恒常性とその調節機構-2 フィードバック機構、体液・電解質バランス、酸塩基平衡、体温の調節、生体機能の周期性変化 第15回 期末試験とその解説			
使用教科書 人体の構造と機能および疾病の成り立ち (東京教学社) (教育効果を高める目的で、生命の科学、生化学、疾病学ともに同じテキストを、教科書あるいは参考書として使用する。)			
自己学習の内容等アドバイス その気になって、積極的に勉強して下さい。開講時に、いつ、どの分野を学ぶかを詳細に示しますので、その部分を予習すると同時に、必ず履修したその日のうちに復習を行ってください。			

[授業科目名] 基礎生化学実験		[授業方法] 実験	[授業担当者名] 間崎 剛
[単位数] 1	[開講期] 1 年次後期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 実験器具や測定機器の使用目的と操作方法を学び、化学薬品の取り扱いにも慣れることで化学実験の基礎的技術を習得することを到達目標とする。また、種々の実験の意義や原理について考える経験と、実験で得られた結果から考察して結論を導きだす経験を通して、物事を論理的に考えて結論を導きだす力を身につけることも到達目標とする。			
授業の概要 基本的な実験技術と実験器具や測定機器の使用方法を学びつつ「容量分析」、「吸光度分析」、「クロマトグラフィー」、「酵素反応」といった実験手法を学ぶ。さらに、これまでの授業で習った「中和反応」、「溶液の pH」、「緩衝作用」、「脂質」、「アミノ酸とタンパク質」といった事項を実験的に確認することで、より深く理解する。			
学生に対する評価の方法 授業への参画態度 (20%) と、提出物の内容 (80%) により評価する。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第 1 回 実験のための基礎事項 (実験の目的と心構え、危険防止のための注意事項) 第 2 回 実験器具の種類と取り扱い方 (ガラス器具やピペット類の取り扱い方、実験器具の洗浄方法) 第 3 回 試薬の調製方法 (天秤の使い方、試薬の調製方法、溶液の希釈) 第 4 回 試薬の調製 (以降の実験に必要な試薬の調製) 第 5 回 中和滴定① (酸・塩基の当量や規定度の計算、標準規定液の標定) 第 6 回 中和滴定② (食酢に含まれる酢酸の定量、モル濃度や含量の計算) 第 7 回 溶液の pH に関する実験 (pH メーターの原理と使用方法、水素イオン濃度と pH の関係) 第 8 回 緩衝作用に関する実験 (弱酸・弱塩基の電離度、塩の加水分解、緩衝作用) 第 9 回 最大吸収波長の測定 (光の波長と色、光の吸収、吸光度分析、分光光度計の原理と使用方法) 第 10 回 吸光度分析による溶質の定量 (ランベルト・ベールの法則、検量線) 第 11 回 精製酵素による卵黄脂質の分解 (脂質の種類、消化酵素による分解様式、酵素反応、脂質の抽出) 第 12 回 脂質の分離分析 (クロマトグラフィー、脂質の検出方法) 第 13 回 アミノ酸・タンパク質の定性分析 (タンパク質の変性、塩析分画法) 第 14 回 乳タンパク質の溶解度に及ぼす pH の影響 (アミノ酸・タンパク質の等電点、等電点沈殿法) 第 15 回 タンパク質の定量 (タンパク質の定量法)			
使用教科書 【教科書】 初回の授業で、実験書を配布する。 【参考図書】 「演習 溶液の化学と濃度計算 実験・実習の基礎」立屋敷哲 (著) (株)丸善			
自己学習の内容等アドバイス 実験書をあらかじめ読み、次の実験の「目的」、「原理や仕組み」、「実験方法と実験器具の使い方」、「結果の見方」について予習しておくこと。また、実験の当日までに、目的と方法を実験ノートにわかりやすく整理してまとめておくこと。そして、実験の原理や仕組み、結果の見方や考え方についてわからない点は図書館で調べたり、友人や教員に質問したりして、自らわかろうと努力すること。			

[授業科目名] 生化学実験		[授業方法] 実験	[授業担当者名] 田村 明
[単位数] 1	[開講期] 1 年次後期・2 年次前期	[必修・選択] 必修	備考 1 年次(10 生) : 3・4 組対象 2 年次(11 生) : 1・2 組対象
授業の到達目標及びテーマ この実験の目的は、生化学 I で履修した内容を、自ら手を動かし体験することによって理解を深めることである。単に実験操作に追われるのではなく、実験結果の解釈を身につけることを目標とする。			
授業の概要 授業と連動させているので、生化学 I の講義の途中で、すなわちある単元が終了したら、即それに関する実験を行うこととする。実験は 4 人 1 組とし、実験終了後、全員の結果を黒板に記し、全員で考察する。			
学生に対する評価の方法 実験に対する取り組み態度 50%、レポート 20%、試験 30%とする。			
授業計画（回数ごとの内容等） (1) 細胞と細胞膜の構造と機能 第 1 回 細胞膜の調製（馬赤血球より赤血球膜を取り出す） 第 2 回 細胞膜構成成分（脂質とタンパク質）の分離分析 第 3 回 細胞膜の機能（浸透圧と溶血） (2) 酵素反応の性質と補酵素 第 4 回 酵素反応の概説と実験の意義、方法の説明 第 5 回 酵素反応の時間依存性、温度と pH 依存性 第 6 回 補酵素の有無が酵素反応に与える影響 (3) 糖質代謝 第 7 回 糖質代謝の概説と実験の意義、方法の説明 第 8 回 パン酵母を用いての解糖系反応の解析（ピルビン酸生成量より推定） 第 9 回 パン酵母を用いての TCA サイクルの解析（二酸化炭素生成量より推定） (4) タンパク質代謝 第 10 回 アミノ酸代謝の概説と実験の意義、方法の説明 第 11 回 摂取タンパク質の質と量が異なる被験者の尿中成分（尿素、クレアチニン）の測定 第 12 回 被験者の摂取食物と排泄する尿素量より、体内におけるタンパク質代謝を考察する。 (5) 核酸塩基の代謝 第 13 回 核酸の代謝、特にプリン塩基代謝の概説と実験の意義、方法の説明 第 14 回 摂取タンパク質の質と量が異なる被験者の尿中成分（尿酸、クレアチニン）の測定 第 15 回 被験者の摂取食物と排泄する尿酸量より、体内におけるプリン塩基代謝を考察する。			
使用教科書 「イラスト栄養生化学実験」 相原英孝ほか（東京教学社）			
自己学習の内容等アドバイス 実験器具や機械類の使い方は既に基礎生化学実験で理解していると思われるので、操作のみに気を取られるのではなく、それぞれの結果は何を意味し、その結果から何が分かるかを考えて欲しい。			

[授業科目名] 食品学 I		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 和泉 秀彦・山田 千佳子
[単位数] 2	[開講期] 1 年次後期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ ヒトは各種の食品からエネルギーや栄養素を得て成長し、生命を維持することができる。したがって、栄養を理解するには食品学を十分に習得する必要がある。この科目では、食品に含まれる主要成分及び重要な微量成分、また食品成分間の反応および食品の物性について理解することを到達目標とする。			
授業の概要 食品中の各成分（水分・炭水化物・脂質・タンパク質・ビタミン・嗜好成分）の役割、さらに食品の物性・食品成分間の反応および保健機能食品について講義する。			
学生に対する評価の方法 日常の出席状況・受講態度 20%＋期末試験 80%			
授業計画（回数ごとの内容等） 1回 序論 食品および食品学とは 2回 水分 水のかたち、食品中の水の状態、食品の冷凍と加熱 3回 炭水化物 単糖、オリゴ糖、多糖、食物繊維 4回 脂質 脂質の種類、脂質の理化学特性、脂質の酸化、脂質と栄養 5回 タンパク質 アミノ酸、タンパク質の構造、タンパク質の分類と性質、タンパク質の変性 6回 酵素 酵素と酵素反応、食品の品質にかかわる酵素、食品生産および加工への酵素利用 7回 ビタミン ビタミンの分類、脂溶性ビタミン、水溶性ビタミン 8回 無機質 無機質の種類と含量、無機質の主な機能、主な無機質 9回 色の成分 植物性色素、動物性色素 10回 味の成分 味の感覚、味覚成分 11回 香りの成分 匂いの成分、食品の香り、食品の加熱香气 12回 食品の物性 コロイドの科学 13回 食品成分間の反応 アミノカルボニル反応、亜硝酸の反応 14回 保健機能食品 特定保健用食品、栄養機能食品 15回 試験			
使用教科書 加藤保子・中山勉編 食品学 I 食品の化学・物性と機能性 南江堂			
自己学習の内容等アドバイス 食品学 I を学習するためには、基礎化学 I ・ II を十分に復習して理解しておくこと。 教科書の練習問題が解けるようにすること。			

[授業科目名] 食品微生物学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 岸本 満
[単位数] 2	[開講期] 1 年次後期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 食品は第一義的に安全であることが求められる。しかし、食中毒、食品汚染、偽装表示問題など人々を不安にさせる事件があつてを絶たない。管理栄養士は食を通じて人の健康を支えるので食の安全に対する知識、技術を習得することは重要である。特に微生物（ウイルス、細菌、真菌など）による食中毒や経口感染症を予防するための衛生管理は管理栄養士の責任のもと実施されることが多く、微生物やその他食品の危害要因に対して科学的かつ客観的な知識を身に付ける必要がある。このような知識を身に付けた上で、食品を扱うプロとしての考え方、問題を解決の仕方を主体的に考える能力を養うことがこの講義の到達目標である。			
授業の概要 本講義はまず生物学的な危害要因としての微生物の特性を理解し、食中毒や感染症と微生物の関係を学ぶ。さらに化学的ないし物理的的危害要因とそのリスクについて理解し、これら危害要因によるリスクの低減方法について考察する。			
学生に対する評価の方法 試験（60%）、小テスト（40%）、自由レポートなどで総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 食品衛生行政と法規①（食品安全基本法、食品の安全性の考え方ほか） 第2回 食品衛生行政と法規②（食品衛生行政 食品衛生法、食品衛生監視員、関連法規ほか） 第3回 食品の変質①（微生物とは ほか） 第4回 食品の変質②（微生物に関する基本事項 ほか） 第5回 食品の変質③（食品の腐敗・変敗・変質 ほか） 第6回 食中毒①（食中毒の定義と概要、自然毒食中毒）、 第7回 食中毒②（微生物性食中毒その1） 第8回 食中毒③（微生物性食中毒その2） 第9回 食中毒④（ウイルス性食中毒） 第10回 食品による感染症・寄生虫症（消化器感染症、人獣共通感染症、寄生虫症ほか） 第11回 食品中の汚染物質（カビ毒・化学物質・異物） 第12回 食品衛生管理/食品の器具と容器包装（HACCP/包装資材ほか） 第13回 食品添加物 第14回 新しい食品の安全性問題 第15回 試験			
使用教科書 食品の安全性 小塚論編（東京教学社）			
自己学習の内容等アドバイス 自由レポートの作成について： 任意に提出するレポートのこと。復習、発展的学習として行うと良い。提出されたレポートはその内容等を総合評価し、0～5点をつけ、成績に加点する（上限30点）。第2回～14回の授業開始時のみ受付。提出日からみて直近の授業に関連する内容で、表題（テーマ）に沿ったまとまりのあるものでなければならない。それ以外は評価の対象にしない。手書きで、A4サイズのレポート用紙4枚以上（表紙除く）であること。ただし、Wordなどで作成した提出者オリジナルの文書ならば手書きでなくてもよい。このとき、自身のオリジナルの文書であることをページ冒頭に書いておくこと。インターネットの情報をプリントアウトしたものを添付することはできない。新聞、雑誌、学術雑誌等の出版印刷物のコピーを参考資料として添付または貼付できる。レポート表紙に、「第〇回授業（〇月△日）授業レポート」と「レポートの表題（タイトル）」、番号、組、氏名を書き、左上を綴じること。提出を忘れて翌週提出したものは評価の対象にしない。			

[授業科目名] 調理学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 岡田 希和子
[単位数] 2	[開講期] 1年次前期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 食品の調理による物理化学的变化、調理操作等について、食の専門家として理論を実践に役立てる力を習得する。			
授業の概要 調理には、食べ物を安全で衛生的な状態に整え、食べ物の栄養特性を生かし、必要な栄養をバランスよく摂取させるための操作という基本的な役割と、人間の嗜好的欲求の充足という付加的な役割がある。両者を理解した上で、調理学の基礎的理論と実際の調理操作中に生じるさまざまな現象を一体化させて、実践的で役立つ知識を習得する。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度(20%)、最終に実施する試験(80%)などで総合的に評価を行う。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 調理と嗜好性 第2回 調理操作 (調味操作) 第3回 調理操作 (非加熱調理操作、加熱調理操作) 第4回 米の調理性 第5回 小麦粉の調理性 第6回 いも類の調理性、豆類の調理性 第7回 野菜類の調理性、果物類の調理性 第8回 種実類の調理性、きのこ類の調理性、海藻類の調理性、山菜類の調理性 第9回 食肉類の調理性、魚介類の調理性 第10回 鶏卵類の調理性、牛乳・乳製品の調理性 第11回 デンプン、ゲル化材料の調理性 第12回 油脂類の調理性、新食品素材の調理性 第13回 エネルギー源および調理器具 第14回 試験 第15回 試験			
使用教科書 木戸詔子・池田ひろ編 「新食品・栄養科学シリーズ 調理学」(化学同人)			
自己学習の内容等アドバイス 学習した範囲の復習を徹底しておくこと。			

[授業科目名] 調理学実習		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 岡田 希和子
[単位数] 1	[開講期] 1年次前期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 食の専門家として健康で豊かな食生活が実践できるように、食品の調理性を理解し、調理の基本操作を習得する。			
授業の概要 科学的知識に基づいた、日本料理、西洋料理、中国料理等の基本的調理操作技術を習得する。また、大量調理への展開、食品学、食品衛生学との関わりも理解する。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度(20%)、各授業項目の評価(30%)、レポート(50%)などで総合的に評価を行う。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 調理の基礎、調理学実習室使用説明(1-1) 第2回 日本料理(1-2) (白飯、ぶりのつけ焼き、牛肉とじゃがいもの炒め煮 沢煮汁) 第3回 日本料理(2-1) (菜飯、天ぷら) 第4回 日本料理(2-2) (茶碗蒸し、きゅうりとわかめの酢の物、けんちん汁) 第5回 日本料理(3-1) (あじの南蛮漬け、かぼちゃのそぼろ煮) 第6回 日本料理(3-2) (白和え、かき玉汁、水菓子) 第7回 西洋料理(4-1) (ハンバーグ、グラタン) 第8回 西洋料理(4-2) (拍子木切りのサラダ、イタリア風スープ、パバロア) 第9回 西洋料理(5-1) (スパゲティミートソース、コロッケ) 第10回 西洋料理(5-2) (グリーンサラダ、とうもろこしのスープ、カスタードプディング) 第11回 中国料理(6-1) (八宝菜、えびの甘酢あん) 第12回 中国料理(6-2) (肉団子のもち米蒸し 酸辣湯、杏仁豆腐) 第13回 甘味料理(7-1) (パウンドケーキ、鶏且糕、) 第14回 実習室片付け、大掃除(7-2) 第15回 レポート ※ 白衣、帽子、上履き、手拭タオルを必携すること。			
使用教科書 「食育に役立つ調理学実習」(建帛社)			
自己学習の内容等アドバイス 次回の実習献立について、使用食材の扱い方、作成手順を予習しておくこと。			

[授業科目名] 応用栄養学 I		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 藤木 理代																																													
[単位数] 2	[開講期] 1 年次後期	[必修・選択] 必修	備考																																													
授業の到達目標及びテーマ 各ライフステージにおける人体の生理的特徴を理解し、成長やライフスタイルに応じた栄養管理が行えるようになる。																																																
授業の概要 栄養状態の評価方法や栄養アセスメント結果に基づく問題点解決のための栄養ケア計画の立て方を学ぶ。特に成長に伴う人体の生理的機能の変化について理解し、成長に応じた栄養所用量の変化および健全な身体形成のための栄養ケアマネジメントについて学ぶ。																																																
学生に対する評価の方法 試験、出席、レポートで評価する																																																
授業計画 (回数ごとの内容等) <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 5%;">1</td> <td style="width: 35%;">栄養アセスメント</td> <td style="width: 60%;">栄養状態の評価方法</td> </tr> <tr> <td>2</td> <td>栄養ケアプログラムの作成</td> <td>栄養アセスメント結果に基づく問題点解決のための栄養ケア計画</td> </tr> <tr> <td>3</td> <td>エネルギーと必要栄養量</td> <td>エネルギー・各種栄養素の必要量</td> </tr> <tr> <td>4</td> <td>食事計画</td> <td>食品成分表の見方、食事摂取基準に応じた献立作成方法</td> </tr> <tr> <td>5</td> <td>栄養ケアの評価と結果のフィードバック</td> <td>栄養ケア計画の実施による有効性、妥当性、問題点の評価と計画の再構築</td> </tr> <tr> <td>6</td> <td>成長・発達・加齢のライフサイクル</td> <td>成長・発達・加齢のライフサイクルに伴う身体の変化と栄養ケアの変遷</td> </tr> <tr> <td>7</td> <td>幼児期の身体的特徴と疾患</td> <td>幼児期の発育・発達に応じた栄養ケア、幼児の身体的特徴や疾患</td> </tr> <tr> <td>8</td> <td>幼児期の栄養ケア</td> <td>幼児の食事摂取基準に応じた栄養管理、適切な食習慣の形成</td> </tr> <tr> <td>9</td> <td>幼児期の食物アレルギー</td> <td>食物アレルギーの機序と調理における留意点、主なアレルゲンと食品のアレルゲン表示</td> </tr> <tr> <td>10</td> <td>学童の身体的特徴と疾患</td> <td>学童期の発育・発達に応じた栄養ケア、学童の身体的特徴と疾患</td> </tr> <tr> <td>11</td> <td>学童の栄養ケア</td> <td>学童期の食事摂取基準に応じた栄養ケア、適切な生活習慣の形成</td> </tr> <tr> <td>12</td> <td>学校給食 (献立作成・食育)</td> <td>学童期の食事摂取基準に応じた学校給食の献立作成方法、各種食物アレルギーに対応した献立の展開食、学校給食を通じた食育活動</td> </tr> <tr> <td>13</td> <td>思春期の身体的特徴と疾患 栄養ケア</td> <td>思春期の発育・発達に応じた栄養ケア、思春期の身体的特徴と疾患</td> </tr> <tr> <td>14</td> <td>思春期の栄養ケア</td> <td>思春期の食事摂取基準に応じた栄養ケア、適切な生活習慣の形成</td> </tr> <tr> <td>15</td> <td>(期末試験)</td> <td>多肢選択式の試験を実施</td> </tr> </table>				1	栄養アセスメント	栄養状態の評価方法	2	栄養ケアプログラムの作成	栄養アセスメント結果に基づく問題点解決のための栄養ケア計画	3	エネルギーと必要栄養量	エネルギー・各種栄養素の必要量	4	食事計画	食品成分表の見方、食事摂取基準に応じた献立作成方法	5	栄養ケアの評価と結果のフィードバック	栄養ケア計画の実施による有効性、妥当性、問題点の評価と計画の再構築	6	成長・発達・加齢のライフサイクル	成長・発達・加齢のライフサイクルに伴う身体の変化と栄養ケアの変遷	7	幼児期の身体的特徴と疾患	幼児期の発育・発達に応じた栄養ケア、幼児の身体的特徴や疾患	8	幼児期の栄養ケア	幼児の食事摂取基準に応じた栄養管理、適切な食習慣の形成	9	幼児期の食物アレルギー	食物アレルギーの機序と調理における留意点、主なアレルゲンと食品のアレルゲン表示	10	学童の身体的特徴と疾患	学童期の発育・発達に応じた栄養ケア、学童の身体的特徴と疾患	11	学童の栄養ケア	学童期の食事摂取基準に応じた栄養ケア、適切な生活習慣の形成	12	学校給食 (献立作成・食育)	学童期の食事摂取基準に応じた学校給食の献立作成方法、各種食物アレルギーに対応した献立の展開食、学校給食を通じた食育活動	13	思春期の身体的特徴と疾患 栄養ケア	思春期の発育・発達に応じた栄養ケア、思春期の身体的特徴と疾患	14	思春期の栄養ケア	思春期の食事摂取基準に応じた栄養ケア、適切な生活習慣の形成	15	(期末試験)	多肢選択式の試験を実施
1	栄養アセスメント	栄養状態の評価方法																																														
2	栄養ケアプログラムの作成	栄養アセスメント結果に基づく問題点解決のための栄養ケア計画																																														
3	エネルギーと必要栄養量	エネルギー・各種栄養素の必要量																																														
4	食事計画	食品成分表の見方、食事摂取基準に応じた献立作成方法																																														
5	栄養ケアの評価と結果のフィードバック	栄養ケア計画の実施による有効性、妥当性、問題点の評価と計画の再構築																																														
6	成長・発達・加齢のライフサイクル	成長・発達・加齢のライフサイクルに伴う身体の変化と栄養ケアの変遷																																														
7	幼児期の身体的特徴と疾患	幼児期の発育・発達に応じた栄養ケア、幼児の身体的特徴や疾患																																														
8	幼児期の栄養ケア	幼児の食事摂取基準に応じた栄養管理、適切な食習慣の形成																																														
9	幼児期の食物アレルギー	食物アレルギーの機序と調理における留意点、主なアレルゲンと食品のアレルゲン表示																																														
10	学童の身体的特徴と疾患	学童期の発育・発達に応じた栄養ケア、学童の身体的特徴と疾患																																														
11	学童の栄養ケア	学童期の食事摂取基準に応じた栄養ケア、適切な生活習慣の形成																																														
12	学校給食 (献立作成・食育)	学童期の食事摂取基準に応じた学校給食の献立作成方法、各種食物アレルギーに対応した献立の展開食、学校給食を通じた食育活動																																														
13	思春期の身体的特徴と疾患 栄養ケア	思春期の発育・発達に応じた栄養ケア、思春期の身体的特徴と疾患																																														
14	思春期の栄養ケア	思春期の食事摂取基準に応じた栄養ケア、適切な生活習慣の形成																																														
15	(期末試験)	多肢選択式の試験を実施																																														
使用教科書 「応用栄養学」 戸谷誠之、藤田美明、伊藤節子 (南江堂) 「応用栄養学栄養マネジメント演習・実習」 竹中優、土江節子 (医歯薬出版)																																																
自己学習の内容等アドバイス 保育園・小中学校で、実際どのような栄養管理が行われているかの情報を書籍や Web サイトなどで収集し学ぶことで、より実践の場で必要な知識や技術が理解できる。																																																

[授業科目名] 給食管理		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 野村 幸子
[単位数] 2	[開講期] 1年次後期・2年次前期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 管理栄養士として給食を提供している施設の目的を理解し、そのための給食の運営に必要な栄養・食事管理を始めとする各管理業務とその関連性を把握し、効果的・合理的に行うための基礎的知識と技能を習得することを目標とする。			
授業の概要 給食は病院、学校、事業所、福祉施設などの特定給食施設で、それぞれの目的をもって運営されている。この運営を効果的・合理的に行うためには、給食の対象となる人や特定集団を的確に把握した上で栄養・食事管理をはじめ、その他の管理業務が機能的に作用することが必要である。したがって、この科目では、給食の運営に必要な各管理業務の基本とそれぞれの関連について講義する。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度・出席状況（20%）、小テスト（40%）、期末テスト（40%）で総合評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 授業内容の概要、給食の概念：健康増進法と特定給食施設、特定給食施設での管理栄養士の役割 第2回 給食と関係法規、給食システム：給食と関係法規、給食の運営、トータルシステムとサブシステム・小テスト 第3回 栄養・食事管理(1)：栄養・食事管理の目的、給与栄養基準の設定 第4回 栄養・食事管理(2)：食品構成、献立作成 第5回 栄養・食事管理(3)：栄養教育、栄養・食事管理の評価・小テスト 第6回 生産管理(1)：食材料管理の目的、購入と検収・保管、食材料管理の評価 第7回 生産管理(2)：生産管理の目的、生産計画、大量調理 第8回 生産管理(3)：工程管理、提供管理、洗浄・洗淨管理、生産管理の評価・小テスト 第9回 安全・衛生管理(1)：衛生管理の目的、食中毒の発生状況、食中毒発生時の対応 第10回 安全・衛生管理(2)：大量調理施設衛生管理マニュアル、HACCPシステム・小テスト 第11回 安全・衛生管理(3)、危機管理：衛生・安全管理の評価、危機管理・小テスト 第12回 事務管理、各特定給食施設の特色(1)：事務管理の目的、帳票の種類、病院給食 第13回 各特定給食施設の特色(2)：病院給食、福祉施設給食・小テスト 第14回 各特定給食施設の特色(3)：学校給食、事業所給食、その他の給食施設・小テスト 第15回 試験			
使用教科書 木村友子他編著 『改訂 楽しく学ぶ 給食経営管理論』 建帛社			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業範囲を教科書で予習しておくこと。専門用語の意味等を事前に調べておくこと。 日頃から、新聞・テレビ・インターネット等で給食関連の情報に関心を示しておいてください。			

[授業科目名] 公衆衛生学 I		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 須崎 尚
[単位数] 2	[開講期] 2 年次前期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 「健康」の背景を幅広く探求する基礎知識を習得することをテーマとし、質の高い生活を手に入れるにはどうしたらよいかについて科学的に考える姿勢を身につけることを到達目標とする。			
授業の概要 公衆衛生は集団を対象として、疾病の予防、寿命の延長、身体的及び精神的健康の増進を図る科学であり、技術である。公衆衛生学 I では予防医学、保健統計、疫学理論、生活習慣病対策などを対象とする。これらは私達が健康で質の高い生活を営むために必要不可欠の問題であり、国民の健康に深く関わり、大きく貢献する管理栄養士にとって、非常に大切な分野である。			
学生に対する評価の方法 出席状況 (20%)、最終的に行う試験 (80%) 等により総合的に評価する。授業の欠席は減点の対象となる。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第 1 回 健康の概念と予防医学 第 2 回 保健統計 (1) 人口静態統計 第 3 回 保健統計 (2) 人口動態統計 第 4 回 保健統計 (3) 生命表 第 5 回 健康状態の評価 (1) 疫学 第 6 回 健康状態の評価 (2) 疫学と因果関係 第 7 回 健康状態の評価 (3) スクリーニング 第 8 回 生活習慣の現状と対策 (1) 食生活、運動 第 9 回 生活習慣の現状と対策 (2) 喫煙、飲酒 第 10 回 生活習慣の現状と対策 (3) 睡眠、ストレス他 第 11 回 主要疾患の疫学 (1) 悪性新生物 第 12 回 主要疾患の疫学 (2) 循環器疾患 第 13 回 主要疾患の疫学 (3) 代謝疾患、骨・関節疾患 第 14 回 主要疾患の疫学 (4) 歯科、感染症、精神疾患他 第 15 回 試験とまとめ			
使用教科書 社会・環境と健康 田中平三他 (健康・栄養科学シリーズ) 南光堂 国民衛生の動向 2009 年 (厚生指標臨時増刊) 厚生統計協会			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業範囲を教科書、参考書等で事前に調べておくこと。			

[授業科目名] 公衆衛生学Ⅱ		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 岸本 満
[単位数] 2	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 本講義では環境衛生について基礎的な知識を身につけ、環境と健康との関わりを考察する力を身につけること、変化する社会保障（保健・医療・福祉・介護）制度の概要を理解し、私達が健康で質の高い生活を営むための社会保障制度と国民の健康増進の連関を能動的に考察する力を身につけることを到達目標とする。自然科学と社会科学の両側面から社会事象を考究する姿勢を養うことを目的に授業を構成する。			
授業の概要 管理栄養士国家試験出題基準（ガイドライン）に示す「社会・環境と健康」の内容のうち、環境と健康、情報化社会におけるコミュニケーション、医療・福祉・介護・保健（地域、母子、高齢者、産業、学校、国際）制度とその関連法規について学ぶ。			
学生に対する評価の方法 試験（60%）、小テスト（40%）などで総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 環境と健康①（生態系の中の人間 / 地球環境の変化と健康影響） 第2回 環境と健康②（環境衛生 / 暮らしの中での環境） 第3回 情報化社会におけるコミュニケーション（情報収集の方法 / 情報マネジメント） 第4回 保健・医療・福祉・介護の制度①（社会保障の概念） 第5回 保健・医療・福祉・介護の制度②（医療制度） 第6回 保健・医療・福祉・介護の制度③（社会福祉・介護） 第7回 保健・医療・福祉・介護の制度④（保健・医療・福祉・介護の連携） 第8回 地域保健（地域保健の目的と制度 / 地域保健の現状と対策） 第9回 母子保健（母子保健の目的と制度 / 母子保健の現状と対策） 第10回 高齢者保健（高齢者保健の目的と制度 / 高齢者保健の現状と対策） 第11回 産業保健（産業保健の目的と制度 / 産業保健の現状と対策） 第12回 学校保健（学校保健の目的と制度 / 学校保健の現状と対策） 第13回 国際保健（国際保健の目的と国際協力 / 関連機関・組織の役割） 第14回 保健・医療・福祉・介護関連法規（公衆衛生の法的基盤 / 栄養関連法規/一般衛生法規） 第15回 試験			
使用教科書 社会・環境と健康（健康栄養科学シリーズ） 田中平三、辻一郎、吉池信夫編（南江堂） 国民衛生の動向 2010年（厚生指標臨時増刊） 厚生統計協会編（厚生統計協会）			
自己学習の内容等アドバイス 新聞を毎日読むこと。また、自治体が作成し頒布する資料にも関心を持つこと。たとえば、社会保障制度、医療制度、福祉制度、介護保険制度などに関する住民向けの資料に目を通し、関心を持ってこれらの制度を身近な問題と捉えるようになって欲しい。			

[授業科目名] 公衆衛生学実習		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 須崎 尚・岸本 満
[単位数] 1	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 本実習では職域や地域保健活動の中で、管理栄養士として主体的に考察し、社会的で幅広い視野を身に付けることをテーマとし、環境衛生にかかわる様々な測定方法を学び、環境の保全に取り組む技術を習得すると共に、健康管理のための手技として、データの取得の仕方、得られたデータの解析の方法、またそれにもとづく保健教育ができることを到達目標とする。			
授業の概要 公衆衛生学は臨床と基礎の両面を持つ学問であり、健康を追求する技術でもある。対象範囲は疫学、統計、環境衛生、生活習慣病対策、学校保健、高齢者保健等きわめて広い。本実習では温度、湿度、水質、騒音、環境中の微生物等についての実習と口腔機能検査、アンケートの実施方法、統計処理等についての実習を行う。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度（10%）、実習ごとのレポート（90%）により評価を行う。実習であるので、授業の遅刻、欠席は減点となる。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 環境保健1（温熱）：温度、湿度、気流、輻射熱、温熱指数、不快指数の測定 ほか 環境保健2（空気）：粉塵濃度、CO ₂ 、CO、空気中の化学成分、換気量、落下細菌（エアゾール）の測定 ほか 第2回 環境保健3（騒音他）：騒音測定、照度、紫外線強度の測定 ほか 環境保健4（水質）：硝酸、亜硝酸、塩素イオン、硬度、過マンガン酸カリウム消費量、pHの測定、排水/下水のBOD、COD、DO、SSの測定 ほか 第3回 環境微生物1（水質+環境）：一般細菌、大腸菌、大腸菌群（飲料水としての適否を衛生的に判断）の計測、拭き取り法による環境微生物検査 ほか 環境微生物2（手指1）：手指、皮膚の常在菌叢の検索、常在細菌数の測定、常在菌の分離と同定、真菌の培養 ほか 第4回 環境微生物3（手指2+真菌）：前回培養結果のまとめ考察、手指消毒法、消毒薬、手洗い効果測定 ほか 環境微生物4（真菌+消毒法）：真菌の顕鏡・同定、滅菌法と消毒法の実際 ほか 第5回 社会統計 データの種類、記述統計、推測統計について 第6回 調査法 調査票の作成、データの処理、プレゼンテーション 第7回 口腔機能 口腔内細菌、味覚、咀嚼力等の測定 第8回 まとめ 本実習は1コマ90分授業を3コマ実施して1回分とします。第8回は1.5コマでまとめとします。			
使用教科書 実習書を使用			
自己学習の内容等アドバイス 次回の実習内容について、実習書を読み、専門的な用語について調べておくこと			

[授業科目名] 医療福祉概論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 山中 克己・末松 弘行 井形 昭弘・都築 一夫
[単位数] 2	[開講期] 2年次前・後期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 到達目標として臨地実習として現場へ出た時に患者の心の理解ができること、医療を行う側に立った時の職業倫理をみにつけること、この医療行為が全体から見てどの部分を担っているか知る。さらに、病院、福祉施設の実習で困らないように、主な疾病について知識や保健、医療、福祉の中での位置づけ知る。			
授業の概要 管理栄養士は医療や福祉の現場で働く機会が多い。当然、そこでは子供、成人、老人の人間が対象になる。栄養学は科学を基盤として発展してきたが、医療や福祉の場では科学では解決できないものが存在する。これはアートまたは癒しの技術と言えるかも知れない。この科目では先人がたどった医療や福祉の道をふり返り、生命、医療の倫理、QOLの意味などを理解する。さらに疾病の基礎的な病理についても説明する。			
学生に対する評価の方法 試験評価、レポート、出席状況により評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 医療の特殊性 人間の生命、医療とは 第2回 医の倫理と生命倫理 第3回 健康・病気・医学の体系 健康の定義、病気の定義、医学の体系 第4回 病気の原因、身体の変化、診断 第5回 病気の治療とリハビリテーション論 第6回 免疫と食事アレルギー 第7回 小児疾患の特性について 第8回 腎臓疾患と体液管理 第9回 悪性新生物 第10回 うつ病 第11回 心療内科 第12回 高齢者医療 第13回 介護保険 第14回 ターミナルケアと尊厳死 第15回 総合討論 第1回～7回、および第15回は山中、第8、9回は都築、第11回は末松、第12～14回は井形が担当する。			
使用教科書 日野原重明 「医療概論」 医学書院			
自己学習の内容等アドバイス 次回の講義予定の教科書の範囲を読んでおくと、理解が容易になる。			

[授業科目名] 解剖生理学実験		[授業方法] 実験	[授業担当者名] 岸 恭一・日暮 陽子 早戸 亮太郎
[単位数] 1	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 人体ならびに実験動物を対象に、実際に自分で観察し実験して、解剖生理学の講義で学んだ知識を確かめ、理解を深めることを目的とする。研究の基礎的な態度を養い、問題解決能力を身につけることが目標である。 解剖学実験としてラットの解剖と消化器官等の組織観察、生理学実験として呼吸・循環機能、腎機能および感覚機能について実習する。			
授業の概要 人体の構造と生理機能の仕組みをヒトおよび実験動物について観察し、実験することにより理解する。循環器系、呼吸器系、泌尿器系、平滑筋および感覚器系の機能について実験し、またラットの肉眼的解剖を行うとともに消化器系の組織標本を観察する。			
学生に対する評価の方法 実習レポート(60%)、筆記試験試験(30%)、実習態度(10%)等を総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 下記の実験は毎回3コマ(90分×3)続けて行うので、3コマ×8回で合計24コマの実験になる。 この実験は数名の班に分かれて行うが、8回の実験の順序は各班により異なる。 第1回 循環機能: 心電図、血圧・脈拍について、安静時と運動時の比較を行う。 第2回 呼吸機能: スパイロメータを用い、正常時、死腔増加時及び気道抵抗増加時の各種肺気量を測定する。 第3回 腎機能: 水制限時、生理食塩水あるいは脱イオン水摂取時の尿量、尿中Na ⁺ とK ⁺ 濃度を経時的に測定し、体液量と浸透圧の濃度の調節について考察する。 第4回 胃平滑筋収縮: 単離平滑筋を種々の電解質液で灌流し、自律神経作動薬の効果を調べて、平滑筋収縮の調節を理解する。 第5回 感覚機能: 皮膚感覚(2点弁別閾値、知覚点)、視覚(Scheinerの実験、Mariottの実験)、深部感覚(Weberの法則)について、各自を被験者として実験する。 第6回 ラット解剖: 胸部及び腹部内臓、脳を中心に解剖してスケッチし、各臓器の位置関係や形態を理解する。 第7回 組織学実習: 肝臓、腎臓、膵臓、胃、十二指腸についてスケッチし、組織の微細構造を理解する。 第8回 総合討論と実習試験 注意事項を守り、実験器具、動物等を丁寧に扱うこと。 興味をもって、真剣に行い、実験中は整理整頓に心がけ、怪我や事故を防ぐこと。			
使用教科書 解剖生理学研究室・栄養生理学研究室作成の実習書をもとに実験する。 【参考書】 トートラ人体解剖生理学(第7版、丸善)、標準生理学(第7版、医学書院)			
自己学習の内容等アドバイス 各実験項目について、実習書や教科書で予習し、実験内容を理解し、実験手順を把握しておくこと。 毎回の実験終了後、復習してレポートにまとめること。 体の仕組みについて自問自答し、人体機能の巧みさを理解してほしい。			

[授業科目名] 疾病学 I		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 北川 元二
[単位数] 2	[開講期] 2 年次前期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 【一般目標】 管理栄養士として必要な疾病についての専門的知識を広く習得するために、生活習慣病の成因、病態、診断、治療等を理解する。 【到達目標】 1 生活習慣病、内分泌・代謝疾患の病態生理を理解する。 2 疾病の発症や進行を理解する。 3 病態評価や診断、治療の基本的考え方を理解する。			
授業の概要 生活習慣病である、糖尿病、脂質異常症、高血圧、高尿酸血症・痛風、肥満症、骨粗鬆症、メタボリックシンドロームなどについて、疾患の成因、病態生理、診断法、治療法、栄養療法、などについて説明する。			
学生に対する評価の方法 授業への参画態度(10%)と期末試験(90%)の成績を総合的に評価する。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回 糖尿病の病態生理 第2回 糖尿病の診断 第3回 糖尿病の合併症 第4回 糖尿病の治療 第5回 脂質代謝異常の病態生理 第6回 脂質異常症の診断と治療 第7回 高尿酸血症と痛風 第8回 高血圧症 第9回 ホルモンの病態生理 第10回 内分泌疾患の診断と治療 第11回 カルシウム代謝と骨粗鬆症 第12回 肥満症 第13回 メタボリックシンドローム 第14回 授業のまとめ 第15回 期末試験			
使用教科書 参考図書：イラスト 人体の構造と機能および疾病の成り立ち(東京教学社)			
自己学習の内容等アドバイス 糖質代謝、脂質代謝などの生化学の知識、血圧やホルモンに関する解剖学・生理学の知識について1年生で使用した教科書で事前に理解しておくこと			

[授業科目名] 疾病学Ⅱ		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 北川 元二
[単位数] 2	[開講期] 2年次前・後期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 【一般目標】管理栄養士として必要な疾病についての専門的知識を広く習得するために、消化器系、呼吸器系、循環器系、脳神経系の疾患の成因、病態、診断、治療等を理解する 【到達目標】 1 主要な臓器に発生する疾患の病態生理を理解する。 2 疾病の発症や進行を理解する。 3 病態評価や診断、治療の基本的な考え方を理解する。			
授業の概要 消化器病、肝臓病、胆道・膵臓病、心臓病、呼吸器病、腎臓病、脳血管障害、認知症などについて、疾患の成因、病態生理、診断法、治療法、栄養療法、などについて説明する。			
学生に対する評価の方法 授業への参画態度(10%)と期末試験(90%)の成績を総合的に評価する。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回 消化吸収の病態生理学 第2回 消化器病学(胃と腸) 第3回 消化器病学(肝臓) 第4回 消化器病学(胆のう、膵臓、その他) 第5回 心血管系の病態生理 第6回 循環器病学 第7回 呼吸器系の病態生理 第8回 呼吸器病学 第9回 腎の病態生理 第10回 腎・泌尿器病学 第11回 脳、神経系の病態生理学 第12回 脳血管障害、認知症 第13回 神経・精神疾患、摂食障害 第14回 トピックス 第15回 期末試験			
使用教科書 参考図書：イラスト 人体の構造と機能および疾病の成り立ち(東京教学社)			
自己学習の内容等アドバイス 消化・吸収、呼吸、循環、腎、脳神経に関する解剖学・生理学の知識について1年生で使用した教科書で事前に理解しておくこと			

[授業科目名] 疾病学Ⅲ		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 北川 元二
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 【一般目標】管理栄養士として必要な疾病についての専門的知識を広く習得するために、血液疾患、免疫・アレルギー疾患、骨・関節疾患、感染症、がんの成因、病態、診断、治療等を理解する。また、医療の実践に関する医学用語、基礎知識について習得する 【到達目標】 1 医療の現場を理解する。 2 医療を実践する場合の課題と問題点を理解する。 3 エビデンスに基づいた診断、治療の基本的な考え方を理解する。			
授業の概要 血液疾患、免疫・アレルギー疾患、骨・関節疾患、感染症、がんなどについて、疾患の成因、病態生理、診断法、治療法、栄養療法、などについて説明する。			
学生に対する評価の方法 授業への参画態度(10%)と期末試験(90%)の成績を総合的に評価する。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回 血液・造血器・リンパ系の病態生理 第2回 血液疾患 第3回 臨床免疫学 第4回 アレルギー疾患と自己免疫疾患、膠原病 第5回 運動器疾患 第6回 感染症 第7回 悪性腫瘍 第8回 医療の基本(医療倫理、チーム医療、インフォームドコンセント、NST、医療安全、等) 第9回 医療面接、診療の実際、医療倫理 第10回 主な症候と病態 第11回 臨床検査 第12回 治療の種類・方法・適応と薬物療法 第13回 輸液治療、栄養療法 第14回 トピックス 第15回 期末試験			
使用教科書 参考図書：イラスト 人体の構造と機能および疾病の成り立ち(東京教学社)			
自己学習の内容等アドバイス 血液に関する解剖学・生理学の知識および細菌学、免疫学について1年生で使用した教科書で事前に理解しておくこと			

[授業科目名] 食品学Ⅱ		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 和泉 秀彦・山田 千佳子
[単位数] 2	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 食品学Ⅱでは、農産物、畜産物、水産物などの素材を理解した上で、それらに物理的、化学的、生物的な処理を加えて、食品の貯蔵性、嗜好性、可食性、栄養性、経済性などの新しい価値が付与された食品加工について理解することを到達目標とする。			
授業の概要 植物性食品および動物性食品の特性とそれらを利用した加工品について講義するとともに、食品の規格および表示についても解説する。			
学生に対する評価の方法 日常の出席状況・受講態度 20%＋期末試験 80%			
授業計画（回数ごとの内容等） 1回 序論 食品の分類 2回 食品成分表 収載食品と収載成分 3回 植物性食品およびその加工品 穀類 4回 植物性食品およびその加工品 いも類 5回 植物性食品およびその加工品 豆類 6回 植物性食品およびその加工品 種実類 7回 植物性食品およびその加工品 野菜類 8回 植物性食品およびその加工品 果実類 9回 植物性食品およびその加工品 きのこと類・藻類 10回 動物性食品およびその加工品 食肉類 11回 動物性食品およびその加工品 牛乳 12回 動物性食品およびその加工品 卵類 13回 動物性食品およびその加工品と 魚介類 14回 食品の生産・加工・流通 食品の規格、表示 15回 試験			
使用教科書 加藤保子・中山編 食品学Ⅱ 食品の分類と利用法 南江堂			
自己学習の内容等アドバイス 食品学Ⅱを学習するためには、食品学Ⅰを十分に復習して理解しておくこと。 教科書の練習問題が解けるようにすること。			

[授業科目名] 食品学実験 I		[授業方法] 実験	[授業担当者名] 和泉 秀彦・山田 千佳子
[単位数] 1	[開講期] 2 年次後期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 化学実験の初歩から始めて系統的に実験を理解できるように進め、実験により食品分析の理論と技術を習得することをテーマとして、食品に対する理解を深めることを到達目的とする。			
授業の概要 食品中の 5 大栄養素について、その成分の定性・定量およびその成分の分離・検出などの実験を行う。			
学生に対する評価の方法 3 回のレポートにより評価する 授業の欠席は減点対象とする			
授業計画（回数ごとの内容等） I（第 1 回～第 4 回） 食品の一般成分分析 水分・灰分・タンパク質・脂質・炭水化物の測定 II（第 5 回～第 10 回） タンパク質に関する実験 タンパク質の分離・精製 タンパク質の定量 タンパク質の消化実験 SDS-PAGE によるタンパク質純度検定 III（第 11 回～第 14 回） 食品成分に関する実験 ミネラル（リン）の定量 油脂の酸価の測定 抗酸化活性の測定 IV（第 15 回） まとめ			
使用教科書 渡辺達夫・森光康次郎編 健康を考えた食品学実験 アイ・ケイコーポレーション 食品学実験 I・II			
自己学習の内容等アドバイス 実験書を熟読し、どのような実験をするかを予習して理解しておくこと。			

[授業科目名] 調理科学実験		[授業方法] 実験	[授業担当者名] 藤木 理代
[単位数] 1	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 調理に伴う食品の科学的变化について学び、調理方法が食材の味、色、テクスチャー、栄養素の損失に与える影響について実験する。食材の持つ特徴や調理による変化を科学的に理解することで、乳児から高齢者まで多様な対象者の身体機能、趣向性、栄養バランスに応じた調理を実践する力を養成することを授業の到達目標とする。			
授業の概要 調理による食品の科学変化と、人体が持つ味覚・テクスチャー・色覚・臭覚などの感覚器官との相互作用によるおいしさのメカニズムを、官能試験や物性測定により学び比較検討する。			
学生に対する評価の方法 平常点、出席、実習ノートの内容で評価する			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 <u>味覚・テクスチャー</u> ・味の相乗効果・対比効果 ・水、ゾル、ゲルが甘味度に及ぼす影響、官能評価 ・デンプンの糊化による粘度の変化 第2回 <u>視覚</u> ・野菜の加熱処理における pH と色の変化 ・果物の褐変におけるポリフェノールオキシダーゼの作用と防止法 第3回 <u>物性の測定法</u> ・レオメーターを用いた嚥下困難者用食品の測定 <u>加熱による変化</u> ・アスコルビン酸の加熱調理による損失 ・真空調理の利点 ・牛乳の加熱および酸によるカードの形成 第4回 <u>臭覚</u> ・アミノカルボニル反応と匂い ・香ばしさ、こく、酸味、辛味による減塩効果 実践への応用：咀嚼、嚥下機能に応じた調理の工夫 第5回 <u>離乳食の実践</u> ・離乳食から普通食への段階的形態の移行 第6回 <u>高齢者介護食の実践</u> ・嚥下能力のレベル別食形態の展開 第7回 <u>食品の物性を活かしたおやつ作り</u> ・小麦粉のスポンジ状膨化 ・卵の起泡性と泡の安定性 ・卵の凝固とゲル化 第8回 実習のまとめ （第1～7回までは1コマ90分の授業を3コマ実施し、第8回は1.5コマ実施する）			
使用教科書 「健康を考えた調理科学実験」 今井悦子 他（アイ・ケイコーポレーション）			
自己学習の内容等アドバイス 各単元ごとに、予習すべき事柄のキーワードが実習ノートに記載されているので、事前学習しておくことで実験結果に対する理解が深まる。			

[授業科目名] 基礎栄養学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 岸 恭一・池田 彩子
[単位数] 2	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 各栄養素の化学、代謝、機能、必要量等およびエネルギー代謝と遺伝子発現の基本的事項について学び、人間の健康の保持・増進と疾病の予防・治療への応用力を養い、管理栄養士として幅広い分野で活躍できる栄養学の基礎知識を修得することを目標とする。			
授業の概要 序論として、栄養学の歴史を概観し、栄養と健康のかかわりについて学び、栄養学の概念を理解する。 その後、エネルギーおよび各栄養素について、化学、代謝、機能、必要量、栄養状態の評価法、栄養的意義等について学ぶ。 最後に、栄養素による遺伝子発現の調節に関する最新の知識を学ぶ。 講義は教科書と配布プリント等を用いて行う。			
学生に対する評価の方法 原則として期末に行う筆記試験により評価するが、出席状況、質疑応答における態度などを考慮する場合もある。			
授業計画（回数ごとの内容等） 岸 恭一 第1回 栄養の概念、栄養素の定義、栄養学の歴史 第2回 エネルギー代謝1（摂食行動の調節、エネルギー代謝の測定法） 第3回 エネルギー代謝2（基礎代謝、食事性熱産生、安静時代謝、活動時代謝） 第4回 炭水化物の栄養1（分類、消化吸収、体内代謝） 第5回 炭水化物の栄養2（血糖の調節、食物繊維の役割） 第6回 タンパク質の栄養（分類、特徴、代謝、窒素出納、食品タンパク質の栄養評価法） 第7回 アミノ酸の栄養（アミノ酸の種類、代謝、役割、バランス） 池田彩子 第8回 脂質の栄養1（分類、消化吸収、リポタンパク質） 第9回 脂質の栄養2（体内代謝、摂食による代謝調節） 第10回 ビタミンの栄養1（水溶性ビタミンの機能） 第11回 ビタミンの栄養2（脂溶性ビタミンの機能） 第12回 ミネラルの栄養1（多量元素の機能） 第13回 ミネラルの栄養2（微量元素の機能） 第14回 栄養素と遺伝子発現 岸 恭一、池田彩子 第15回 まとめと期末試験			
使用教科書 「人体栄養学の基礎」（小林修平、山本 茂共編、建帛社） その他、適宜プリントを配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 栄養学は基礎科学を応用した学問であり、化学、生化学、生理学、食品学の知識が欠かせないので、それらの教科書や講義を含めて学習すること。			

[授業科目名] 基礎栄養学実習		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 池田 彩子
[単位数] 1	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 牛乳カゼインと小麦グルテンの栄養価の評価を通して、タンパク質の栄養価の考え方とその評価法を理解する。			
授業の概要 食品タンパク質は、一般に、体タンパク質構成に適したアミノ酸組成を持つものが良質であり、食品タンパク質の種類によって栄養価が異なる。タンパク質の栄養評価法には、動物を飼育してその成長や生体成分の分析から判断する生物学的評価法と、化学分析のみから判断する化学的評価法の2つがある。本実習では、これらの評価法を学び、動物性タンパク質である牛乳カゼインと植物性タンパク質である小麦グルテンの栄養価を、ラットを用いて評価する。			
学生に対する評価の方法 出席状況、実習への取り組み方、およびレポートの内容から総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 実習内容の説明・実習上の注意・試薬調製 第2回 実験飼料の作製 第3～5回 実験飼料中の窒素含量の測定 第6回 食品タンパク質のアミノ酸組成にもとづく栄養価 第7回 ラットの飼育・糞尿の採取 第8・9回 ラットの解剖・糞尿の試料調製 第10回 タンパク質効率・正味タンパク質効率 第11～13回 糞尿中の窒素排泄量の測定 第14回 窒素出納・生物価・正味タンパク質利用率 第15回 結果のまとめと考察			
使用教科書 未定			
自己学習の内容等アドバイス 基礎栄養学の「タンパク質の栄養」の内容を十分理解しておくことが望ましい。			

[授業科目名] 応用栄養学Ⅱ		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 藤木 理代
[単位数] 2	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 各ライフステージにおける人体の生理的特徴を理解し、成長やライフスタイルに応じた栄養管理が行えるようになる。			
授業の概要 成長に伴う人体の生理的機能の変化を理解し、成長に応じた栄養所用量および健全な身体形成のための栄養管理について学ぶ。成人期における身体の特徴やライフスタイルについて理解し、生活習慣病の一次予防を目指した栄養管理を学ぶ。			
学生に対する評価の方法 試験、出席、レポートで評価する			
授業計画（回数ごとの内容等）			
1	幼児期の身体的特徴と疾患	幼児の身体的特徴や疾患について	
2	幼児期の栄養ケア	幼児期の食事摂取基準に応じた栄養管理、適切な食習慣の形成	
3	幼児期の食物アレルギー	食物アレルギーの機序と調理における留意点、主なアレルゲンと食品のアレルゲン表示	
4	学童の身体的特徴と疾患	学童の身体的特徴と疾患	
5	学童期の栄養ケア	学童期の食事摂取基準に応じた栄養ケア、適切な生活習慣の形成	
6	学校給食（献立作成・食育）	学童期の食事摂取基準に応じた学校給食の献立作成、各種食物アレルギーに対応した献立の展開、学校給食を通じた食育活動	
7	思春期の身体的特徴と疾患	思春期の身体的特徴と疾患	
8	思春期の栄養ケア	思春期の食事摂取基準に応じた栄養ケア、思春期の適切な生活習慣の形成	
9	成人期の身体的特徴と生活習慣	成人期の身体的特徴、個人の生活スタイル	
10	成人期の身体的特徴と栄養ケア	成人期の身体的特徴、個人の生活スタイルに応じた栄養ケア	
11	成人期の生活習慣病予防のための栄養ケア計画	生活習慣病予防のための栄養ケア計画	
12	成人期の生活習慣病予防のための献立作成	生活習慣病予防のための献立作成方法	
13	更年期の身体的特性と栄養ケア	更年期の身体的特性に応じた栄養ケア	
14	まとめ	学習内容の総まとめ	
15	（期末試験）	多肢選択式の試験を実施	
使用教科書 「応用栄養学」 戸谷誠之、藤田美明、伊藤節子（南江堂） 「応用栄養学栄養マネジメント演習・実習」 竹中優、土江節子（医歯薬出版）			
自己学習の内容等アドバイス 授業内容が多岐にわたるので、事前に用語や項目について調べてくるとより授業内容の理解が深まる。			

[授業科目名] 応用栄養学Ⅲ		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 南 亜紀
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 高齢者栄養 高齢者やその他の状況における特徴を理解し、あらゆる状況に応じた栄養ケアおよび献立作成等を考えることができるように基礎的な知識および技術を習得することをテーマとし、それに基づき自分なりに状況判断ができ、主体的および客観的に考える姿勢を身につけることを到達目標とする。			
授業の概要 高齢者の身体的、精神的変化の特徴を理解し、それに応じた栄養管理や対応策、疾病の予防策について学ぶ。また、体内でのエネルギー代謝の機序や各種栄養素の役割を再確認し、状況に応じた献立作成、栄養指導および生活習慣の指導ができるよう基礎的知識を高め、実践的で役立つ知識を身につける。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度 (30%)、レポート(10%)、小テスト(10%)、最終に実施する試験 (50%)で総合的に評価を行う。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 高齢者栄養を学ぶにあたって (講義ガイダンス、講義内容の概要、授業日程の説明) 高齢期の特徴 (高齢者の現状、老化に伴う身体的、精神的変化) 第2回 高齢期の疾患・病態 第3回 栄養アセスメント① (生化学的検査、検査値の読み方、食事調査法など) 第4回 栄養アセスメント② (高齢期の食事摂取基準、身体活動レベル) 第5回 栄養ケア① (高齢期の食事および調理の形態、献立作成方法) 第6回 栄養ケア② (一般的な高齢期の献立作成、PEM・咀嚼嚥下障害・褥瘡・骨粗鬆症時の献立) 第7回 栄養ケア③ (施設および在宅高齢者の栄養管理) 第8回 栄養ケア④ (高齢者支援制度、QOLの向上、予防と支援、個別栄養指導)・小テスト 第9回 運動・スポーツと栄養① (健康増進と運動の関係、運動の種類と効果) 第10回 運動・スポーツと栄養② (運動と栄養補給) 第11回 環境と栄養① (ストレスと栄養、生体リズムと栄養) 第12回 環境と栄養② (特殊環境と栄養) 第13回 エネルギーと栄養素の必要量① (生活活動とエネルギー代謝) 第14回 エネルギーと栄養素の必要量② (日本人の食事摂取基準) 第15回 試験			
使用教科書 「応用栄養学 改訂第3版」 戸谷誠之、伊藤節子、渡邊令子 (南江堂) 「応用栄養学栄養マネジメント演習・実習」 竹中優、土江節子 (医歯薬出版)			
自己学習の内容等アドバイス 今回の授業範囲を教科書で予習、専門用語の意味等を事前に調べておくことが望ましい。 授業前に前回の授業内容を教科書およびプリント類で再読しておく。 日常生活の中で料理レシピや調理方法、高齢者に関する情報等を気にかけてみる。			

[授業科目名] 栄養教育論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 榎 裕美
[単位数] 2	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 本講義では、栄養教育の目的を理解した上で、管理栄養士として、対象者に応じた栄養教育が実施できるための理論と方法を習得する。			
授業の概要 予防医学の一端を担う管理栄養士は臨床、教育、地域をはじめ様々な環境において、栄養教育の実践が期待されている。本講義では、健康増進対策や疾病予防を中心とした栄養士活動の歴史的背景を認識し、現代社会における栄養教育の重要性を概説する。対象者のニーズに応じた栄養教育プログラムの作成・実施・評価を総合的にマネジメントできる栄養教育の専門家としての教育理論や技術・知識を習得する。			
学生に対する評価の方法 授業時に課するレポート、授業内小テストおよび最終に実施する試験により、総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回：オリエンテーション 第2回：栄養教育の概念、健康政策と栄養教育 第3回：栄養教育の目的 第4回：国民栄養の現状、食の消費動向と栄養教育 第5回：食行動変容と栄養教育① 第6回：食行動変容と栄養教育② 第7回：栄養教育のためのアセスメント 第8回：栄養教育計画 第9回：栄養教育の方法（教材、媒体） 第10回：栄養教育の学習形態 第11回：栄養教育の実施・評価 第12回：ライフステージ別栄養教育① 第13回：ライフステージ別栄養教育② 第14回：食環境づくりにおける栄養教育 第15回：栄養教育の国際的動向、まとめ			
使用教科書 春木敏編 エッセンシャル栄養教育論 第2版（医歯薬出版株式会社）			
自己学習の内容等アドバイス 国家試験科目であることから、各自、終わった単元から要点をまとめておくこと。			

[授業科目名] 栄養カウンセリング		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 山内 恵子
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ アサーションやネゴシエーションなどのコミュニケーション理論についても正しく理解し、管理栄養士に必要なコミュニケーション能力についての認識を深める 到達目標：人間行動や気持ち、感情のメカニズムを理解し、行動変容につなぐための方法、理論を習得する。			
授業の概要 保健医療従事者として、健康や病気をめぐる人間行動について、行動科学的に対する理解を深めていく。また、栄養カウンセリングの理論、カウンセリングの栄養教育への適応・実践など広義について学び、効果的な栄養面談法を紹介する。 さらに、行動科学の基本的概念や行動の捉え方について保健行動科学の基礎理論などの学習を通して、健康や病気をめぐる人間行動について理解を深める。			
学生に対する評価の方法 出席状況、授業における課題の提出、テストの得点により総合評価			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 栄養カウンセリングの必要性 第2回 行動科学の理解 第3回 病気と疾患 第4回 行動療法① 第5回 行動療法② 第6回 食行動変容と栄養教育① 第7回 食行動変容と栄養教育② 第8回 食行動変容と栄養教育③ 第9回 総括 解説を通して重要ポイントの理解を深める 第10回 アサーション理論の理解 第11回 ネゴシエーション理論の理解 第12回 事例の検討 発表 第13回 思春期の問題 第14回 特定保健指導に向けての心理的アプローチ 第15回 テスト			
使用教科書 参考図書 ヘルスカウンセリング事典 日総研出版 生活習慣病とヘルスカウンセリング 日総研出版 自己カウンセリングで本当の自分を発見する本 宗像恒次著 中継出版 カウンセリングマインドを使った栄養指導のための面接技法 発行者 チーム医療 小森まり子、鈴木浄美、橋本佐由理共著			
自己学習の内容等アドバイス 行動療法の理論を理解するのみでなく、さまざまな事例を通して理解し、実践力をつけていく。国試の問題などにも慣れておこう！			

[授業科目名] 栄養カウンセリング演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 山内 恵子
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ カウンセリングマインドやカウンセリング技法を理解する。さらに、学習者が体験学習を通して、カウンセリングマインドで相手に対応することをこと体験することから、コミュニケーションスキル、栄養カウンセリングスキルを習得する。 到達目標：リスニング・アサーション・ネゴシエーションなどのコミュニケーションスキルを身に付け、個別および集団への行動変容アプローチができる能力を身につける。 公認傾聴支援士（リスナー）の資格取得が可能なスキルの習得			
授業の概要 SAT ヘルスカウンセリングは、筑波大学の宗像恒次氏によって構造化された技法である。スピーディに気持ちや感情を明確にし、自分自身の要求に気づく事ができる。 授業ではヘルスカウンセリングの基本技法のほか、健康や病気をめぐる人間行動について理解を深め、人々の保健行動の実践や変容のための支援法を学習する。			
学生に対する評価の方法 出席状況、授業における体験学習や問題解決学習での課題のレポート提出 公認傾聴支援士（リスナー）の資格取得が可能なスキルの習得（実践テープの審査）			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 カウンセリングの学習理解と気付きの体験ワーク 第2回 ヘルスカウンセリングの特徴と効果 第3回 ストレスマネジメント 自己分析 第4回 カウンセラーの態度いろいろ カウンセリングの基本姿勢 第5回 ワークシートでカウンセリングのスキル体験 カウンセリングの手順理解 第6回 行動目標化カウンセリングのモデリングとグループワーク 第7回 行動目標化カウンセリングのモデリングとグループワーク 自己イメージ法 第8回 傾聴技能の習得 ペアワーク 第9回 傾聴技能の習得 ペアワーク 第10回 傾聴技能の習得 ペアワーク 課題実技テープの完成 第11回 コーチングスキルの実践① 第12回 コーチングスキルの実践② 第13回 集団カウンセリングの理論 第14回 病態別アプローチ 行動療法の事例を通して学ぶ① 第15回 病態別アプローチ 行動療法の事例を通して学ぶ②			
使用教科書 エssenシャル 栄養教育論 配付資料（オリジナル教材）を使用 参考図書 栄養指導と患者ケアの実践ヘルスカウンセリング 発行者 医歯薬出版 SAT カウンセリング技法 宗像恒次著 広英社 ヘルスカウンセリング事典 発行者 日総研出版 宗像恒次編			
自己学習の内容等アドバイス カウンセリングは道具であり、スキルである。基本技法や、手法は頭で理解するのではなく、実践、練習を繰り返すことで身に付く。			

[授業科目名] 臨床栄養学 I		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 塚原 丘美
[単位数] 2	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ チーム医療の一員として傷病者に対する栄養管理、診療録の見かたや栄養ケアの記録方法などを学習することで、医療機関における管理栄養士の役割と具体的な栄養管理方法について理解する。			
授業の概要 傷病者に対して適切な栄養管理を行うための方法について総論として学習する。患者の栄養状態や病態の的確な評価（アセスメント）、栄養ケアプランの作成（栄養治療の目標、栄養必要量の決定、栄養補給法の選択）、実施及び評価（モニタリング）などの総合的な栄養ケアマネジメントを学習する。			
学生に対する評価の方法 出席点（5%） 期末に筆記試験（95%）を行なう。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 I 臨床栄養の基礎 1、臨床栄養管理の流れ 第2回 2、臨床栄養とチーム医療 第3回 3、ターミナルケア、QOL 4、診療・保険制度と臨床栄養 第4回 II 臨床での栄養評価 1、栄養スクリーニング（栄養状態判定法） 第5回 2、身体計測 第6回 3、臨床検査 第7回 4、喫食調査 第8回 III 栄養必要量の算定 1、エネルギー 第9回 2、たんぱく質 3、脂質 4、ビタミン、ミネラル 第10回 IV 治療食と栄養補給法 1、一般食（入院食）と治療食 第11回 2、経腸栄養法・経腸栄養剤 第12回 3、経静脈栄養法・輸液 4、保健機能食品 第13回 V 医薬品と飲食物との相互作用 1、医薬品が栄養に及ぼす影響 第14回 2、食品（食事）が薬効に及ぼす影響 第15回 試験			
使用教科書 中坊幸弘、寺本房子編集 「栄養科学シリーズNEXT 臨床栄養管理学総論」 講談社サイエンティフィク			
自己学習の内容等アドバイス 基礎栄養学で学習する各栄養素の役割とその必要量について、また解剖生理学で学習する各栄養素の消化と吸収および代謝について復習しておく。			

[授業科目名] 臨床栄養学Ⅲ		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 立花 詠子
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ それぞれの病態の特徴を理解し、その病気に沿った栄養必要量や補給方法について正しく判断できると同時に、疾病名に関わらずそれぞれの患者別に個々の栄養ケアプランが作成できることを目的とする。			
授業の概要 臨床栄養学Ⅰで学習した基本的な内容を踏まえて、臨床栄養学Ⅲでは、「腎臓疾患」とステージ別で「妊娠時の疾患」及び「更年期障害」、「小児期の疾患」を中心に講義を行う。それぞれの疾患の病態、臨床検査値などのアセスメント、栄養治療計画から食品構成・献立作成まで、具体的な栄養管理を一連の流れに沿って勉強する。			
学生に対する評価の方法 期末の筆記試験（80%）、授業態度（20%）などを総合的に判断する。試験の欠席は認めない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 腎臓疾患とは 第2回 I 糸球体腎炎 II ネフローゼ症候群 第3回 III 急性腎不全・慢性腎不全 第4回 IV 糖尿病腎症 第5回 V 人工透析 第6回 VI 慢性腎臓病（CKD） 第7回 母子栄養（妊産婦栄養）について I 妊娠悪阻 II 肥満 III 妊娠時の貧血 第8回 IV 妊娠高血圧症候群 第9回 V 妊娠糖尿病 第10回 VI 更年期障害 第11回 小児栄養について I 小児消化器疾患（消化不良症、周期性嘔吐症） II 小児肥満 第12回 III 1型糖尿病 第13回 IV 小児腎疾患 第14回 V 先天性代謝異常症 第15回 試験			
使用教科書 栄養科学シリーズNEXT 臨床栄養管理学各論 第2版 寺本房子、市川寛編集（講談社サイエンティフィック）			
自己学習の内容等アドバイス 臨床栄養学Ⅰの内容を復習しておくこと。また、応用栄養学や解剖生理学、基礎栄養学などの内容も併せて予習復習をすること。			

[授業科目名] 公衆栄養学 I		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 徳留 裕子
[単位数] 2	[開講期] 2 年次後期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 1. 公衆栄養と公衆栄養活動を理解する。 2. わが国や諸外国の健康・栄養問題とそれに対応した主な栄養政策について、その背景を踏まえて理解する			
授業の概要 公衆栄養学 I では、わが国の社会環境と健康・栄養問題ならびにその解決のための栄養政策ならびに公衆栄養活動について、資料や事例をあげて進める。			
学生に対する評価の方法 レポート(10%)、期末試験 (75%)、出席状況(10%)、受講態度(5%)などにより総合的に評価する。 原則として再評価も筆記試験とする。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第 1 回 公衆栄養の概念 第 2 回 公衆栄養活動 第 3 回 社会環境と健康・栄養問題 第 4 回 健康状態の変化 第 5 回 食事の変化 第 6 回 食生活・食環境の変化 第 7 回 諸外国の健康・栄養問題の現状と課題 第 8 回 わが国の栄養政策—公衆栄養活動 第 9 回 わが国の栄養政策—公衆栄養関連法規 第 10 回 わが国の栄養政策—国民健康・栄養調査 1 第 11 回 わが国の栄養政策—国民健康・栄養調査 2 第 12 回 わが国の栄養政策—公衆栄養関連の指針、ツール 第 13 回 わが国の栄養政策—国の健康増進基本計画と地方計画 第 14 回 諸外国の健康・栄養問題 第 15 回 まとめと期末試験			
使用教科書 公衆栄養学 田中平三、徳留信寛、伊達ちぐさ、佐々木敏編集 (南江堂)			
自己学習の内容等アドバイス 教科書の予習・資料、教科書の復習が大切です。			

[授業科目名] 給食経営		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 上原 正子
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期・3年次前期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 給食施設で活躍する管理栄養士には、管理者として給食経営全体を効率よく管理できる専門知識とマネジメント力が求められている。この科目では、管理栄養士に望まれる「給食の運営や関連の資源（経費等）を総合的に判断できる能力」や「マーケティングの原理や応用を理解できる」ことを目標とする。			
授業の概要 授業では給食にかかわる経営管理について具体的な事例を挙げて進めていく。経営管理に必要なものとしてマーケティングが重要であり、給食の品質を評価する手順について説明していく。給食経営管理は多業種に共通した管理と特徴をとらえた管理が必要になる。特徴的な施設における給食の運営方法とマネジメントについて基礎的な理解が図られるよう進めていく。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度（20%）、授業内で行うレポートにより各授業内容の理解度・積極性（30%）、試験（50%）などで総合的に評価を行う。試験の欠席は認めない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 給食における経営管理Ⅰ（経営管理の概要、給食のオペレーションシステム） 第2回 給食における経営管理Ⅱ（経営管理の意義、給食経営のアウトソーシング） 第3回 給食経営の組織（組織の意義、組織の原則、組織の形態） 第4回 人事・労務管理Ⅰ（リーダーシップとマネジメント） 第5回 人事・労務管理Ⅱ（従業員の教育・評価） 第6回 経営管理の機能と展開（マネジメントサイクルと経営資源） 第7回 給食におけるマーケティングⅠ（マーケティングの概念と機能） 第8回 給食におけるマーケティングⅡ（マーケティングの調査法と評価） 第9回 給食におけるマーケティングⅢ（給食市場のマーケティング） 第10回 経営と会計Ⅰ（会計の機能と制度会計、財務諸表） 第11回 経営と会計Ⅱ（原価計算と損益分岐点、会計・原価管理の評価） 第12回 給食の品質管理（品質の概念、品質の改善、品質評価） 第13回 危機管理（事故・災害時対策、安全管理対策） 第14回 試験 第15回 まとめ・より良い給食運営のためのオペレーションシステムを考える			
使用教科書 編著者 木村友子/井上明美/宮沢節子 「給食経営管理論」 株式会社 建帛社			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業範囲を教科書で予習しておくこと。専門用語の意味を事前に調べておくこと。			

[授業科目名] 給食管理実習		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 野村 幸子
[単位数] 2	[開講期] 2年次前・後期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 給食を運営する管理の基本のあり方を理解するとともに、管理栄養士としての主体的な自覚をうながすこと目標とする。			
授業の概要 学内の給食施設で学生、教職員を対象に 100 食の昼食を生産（調理）して販売する。そのために、利用者の栄養・食事管理をはじめ、その他給食に関する管理を計画、実施、評価・反省という管理サイクルののびのびとした運営し、効果的に機能させる技術を習得する。			
学生に対する評価の方法 実習科目であるので平常の出席状況（30%）・実習態度（30%）に重点を置き、栄養教育ポスター（グループ点・10%）、個々に提出の献立（20%）、その他提出課題（10%）の総合評価とする。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 授業内容の概要説明、グループわけ（前半4グループ、後半4グループの計8グループ） 栄養・食事管理の計画 第2回 栄養・食事管理の計画（給与栄養目標量設定、食品構成、献立計画） 第3回 前半は献立の作成と試作準備、後半は実習室の掃除 第4回 前半は献立の試作、後半は献立の作成と試作準備 第5回 後半は献立の試作、前半は次週実施の生産・作業管理計画、衛生安全管理の計画 第6回 前半:実習室で、給食を生産（調理）、提供 後半:演習室で、次週実施の生産・作業計画、衛生安全計画 第7回 後半:実習室で、給食を生産（調理）、提供 前半:演習室で、次週実施の生産・作業計画、衛生安全管理の計画と実施した給食の事務整理 第8回 前半:実習室で、給食を生産（調理）・販売 後半:演習室で、次週実施の生産・作業計画、衛生安全管理の計画と実施した給食の事務整理 第9回 後半:実習室で、給食を生産（調理）・販売 前半:演習室で、次週実施の生産・作業計画、衛生安全管理の計画と実施した給食の事務整理 第10回 前半:実習室で、給食を生産（調理）・販売 後半:演習室で、次週実施の生産・作業計画、衛生安全管理の計画と実施した給食の事務整理 第11回 後半:実習室で、給食を生産（調理）・販売 前半:演習室で、次週実施の生産・作業計画、衛生安全管理の計画と実施した給食の事務整理 第12回 前半:実習室で、給食を生産（調理）・販売 後半:演習室で、次週実施の生産・作業計画、衛生安全管理の計画と実施した給食の事務整理 第13回 後半:実習室で、給食を生産（調理）・販売 前半:演習室で、次週実施の生産・作業計画、衛生安全管理の計画と実施した給食の事務整理 第14回 栄養出納表・栄養月報、その他書類の作成 第15回 ABC分析、実施後の評価・反省			
使用教科書 木村友子他編著 『学内給食経営管理実習のためのおいしい食事のコーディネート』第2版 医歯薬出版			
自己学習の内容等アドバイス 献立の作成には、日頃から自宅で積極的に調理を行って、料理の調理法、料理のレパートリーを増やすことが必要です。			

[授業科目名] 科学英語		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 仲川 政宏
[単位数] 2	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 1. 英文専門書、英文科学技術論文を読むことができる。 2. 簡単な英文技術資料、英文発表用資料を作成することができる。 3. 簡単な英文指示書などを訳し、それに基づき実施できる。			
授業の概要 標準的な科学英語の基礎から学習し、興味のある英文科学関係資料を理解することから始め、段階を踏み、英語の読解力、表現力を伸ばす訓練をする。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度(40%)、授業中随時のQ & A(20%)、事前配布の料理や栄養学(どちらか選択)の英語文献の翻訳とまとめのレポート(40%)により総合評価する。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回 講義：授業の進め方：科学英文読解、語彙力向上、英文資料探索、科学ビジネスと英語力 第2回 講義：科学英語の基礎：標準的科学関係語彙 第3回 講義：化学・生化学、生物学の基本単語と英文教科書要訳 第4回 講義：数学・物理の基本単語と英文教科書要訳 第5回 講義・輪読：調理の基本単語とトピックス要訳 第6回 講義・輪読：栄養学の基本単語とトピックス要訳 第7回 講義・輪読：物体、物性、現象を述べる報告書要訳 第8回 ビデオ鑑賞：英語によるメインディッシュ料理番組：要訳 第9回 ビデオ鑑賞：英語によるデザート料理番組：要訳 第10回 講義・輪読：栄養学文献講読1 第11回 講義・輪読：栄養学文献講読2 第12回 講義・輪読：栄養学文献講読3 第13回 講義・輪読：栄養学文献講読4：レポート用英文翻訳出題 第14回 演習：英文発表用資料作成 第15回 演習：科学に関する問い合わせ：FAX、E-mail、手紙作成など： 最終レポート提出			
使用教科書 事前配布資料、プロジェクターで示す資料、ビデオなど。			
自己学習の内容等アドバイス 課外で学生各々が選んだ副読本としての英文栄養学教科書や英文料理教科書を少しずつ読む習慣を付ける。そのなかで、各人が理解できない箇所の構文についてはメールなどで質問を受け、回答をする。			

[授業科目名] 医療福祉実習		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 須崎 千鶴
[単位数] 1	[開講期] 3年次前期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 本授業では体験高齢者疑似体験を通して高齢者の理解、車椅子使用者や視覚障害者等の外出時の介助法、要介護高齢者の介護法、緊急時の対応法など基礎技術の習得をする。			
授業の概要 各援助技術は提供する側、提供される側の両方を体験する。また、基礎を踏まえ応用場面への対応を班単位で協力して考え発表する。応用場面への対応については現場からのアドバイザーの協力もある。			
学生に対する評価の方法 出席日数、毎回提出するレポート内容、実習態度を総合して評価する			
授業計画（回数ごとの内容等） この実習では、1コマ90分の授業を1日に3コマ実施して1回とします。従って、全8回では24コマ分の実習をおこなうこととなります。 第1回 高齢者疑似体験 車椅子介助方法 視覚障害者の介助方法・聴覚障害者とのコミュニケーション 第2回 環境の整備 観察法 寝衣交換とシーツ交換 第3回 移動と移乗 第4回 食事介助 口腔ケア 排泄の介助 第5回 ハンドケア・フットケア 応急手当の方法 第6回 一次救命処置技術 成人・乳児・小児 第7回 緊急時対応事例学習「こんなときどうする」 第8回 まとめ			
使用教科書 冊子を配布する			
自己学習の内容等アドバイス 日常生活の中で使える援助技術は機会があれば積極的に実践してください。			

[授業科目名] 健康管理論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 篠原 力雄・斉藤 邦明
[単位数] 2	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 医療の場では、各種の疾患については、医師の経験および臨床検査データをもとに診断されている。患者の治療にあたっては、適切な薬物治療とともに十分な栄養管理の必要性が高まっている。このような観点から、Nutrition Support Team (NST) が編成され、患者の速やかな治癒・社会復帰への一助として、管理栄養士の役割が従来に比して高まっている。そのために、管理栄養士も疾患の概要および臨床検査データを正しく理解できる能力の養成が必要である。			
授業の概要 代表的な疾患について理解するために、必要かつ基礎的な事項を講義するとともに、その疾患の概要および治療経過を評価するのに必要な臨床検査項目のデータの解釈について講義する。			
学生に対する評価の方法 ミニテスト：前週の講義内容について10分間テストを実施する。 定期試験：ミニテストとは別にすべての講義終了後に総合試験を実施する。 合否はミニテストおよび定期試験の総合点に出席点を加味して60点以上を合格とする。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 医療における臨床検査の必要性とその評価 第2回 血清・血漿中のタンパク質の分類と主要タンパク質・栄養アセスメントタンパク質の臨床的意義 第3回 血中尿素窒素、クレアチン、クレアチニン、尿酸およびアミノ酸の臨床的意義 第4回 糖尿病の病態、診断法および必要な臨床検査とその意義 第5回 メタボリックシンドロームの診断法および栄養指導 第6回 生体内におけるコレステロール、中性脂肪およびリポタンパク質の代謝について 第7回 脂質異常症の臨床検査とその意義 第8回 主要な血清酵素とその臨床的意義 第9回 ビリルビンの代謝経路およびその臨床的意義 第10回 血清電解質および微量金属イオンの臨床的意義 第11回 尿中成分とその臨床的意義 第12回 血液の役割および凝固・線溶系について 第13回 腫瘍マーカーとその臨床的意義 第14回 生体の免疫反応のしくみと疾病について 第15回 総合評価			
使用教科書 「分かりやすい臨床検査医学」廣川書店			
自己学習の内容等アドバイス その日の講義内容については十分に理解し、不明なところをそのままにしないこと			

[授業科目名] 食と環境		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 山本 勝彦
[単位数] 2	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 環境由来の有害化学物質汚染問題を知り、地球上の全ての生命と人類が共存できる環境について食物汚染を通じて再構築をする必要性を学ぶ。			
授業の概要 ①水銀等有害金属汚染 ②ダイオキシンおよびPCB類汚染 ③残留農薬 ④カビ毒（マイコトキシン）汚染 ⑤BSE問題 ⑥動物薬品・資料添加物の残留 ⑦健康食品の人体被害（肥満解消と美容など）等7項目を学ぶ。			
学生に対する評価の方法 レポートによる評価：①出席（30%）、②態度（10%）、③レポート（60%）（講義の第1部から第7部の中から興味を持ったテーマについてレポート（A4版5枚程度）を提出する。内容は講義のまとめ、自己調査研究でもよく、意見、要望、感想、環境食品衛生政策への意見も評価の対象とする。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 第1部 有害金属 第1章 水銀（1）水銀の毒性（2）魚介類水銀汚染濃度 第2回 （3）水俣病（水俣湾、阿賀野川流域）（4）規制値の設定 第3回 第2章 カドミウム（1）環境、食品中濃度（2）イタイイタイ病（3）規制値の設定と国際間の協調問題 第4回 第2部 ダイオキシン類 第1章 ダイオキシン類の性状と毒性 第2章 食品のダイオキシン汚染の実態 第5回 第3章 母乳汚染 第4章 ダイオキシンの曝露評価（1）1日摂取量（2）法的規制 第6回 第3部 残留農薬 第1章 1. 農薬の定義 2. 農薬の歴史と変遷 第7回 第2章 農薬の種類とその作用機序 第3章 食と農薬に関わる法律 第9回 第4章 食品と残留農薬（1）残留基準の設定（2）ポジティブリスト制度導入について 第10回 第4部 マイコトキシン 第1章 概要（1）産生のメカニズム（2）カビ毒の毒性 第11回 第2章 1. 食料の汚染実態 2. カビ毒汚染の特徴 3. 分析上の問題点 4. 汚染の基準 第12回 第5部 動物用医薬品・飼料添加物 第1章 畜産業・水産業の現状 1. 動物用医薬品 2. 畜産動物、養殖魚の疾病と治療 第13回 第2章 動物薬品の法規制 1. 畜産食品の安全確保と残留実態 2. 安全性の評価 第14回 第6部 BSE（牛海面状脳症） 第1章 1. プリオン病の概況 第2章 1. BSEと食品衛生対策（1）検査システム（2）検査結果 第15回 第7部 健康食品人体被害 第1章 1. 痩せ薬の添加された健康食品 2. 肌の美容と食物 第2章 いわゆる健康食品による健康被害			
使用教科書 異なった分野の多くの参考書、文献などから情報を収集したので、それらを抽出した資料としてプリントをその都度配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 我々の食生活において、多くの物質で有益な作用と有害作用のあることを知り、その量的評価の基となる体内及び環境における物質濃度の関係を数量的に評価する見方を養う。			

[授業科目名] 社会保障概論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 本間 明子
[単位数] 2	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 医療保険、社会福祉制度、介護保険など、生活に身近な社会保障制度を学ぶ。 講義では、社会保障制度の変遷や、社会保障の具体的な制度内容を知ること、その全体像に関する理解を深めることを目的とする。			
授業の概要 本科目は、医療・福祉分野で働く人にとって不可欠な科目である。社会保障制度を理解することは、大学を卒業した後、個人の生活面においても必要なことである。本科目は、管理栄養士国家試験の「社会・環境と健康」の分野にあたる。国家試験を意識した授業計画とする。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度(20%)、授業内で行う小レポートや小テストにより各授業項目の理解度(40%)、最終試験(40%)などで総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 インTRODクション：何のために社会保障を学ぶのか？ 第2回 国民生活と社会保障 第3回 社会保障制度の変遷 第4回 わが国の社会保障を取り巻く環境 第5回 社会福祉（1）生活保護 第6回 社会福祉（2）社会福祉制度 第7回 社会福祉（3）社会手当 小テスト実施 第8回 介護保険（1） 第9回 介護保険（2） 第10回 医療保険（1） 第11回 医療保険（2） 第12回 年金 第13回 雇用保険、労働者災害補償 第14回 試験日 第15回 学習のまとめ			
使用教科書 『社会保障入門 2011』社会保障入門編集委員会 中央法規出版 【参考図書】『はじめての社会保障』椋野美智子・田中耕太郎 有斐閣、『社会福祉六法』みらい 他			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業範囲を教科書で予習しておくこと。普段から、ニュースや新聞等で、日本や世界の社会情勢についての情報を得ておくこと。 欠席をした場合は、他の受講者のノート等を写したりして、欠席分の授業内容を理解しておくこと。			

[授業科目名] 介護概論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 須崎 千鶴
[単位数] 2	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 要介護者がその人らしく自立して生活を継続できるように支援するために、介護者として必要な知識や技術についての理解を深める。			
授業の概要 少子高齢社会を迎え、介護を必要とする対象は増加の一途を辿っており、老老介護、認知症者の介護、虐待など深刻な社会問題ともなっている。介護保険制度を含めた社会の現状や生活を支える介護の理念、対象に応じた介護援助、介護施設など介護を取り巻く社会、制度、理念、対象、技術など全体像を学ぶ。			
学生に対する評価の方法 出席状況および試験等を総合して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 高齢障害者の増加と家族介護の問題 第2回 介護とは 第3回 介護を必要とする人間の理解 第4回 保健医療福祉の動向—1960年代から現在まで 第5回 介護保険制度の概要—サービスについて— 第6回 介護保険法に求められるチームアプローチとは 第7回 生活自立を支える介護技法の基本 第8回 医療の継続や医療処置を必要としている人への介護 第9回 認知症高齢者の理解 第10回 認知症高齢者の介護 第11回 成年後見制度とは 第12回 ターミナルケア 第13回 在宅介護と施設介護 第14回 まとめ 第15回 筆記試験			
使用教科書 プリント、VTRを使用する。 参考図書: 社会福祉士養成講座.「介護概論」.中央法規. 2008年			
自己学習の内容等アドバイス 介護制度や介護の現状について新聞等に目を通し問題意識を持って受講してください。			

[授業科目名] 衛生管理システム		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 岸本 満
[単位数] 2	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 食品を安全に製造、調理し提供する仕組みづくりが食品業界で盛んに行われている。ISO22000 の認証、厚生労働省「総合衛生管理製造過程」による認証、地方自治体による認証など、いわゆる第3者機関による認証を取得し、自組織の安全衛生管理のレベル向上と消費者からの信頼を得る努力をしている。病院、福祉、学校、産業給食などの調理施設、食品製造、流通、小売の現場においても食中毒事故対策や食品事故対策に HACCP による衛生管理が導入されている。HACCP プラン作成などの演習を通じて、衛生管理ための実践力を身につけることが目標です。			
授業の概要 この科目は一般的衛生管理のノウハウと「HACCP システム」の概念を学びます。そのうえで衛生管理システム構築の演習を行い、最後に食品安全マネジメントシステム ISO22000 について理解します。 (受講生の人数により授業内容および授業形態を変更することがあります。)			
学生に対する評価の方法 演習レポートの提出 90%以上であること。その他提出物、授業態度などで総合的に評価する。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 ガイダンス / 安全な食品の提供について 第2回 食中毒事故・食品事故の現状を知り問題提起と問題解決の提案をする演習 第3回 飲食に起因する健康被害 (いわゆる危害) 要因物質に関する講義/演習 第4回 食品微生物 (主として食中毒菌) に関する講義/演習 第5回 一般的衛生管理 (1) 講義/演習 従事者の衛生管理、健康管理と手洗い、個人衛生、身だしなみ、衛生意識の向上、手洗い等 第6回 一般的衛生管理 (2) 講義/演習 食品管理、洗浄剤・殺菌剤、食品や冷蔵・冷凍庫の取扱い、洗浄剤・殺菌剤の使い方等 第7回 一般的衛生管理 (3) 講義/演習 食器・器具・機器の洗浄、施設の衛生管理、洗浄・殺菌の仕方、清掃、温度湿度管理、害虫駆除等 第8回 HACCP (1) 講義/演習 HACCP プランの作成① HACCP プランとは 製品説明書作成 第9回 HACCP (2) 講義/演習 HACCP プランの作成② 製造工程図作成 危害リスト作成 第10回 HACCP (3) 講義/演習 HACCP プランの作成③ HACCP 総括表の作成 第11回 HACCP (4) 講義/演習 7原則 1 2 手順、HACCP のまとめ、 第12回 自主衛生管理システム (1) 構築/演習 SSOP 衛生標準作業手順書ほか 第13回 自主衛生管理システム (2) 構築/演習 点検記録表ほか 第14回 食品安全マネジメントシステム ISO22000 (1) 講義 ISO について ISO と HACCP ISO22000 の概要 第15回 食品安全マネジメントシステム ISO22000 (2) 講義 ISO22000 構築のための要件			
使用教科書 管理栄養士のための大量調理施設の衛生管理 幸書房 (矢野俊博、岸本満著)			
自己学習の内容等アドバイス 食品製造、流通、中食、外食、業界、給食サービスなどで食品衛生、食品安全に係る業務に就きたい学生は受講すると良い。食品微生物学の教科書「食品の安全性」(東京教学社)を事前に目を通すと良い。また、「食と健康」、「食品衛生研究」、「HACCP」などの食品衛生に関する専門雑誌に毎月目を通すと良い。			

[授業科目名] 代謝栄養学実験		[授業方法] 実験	[授業担当者名] 池田 彩子
[単位数] 1	[開講期] 3年次前期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 生化学検査を通して、栄養状態や栄養素の代謝変動をあらわす指標となる血液成分および尿中成分について学ぶ。			
授業の概要 動物実験とは異なり、ヒトを対象としてその栄養状態を知るためには、得られる試料に限られる。血液と尿は、対象者の栄養状態を知るための重要な試料である。血液や尿に含まれている成分を分析することによって、肝臓、腎臓をはじめとする様々な臓器の状態を知り、対象者の栄養状態を明らかにすることができる。本実習では、ヒトの血液および尿成分の生化学検査とその評価を行うとともに、それらの代謝変動について理解する。			
学生に対する評価の方法 出席状況、実習への取り組み方、レポートの内容から総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 実習内容の説明・実験上の注意 第2回 試薬調製 第3回 血液成分の生化学検査とその評価1 グルコース 第4・5回 血液成分の生化学検査とその評価2 アスパラギン酸アミノトランスフェラーゼ 第6回 血液成分の生化学検査とその評価3 アラニンアミノトランスフェラーゼ 第7回 血液成分の生化学検査とその評価4 総コレステロール 第8回 血液成分の生化学検査とその評価5 トリアシルグリセロール 第9回 血液成分の生化学検査とその評価6 総タンパク質・アルブミン 第10回 血液成分の生化学検査とその評価7 尿素窒素 第11回 尿検査とその評価1 尿の一般性状（尿量、比重、色調、におい、pH、混濁）・尿試験紙 第12回 尿検査とその評価2 グルコース・タンパク質・ケトン体 第13回 尿検査とその評価3 尿素 第14回 尿検査とその評価4 クレアチニン 第15回 代謝変動についての学習と発表			
使用教科書 青山頼孝・小原郁夫 編著「健康を考えた栄養学実験」アイ・ケイコーポレーションおよびプリント配布			
自己学習の内容等アドバイス 生化学および基礎栄養学の内容を十分理解しておくことが望ましい。			

[授業科目名] 食物とアレルギー		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 和泉 秀彦
[単位数] 2	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ タンパク質は、生体を構成している成分の中で最も多く、様々な機能を果たす。タンパク質の摂取なしに生命の維持は考えられない。しかし、そのタンパク質の摂取によって食物アレルギーは引き起こされることがある。そこで、この講義では、タンパク質の基本的な性質を理解し、食物アレルギーの発症およびその抑制について理解することを到達目標とする。			
授業の概要 食物アレルギーを引き起こすタンパク質の性質、食物アレルギーの発症機構（免疫反応含む）とその抑制（除去、低アレルゲン食品、免疫療法）、さらに食物アレルギーの現況とその対応について講義する。			
学生に対する評価の方法 レポートにより評価する 授業の欠席は減点対象とする			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 アミノ酸 タンパク質の構造 第2回 タンパク質の分類 タンパク質の変性 第3回 タンパク質の消化 第4回 免疫反応1 第5回 免疫反応2 第6回 食物アレルギーの発症機構1 第7回 食物アレルギーの発症機構2 第8回 食物アレルギーの抑制 第9回 食品の低アレルゲン化 第10回 食物アレルギーの疫学、症状と治療（アナフィラキシーを含む） 第11回 食物アレルギーの検査と診断（食物経口負荷試験） 第12回 食品別のアレルギー対応 第13回 栄養指導（食品表示制度） 第14回 免疫寛容の誘導と経口免疫療法 第15回 食物アレルギーの社会的対応 第10～15回の講義では、あいち小児保健医療総合センターアレルギー科の医師が講義協力者として参加			
使用教科書 NPO 法人 アレルギー支援ネットワーク編 アレルギー対応給食 つむぎ出版			
自己学習の内容等アドバイス 食品学ⅠおよびⅡの内容をよく復習しておくこと。			

[授業科目名] 薬理学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 山本 勝彦
[単位数] 2	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 食物が薬理作用に影響すること、また薬物の吸収及び分解・排泄に影響することが明らかになってきた。食生活において無駄の無い有効な薬物の使用について学ぶことは栄養士にとって重要である。また、薬の販売規制の緩和により、薬の登録販売員制度の発足と共に栄養士も職場の一つとして注目されるようになり、薬の基礎的知識を習得する機会としても授業内容に取り込みたい。			
授業の概要 1. 総論：薬物の概念、法制度、与薬方法、体内動態、薬理作用、副作用、複数使用薬物の相乗・拮抗作用 2. 抗感染症薬、抗がん薬、消炎解熱鎮痛薬、高血圧薬、糖尿病薬、高脂血症治療薬、骨阻鬆症治療薬など 3. 食物（栄養成分）と薬物の相互作用 以上3部門について学ぶ。 4. 上記項目について演習問題をプリント配布し理解を深める。			
学生に対する評価の方法 期末試験及び日常の授業出席、聴講意欲評価：①期末試験（原則）または指定テーマによるレポート（60%）、②出席及び日常の質問などによる授業聴講意欲（40%）			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 第1章 授業概要、第2章 薬の基礎知識 1. 薬理学の意味 第2回 2. 医薬品と法令 3. 医薬品の種類 第3回 4. 医薬品の作用 第4回 5. 医薬品の体内動態 6. 医薬品の有害作用 第5回 第3章 疾病治療薬の概要 1. 高血圧及び心疾患治療薬 第6回 2. 抗がん薬 3. 抗感染症薬 4. 抗ウイルス薬 第7回 5. 消化器に作用する薬 6. 抗パーキンソン病薬 第8回 7. 麻薬性鎮痛薬 8. 高脂血症薬 第9回 9. 抗炎症薬・解熱・鎮痛薬、ステロイド剤 10. 痛風治療薬 11. 糖尿病治療薬 12. 骨阻鬆症 第10回 第4、5章 内服薬の吸収 1. 医薬品の吸収・代謝 2. 食事と服薬の時間 第11回 第6章 食事内容と医薬品相互作用 1. 高脂肪食 2. 高タンパク質食 3. 特異動的作用と薬物効果 第12回 第7章 食品中の特定成分と医薬品の相互作用 1. お茶 2. グレープフルーツジュース 3. カルシウム含有食品 第13回 4. アルコール含有食品 5. チラミン含有食品 6. 食物繊維 第14回 第8章 ビタミン含有食品と医薬品 1. ワルファリンと納豆 2. その他の食品中ビタミン 第9章 健康食品と医薬品の相互作用 1. セントジョーンズワート 2. ニンニクなど 第15回 期末試験			
使用教科書 ①医療・福祉介護者も知っておきたい食と薬の相互作用（幸書房） ②関連資料のプリント配布			
自己学習の内容等アドバイス 教科書を予め読んでおく。配布プリント演習問題で理解を深めておく。			

[授業科目名] 食品機能論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 加藤 保子
[単位数] 2	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 食品は人間の生存を支える重要な因子の一つである。従来、食品の品質は主として栄養特性（一次機能）および嗜好特性（二次機能）から評価されてきた。しかし、食品には、“第三の機能”として、生体防御、疾病予防と回復、体調リズム調節、肥満防止、老化の抑制などに関係する生体調節機能成分が含まれている。この授業では、これらの食品の機能性について生体と関連した知識とする。			
授業の概要 まず食品の機能性について理解し、我々の健康維持の観点から問題となる活性酸素、メタボリックシンドロームを含めた生活習慣病などの要因とそれらを防ぐために見いだされている食品成分について、これまでの研究動向から考察する。また関連特定保健用食品についても言及する。			
学生に対する評価の方法 レポートにより評価する(80%)。授業への積極的参加（質問への回答や質問など）(20%)。 届出のない欠席は減点対象とする。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 食品機能学とは、日本発信の機能性食品 第2回 活性酸素とは、体内での発生要因、メリット、デメリット 第3回 抗酸化（体内および食品成分） 第4回 ミネラルの吸収と利用、骨粗鬆症発症要因と機能性食品 第5回 ビタミンの吸収—脂溶性および水溶性ビタミン 第6回 難消化性成分と生体に及ぼす影響 第7回 微生物の生態に及ぼす影響—特に乳酸菌について 第8回 脂肪細胞と健康 第9回 脂質の構造と生体内での働き 第10回 高血圧に関する食品成分開発（酵素阻害物質を中心に） 第11回 糖尿病に関する食品開発 第12回 腸管免疫システム 第13回 食物依存性運動誘発アナフィラキシー 第14回 低アレルゲン化食品と免疫寛容 第15回 神経系に及ぼす機能性成分			
使用教科書 なし。プリントを配布する。			
自己学習の内容等アドバイス コマーシャルなど食品に関しては多くの情報が発信されているが、何故かと疑問を持って接して調べてみてください。			

[授業科目名] 食品学実験Ⅱ		[授業方法] 実験	[授業担当者名] 和泉 秀彦・山田 千佳子
[単位数] 1	[開講期] 3年次前期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 食品衛生および食品加工に関する実験を通して、人体に安全な食品を確保するためのさまざまな方法を理解することを到達目標とする。			
授業の概要 食品添加物の検査、食品の細菌学的検査を通して食品衛生的な実験を行い、さらに保蔵を目的とした二次加工食品について、簡単な機器・器具を利用した実験を通して加工の原理を把握し、加工食品に対する科学的知識を身につける。			
学生に対する評価の方法 3回のレポートにより評価する 授業の欠席は減点対象とする			
授業計画（回数ごとの内容等） I（第1回～第4回） 食品添加物の定量・同定 発色剤の定量 保存料の定量 着色料の分離同定 II（第5回～第8回） 各種微生物の検査 一般生菌数の測定 大腸菌群の測定 大腸菌の測定 黄色ブドウ球菌の検出 細菌のグラム染色 III（第9回～第14回） 食品加工学実験 みかん缶詰の製造（実験）ビタミンCの定量・シロップ（糖）濃度の定量 パンの製造（実験）湿グルテンの測定・小麦タンパク質の定量 豆腐の製造 IV（第15回） まとめ			
使用教科書 清水英世・杉山章編 図解 食品衛生学実験 みらい 食品学実験Ⅰ・Ⅱ			
自己学習の内容等アドバイス 実験書を熟読し、どのような実験をするかを予習して理解しておくこと。			

[授業科目名] 分子栄養学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 池田 彩子
[単位数] 2	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 栄養素の体内での代謝や生体に対する機能およびその発現機構を、分子レベルや細胞レベルで理解する。			
授業の概要 本講義では、はじめに遺伝子発現調節や細胞内情報伝達システムの概要について述べ、次に主要栄養素の代謝や機能の詳細を分子レベルで解説する。			
学生に対する評価の方法 筆記による期末試験、出席状況、質疑応答における態度などを総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 分子栄養学とは 第2回 栄養素による遺伝子発現調節 第3回 細胞内情報伝達システム 第4回 糖質の代謝と機能 1 第5回 糖質の代謝と機能 2 第6回 脂質の代謝と機能 1 第7回 脂質の代謝と機能 2 第8回 タンパク質・アミノ酸の代謝と機能 1 第9回 タンパク質・アミノ酸の代謝と機能 2 第10回 脂溶性ビタミンの代謝と機能 1 第11回 脂溶性ビタミンの代謝と機能 2 第12回 水溶性ビタミンの機能 第13回 ミネラルの機能 第14回 非栄養素と疾病予防 第15回 まとめと期末試験			
使用教科書 未定			
自己学習の内容等アドバイス 生化学および基礎栄養学の内容を十分に理解していることが望ましい。			

[授業科目名] スポーツと栄養		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 大嶋 里美
[単位数] 2	[開講期] 3年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 基本的な栄養素等とその体内における働きを理解した上で、運動・スポーツに必要な栄養素等の量・質・摂取タイミングやその応用方法を学ぶ。			
授業の概要 アスリートや運動や栄養を通してより健康になりたい人へのパフォーマンス向上・健康増進のための運動と栄養の関係についてその基礎知識を学び、どのような栄養摂取が適切であるのか計画判断するための知識や方法を習得することを目的とする。			
学生に対する評価の方法 授業中実施する小テスト及びワークシート（40%）、グループプロジェクト課題（30%）および学期末に実施する試験（30%）などで総合的に評価する。本授業は再評価を実施しません。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 スポーツ栄養学とは 第2回 トレーニングとエネルギー消費 第3回 アスリートの身体組成 第4回 トレーニングとエネルギー補給 第5回 からだづくりとタンパク質摂取 第6回 アスリートに栄養処方をしてみよう（実践） 第7回 骨づくりとカルシウム摂取&Female Athlete Triad・小テスト 第8回 貧血予防と鉄・タンパク質摂取 第9回 コンディショニング維持とビタミン摂取 第10回 運動中の水分補給 第11回 サプリメント&アメリカ栄養事情 第12回 試合前後の食事・栄養指導法（応用編）&まとめ 第13回 試験日 第14回 グループプロジェクトの発表会1 第15回 グループプロジェクトの発表会2			
使用教科書 新版 コンディショニングのスポーツ栄養学 樋口 満 編著（市村出版）			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業範囲を教科書で予習をしておくこと。			

[授業科目名] 応用栄養学実習		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 山内 恵子・後藤 恵子
[単位数] 1	[開講期] 3年次前期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 様々な対象例のプランニングを行うことで、各ライフステージにおける適切な食事内容や量を理解し、テーマに応じた栄養ケアプログラムを計画する力を身につける。			
授業の概要 応用栄養学Ⅰ、ⅡおよびⅢで学習した内容を基に、各ライフステージにおける人体の機能とライフスタイルをふまえた対象例の食生活プランニングを行う。具体的には、対象例の栄養ケアマネジメントの目標設定、適切な栄養量の設定、献立の作成、対象者の社会環境をふまえたアドバイス、フォローアップ方法などを発表、討議する。			
学生に対する評価の方法 出席状況および実習への取組み（50%）、レポート（50%）により、総合的に評価する			
授業計画（回数ごとの内容等） この実習では、1コマ90分の授業を連続3コマで1回とします。したがって、全8回で24コマ分となります。 第1回 オリエンテーション 第2回 離乳期の食事計画 第3回 幼児期の食事計画 第4回 学童期の食事計画 第5回 思春期・成人期の食事計画 第6回 妊産婦の食事計画 第7回 高齢者の食事計画 第8回 スポーツ選手の食事計画			
使用教科書 授業内で資料を配布する 参考図書：日本人の食事摂取基準2010年版（第一出版）、五訂食品成分表（女子栄養大学出版社）			
自己学習の内容等アドバイス それぞれのライフステージの特徴を十分に理解していることが必要。栄養教育で学んだことをしっかり復習すること。共同作業で、作品を仕上げていく協調性、責任力が必要。			

[授業科目名] 栄養教育実習		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 山内 恵子																																
[単位数] 1	[開講期] 3年次前期	[必修・選択] 必修	備考																																
授業の到達目標及びテーマ 行動科学に基づいた栄養教育のスキル習得 個別面談力・集団アプローチ、支援力の育成 到達目標：管理栄養士の栄養教育業務に必要な基本的スキルを身につけ、教材、媒体の作成から、行動変容に支援する個別・集団でのアプローチができるようになること。																																			
授業の概要 栄養教育は、乳幼児から高齢者までのライフステージを通じ、健康者、半健康者、患者などのレベルに応じた対応が、地域、職域、教育、臨床などあらゆる分野で展開される。管理栄養士や栄養士の配属されているところでは、必要に応じ、個別相談や集団指導、教室などの教育、実習、演習が実施されているが、実施状況はまだ十分とはいえない。 食事の提供そのものが栄養教育の媒体には違いないが、何れのステージ、場においても、より健康度を上げるための方法について、問題点の把握、教育の目的設定、計画、実施、評価にいたるまでのプロセスを実習しながら技術を体得する。																																			
学生に対する評価の方法 出席状況、授業における学習態度や実習・演習での課題の提出、グループワークの評価点より総合評価																																			
授業計画（回数ごとの内容等） <table border="0"> <tr> <td>第1回</td> <td>栄養教育のマネージメント 個別面談の実際</td> <td>面接に必要なアセスメント 栄養カウンセリングの実際</td> <td>簡単な栄養計算法</td> </tr> <tr> <td>第2回</td> <td>生活習慣改善の実際</td> <td>生活習慣改善に役立つツール 運動指導の体験</td> <td></td> </tr> <tr> <td>第3回</td> <td>集団指導の方法と実際 ステージ別教育プラン</td> <td>行動療法を活用した教室開催 高齢者の食事 介護食・嚥下食の理解</td> <td></td> </tr> <tr> <td>第4回</td> <td>病態別食事療法の実際 ステージ別教育プラン</td> <td>慢性疾患患者の食事 指導法 糖尿病・メタボの最新指導法の実際</td> <td></td> </tr> <tr> <td>第5回</td> <td>ステージ別教育プラン 病態別食事療法の実際1</td> <td>幼児期から学童期 媒体製作の準備 低タンパク食材の扱い 調理実習</td> <td></td> </tr> <tr> <td>第6回</td> <td>教育媒体の活用・指導法の実際1 病態別食事療法の実際2</td> <td>成人期・慢性疾患患者対応 糖尿病教室開催の体験 調理実習</td> <td>面談の実際</td> </tr> <tr> <td>第7回</td> <td>ステージ別教育プラン4 ステージ別教育プラン5</td> <td>幼児期から学童期 媒体製作発表 行動療法を生かした媒体製作発表</td> <td></td> </tr> <tr> <td>第8回</td> <td>ステージ別教育プラン6</td> <td>特定保健指導 教材製作</td> <td></td> </tr> </table>				第1回	栄養教育のマネージメント 個別面談の実際	面接に必要なアセスメント 栄養カウンセリングの実際	簡単な栄養計算法	第2回	生活習慣改善の実際	生活習慣改善に役立つツール 運動指導の体験		第3回	集団指導の方法と実際 ステージ別教育プラン	行動療法を活用した教室開催 高齢者の食事 介護食・嚥下食の理解		第4回	病態別食事療法の実際 ステージ別教育プラン	慢性疾患患者の食事 指導法 糖尿病・メタボの最新指導法の実際		第5回	ステージ別教育プラン 病態別食事療法の実際1	幼児期から学童期 媒体製作の準備 低タンパク食材の扱い 調理実習		第6回	教育媒体の活用・指導法の実際1 病態別食事療法の実際2	成人期・慢性疾患患者対応 糖尿病教室開催の体験 調理実習	面談の実際	第7回	ステージ別教育プラン4 ステージ別教育プラン5	幼児期から学童期 媒体製作発表 行動療法を生かした媒体製作発表		第8回	ステージ別教育プラン6	特定保健指導 教材製作	
第1回	栄養教育のマネージメント 個別面談の実際	面接に必要なアセスメント 栄養カウンセリングの実際	簡単な栄養計算法																																
第2回	生活習慣改善の実際	生活習慣改善に役立つツール 運動指導の体験																																	
第3回	集団指導の方法と実際 ステージ別教育プラン	行動療法を活用した教室開催 高齢者の食事 介護食・嚥下食の理解																																	
第4回	病態別食事療法の実際 ステージ別教育プラン	慢性疾患患者の食事 指導法 糖尿病・メタボの最新指導法の実際																																	
第5回	ステージ別教育プラン 病態別食事療法の実際1	幼児期から学童期 媒体製作の準備 低タンパク食材の扱い 調理実習																																	
第6回	教育媒体の活用・指導法の実際1 病態別食事療法の実際2	成人期・慢性疾患患者対応 糖尿病教室開催の体験 調理実習	面談の実際																																
第7回	ステージ別教育プラン4 ステージ別教育プラン5	幼児期から学童期 媒体製作発表 行動療法を生かした媒体製作発表																																	
第8回	ステージ別教育プラン6	特定保健指導 教材製作																																	
使用教科書 0.5単位お食事カード 配付資料（オリジナル教材）を使用																																			
自己学習の内容等アドバイス 栄養教育や、臨床栄養などから学んだ基礎知識をもとに、栄養教育の手技、手法を学んでいくので、検査値が読める、病態や生理を理解していることが必要。共同作業で、作品を仕上げていく協調性、責任力が必要。																																			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
臨床栄養学実習Ⅰ		実習	塚原 丘美
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
1	3年次前期	必修	
授業の到達目標及びテーマ 臨床栄養学Ⅰで学習したことを実際に体験することで傷病者の栄養管理についてより理解を深め、医療・福祉施設の管理栄養士として業務を遂行する上で必要な知識と手技を身につける。特に、機器の測定値や実測値及び計算値など様々な数値を正しく捉えることができることを目的とする。			
授業の概要 臨床栄養学Ⅰで学習した身体計測や代謝測定の手技、ケアプランの作成（栄養必要量の決定、栄養投与方法の決定、食品構成作成、献立作成）など、実際に身をもって体験する。また、あらゆる方面から傷病者の栄養管理を考えられるようになるために、傷病者の栄養必要量や栄養補給法などの栄養ケアプランについて発表する機会を設け、討論する。			
学生に対する評価の方法 項目ごとのレポートで評価する（100%）。			
授業計画（回数ごとの内容等） （1回の実習は 90分/コマ × 3コマ（全24コマ）で行う。） 第1回 オリエンテーション 臨床栄養学実習を学ぶにあたって Ⅰ 栄養アセスメント1 － 身体計測 － 様々な測定機器・器具を用いた身体計測 第2回 Ⅱ 栄養アセスメント2 － エネルギー消費量 － 安静時エネルギー消費量の測定、エネルギー基質の算出 タイムスケジュールによるエネルギー消費量の算出 Ⅲ 栄養アセスメント3 － 食事摂取量調査 － 24時間思いだし法を用いた1日のエネルギー摂取量の算出（ロールプレイ） 第3回 Ⅳ 栄養アセスメント4 － 臨床検査 － 簡易型自己血糖測定器を用いた75gOGTT 臨床検査値（血液、尿）からの病態評価（グループ討議・発表） Ⅴ 栄養アセスメント5 － 臨床診査 － 身体徴候からの病態評価 第4回 Ⅵ 食事計画1 － 栄養補給法（経腸栄養法） － PEGについてビデオ学習、経腸栄養剤の試飲 経腸栄養剤を用いる患者の症例検討（栄養投与量・方法をグループ討議・発表） 第5回 Ⅶ 食事計画2 － 栄養補給法（経口栄養法、嚥下障害食） － 嚥下障害についてビデオ学習、とろみ剤の検討、間接的嚥下訓練 嚥下障害患者の栄養管理計画書を作成（発表）、献立の作成 第6回 Ⅷ 症例検討（糖尿病1と2） 両症例のアセスメント、栄養量の設定 糖尿病食品交換表を用いて食品構成（グループ討議・発表）、献立の作成 第7回 Ⅸ 診療記録について 栄養指導記録の作成（栄養指導ロールプレイ） 第8回 実習のまとめ			
使用教科書 塚原丘美編集 「栄養科学シリーズNEXT 臨床栄養管理学実習」 講談社サイエンティフィク 日本糖尿病学会編 「糖尿病食事療法のための食品交換表」 文光堂			
自己学習の内容等アドバイス 臨床栄養学Ⅰの内容を十分に復習しておく。			

[授業科目名] 臨床栄養学実習Ⅱ		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 立花 詠子
[単位数] 1	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ それぞれの疾病の特徴や代謝異常及び使用薬剤などについて、これまでの学習を復習すると同時に、この実習終了時には教科書などを見ることなく、学生1人で栄養設定や献立作成ができるようになることを目標とする。			
授業の概要 臨床栄養学実習Ⅱではすべて症例検討とし、主に具体的な症例から栄養状態や病態の把握、治療計画と食品構成の作成及び献立作成までを学習する。あらゆる方面から傷病者の栄養管理を考えられるようになるために、傷病者の栄養必要量や栄養補給法などの栄養ケアプランについて毎回発表する機会を設け、討論する。			
学生に対する評価の方法 項目ごとのレポート（約90%）、授業の受講態度（約10%）を総合して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） すべて症例検討とする。 第1回 高度肥満症 動脈硬化症（脂質異常症） 第2回 胃切除術後 クロウン病 第3回 肝疾患 特別治療食：展開食 第4回 慢性膵炎 ネフローゼ症候群 第5回 慢性腎不全 展開食の作成 第6回 糖尿病腎症 人工透析 第7回 様々な疾患を含む症例 練習問題 第8回 総合問題 （授業時間外に補講時間を設けて行うこともある）			
使用教科書 栄養科学シリーズNEXT 臨床栄養管理学実習 塚原丘美編（講談社サイエンティフィク） 日本糖尿病学会編 「糖尿病食事療法のための食品交換表」 文光堂 「食品成分表」女子栄養大学出版			
自己学習の内容等アドバイス これまでに勉強した臨床栄養学、基礎栄養学、応用栄養学、生理学、生化学、食品学等の内容を含めて、予習復習をすること。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
栄養ケア・マネジメント演習		演習	塚原 丘美
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	3年次後期	選択	
授業の到達目標及びテーマ 管理栄養士は医療施設入院中の患者に対して「栄養管理計画書」、高齢者福祉施設の利用者に対して「栄養ケア計画書」を作成しなければならない。さらに、平成20年度から始まった特定保健指導の積極的支援対象者に対して「特定保健指導支援計画書」を作成しなければならない。この授業を通じて、これらの栄養ケアプランを作成できる実践的な技術を身につける。			
授業の概要 臨床栄養学実習Ⅰ・Ⅱでは、代表的な疾患についての栄養管理計画を学習するので、この演習ではより特別な対象者に対する栄養管理計画を学習する。また、より実践的な技術を身につけるために、管理栄養士として職場で使用する形式（栄養管理計画書、栄養ケア計画書、特定保健指導支援計画書）で栄養ケアプランを作成する。			
学生に対する評価の方法 演習時の提出物（50%）と出席点（50%）で評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1 回 栄養ケア・マネジメント（講義） ～ 栄養管理とは、栄養管理計画書・栄養ケア計画書の作成について ～ 第 2 回 高齢者の栄養管理（講義） ～ 高齢者の低栄養予防、褥瘡の評価について ～ 第 3 回 症例 1 PEM 患者の栄養ケア計画書を作成 第 4 回 症例 2 褥瘡患者（1）の栄養ケア計画書を作成 第 5 回 症例 3 褥瘡患者（2）の栄養ケア計画書を作成 第 6 回 症例 4 嚥下障害患者の栄養ケア計画書を作成 第 7 回 症例 5 COPD 患者の栄養ケア計画書を作成 第 8 回 癌、周術期の栄養管理（講義） ～ 癌患者の外科的療法と内科的療法に対する栄養管理について ～ 第 9 回 症例 6 癌患者の化学療法時の栄養管理計画書を作成 第 10 回 症例 7 癌患者の術後の栄養管理計画書を作成 第 11 回 静脈栄養法（講義） ～ 電解質の補正、輸液による栄養補給、病態に対する静脈栄養法について ～ 第 12 回 電解質補正のための輸液量の算出（練習問題） 症例 8 経腸栄養不可の患者（急性膵炎）の栄養管理計画書を作成 第 13 回 症例 9 経腸栄養不可の患者（大腸切除術後）の栄養管理計画書を作成 第 14 回 特定健診・保健指導について（講義） ～ 特定健診制度、特定保健指導支援計画書の作成について ～ 第 15 回 症例 10 特定健診受診者（積極的支援）の特定保健指導支援計画書を作成			
使用教科書 中坊幸弘、寺本房子編集 「栄養科学シリーズNEXT 臨床栄養管理学総論」 講談社サイエンティフィック 寺本房子、市川寛編集 「栄養科学シリーズNEXT 臨床栄養管理学各論」 講談社サイエンティフィック			
自己学習の内容等アドバイス 臨床栄養学の講義と実習を復習しておく。			

[授業科目名] 公衆栄養学Ⅱ		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 徳留 裕子
[単位数] 2	[開講期] 3年次前期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 公衆栄養学Ⅱでは公衆栄養マネジメントの方法について学ぶ。 地域、職域などを対象に、公衆栄養マネジメント能力の向上をめざして、その基礎となる栄養疫学の基礎となる食事摂取量の測定方法について理解する。			
授業の概要 栄養疫学は公衆栄養マネジメントの基本的方法の一つである。生活習慣病の事例や食事調査を体験して理解を促す。 公衆栄養マネジメントの理論モデルや事例をあげて理解を深める。			
学生に対する評価の方法 レポート(10%)、期末試験(75%)、出席状況(10%)、受講態度(5%)などにより総合的に評価する。 原則として再評価も筆記試験とする。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回 栄養疫学—概要 第2回 栄養疫学と食事摂取量 第3回 栄養疫学と食事摂取量の測定方法 第4回 栄養疫学とエネルギー調整による食事摂取量 第5回 疫学指標 第6回 公衆栄養マネジメント 第7回 公衆栄養アセスメント① 第8回 公衆栄養アセスメント② 第9回 公衆栄養プログラムの目標設定 第10回 公衆栄養プログラムの計画・実施 第11回 公衆栄養プログラムの評価 第12回 公衆栄養プログラムの展開① 第13回 公衆栄養プログラムの展開② 第14回 公衆栄養プログラムの展開③ 第15回 まとめと期末試験スト			
使用教科書 公衆栄養学 田中平三、徳留信寛、伊達ちぐさ、佐々木敏編集(南江堂) 食事調査マニュアル 日本栄養改善学会監修(南山堂)			
自己学習の内容等アドバイス 栄養疫学は、公衆衛生で学んだ疫学が基本となっているので、復習しておくことが望まれる。 教科書の予習・資料、教科書の復習が大切である。			

[授業科目名] 公衆栄養学実習		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 徳留 裕子
[単位数] 1	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 本実習では、管理栄養士の専門性が問われる食事調査方法ならびに摂取量の評価法と地域公衆栄養モデルに準拠したプログラム立案を通して公衆栄養マネジメントについて理解する。 グループワークでは、グループ内で課題をまとめ、最後に課題のプレゼンテーションを行う過程でコミュニケーション能力を身につける。			
授業の概要 実習は個人ならびにグループワークで進める。グループワークではディスカッションやロールプレイが求められている。各個人の考えが問われ、それを伝え、グループ内で課題をまとめていく過程でコミュニケーション力を身につける。			
学生に対する評価の方法 レポート(85%)、出席状況(10%)、受講態度(5%)などにより総合的に評価する。 原則として再評価は、課題のレポートとする。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1週 食事調査の概要 第2週 秤量食事記録法 第3週 国民健康・栄養調査法 第4週 24時間思い出出し法 第5週 食物摂取頻度調査法 第6週 統計解析 まとめ 第7週 食事調査法のまとめ 第8週 公衆栄養プログラム計画の概要 第9週 地域アセスメント 第10週 優先課題の選定と重点目標の設定 第11週 評価計画 第12週 行動（事業）計画 第13週 事例検討 第14週 事業の計画書作成と説明 第15週 公衆栄養プログラム計画の発表			
使用教科書 公衆栄養学ワークブック 徳留裕子 北川郁美 八木典子編集（みらい社） 食事調査マニュアル 日本栄養改善学会監修（南山堂） 公衆栄養学 田中平三、徳留信寛、徳留信寛、伊達ちぐさ、佐々木敏編集（南江堂）			
自己学習の内容等アドバイス 臨地実習で公欠扱いになる学生については、必ず、課題レポートが求められる。			

[授業科目名] 総合演習 I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 服部 健治・塚原 丘美 野村 幸子・藤木 理代
[単位数] 1	[開講期] 3年次前期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 臨地実習の意義とそれぞれの実習先で学ぶべき事柄について十分に理解し、各自が目的を持って実習に臨むことができるようになる。			
授業の概要 臨地実習の目的は、実践活動の場における課題発見と解決を通じて、必要とされる専門的知識および技術の統合を図ることにある。従って、臨地実習の教育効果をあげるため、事前に管理栄養士として具備すべき知識および技術を習得するとともに学生自らが実習に対する自主的および意欲的・積極的な態度で取り組む姿勢について学ぶ。また、保健所、病院、学校、事業所、福祉施設の管理栄養士から現場における管理栄養士業務の実際についても学ぶ。			
学生に対する評価の方法 テスト、出席状況、授業態度により総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 臨地実習の意義と目的 第2回 保健所・市町村保健センターにおける管理栄養士業務の内容 第3回 保健所・市町村保健センターにおける管理栄養士業務の実際 第4回 病院における管理栄養士業務の内容（1） 第5回 病院における管理栄養士業務の内容（2） 第7回 病院における管理栄養士業務の実際 第6回 学校における管理栄養士業務の内容 第8回 学校における管理栄養士業務の実際 第9回 事業所における管理栄養士業務の内容 第10回 事業所における管理栄養士業務の実際 第11回 福祉施設における管理栄養士業務の内容（1） 第12回 福祉施設における管理栄養士業務の内容（2） 第13回 福祉施設における管理栄養士業務の実際 第14回 試験 第15回 全体評価、まとめ			
使用教科書 加糖昌彦、木村友子、井上明美編集 「臨地・郊外実習書（第3版）」 建帛社 プリント			
自己学習の内容等アドバイス 授業の内容を必ず復習して、学外講師の講義に臨むこと。			

[授業科目名] 総合演習Ⅱ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 服部 健治・塚原 丘美・野村 幸子 藤木 理代・岡田 希和子
[単位数] 1	[開講期] 3年次後期～4年次前期	[必修・選択] 必修	備考 2012年度4年次前期まで 継続履修のこと
授業の到達目標及びテーマ 実習で学んだ事柄を発表することにより、実習内容を振り返って整理する。また、他の学生と討議することで管理栄養士の業務内容や役割について考えることも大切な目的である。			
授業の概要 臨地実習をとおして学んだことに対して、自己評価およびまとめについて発表を行うとともに学生間で、実習の目的達成度等について評価を行う。			
学生に対する評価の方法 出席状況、授業態度により総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 【前半】 3年次後期（第1回～第10回） 大教室にて3年生全員で行う。 臨地実習を行ったグループ順に実習内容、反省点、予習しておくべき事柄などを発表し、質疑応答を行う。 第1回 臨地実習の自己評価および実習のまとめについて発表（主に保健所・保健センター） 第2回 〃 第3回 〃 第4回 〃 第5回 臨地実習の自己評価および実習のまとめについて発表（主に事業所、学校） 第7回 〃 第6回 〃 第8回 臨地実習の自己評価および実習のまとめについて発表（主に福祉施設、病院） 第9回 〃 第10回 〃 【後半】 4年次前期（第11回～第15回） 別々の教室でクラスごとに行う。 クラスごとに発表会を行う。前半で発表していない実習内容や管理栄養士の業務内容について、一人ずつ順に発表・質疑応答を行う。 第11回 臨地実習で学習したこと、管理栄養士のあり方について発表 第12回 〃 第13回 〃 第14回 〃 第15回 〃			
使用教科書			
自己学習の内容等アドバイス 次の臨地実習に向けて、発表者の反省点などを参考にして準備する。			

[授業科目名] 管理栄養士実習		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 服部 健治・野村 幸子・塚原 丘美 藤木 理代・岡田 希和子・立花 詠子
[単位数] 4	[開講期] 3年次～4年次前期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 実践活動の場での課題発見、解決をととして、栄養評価・判定に基づく適切なマネジメントを行うために必要とされる専門的知識及び技術の統合を図り、管理栄養士として具備すべき知識及び技能を修得させることを目標としている。実習の種類及び単位は「臨床栄養学」[公衆栄養学][給食経営管理論]で4単位以上とし、[給食の運営]に係る校外実習の1単位を含むものとしている。			
授業の概要 実習施設は管理栄養士が専従する病院、介護老人保健施設等の医療提供施設(臨床栄養学)、保健所、保健センター又はこれに準ずる施設(公衆栄養学)、事業所等の集団給食施設(給食経営管理論)で実習を行うこととする。なお、実習に当たっては、その教育効果が上がるよう総合演習の授業において事前及び事後評価を行うこととしている。			
学生に対する評価の方法 各施設における実習の状況及び実習内容等の発表等、総合評価で行う。			
授業計画(回数ごとの内容等) 1. 臨床栄養学：10日間で1日9時間の90時間を2単位とする。 「臨床栄養学」の実習については、病院、介護老人保健施設等において、専従の管理栄養士から2単位(90時間)以上の指導を受ける。なお、実習の目的としては、① 栄養アセスメントに基づいた栄養ケアプランの作成、実施、評価に関する総合的なマネジメントの考え方を理解する。② 栄養状態の評価、判定、栄養補給、栄養教育、食品と医薬品の相互作用について修得する。③ 医療・介護制度やチーム医療における管理栄養士の役割について理解する。			
2. 公衆栄養学：5日間で1日9時間の45時間を1単位とする。 「公衆栄養学」の実習については、保健所、保健センター等において、専従の管理栄養士から1単位(45時間)以上の指導を受ける。なお、実習の目的としては、① 地域や職域等の健康・栄養問題とそれを取巻く自然、社会、文化的要因に関する情報を収集・分析し、それらを総合的に評価・判定する能力を養う。② 保健・医療・福祉・介護システムの中で、栄養上のハイリスク集団の特定とともにあらゆる健康・栄養状態の者に対し適切な栄養関連サービスを提供するプログラムの作成・実施・評価の総合的なマネジメントに必要な理論と方法を修得する。③ 各種サービスやプログラムの調整・人的資源など社会的資源の活用、栄養情報の管理、コミュニケーションの管理などの仕組みについて理解する。			
3. 給食経営管理論(特定給食施設)：5日間で1日9時間の45時間を1単位とする。 「給食経営管理論(特定給食施設)」の実習については、病院、介護老人保健施設、社会福祉施設、児童福祉施設、学校、事業所等において、専従の管理栄養士から、1単位(45時間)以上の指導を受ける。 なお、実習の組み立てとしては、給食システムの解説と見学⇒課題の計画づくり⇒課題への取り組み⇒整理と検討⇒検討会・意見交換会⇒発表会である			
4. 「給食の運営(特定給食施設)」の実習については、病院、介護老人保健施設、社会福祉施設、児童福祉施設、学校、事業所等において、専従の管理栄養士または栄養士から1単位(45時間)以上の指導を受ける。なお、実習の組み立てとしては、給食システムの解説と見学⇒献立作成⇒食数処理⇒食材料管理⇒調理・配膳⇒討論会・反省会である。 ※公衆栄養学、給食経営管理論(特定給食施設)のうち選択するものとする。			
使用教科書 臨地・校外実習書およびプリント等			
自己学習の内容等アドバイス 総合演習Ⅰの授業内容を復習すること			

[授業科目名] 食品分析化学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 和泉 秀彦
[単位数] 2	[開講期] 4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 食品や生体成分の定量的な測定法に関して理解し、分析に必要な基礎知識を身につけることを到達目標とする。			
授業の概要 食品を構成している成分の分析方法について解説するとともに、食品分析に関わる容量分析および機器分析の原理を説明する。また、健康食品管理士の資格取得のための講義も行う。			
学生に対する評価の方法 レポートにより評価する 授業の欠席は減点対象とする			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 栄養とその歴史・食物の消化と吸収 第2回 糖質と代謝 第3回 脂質と代謝 第4回 タンパク質と代謝 第5回 ビタミンとその類似物・ミネラル 第6回 電解質と水の代謝・食物繊維・難消化性糖類 第7回 エネルギー代謝・健全な食生活 第8回 いわゆる健康食品と保健機能食品 第9回 栄養機能食品 第10回 健康食品各論（機能性成分とその作用機構1） 第11回 健康食品各論（機能性成分とその作用機構2） 第12回 容量分析 滴定 第13回 機器分析 比色分析・蛍光分析 第14回 機器分析 クロマトグラフィー・原子吸光分析 第15回 まとめ			
使用教科書 新美康隆編 図解食品学実験 みらい 健康食品学 健康食品管理士認定協会 問題解説集 健康食品管理士認定協会			
自己学習の内容等アドバイス 食品学および生化学をよく復習しておくこと。			

[授業科目名] 健康食品とサプリメント		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 須崎 尚・山本 勝彦
[単位数] 2	[開講期] 4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 本講義では健康食品、サプリメントについての正しい知識を習得することをテーマとし、有効で安全な使用方法について考察する態度を身に付けることを到達目標とする。また、消費者の身近で適切なアドバイスができる者として「健康食品管理士」の資格取得も目指す。			
授業の概要 「健康食品」「サプリメント」は、広く私たちの日常生活に取り入れられているが、明確な定義がないまま中には有効な成分が少なかったり、逆に認められていない製薬成分が含まれていたために健康被害が起る例がある。また、疾病別治療薬とその疾病の予防に寄与する健康食品との相互作用、両者の併用で重複する薬理学的効果並びに薬理効果低減などの不具合を起こす可能性がある。今講義では健康食品・サプリメントに対して管理栄養士としてどのように対処するかを学ぶ。			
学生に対する評価の方法 試験（80％）出席状況（20％）により総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 健康食品学総論 食品の機能 第2回 健康食品学総論 健康食品の現状 第3回 健康食品及び喫煙と医薬品の相互作用 第4回 疾病別治療薬と保健機能食品との相互作用 第5回 健康食品と医薬品の相互作用に関する応用問題解説 第6回 健康食品の安全性 食品表示 第7回 健康食品の安全性 食品添加物、食中毒、残留農薬等 第8回 関係法規 食品衛生法 第9回 関係法規 JAS法、健康増進法 第10回 関係法規 薬事法、景品表示法 第11回 臨床検査と健康食品（臨床検査総論） 第12回 臨床検査と健康食品（血液検査） 第13回 疾患と健康食品 第14回 健康食品と健康被害 第15回 試験とまとめ 第3回～5回を山本が、それ以外は須崎が担当する			
使用教科書 健康食品学、問題解説集（いずれも健康食品管理士認定協会）			
自己学習の内容等アドバイス 次回の範囲を教科書等で調べておくこと			

[授業科目名] 臨床医学特論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 北川 元二
[単位数] 2	[開講期] 4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 【一般目標】 栄養サポートが必要な疾患について、その病態、臨床検査、治療、予後などの理解を深めるために、実際の症例をもとに管理栄養士としての実践力を高める 【到達目標】 1 国家試験に出題されている症例問題を中心に、症候・徴候および検査成績が解釈できる 2 解釈した結果をもとに、症例の問題点を列挙できる 3 Problem Listをもとに、問題解決の方法を検討できる 4 症例に該当する疾患の典型的な病態、診断、治療、予後について説明できる			
授業の概要 症例にある現病歴、症状・徴候、血液検査成績をもとに、病態の理解法を解説した上で、医学的および臨床栄養学的な意味づけを理解できるようにする			
学生に対する評価の方法 授業への参画態度(10%)と期末試験(90%)の成績を総合的に評価する。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回 糖尿病 第2回 脂質異常症 第3回 メタボリックシンドローム、痛風 第4回 慢性腎臓病 第5回 糖尿病腎症 第6回 狭心症・心筋梗塞 第7回 脳血管障害 第8回 肝硬変、脂肪肝 第9回 膵炎、胆石 第10回 潰瘍性大腸炎、クローン病 第11回 貧血 第12回 慢性閉塞性肺疾患(COPD) 第13回 臨床検査値の読み方 第14回 症例問題のポイント 第15回 試験			
使用教科書 参考図書：イラスト 症例からみた臨床栄養学(東京教学社)			
自己学習の内容等アドバイス 各授業で解説する疾患について、疾病学のプリントおよび臨床栄養学で使用した教科書で事前に理解しておくこと。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
管理栄養士演習（卒業演習・研究）		演習	池田・和泉・岡田・岸・岸本 北川・須崎・田村・塚原・徳留 野村・藤木・山内・山中
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
4	4年次	必修	
授業の到達目標及びテーマ 演習・研究を通して、最新の専門知識や技術を習得すると同時に、問題解決に利用できるさまざまな能力やプレゼンテーション能力を身につけ、創造性および独創性豊かな人間形成を目指す。			
授業の概要 希望する教員のゼミに所属し、各教員の個別指導を受けながら4月から12月まで演習または研究を行います。 卒業研究：2010年度の研究テーマを下に示しますが、実験研究から調査研究まで指導教員によって様々です。 卒業演習：集中的または定期的にゼミを開講し（年間60コマ以上）、輪番制で課題等を発表します。			
学生に対する評価の方法 卒業研究…12月末の研究成果発表し、論文を審査することにより評価する。 卒業演習…レポートやゼミ発表などより評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） <p style="text-align: center;">2010年度の主な研究テーマ</p> ビタミンE栄養状態の違いによるビタミンK濃度の変動 脂質濃度に及ぼすドコサヘキサエン酸とセサミンの影響 低アレルゲン米中のタンパク質の消化性 糖付加リゾチームの免疫療法への活用 ラットのアミノ酸摂取行動 ラットのタンパク質摂取量に対するインスリンの影響 女子大学生における全血総ビタミンB ₁ 濃度に関する研究 エリート女子駅伝選手のメディカルチェック ー血液・尿中の生化学成分を指標にしてー 企業におけるメタボリックシンドロームの実態調査 手指を介したS. aureusのおにぎりへの伝播 大腸切除術クリニカルパスにおける栄養管理に関する検討 2型糖尿病患者に対する少人数制料理教室の効果 食事バランスガイドからみた料理区分別摂取量と咀嚼の関係 食事調査のための料理データベースの構築の概要 料理データベースの構築Ⅰー主食 料理データベースの構築Ⅱーメインディッシュ 大学生の体型に対する態度・行動と栄養表示利用行動との関連 予定献立の栄養量と摂取栄養量の差 姿勢改善によるダイエット効果についての検討 ーアイソメトリック運動による体型変化についてー 各種アレルギー代替食の展開と作成 親の食意識が子どもの食習慣にどう影響するのか 糖質を制限した「シェイプアップ教室」のこころみ 大学生の食品嗜好の変化について			
使用教科書 担当教員の指示に従って下さい。			
自己学習の内容等アドバイス 指示されて動くのではなく、自分で考えて計画し、自分から行動することが大切です。 発表に際しては、どのように説明したら相手が理解してくれるかを十分考えて説明してください。			

[授業科目名] 教職入門		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 三浦 浩子
[単位数] 2	[開講期] 1 年次後期	[必修・選択] 選択 (栄教必修)	備考
授業の到達目標及びテーマ 価値観の多様化に伴い、学校教育の在り方や教師に求められる資質・能力にも多様なものがある。それらの現実も踏まえ教師としての職責の重大さを認識し、資質・能力の向上に努め、信頼される教師となるにはどうすべきかを学び、研究と修養に努める態度の育成を目標とする。			
授業の概要 本授業においては、はじめに教師が職務を遂行するために知っておくべき必須のことがらや使命について学ぶ。つぎに、教師に必要な資質能力について理解すると共に、信頼される教師になるための他者との人間関係構築のあり方について学ぶ。最後に、教育現場の今日的な課題への対応について考えながら教師としての資質を高めていく。			
学生に対する評価の方法 授業への参加状況と態度(20%)、レポート(30%)、試験の結果(50%)等を総合的に判断して評価を行う。教員養成を目的として開講されている科目であるので、教員としてふさわしくない授業への参加態度や欠席遅刻等は減点の対象となる。やむを得ない理由以外、試験の欠席は認めない。再評価は実施しない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 ガイダンス (授業の進め方・自己学習の必要性と方法) 第2回 学校組織と教師の役割 (公教育の役割・教員の役割と職責・学校教育にかかわる諸法規) 第3回 学校教育と教育課程の編成 (学習指導要領の役割とめざすところ・特色ある教育課程の意義) 第4回 教師の実践的指導力と7つの要素 第5回 教員の実践活動その1 (学級経営と授業実践) 第6回 教員の実践活動その2 (生徒指導とキャリア教育) 第7回 教員の実践活動その3 (家庭・地域との連携) 第8回 信頼関係構築の方策その1 (他者の行動の背景を読み取る) 第9回 信頼関係構築の方策その2 (自分の率直な気持ちを伝え他者との良好な関係をつくる) 第10回 信頼関係構築の方策その3 (意見が対立したときの双方が納得のできる解決策を見つける) 第11回 教育現場における課題その1 (不登校問題とその対応) 第12回 教育現場における課題その2 (いじめ問題とその対応) 第13回 教育現場における課題その3 (こころの教育・道徳教育・食教育の意義) 第14回 魅力ある教員を目指して (教員の資質向上に向けての研修への構えと場) 第15回 まとめと試験			
使用教科書 「学級づくりの力をきたえる」前田勝洋・実践同人たち著 黎明書房 (授業開始後に購入のこと)			
自己学習の内容等アドバイス 学校現場における今日的な課題を意識し自分なりに考え関心をもつことが、教師としての資質を備えることへとつながる確かな道である。そのためには、教育に関わる図書をはじめ幅広い読書や他者との意見交換の場を多くもつよう心がけることをすすめる。			

[授業科目名] 教育原論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 重留 紘治
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択(栄教必修)	備考
授業の到達目標及びテーマ 「教育」のイメージを、人間形成という視点から問い直し、「学校」という空間について考え、発達という神話を生みだした歴史を概観し、作り上げられたイメージを洗いなおす。子どもに対する「感性」を考察し、「子ども」とは何か、何故「学校という場」が問題となるのか、学びを支える教育実践とは何か、「教師」という存在と役割の意味を問い、家族・社会・人間関係にある広義の教育作用、共生社会を生きる人間に求められる教育の課題と可能性について、分かりやすく講義して自分なりの教育に対する確とした原理を形成することを目的とする。			
授業概要 教師を志す学生が今までに描いて来た、また、今持っている教育へのイメージが、果たして人間教育の本質に迫るものなのか、教育作用の効果とは何か、そして子どもたちの心をつかむためにはどうしたら良いのか、教育の原点を問い直すことが必要である。教育を受けるものから、教育をする者へのまなざしの大きな転換により、職業人としてのアイデンティティを創る基礎を培うことを目標とする。			
学生に対する評価の方法 授業時の態度(20%)・レポート(予習20%、授業内容20%)、定期考査(中間・期末)(40%)によって総合評価する。授業態度については、常識的な観点。レポートについては、予習による授業時の発言内容、授業時のまとめがしっかりできているかの観点。定期考査については、知識、理解度、独自性、等を観点とする。なお、教員養成を目的として開講されている科目のため、特に授業欠席は減点の対象となる。			
授業計画(回数ごとの内容等) 1回 教育という仕事(イメージの中の教師。教師への道を動機づける時期。教師という職業の魅力。教育を受ける者から、する者へのまなざしの転換) 2回 教育という物語ー1(教育の営みとは何か。教育が営まれる場。子育ての営みと教育。) 3回 教育という物語ー2(人間形成とその教育機能。時代や社会の中で作られる教育。) 4回 学校という空間(学校の誕生。学校論とその課題。学校空間への挑戦ー可能性を探る試みー) 5回 発達という神話(統治者に金を農夫に銅を。人間の測定。発達論の現在) 6回 教育の対象としての子どもー1(子どもの誕生。子ども再考の作業の中で) 7回 1回から6回までの講義に係る課題考査実施 8回 子どもの問題と学校教育(子どもの問題が意味するもの。転換期の学校。) 9回 学びを支える教育実践(学ぶということ。教育内容とカリキュラム。) 10回 学びを支える教育実践。教育の担い手としての教師。(教師という専門職。教師が求められたものは何であったか。) 11回 教師をめぐる物語。家族が生み出す教育のドラマ。家族というドラマチックな舞台。家庭の教育力とは何か。 12回 社会の変化と教育課題 メディアと情報教育。地球時代を生きる子どもたち。性と性差の教育。 13回 教育の再生する視点を求めて 学校観の変化。小さな試みから大きな宇宙へ。 14回 8回から13回までの講義に係る課題考査実施 15回 授業のまとめ、再試験			
使用教科書 萌文書林 教育学への視座ー教育へのまなざしの転換を求めてー 青木久子、磯部裕子、大豆生田啓友 共著			
自己学習の内容等アドバイス 授業時に、翌週の学習内容に関するレポート渡すので、その項目について教科書や参考書で調べて記入し、予習してくる。			

[授業科目名] 教育心理		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 橘 春菜
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択（栄教必修）	備考
授業の到達目標及びテーマ 基本的な学習過程、発達過程を理解し、児童生徒（障がいのある児童生徒を含む）の心身発達に応じた教育のあり方について考えを深める。			
授業の概要 効果的に学習を促すには、学習者の発達における心理的特性を理解し、発達に応じた適切な学習指導を行う必要がある。この授業では、発達、学習、人格などの観点から人間の基本的な理解を深めたうえで、学級集団の指導、子どもたちへの心理教育的援助、教育評価などについて学ぶ。受講者は授業を通じてこれからの学校教育のあり方に関して積極的に考え、自分の意見を持つように心がけてほしい。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度および授業中の提出物（50%）、最終に実施する試験（50%）により総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 授業のガイダンス（授業の目的と講義内容の概要、履修上の注意）・教育心理学とは 第2回 学習理論 学習成立のメカニズム 第3回 学習過程の理解 知識獲得と学習の転移 第4回 学習意欲 動機づけと原因帰属 第5回 授業における教授・学習過程 第6回 発達過程の理解1 人格の形成 第7回 発達過程の理解2 子どもの思考の発達 第8回 発達過程の理解3 対人関係の発達 第9回 発達過程の理解4 教育と発達 第10回 学級集団 教師と児童生徒関係 第11回 適応と障害1 学校臨床 第12回 適応と障害2 障がいのある児童生徒への理解 第13回 知能と学力 知的発達と学力の測定 第14回 教育評価 教育評価の機能、方法、解釈 第15回 まとめと筆記試験			
使用教科書 必要な資料をその都度配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 事後学習により、講義内容をよく理解し、自分の考えを整理しておくことが望ましい。			

[授業科目名] 教育行政学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 小野田 章二
[単位数] 2	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択 (栄教必修)	備考
授業の到達目標及びテーマ 教育の憲法ともいべき教育基本法が改正され、関連する学校教育法や地方教育行政の組織及び運営に関する法律等、学校現場、教育委員会に直接かかわる法令が変わった この講義では、我が国の教育行政の主体である、国（文部科学省）と地方公共団体（教育委員会）・学校との関係やこれまでの歴史、現状・改善点を学び、併せてこれからの課題について考えることを目的とする。教員として必要な教育関連法規の知識を確実に身につけさせることを目標とする。			
授業の概要 教育行政は教育法規に基づいて行われており、教育制度の大部分が教育法規によって形づくられている。したがって、教育法規についても多くの時間を割いて学ぶこととする。教育小六法を常に携帯し、与えられた演習問題を自ら解くことにより教育に関する幅広い知識・教養が身につくような授業を展開する。			
学生に対する評価の方法 教職を目指す学生を対象に開講されている講座であり、授業への出席は特に重視する。また、講義中に実施する教育法規の演習問題への真剣な取り組みが求められる。 評価は、授業態度（20%）、小テスト（40%）、テスト（40%）を総合的に判断して行う。 なお、この授業は再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 講義の進め方、法規の読み方 第2回 教育行政の組織 第3回 学校の管理と運営 第4回 教育費と教育財政 第5回 教育活動を支える諸条件 第6回 教職員の養成・採用・研修 第7回 教育課程行政と教科書、小テスト 教育法規（第8回から第14回まで） ① 国の法規と地方公共団体の法規 ② 日本国憲法と教育基本法 ③ 国家公務員法・地方公務員法・教育公務員特例法 ④ 学校教育法・教育職員免許法 ⑤ 学校保健安全法・学校給食法 ⑥ 地方教育行政の組織及び運営に関する法律 ⑦ 義務教育費国庫負担法・市町村立学校職員給与負担法 15回 まとめとテスト			
使用教科書 「教育小六法」平成23年版 兼子 仁 ほか 学陽出版			
自己学習の内容等アドバイス あらかじめプリントを配布するので、小六法等を使って演習問題を解いておくと良い。			

[授業科目名] 教育課程		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 藤原 善行
[単位数] 2	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択（栄教必修）	備考
授業の到達目標及びテーマ 本授業では、教育課程論の歴史的展開、わが国の教育課程改革の歴史、学習指導要領の変遷、学習指導要領の特徴、教育課程行政等について学習し、初等中等教育に関する教育課程についての理解を深めることを目的とする。			
授業の概要 教育課程の編成・実施は各学校の裁量に任されており、個々の学校の特色づくりに大きな役割を果たしている。本授業では、教職を目指す学生にとって必要な教育課程に関する基礎的・基本的な知識を身に付けることを目標とする。			
学生に対する評価の方法 平生の受講態度、課題への対応状況、定期試験等を総合的に判断して評価を行う。なお、この授業は再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 1回 オリエンテーション、教育課程の意義 教職課程で学ぶこと、公教育、憲法、教育基本法、教育課程とカリキュラム 2回 教育課程論の歴史的展開 近代までの教育課程論、現代の教育課程論 3回 わが国の教育課程改革の歴史 1 日本における学校の起源と発達（江戸時代まで） 4回 わが国の教育課程改革の歴史 2 近代学校創設と教育課程の確立、戦時下国民学校の教育課程（明治維新から終戦まで） 5回 わが国の教育課程改革の歴史 3 戦後「新教育」のカリキュラム改革、学習指導要領の変遷 6回 わが国の教育課程行政 1 教育課程行政の概略、文部科学省による教育課程の基準策定 7回 わが国の教育課程行政 2 教育委員会の指導助言行政、各学校の教育課程編成と学校評議員 8回 教育目的・目標と教育課程編成 教育課程編成の意義、教育目的と教育目標 9回 教育課程編成の社会的基礎 「社会の変化に対応する教育の在り方」、教育課程編成に影響を与えるその他の社会的基礎 10回 学習方法・形態と教育課程の編成 学習方法や学習形態を検討する視点、教育課程の編成と授業デザイン 11回 教育課程の経営と評価 経営の対象としての教育課程、教育課程評価の理論と方法 12回 小学校教育課程・中学校教育課程の構成 学習指導要領の領域の特徴と問題、教科の構成と問題、新学習指導要領の特徴 13回 高等学校教育課程の構成 高等学校の性格、高等学校の量的拡大と総則・特別活動の変遷、新学習指導要領の特徴 14回 諸外国の教育課程行政 アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、ロシア 等 15回 定期試験			
使用教科書 「教育課程論第二版」柴田義松編著（学文社）、「小学校学習指導要領」文部科学省（東京書籍）、 「小学校学習指導要領解説総則編」文部科学省（東洋館出版社）			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業範囲を教科書で予習しておくこと。			

[授業科目名] 道徳教育の研究		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 山田 敏子
[単位数] 2	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 選択(栄教必修)	備考
授業の到達目標及びテーマ 学校教育の果たす大きな役割は人格教育であり、道徳教育はその中核をなすものである。良き社会人、市民を育成するために、道徳教育の充実を目指して実践的指導法を身に付けることを到達目標とする。さらに、指導者としての道徳的な資質を高めることも目標とする。			
授業の概要 この講座では、学校・家庭・社会が協働して道徳教育を充実させるために、学習指導要領や具体的な実践事例などをもとに研究を進める。特に、児童生徒・青少年・大人の現状や実態を把握するとともに、自己統制力と規範意識の育成にもふれながら、具体的な実践事例を多く取り入れた授業を行う。また、具体的な指導方法についてのプレゼンテーション・ロールプレイを行い、理解を深める。			
学生に対する評価の方法 受講態度・関心意欲(約20%)、課題・発表(約30%)、試験の結果(50%)などで総合的に評価を行う。特に、試験の欠席は認めないので注意すること。不合格者は再試験を実施するが、再評価は実施しない。			
授業計画(回数ごとの内容等) 1回 ガイダンス(授業の進め方、青少年の規範意識と道徳観、教育改革) 2回 家庭における道徳教育 家庭環境の変化と課題、家庭教育の機能 3回 学校における道徳教育 児童生徒のモラル意識、日米比較でみる道徳教育の現状 4回 社会における道徳教育 学校再生のための道徳教育、社会における道徳、学校と地域社会との協働 5回 教育の概念と道徳教育(道徳とは、道徳律と道徳性、道徳的価値) 6回 道徳性の発達 道徳的価値、道徳的实践力、道徳性発達理論と道徳教育の今日的課題 7回 道徳性の一般的な発達段階 乳幼児期、幼児期、児童期、思春期、青年期 8回 戦後日本の道徳教育のあゆみ 先人に学ぶ道徳、道徳教育年表 9回 「学習指導要領」のなかの道徳教育 学習指導要領の改訂と特設「道徳の時間」 10回 道徳教育の指導法の具体的な考察 道徳の時間、総合的な学習の時間等 11回 「道徳の時間」の学習指導案の作成 主題・授業資料の選定、内容の学校種・学年段階の設定 12回 「道徳指導」の実践のための研究① 13回 「道徳指導」の実践のための研究② 14回 「道徳教育の研究」のまとめとテスト 15回 道徳教育の研究及び授業実践の課題とまとめ			
使用教科書 小学校学習指導要領解説 道徳編 文部科学省 東洋館出版社			
自己学習の内容等アドバイス 各授業のまとめと課題ワークを指示するので、予習・復習をしておくこと。特に、提出を指示するワークシートは、期日までに提出すること。			

[授業科目名] 特別活動の研究		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 小野田 章二
[単位数] 2	[開講期] 3年次前期	[必修・選択] 選択(栄教必修)	備考
授業の到達目標及びテーマ 学習指導要領が改訂され、小学校では平成23年度から完全実施される。今回の改訂の基本的なねらいは、教育基本法改正等で明確になった教育の理念を踏まえ、「生きる力」の育成、知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成及び豊かな心や健やかな体の育成などにある。 特別活動の目標を達成するため具体的にどのような指導が行われたら良いか等、教師としての指導力向上を目指す。			
授業の概要 「特別活動」の内容は、学級活動、生徒会活動、学校行事の三領域が中心である。それぞれの領域で学習指導要領の目標や理念を生かした授業を展開するには、どのような配慮や工夫が必要か等、できるだけ具体例を取りあげながら講義、発表・レポートなどの授業を進める。			
学生に対する評価の方法 教職を目指す学生を対象に開講されている講座であり、授業への出席は特に重視する。また、講義中に随時指示するテーマについて、発表やレポート、小テストを行う。 評価は授業態度(20%)、レポート(20%)、テスト(60%)を総合的に判断して行う。 なお、この授業は再評価を実施しない。			
授業計画(回数ごとの内容等) 1回 講義内容のガイダンス、参考書の紹介等 2回 日本の学校教育の特質と課題 3回 学校教育の形態と機能 4回 教科教育と教科外教育の意義と目標 5回 戦前の教科外教育の歴史と変遷 6回 戦後の教科外教育の歴史と変遷 7回 教育課程における「特別活動」の位置づけの変遷 8回 「学級活動」の特質、活動内容 9回 「学級活動」の指導計画の作成及び留意事項 10回 「生徒会活動」の特質、活動内容、指導上の留意点 11回 「学校行事」の特質、活動内容、指導計画の作成、指導上の留意事項 12回 「部活動」の特質、活動内容、指導計画の作成、指導上の留意事項 13回 「総合的な学習の時間」の現状と課題 14回 「総合的な学習の時間」と特別活動 15回 まとめとテスト			
使用教科書 小学校の「学習指導要領の解説と展望」特別活動編 安彦忠彦監修、教育出版			
自己学習の内容等アドバイス 次時の講義内容をテキストで確認して講義に臨むようにしてください。			

[授業科目名] 教育実践学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 三浦 浩子
[単位数] 2	[開講期] 3年次前期	[必修・選択] 選択(栄教必修)	備考
授業の到達目標及びテーマ 本授業では、教育が目指すところ、教育方法の変遷、教育の今日的な課題等を学びそれらをふまえ、実際に学校現場において生かしていくことのできる教育方法について研究する。また、それらの学びをもとに教師の実践的指導力の向上を目指し、教師に最も必要とされる授業実践力の基礎を身につけることを目標とする。			
授業の概要 本授業においては、教師の実践的指導力の基底となる教師の「実践的感性(人間性)」の問い直しからスタートする。次に、子どもが学びの主体者となることのできる授業を考える。実際には、指導案を作成し模擬授業を行う。模擬授業を通して、教える立場と学ぶ立場を体験し、学習者中心の授業作りの視点を見つけ出していく。			
学生に対する評価の方法 授業への参加状況と態度(20%)、レポート(30%)、試験の結果(50%)等を総合的に判断して評価を行う。教員養成を目的として開講されている科目であるので、教員としてふさわしくない授業への参加態度や欠席遅刻等は減点の対象となる。やむを得ない理由以外、試験の欠席は認めない。再評価は実施しない。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回 ガイダンス 第2回 学校現場の今日的な課題と教師の実践的指導力の要素 第3回 教育方法の変遷と教師の「実践的感性」 第4回 教師の「実践的感性」を高める方策Ⅰ(自己の価値観を問う) 第5回 教師の「実践的感性」を高める方策Ⅱ(自己の人間関係の傾向を問う) 第6回 教師の「実践的感性」を高める方策Ⅲ(自己の問題解決の方法を問う) 第7回 学びにおける体験の役割 第8回 学習形態による学びの利点と不利点 第9回 授業作りの基礎・基本(指導案についての理解) 第10回 授業づくりⅠ(模擬授業の準備・独自学習) 第11回 授業づくりⅡ(模擬授業の準備・グループ学習) 第12回 授業の実際Ⅰ(模擬授業の実践) 第13回 授業の実際Ⅱ(模擬授業の実践) 第14回 模擬授業からの学びと現職研修の意義 第15回 試験と反省			
使用教科書 「授業をデザインする」久野弘幸編著 ぎょうせい(授業開始後に購入可)			
自己学習の内容等アドバイス 授業作りの基本は、独自学習である。各自の授業案を持ち寄ってグループ討議をすることで教育方法の多様さを実際に学ぶことができる。従って、積極的に独自学習を行うこと。またその際に、教材について幅広く学ぶことがよりよい授業作りとつながるので、教材研究を積極的にすること。			

[授業科目名] 生徒指導論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 加藤 純一
[単位数] 2	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 選択 (栄教必修)	備考
授業の到達目標及びテーマ テーマ： 生徒指導の「心」と「構え」のあり方 授業の到達目標：自分の個性にふさわしい生徒指導の方法を構築するための基礎的知識を身につけることを到達目標とする。			
授業の概要 生徒指導の意義は、児童生徒が「社会的に自己実現できる資質・態度を形成する指導・援助である」ことを認識するとともに、子どもたちの状況、心、社会的背景、家庭等について理解させ、教職につく者にとって必須の条件である「子どものさまざまな問題行動」に対する対応方法の基礎・基本について学習する。			
学生に対する評価の方法 授業への参加状況 (15%)、レポート (20%)、試験の結果 (65%) 等を総合的に判断して評価を行う。 教員養成を目的として開講されている科目であるので、教員としてふさわしくない授業への参加態度や欠席遅刻等は減点となる。やむを得ない理由以外、試験の欠席は認めない。再評価は実施しない			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 ガイダンス 第2回 生徒指導の原理・意義 第3回 生徒指導の定義、生徒指導の位置づけ 第4回 生徒指導と生徒理解Ⅰ (これからの生徒指導、生徒指導の充実に向けて) 第5回 生徒指導と生徒理解Ⅱ (生徒指導と進路指導、生きる力の育成) 第6回 生徒指導と生徒理解Ⅲ (児童虐待、いじめ) 第7回 生徒指導の「心」と「構え」 第8回 生徒指導と教育相談 第9回 生徒指導の組織的実践 第10回 危機理論・性善説と性悪説・父性原理と母性原理 第11回 子どものサインを受け止める (行間を読む、欠席、加点評価) 第12回 子どもを取り巻く社会Ⅰ (高学歴社会、大量消費社会、情報化社会) 第13回 子どもを取り巻く社会Ⅱ (退廃文化、都市化) 第14回 家庭を見直す (家庭機能の変化、父母の心理的不在、核家族と少子家族) 第15回 まとめと試験			
使用教科書 なし			
自己学習の内容等アドバイス 限られた授業回数では、生徒指導の基本に触れることしか出来ない。 文部科学省のホームページで、生徒指導に関する文部科学省の姿勢を、きちんと把握することが望ましい。			

[授業科目名] 教育相談とカウンセリング		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 加藤 純一
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択 (栄教必修)	備考
授業の到達目標及びテーマ テーマ：教師が行う教育相談活動の「心」と「構え」 授業の到達目標：自分の個性にふさわしい、自分自身の教育相談の方法を構築するための「基礎的知識」を身につける。			
授業の概要 不登校及びいじめ問題への対応が大きなきっかけとなり、文部科学省は学校教育相談の充実を目指してきた。この授業において、学校現場できちんと応用できる「学校教育相談の基礎」及び「有効な教育相談・カウンセリングを行うための基本的な姿勢」について学習する。			
学生に対する評価の方法 授業への参加状況 (15%)、レポート (20%)、試験の結果 (65%) 等を総合的に判断して評価を行う。教員養成を目的として開講されている科目であるので、教員としてふさわしくない授業への参加態度や欠席遅刻等は減点となる。やむを得ない理由以外、試験の欠席は認めない。再評価は実施しない			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 ガイダンス 第2回 学校教育相談の歴史 第3回 学校と専門機関の相談の違い・校内連携・校外連携 第4回 学校教育相談における相談系の役割 第5回 ディレクティブとノンディレクティブ・聴くことの重要性 第6回 相談の目標と終結 第7回 人が人を変えるということ 第8回 不登校 第9回 ノイローゼ等病的事例 第10回 長期欠席と進級・原級留置・休学 第11回 特別支援教育 第12回 思春期の理解 第13回 親の構えを組み立てなおす 第14回 教育相談を行うときの注意事項 第15回 まとめと試験			
使用教科書 『親面接のポイント』 加藤純一著 ほんの森出版 [参考図書] 『学校教育相談学 ハンドブック』 ほんの森出版			
自己学習の内容等アドバイス 毎時間の授業資料プリントを配布する。資料プリントに、関連事項の書かれている教科書のページ数が記されているときには、前もって教科書のその部分を読んでおくこと。			

[授業科目名] 総合演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 立川 義政・小笠原 昭夫
[単位数] 2	[開講期] 4年次後期	[必修・選択] 選択（教職必修）	備考 DVDを活用
授業の到達目標及びテーマ 二つのテーマ、「国際理解教育」及び「生活環境」について、前半・後半に分かれて実施する。 「国際理解教育」の目標は、総合的な学習の時間（国際理解教育）の具体的な学習活動を、どのように教科・道徳・特別活動等との関連を図りながら構成していくか、そして、いくつかの実践事例をもとに、学習活動をどのように計画し、実践化、評価していくかという一連の手順について学生相互に論じ合うとともに、学習活動案を作成し、それを発表するという授業を通して、学習活動を設定していくための基礎的な能力を養うこととする。 また、「生活環境」については、テーマとして生活環境問題から何か一つを取り上げ、そのテーマに沿って調査・研究を深めた上、いかにまとめ解りやすく発表するか、その手腕の向上を目標とする。			
授業の概要 「国際理解教育」の主たるねらいは、子供たちに、地球上に暮らす様々な文化的背景を有する人々と平和で友好的な関係を形成し、発展させる資質と能力を育成していくことである。そこで、それらを育むための教育活動を設定するには、子どもたちの発達段階を踏まえ、国際比較という観点に立って、どのように教材を構成し、学習活動を構築していくという一連の方法を身につけることが、本授業の概要である。 また、「生活環境」は、環境の時代と言われながら、ともすれば授業の主題から遠ざけられがちな生活環境を身近で切実な問題と捉え、それらを具体的に追及することにより、より健全な人間社会を構築するきっかけを作る。予め小学校低学年・中学生など対象者を設定し、対象者により深く理解してもらうにはどうすればよいか、発表・説明の方法を工夫し実践する。			
学生に対する評価の方法 「国際理解教育」では、授業への態度(30%)、数回実施する小レポート(30%)、国際理解教育に関する学習活動計画案(40%)等で総合的に評価する。 「生活環境」では、授業への参加の積極性(20%)テーマの掘り下げ方と発表にあたっての創意工夫(40%)、発表の成果(30%)小レポート(10%)などで総合的に評価する。本授業は、再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 教職総合演習として国際理解教育を学ぶにあたっての目的と講義内容、授業の進め方について 第2回 総合学習の歴史、現行学習指導要領に示された総合的な学習の時間と国際理解教育とは・・・ 第3回 国際化への流れと理念・国際理解のための基本姿勢、国際理解教育の実践の目標と内容及び学習方法、国際比較研究（課題研究）について 第4回～5回 国際理解教育の具体的に実践化する手順とは・・・ 国際比較研究のための具体的なテーマ（課題）別に実践例をもとに研究 ①人間理解のための学習 ②生活や文化に着目した学習 ③世界の現実理解のための学習 第6回～7回 個々に設定した国際比較研究のための具体的なテーマ（課題）に関し、教育的意義や発達段階を踏まえて発表し、意見交換する。 第8回 個々に設定したテーマ（課題）を具体化した実践活動（総合的な学習）について評価方法を踏まえて発表する。			

ここから「生活環境」

第9回 生活環境に関する話題提供(1)及びグループ分け。

第10回 生活環境に関する話題提供(2)及び研究・発表のテーマ設定並びに良い話し方のヒント。

第11回～14回 グループ発表(毎回2～3グループずつ)。

第15回 全員による反省と討論。小レポート。

使用教科書

参考図書「国際理解教育」(多田孝志著、東洋出版社)

(国際理解教育に関する理論や具体的な実践例等について、資料を配布して授業を進める)

「生活環境」では教科書は使用しない。

自己学習の内容等アドバイス

「国際理解教育」の授業に臨むにあたり、現在、日本や世界で論点や争点になっていることに関し、日頃から興味関心を持ち、メディアや関連する書物等から情報を得よう努力しておくこと。

「生活環境」の授業については、日頃から新聞・テレビなどで報道される環境問題に注意し、人類を含めた私物の生活環境として、現在の地球がどのような状態にあるのかを考え、勉強する習慣を身につけておく。併せて、アナウンサーや落語家の話し方に注意し、話術の向上を志す。

[授業科目名] 栄養教育実習指導		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 増田 温美
[単位数] 1	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択(栄教必修)	備考 ※2012年度まで継続履修
授業の到達目標及びテーマ 教育実習の概要や意義を知ると共に、児童・生徒にわかる授業実践ができるように、指導の工夫を理解し、学習指導案の作成をする。また、模擬授業を行い、検討協議をする。 教育実習の事前・事後指導を実施して栄養教諭としての実践力を身につけさせる。			
授業の概要 授業計画に従って、わかる授業、食生活の向上につながる授業のあり方を模索し、模擬授業を実施する。また、その後の協議を通して、指導の工夫を図る。			
学生に対する評価の方法 受講態度、授業内のコメント、レポートを40%、学習指導案、模擬授業を60%で評価する。 受講態度、授業内コメントについては意欲・関心を、レポート、学習指導案、模擬授業については知識、理解度、課題解決への演繹力、独創性、解答のレベルを主たる評価の観点とする。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回 教育実習の意義と実習内容、課題および実習生としての自覚 校務分掌、学習指導、児童・生徒理解、部活動指導 第2回 教育実習にあたっての留意点 勤務・サービスについて、実習前(事前指導、実習校との打ち合わせ)、実習中(観察、参加、授業研究) 実習後(反省会、提出物など) 第3回 良い授業のために 教材研究、児童の実態把握、板書の工夫、観点別評価、指導と評価の一体化 第4回 実践的・体験的活動を重視した授業 資料の提示、実験の仕方など 第5回～14回 朝食の重要性、栄養バランス、牛乳の価値、好き嫌いをなくそう、効果的なおやつ、郷土の特産品 など食育に関わる事項の学習指導案を作成する。 交代で模擬授業を実施して後、授業内容、資料、発問の仕方、指導と評価について検討協議する。 模擬授業は教育実習にできる直前まで継続して行う。 第15回 まとめ 教育実習を終えて、授業実践をして、実習の報告書第1回			
使用教科書 適宜プリントを配布する			
自己学習の内容等アドバイス 食生活を豊かにする教材は、児童生徒が納得できる資料はと、興味を持って食生活を見つめる。			

[授業科目名] 栄養教育実習指導		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 増田 温美
[単位数] 1	[開講期] 4年次前期	[必修・選択] 選択（栄教必修）	備考 ※2010年度から継続履修分
授業の到達目標及びテーマ 前年度の学習をもとに、教育実習の概要や実習効果を上げるための留意事項と成果のまとめ方を扱う。また、受け入れ校に迷惑をかけることのないよう基本的な生活態度の在り方について指導の徹底を図り、教師として必要な力量を磨く。			
授業の概要 教育実習の事前・事後指導を実施し、実習効果を上げるとともに、受け入れ校に迷惑をかけることのないように指導の徹底を図る。実習後は実践結果を報告し、教職への理解を深めるとともに、更なる向上策を研究する。			
学生に対する評価の方法 授業時の課題、研究発表、論文で評価する。 課題、研究発表についてはアプローチ法、解答のレベルを観点とする。評価論文については、知識、理解度、問題解決への演繹力、独自性、解答のレベルを観点とする。			
授業計画（回数ごとの内容等） < 4年次の内容 > 4年次の教育実習に出る前まで、3年次に続けて学習指導案を作成し全員が交代で模擬授業を実施し、研究協議する。 その後は、これまで学習した理論を教育実習で実践する。 実習終了後は、実践結果と理論との比較のもとに、教育実践理論の再認識と実践力の向上について研究・協議する。 最後に研究・協議結果を自分なりに評価し、自己の教育観を論文にまとめる。			
使用教科書 適宜プリントを配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 1つでも多くの授業を参観し、良い点を取り入れた授業実践をめざす。 周りの人と積極的にかかわりをもつ。			

[授業科目名] 栄養教育実習		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 増田 温美
[単位数] 1	[開講期] 4年次前期または後期	[必修・選択] 選択(栄教必修)	備考
授業の到達目標及びテーマ 教育実習はこれまでに修得した教育に関わる全ての教科の基礎知識を、教員として統合化・体系化し教育実践に生かす訓練をすることを目的として行われる。この実習を通して実践力を身につける手だてと、さらに充足すべきことは何かを明らかにして、立派な教師として成長するための機会とする。			
授業の概要 教育実習を通して実践力を身につけ、教師として成長するための機会となるよう支援する。 受け入れ校では、後継者育成という立場から指導に当たる点を肝に銘じて、実のある実習にさせたい。			
学生に対する評価の方法 巡回指導時の研究授業や学習指導案、実習校の評価、実習中の実習記録、実習終了後の報告会用資料をもとに総合的に評価する。			
授業計画(回数ごとの内容等) 実習校において行う内容はおよそ以下の通りである。 登校指導、職員朝礼、朝のショートタイム、指導者の講話(オリエンテーションや生徒指導、職員分掌業務について)、指導者の授業参観、教材研究と学習指導案作成、研究授業の実施(実習生が授業を行い指導教員達が参観し指導する)、指導者とのティームティーチング、週一度のホームルーム、職員各部の分掌業務の手伝い、下校指導、部活動指導			
使用教科書 「教育実習の手引き」、「教育実習記録」(名古屋学芸大学)			
自己学習の内容等アドバイス 実習校では諸活動に積極的に参加して、児童・生徒とのふれあいを多くできるように			

[授業科目名] 学校栄養指導論Ⅰ		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 吉見 成子
[単位数] 2	[開講期] 3年次前期	[必修・選択] 選択（栄養必修）	備考
授業の到達目標及びテーマ 食に関する指導と学校給食の管理を一体のものとした食育を通して、未来を担う子どもたちに豊かな人間性と生きる力を身につけさせることを使命とした栄養教諭の育成をめざす。 栄養教諭としての使命感をもち、職務を遂行するために必要な知識・技術を身につけさせることを目的とする。			
授業の概要 栄養教諭の役割および職務内容に関する事項、並びに児童生徒を取り巻く食や健康に関する現状と諸課題について講義を行う。 学校現場で実際に使用されている食育の媒体や献立のレシピなどを紹介し、実践的な授業内容とする。			
学生に対する評価の方法 小テストと学期末テスト（70%）、出席状況と受講態度・提出物（20%）、レポート及び毎回の意見・要望・質問・感想（10%）を総合して評価する。なお、この授業は再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス 授業の進め方、栄養教諭とは——職務内容と役割—— 第2回 栄養教諭が行う食に関する指導についてⅠ 栄養教諭制度の概要 第3回 栄養教諭が行う食に関する指導についてⅡ 学校給食の現状——管理と運営 第4回 栄養教諭が行う食に関する指導についてⅢ 学校給食の現状——栄養管理の実際 第5回 栄養教諭が行う食に関する指導についてⅣ 学校給食の現状——衛生管理の実際 第6回 栄養教諭が行う食に関する指導についてⅤ 学校給食の現状——食に関する指導の実際 第7回 まとめと小テスト 第8回 学校給食の教育的な意義と役割 第9回 食に関する指導及び学校給食管理に関する法令と諸制度 第10回 児童生徒の食に関わる諸課題についてⅠ 食卓をめぐる現状 第11回 児童生徒の食に関わる諸課題についてⅡ 国民の健康と栄養をめぐる諸事情その1 第12回 児童生徒の食に関わる諸課題についてⅢ 国民の健康と栄養をめぐる諸事情その2 第13回 児童生徒の食に関わる諸課題についてⅣ 食の安全 第14回 食に関する指導の「全体計画」について 第15回 前期のまとめとテスト			
使用教科書 改訂 栄養教諭論 一理論と実際— 金田雅代 編著 建帛社 【参考図書】食に関する指導の手引 改訂版 文部科学省 編著 東山書房			
自己学習の内容等アドバイス 授業内容をより確実に身につけ、さらに深めるため他の科目の教科書や授業内容で関連する事項についても、予習および復習をすること。			

[授業科目名] 学校栄養指導論Ⅱ		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 吉見 成子
[単位数] 2	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択(栄教必修)	備考
授業の到達目標及びテーマ 「学校栄養指導論Ⅰ」を基礎において食育を推進するために必要な知識を積み上げ、現状と今後の方向性を考え、食育の推進に役立てることを目標とする。 実践演習を行うことにより、授業の方法や指導技術の向上を図ることを目的とする。			
授業の概要 食生活の歴史と文化および、食料の生産・流通・消費、食と環境、食の安全性など食を取り巻く現状、さらに小中学校における食育の実際について講義をする。これらをふまえて実践演習を行う。			
学生に対する評価の方法 小テストまたはレポート(30%)、実践演習での指導案及び発表内容(50%)、出席状況と受講態度(10%)、毎回の意見・要望・質問・感想(10%)を総合して評価する。 なお、この授業は再評価を実施しない。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回 食生活の歴史と文化Ⅰ 日本の食文化 第2回 食生活の歴史と文化Ⅱ 食生活の変遷——食糧自給率から—— 第3回 食生活の歴史と文化Ⅲ 学校給食の歴史と食文化の変遷 第4回 食に関する指導の方法Ⅰ 総論、全体計画と年間計画 第5回 食に関する指導の方法Ⅱ 教科における食に関する指導 第6回 食に関する指導の方法Ⅲ 特別活動・総合学習等における食に関する指導 第7回 食に関する指導の方法Ⅳ 学校・家庭・地域との連携における食の指導 第8回 食に関する指導の方法Ⅴ 肥満・食物アレルギーなどの個別指導の方法 第9回 指導案の作成方法、小テスト 第10回 実践演習Ⅰ 指導案の作成 第11回 実践演習Ⅱ 指導の技術(話し方、板書計画、媒体) 第12回 実践演習Ⅲ 模擬授業と検討会 第13回 実践演習Ⅳ 模擬授業と検討会 第14回 実践演習Ⅴ 模擬授業と検討会 第15回 実践演習のまとめと講義の総まとめ			
使用教科書 改訂 栄養教諭論 ー理論と実際ー 金田雅代 編著 建帛社 【参考図書】食に関する指導の手引 改訂版 文部科学省 編著 東山書房			
自己学習の内容等アドバイス 授業内容をより確実に身につけ、さらに深めるため他の科目の教科書や授業内容で関連する事項についても、予習および復習をすること。			

[授業科目名] 栄養指導論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 富田 卓邦
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 管理栄養士として、ライフステージ別の対象者またはその保護者等に、望ましい食事について教育・指導を 実践できるようにすることを目的として、生涯の各期における特質や現下における問題点等を理解・認識させる ことを授業の到達目標とする。			
授業の概要 将来、ライフステージのどのような場面にある者に対しても適切な栄養教育・指導が行なえるよう、適宜に場 面・状況を仮定し、その対応・対処方法を課題として少人数のグループにより協議してまとめるよう求めつつ 進める。			
学生に対する評価の方法 出席状況および平常の授業態度(20%)、授業時の課題への取り組みとまとめ状況(30%)、最終に実施する試 験(50%)などにより総合的に評価する。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 後期の講義の進め方について及び、ライフステージ別栄養教育・指導への基本的態度について 第2回 妊娠・授乳期の栄養教育 第3回 乳・幼児期の栄養教育 第4回 学童期の栄養教育① 第5回 学童期の栄養教育② 第6回 思春期の栄養教育 第7回 成人期の栄養教育① 第8回 成人期の栄養教育② 第9回 高齢期の栄養教育 第10回 障害者の栄養教育 第11回 栄養教育の国際的動向 先進諸国 第12回 栄養教育の国際的動向 開発途上国 第13回 食環境づくりにおける栄養教育 第14回 まとめ 第15回 試験			
使用教科書 春木 敏 編 エssenシャル栄養教育論 (医歯薬出版株式会社) その他 必要に応じプリント配布、参考図書紹介等を行なう。			
自己学習の内容等アドバイス 現ステージにある自分とは遥かに過去・未来方向に離れた世代への栄養指導・教育は本来経験を重ねないと 適切に行なえるものではない。今は世代別の特徴や課題は何か事前に調べておくこと。			